

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第55集

き せい ちょう
貴 生 町 遺 跡 II ・ III
つき なわ て
月 縄 手 遺 跡 II

1 9 9 4

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター



1

(上左) 月繩手遺跡 I 期赤彩土器



2

(上右) 月繩手遺跡 I—2 期
SK116・152・SD101土器群



3

(下右) 月繩手遺跡 I—3 期
SK134・148・SD110・NR101他
土器群



4

(左)
月繩手遺跡 II 期
SX02・03下層土器群



5

(右)
月繩手遺跡 II 期
SX02・03土層土器群

序

貴生町遺跡・月縄手遺跡が所在する名古屋市西区は、東濃地方に起源を發する庄内川の恵みをうけて、いにしえより先人達の生活のあとが数多く残されてきた地であります。なかでも、弥生時代における東海地方最大の集落である朝日遺跡や、愛知県下で最も古い稲作農民たちの村のひとつである西志賀遺跡などは全国的にもよく知られた存在であります。

本書で紹介する月縄手遺跡もこれらの遺跡と同様に、愛知県の歴史を語るうえできわめて重要な遺跡であることがわかってまいりました。なかでも弥生時代前期の集落を囲む環濠の発見やモミ痕土器の出土、科学分析による水田存在の推定など、枚挙にいとまがないほどであります。

また、貴生町遺跡においても、すでに埋没した河川のなかから古墳時代前期と推定される他に例をみない線刻をほどこした石製品が出土するなど、貴重な成果をあげることができました。

かくの如き重要な調査成果を収録した本書が多くの方々に利用され、地域の歴史研究や埋蔵文化財の保護啓発に役立つことを願ってやみません。

最後になりましたが、現地での発掘調査および本書の作成に際して御協力いただいた関係諸機関ならびに地元の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成6年3月31日

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
理事長 高木 鐘三

目 次

I 序 章	1
1 調査にいたる経緯と調査の経過	1
2 位置と環境	2
II 貴生町遺跡II	3
1 遺 構	4
1 調査区の設定	4
2 基本層序と主要遺構	6
2 遺 物	9
1 土器・陶磁器	9
2 石製品	10
III 貴生町遺跡III	11
1 調査区の設定	12
2 主要遺構	12
3 遺 物	15
4 まとめ	17
IV 月縄手遺跡II	19
1 遺 構	20
1 調査区の設定と基本層序	20
2 I期の遺構	22
3 II期の遺構	28
2 遺 物	34
1 I期の遺物	34
2 II期の遺物	59
3 自然科学分析	70
1 月縄手遺跡の環濠から検出された珪藻遺骸群集について	70
2 月縄手遺跡における弥生時代前期の花粉化石	80
3 月縄手遺跡における植物珪酸体分析	85
4 自然科学からみた月縄手遺跡	89
4 まとめ	90
付 表	93

挿 図 目 次

図1 遺跡の位置と周辺の主要遺跡…………… 2	図2 調査区設定図…………… 4
図3 貴生町遺跡遺構図…………… 5	図4 A・B区北壁土層断面図…………… 6
図5 SK04平面・断面図…………… 7	図6 NR02平面・断面図…………… 8
図7 I期土器実測図…………… 9	図8 II期土器・陶磁器実測図……………10
図9 線刻有孔円板実測図……………10	図10 SD01平面・断面図……………12
図11 貴生町遺跡遺構図……………13	図12 SD09平面・断面図……………14
図13 C区土器・陶磁器実測図……………16	図14 貴生町遺跡遺構全体図……………18
図15 調査区設定図……………20	図16 B・Ca区南壁土層断面図 ……21
図17 月縄手遺跡I期遺構図……………23	
図18 A区(上)・Ca区(下)SD101平面・断面図 ……25	
図19 Ca区SK113・114(上)・SK116(左下)・SK99・156(右下)平面・断面図 ……26	
図20 Ca区SK133・147~152・SD110平面・断面図 ……27	
図21 月縄手遺跡II期遺構図……………29	図22 B区SD25平面・断面図……………30
図23 Ca区東半部遺構平面図 ……31	
図24 Ca区SX02(上)・SX03(下)平面・断面図 ……33	
図25 I期土器器種分類(1)……………35	図26 I期土器器種分類(2)……………37
図27 SK102・113・114出土土器実測図 ……40	図28 SK116出土土器実測図(1) ……41
図29 SK116(2)・115・117・118・120出土土器実測図 ……42	
図30 SK121・128・129・133・134・151出土土器実測図……………44	
図31 SK147・148・150出土土器実測図 ……45	図32 SK152・154出土土器実測図……………47
図33 SK155・156・SD101出土土器実測図 ……48	
図34 SD104・105・110・SX101出土土器実測図……………50	
図35 NR101出土土器実測図(1) ……51	
図36 NR101(2)・NR101西肩出土土器実測図……………53	
図37 包含層出土土器実測図(1)……………54	図38 包含層出土土器実測図(2)……………55
図39 I期石器実測図(1)……………57	図40 I期石器実測図(2)……………58
図41 SK58・24・74・SX04出土土器実測図……………62	
図42 SX01出土土器実測図……………63	図43 SX02上層・同下層出土土器実測図…64
図44 SX03上層・同下層出土土器実測図……………65	
図45 SX03最上層出土土器実測図……………66	図46 SX02・03(1)出土木器実測図……………68
図47 SX03(2)・SK20・99出土木器実測図……………69	
図48 分析試料採取地点……………70	図49 分析試料採取地点における地質柱状図 ……71
図50 月縄手遺跡の珪藻遺骸分析結果……………74	図51 分析試料採取地点……………80

図52	分析試料採取地点における地質柱状図	81
図53	月縄手遺跡の花粉化石分析結果	82
図54	月縄手遺跡92B区における植物珪酸体分析結果	88
図55	月縄手遺跡92A b区における植物珪酸体分析結果	88
図56	月縄手遺跡展開想定図	91

表 目 次

表1	月縄手遺跡の珪藻遺骸分析結果リスト	75	表2	月縄手遺跡の植物珪酸体分析結果	87
表3	主な分類群の推定生産量	88			
表4	貴生町遺跡II・III 遺構番号新旧対照表	93			
表5	貴生町遺跡II・III 遺物観察表	93	表6	月縄手遺跡II 遺構番号新旧対照表	95
表7	月縄手遺跡II 遺物観察表 (I期 土器)	97			
表8	月縄手遺跡II 遺物観察表 (I期 石器)	101			
表9	月縄手遺跡II 遺物観察表 (II期 土器)	102			
表10	月縄手遺跡II 遺物観察表 (II期 木器)	104			

図 版 目 次

巻頭図版1	月縄手遺跡I期赤彩土器		
2	月縄手遺跡I—2期S K116・152・SD101土器群		
3	月縄手遺跡I—3期S K134・148・SD110・NR101他土器群		
4	月縄手遺跡II期S X02・03下層土器群		
5	月縄手遺跡II期S X02・03上層土器群		
図版I	月縄手遺跡の珪藻遺骸の顕微鏡写真(1)	78	
図版II	月縄手遺跡の珪藻遺骸の顕微鏡写真(2)	79	
図版III	月縄手遺跡の花粉化石の顕微鏡写真	84	
PL.1	月縄手遺跡II 92A区I期遺構図	PL.2	月縄手遺跡II 92A区II期遺構図
PL.3	月縄手遺跡II 92B区I期遺構図	PL.4	月縄手遺跡II 92B区II期遺構図
PL.5	月縄手遺跡II 92C a区I期遺構図	PL.6	月縄手遺跡II 92C a区II期遺構図
PL.7	月縄手遺跡II 92C b区I期遺構図	PL.8	月縄手遺跡II 92C b区II期遺構図
PL.9	貴生町遺跡II 92A区 全景 (東から) SD01~03 (東から) SD03播鉢出土状況 (東から)		
PL.10	貴生町遺跡II 92B区 西半部全景 (南東から) SK04 (東から) SD04 (南東から)		
PL.11	貴生町遺跡II 92B区 NR02 (東から) NR02土層堆積状況 (南から) NR02S字甕出土状況 NR02灰釉系陶器出土状況		

- PL.12 貴生町遺跡II 92A・B区 出土遺物
- PL.13 貴生町遺跡III 92C区 SD07(東から) SD07B-B' ベルト土層堆積状況(西から)
SD01土層堆積状況(北から) NR02(東から)
NR02土層堆積状況(南西から)
- PL.14 貴生町遺跡III 92C区 出土遺物
- PL.15 月縄手遺跡II I期 92Aa・Ab区 全景(北東から)
92Aa区 第2遺構面全景(北東から)
92Aa区 第3遺構面全景(北東から)
- PL.16 月縄手遺跡II I期 92Ab区 全景(南西から) 92B区 全景(北西から)
92B区 NR101西肩土器出土状況(北東から)
- PL.17 月縄手遺跡II I期 92Ca・Cb区 全景(南西から) 92Ca区 全景(南西から)
- PL.18 月縄手遺跡II I期 92Ca区 SK113・114周辺(北東から) SK116(北から)
SD101(北西から)
- PL.19 月縄手遺跡II I期 92Cb・Ca区 全景(北東から) 92Cb区 全景(北東から)
- PL.20 月縄手遺跡II I期 92Cb区 SK133周辺(北西から) SK148(北から)
SK134(北西から)
- PL.21 月縄手遺跡II I期 92Cb区 SK150・151・SD110周辺(北から)
SK150・151(南西から) SK152(西から)
- PL.22 月縄手遺跡II I期 92Cb区 SD110(北西から) SD110石器出土状況(北から)
SK154(南西から)
- PL.23 月縄手遺跡II II期 92Aa・Ab区 全景(北東から) Aa区 全景(北東から)
92Aa区 全景(南東から)
- PL.24 月縄手遺跡II II期 92Aa区 SD01(北東から) SK01断ち割り状況(南から)
92Ab区 全景(南東から)
- PL.25 月縄手遺跡II II期 92B区 全景(北西から) NR01(北西から)
SX01土器出土状況(北西から)
- PL.26 月縄手遺跡II II期 92Ca区 全景(北東から) 東半部(南西から)
- PL.27 月縄手遺跡II II期 92Ca区 SK58・SX02~04土器出土状況(北西から)
SK24(北西から) SK58(北東から)
- PL.28 月縄手遺跡II II期 92Ca区 SX02検出状況(北西から) SX02全景(東から)
SX02土層堆積状況(西から)
- PL.29 月縄手遺跡II II期 92Ca区 SX02最下層遺物出土状況(東から)
SX03検出状況(南西から) SX03全景(西から)
- PL.30 月縄手遺跡II II期 92Ca区 SX03土層堆積状況(西から) SX03遺物出土状況(西から)
SX03最下層土器出土状況(西から)
- PL.31 月縄手遺跡II II期 92Cb・Ca区 全景(北西から) Cb区 西半部(北東から)

- P L . 32 月繩手遺跡Ⅱ II期 92C b 区 東半部 (北東から) S K 99・156重複状況 (南西から)
- P L . 33 月繩手遺跡Ⅱ I期 S K 116出土土器
- P L . 34 月繩手遺跡Ⅱ I期 S K 114・117・134・147・148・151出土土器
- P L . 35 月繩手遺跡Ⅱ I期 S K 152・154・156・S D 101出土土器
- P L . 36 月繩手遺跡Ⅱ I期 S D 110・S X 101・N R 101出土土器
- P L . 37 月繩手遺跡Ⅱ I期 N R 101・包含層出土土器
- P L . 38 月繩手遺跡Ⅱ I期 出土石器
- P L . 39 月繩手遺跡Ⅱ II期 S K 58・S X 04・S X 01出土土器
- P L . 40 月繩手遺跡Ⅱ II期 S X 02上層・S X 02下層出土土器
- P L . 41 月繩手遺跡Ⅱ II期 S X 03上層・S X 03下層・S X 03最上層出土土器
- P L . 42 月繩手遺跡Ⅱ II期 出土木器

例 言

1. 本書は、愛知県名古屋市西区貴生町に所在する貴生町遺跡(遺跡番号01-3002)、および同区比良に所在する月繩手遺跡(遺跡番号01-3021)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国道302号拡幅(貴生町遺跡Ⅱ・月繩手遺跡Ⅱ)および小田井山田共同溝建設(貴生町遺跡Ⅲ)にともない、愛知県教育委員会を通じて建設省愛知国道工事事務所(貴生町遺跡Ⅱ・月繩手遺跡Ⅱ)および建設省名古屋国道工事事務所(貴生町遺跡Ⅲ)からの委託をうけ、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間・面積は次のとおりである。

貴生町遺跡Ⅱ	平成4(1992)年4月21日～5月30日	A・B区	1088㎡
貴生町遺跡Ⅲ	平成4(1992)年7月18日～8月19日	C区	540㎡
月繩手遺跡Ⅱ	平成4(1992)年9月2日～12月25日	A・B・C区	311㎡
4. 調査に際しては、次の各機関の御指導・御協力をえた。

愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・建設省中部地方建設局愛知国道工事事務所・建設省中部地方建設局名古屋国道工事事務所・名古屋市教育委員会
5. 発掘調査は、鷲見 豊(調査課主査、現・西春町立西春小学校教諭)・樋上 昇(調査研究員)が担当した。
6. 発掘調査にあたっては次の方々の御協力をえた。

河合明美(調査研究補助員)・木全佐奈恵(発掘調査補助員)・小川羊子(大府・半田東高校非常勤講師)・加藤久美子(三重大学学生)・加納美華(岡崎国際大学学生)・青柳美代子・跡部廣子・安藤慶子・岩村 章・岩室一栄・大宮春夫・小郷とみ・粕屋和美・加藤やよ・蟹江和子・北島万紀・小出さゆり・神山示子・後藤容子・小播すみ江・佐伯宣子・竹川美知子・田嶋茂明・戸田朋一・富田光江・仲川信子・中村雅子・中村美佐子・野田郁子・服部善治・服部ますみ・馬場とみゑ・濱嶋英津子・廣垣澄枝・細野 明・堀尾美枝・堀場美子・松森雅良・水谷真理・水谷淑子・水野拓子・宮田百合子・森田明子・山口志満子・山川美智子・渡辺国彦(以上、発掘作業員)・森本千歳
7. 遺物・遺構図の整理、製図などについては次の方々の御協力をえた。

河合明美・岩崎繁子・小島洋子・後藤美子・日栄智子(南山大学学生)
8. 本書の執筆は、Ⅱ-2-1(石器)を服部信博(調査課主査)、Ⅳ-2-2(土器)を赤塚次郎(調査研究員)、Ⅳ-3-1を森勇一(愛知県立明和高等学校教諭)・小澤美紀(調査研究補助員)、Ⅳ-3-2を堀木(旧姓・楯)真美子(調査研究員)・萬谷さつき(津島市教育委員会)・吉野道彦(名城大学)が執筆し、Ⅳ-3-3は古環境研究所の分析結果をもとに堀木がまとめた。Ⅳ-3-4は堀木・樋上りが執筆し、それ以外の部分の執筆と全体の編集は樋上がおこなった。なお、遺物の写真撮影については深川進氏の手をわずらわせた。
9. 現地調査ならびに報告書作成については次の方々の御教示・御協力をえた。

川合 剛(名古屋市見晴台考古資料館)・深澤芳樹(奈良国立文化財研究所)・山田昌久
10. 調査区の座標は、建設省告示の平面直角座標第Ⅶ座標系に準拠した。
11. 出土遺物および調査記録などの資料は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

I. 序 章

1. 調査にいたる経緯と調査経過

貴生町遺跡・月縄手遺跡はともに名古屋市西区に所在している。うち、貴生町遺跡は昭和53年名古屋環状2号線小田井道路改良工事中に発見され、愛知県教育委員会によって発掘調査がおこなわれた¹⁾のを皮切りに、昭和60年に本センターが範囲確認のための試掘調査をおこない、昭和62年には同じく本センターが名古屋環状2号線建設にともなう発掘調査をした²⁾。さらに、名鉄犬山線高架工事や名鉄犬山線・地下鉄鶴舞線の上小田井駅建設の事前調査として昭和62年から平成4年にかけて名古屋市教育委員会によって断続的に調査がおこなわれてきた³⁾。その結果、縄紋時代から近世にかけての遺物包含層、古墳時代の井戸・土坑や、近世に属する自然流路2条、溝・土坑多数が検出されている。

一方、月縄手遺跡は昭和60年の本センターによる試掘調査によって確認され、昭和62年に名古屋環状2号線建設にともない発掘調査をおこなった⁴⁾。その結果、古墳時代前期と弥生時代前期の2つの遺構面を確認し、それぞれの面で土坑や溝を多数検出し、特に弥生時代前期のいくつかの土坑からは遠賀川系土器を主体とする良好な一括資料をえることができた。

今回は、平成4年度に本センターが国道302号の拡幅にともなう事前調査として、建設省愛知国道工事事務所の依頼をうけて貴生町遺跡・月縄手遺跡の発掘調査を実施した。さらに、建設省名古屋国道工事事務所共同溝課から小田井山田共同溝建設にともない貴生町遺跡の国道302号北側側道部分を発掘調査をおこなってほしい旨の依頼があり、建設省と本センターならびに愛知県埋蔵文化財調査センターが協議をした結果、国道302号拡幅の貴生町遺跡を調査したのち、共同溝建設にかかる貴生町遺跡、そして月縄手遺跡の順に調査をおこなうこととなった。調査期間・面積は例言のとおりである。

成果としては、貴生町遺跡からは古墳時代前期の土坑・溝や近世の土坑・溝・自然流路がみつかった。月縄手遺跡では古墳時代前期の土坑・溝などから大量の土器のほか木製品も出土した。さらに弥生時代前期では集落を取り囲む環濠の一部や土坑・溝などから良好な土器群が多数みつかった。

註)

1. 七原恵史・都築暢也 1979「付、小田井遺跡」『朝日遺跡群発掘調査中間概報』6 愛知県教育委員会
2. 宮腰健司・佐藤公保 1990「貴生町遺跡」『月縄手遺跡・貴生町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第12集
3. 名古屋市見晴台考古資料館 1988『貴生町遺跡 第1次・第2次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
名古屋市見晴台考古資料館 1990『貴生町遺跡 第3～5次調査の概要』名古屋市教育委員会
名古屋市見晴台考古資料館 1992『貴生町遺跡 第6～8次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会
4. 松田 訓・森 勇一 1990「月縄手遺跡」『月縄手遺跡・貴生町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第12集

2. 位置と環境

貴生町遺跡・月繩手遺跡は名古屋市の北西部、西区の最北端で西春・師勝両町にほぼ接する地に東西約1kmの距離をへだてて所在している。両遺跡の約1km南には庄内川が北東から南西方向に流れ、貴生町遺跡の西約300mには江戸時代に開鑿された新川がほぼ庄内川に平行して流れている。両遺跡はこれら濃尾平野南部を網の目のように流れる河川にはさまれて形成された狭い微高地上に位置している。標高は現地表面で海拔4m程度である。

周辺の遺跡としては、貴生町遺跡の約1km西には東海地方屈指の弥生時代集落の朝日遺跡、さらにそれに西接して清洲城下町遺跡が南北方向にひろがっている。月繩手遺跡から庄内川をへだてた南約1.5kmには弥生時代前期の集落として著名な西志賀遺跡と古墳時代集落である志賀公園遺跡がある。そのほか古墳時代の遺跡には月繩手遺跡の東約1.7kmに味美二子山古墳・白山神社古墳・春日山古墳・白山藪古墳などで形成される味美古墳群が展開している。中・近世には清洲城下町遺跡のほか、両遺跡の周辺には平田城・小田井城・比良城など中小の城郭が築かれている。

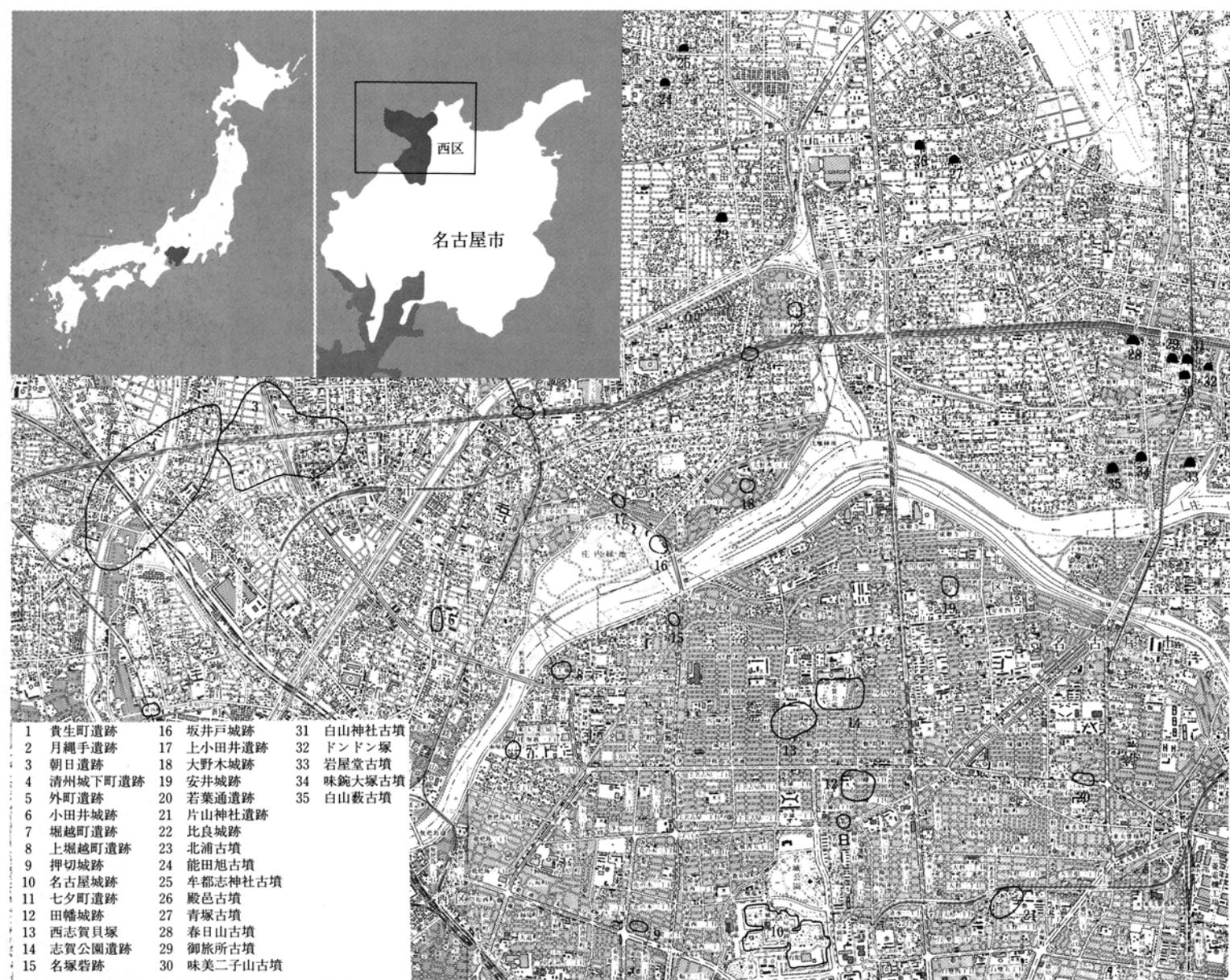


図1 遺跡の位置と周辺の主要遺跡 (1 : 50,000)

貴生町遺跡 II

II. 貴生町遺跡II

1. 遺 構

1. 調査区の設定 (図2)

貴生町遺跡の所在地は先述のように名古屋環状2号線(国道302号)・名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線)が十字に交差する交通の要衝にあっている。昭和53年以来、愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会・本センターが断続的に発掘調査をおこなってきたため、数多くの発掘区が複雑に入りこんでいるが、おおむね南北方向の調査区が名古屋市教育委員会によるもので、東西方向が本センターの調査区である。昭和62年におこなった本センターの調査区は西からA・B・C・D・E・F・Gと7ヶ所にわかれ、うち、A・B区で遺構がみつかったために、遺跡の範囲は環状2号線と名鉄線が交差する地点から西側にひろがるものと推定されている。このために今回の調査区は62A区の西側と62A区と62B区の間地点に設定された。南北約7m、東西約85mの東西に細長い調査区の西側から約4分の1の位置にコンクリート擁壁があるため、ここから西側を92A区、東側を92B区(以下、それぞれ単にA・B区と記述する)として発掘調査をおこなった。

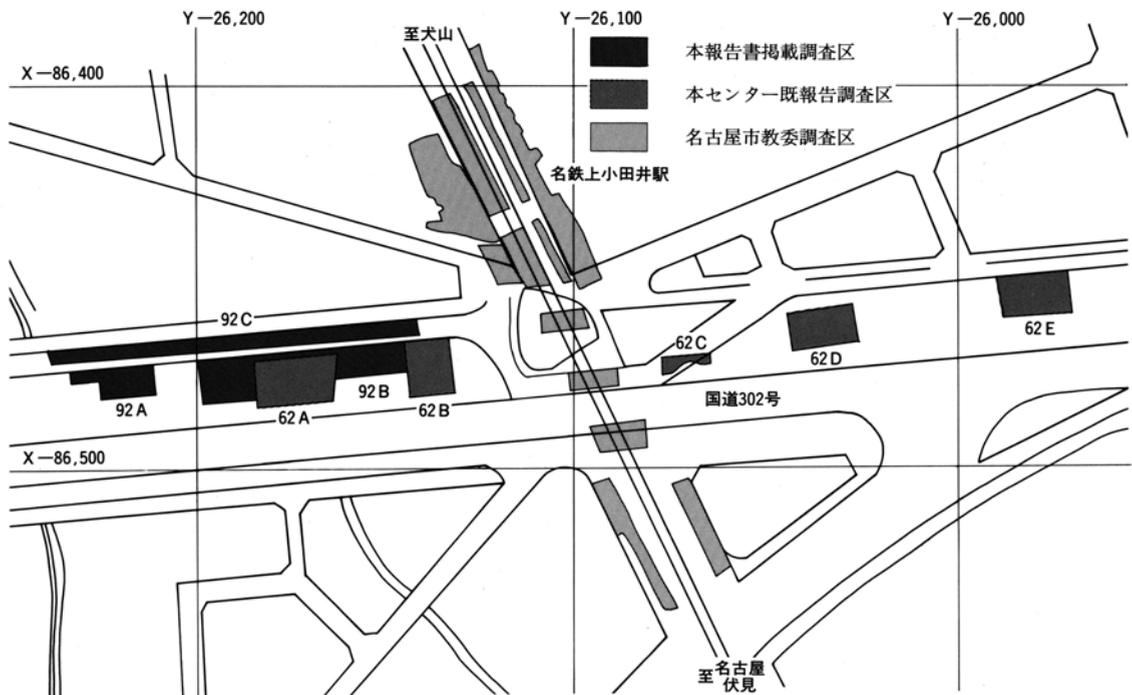


図2 調査区設定図 (1:2000)

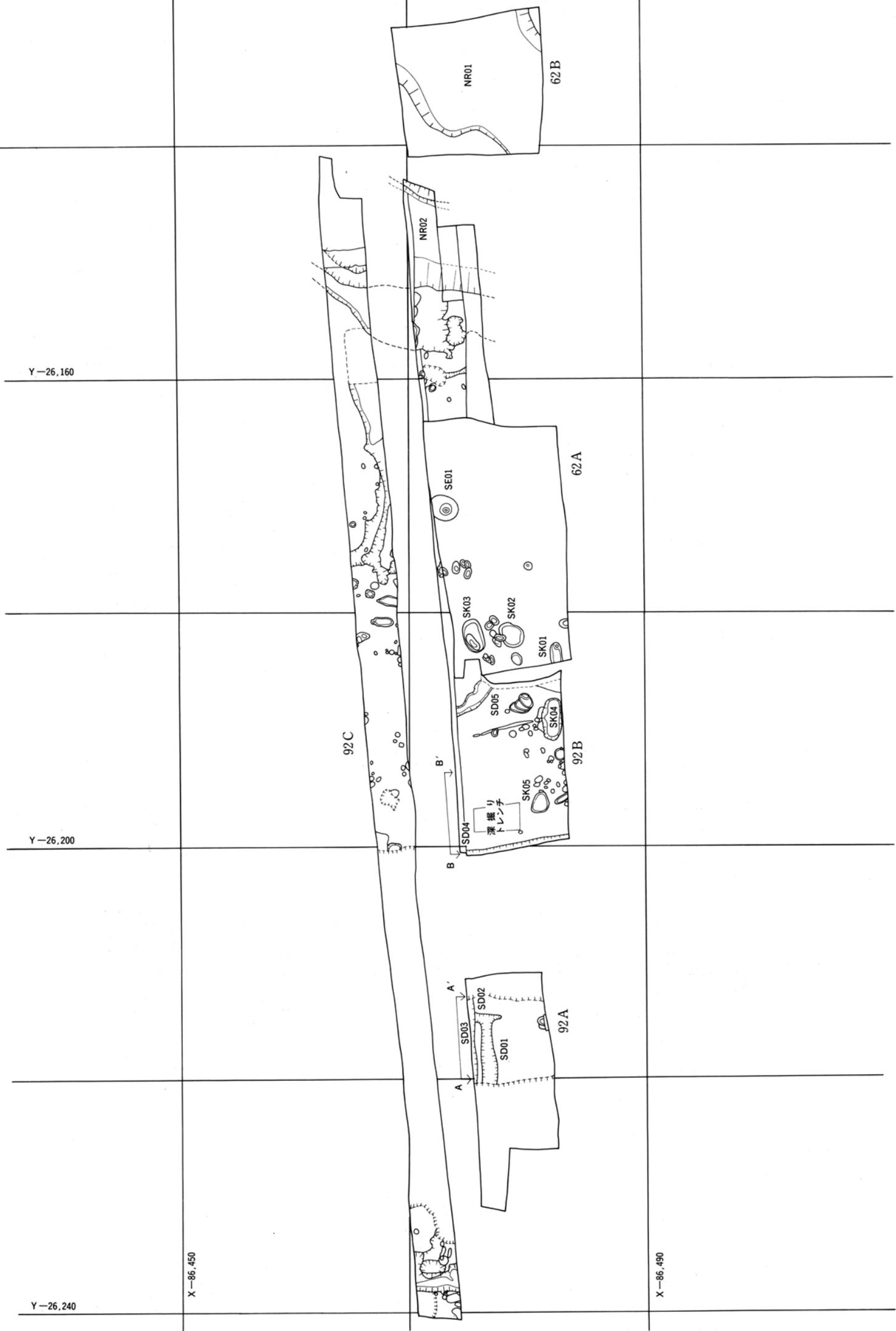


図3 貴生町遺跡遺構図 (1:400)

2. 基本層序と主要遺構

(1)基本層序 (図4) 地形的にはA区から西側の新川にむかってゆるやかに下がり、B区の東端部には南北方向の自然流路が位置するため、黄色味をおびた灰白色シルトの地山面では、62A区によって分断されたB区の西側部分(以下、B区西半部)が最も高く、包含層の堆積も厚くなっている。

土層の堆積状況はA区とB区で異なっている。A区では、現地表下1m以上におよぶ客土層の下に中・近世包含層の暗灰色粘質土が約30cmあり、地山面にいたる。包含層中には新川の洪水によるとみられる白色砂が混じっている。B区では客土層の下に旧水田耕土と床土が2面あり、暗灰褐色粘質土の中・近世包含層、地山面となる。遺構の検出はI期—古墳時代、II期—中・近世とも地山面でおこなった。

(2)I期の主要遺構 (図3) I期はその遺構から出土する土器より、古墳時代前期に属する。ただしこの時期の土器が出土する遺構はきわめてわずかなため、埋土の色調などから時期を判断しているものもある。ここではSK04とSD04・05について記述するが、他にSK04やB区全域から足跡とおもわれる小ピットを検出している。埋土はおおむね地山ブロック混じりの暗茶褐色粘質土である。

SK04 (図5) B区西半部の南壁付近で検出した東西に長い楕円形の土坑。断面は浅い逆台形で、規模は長径が3.6m、短径が1.76mで、深さは0.25mである。埋土は地山ブロックが混じる黒褐色粘質土である。遺物はS字状口縁台付甕の下半部が出土している。

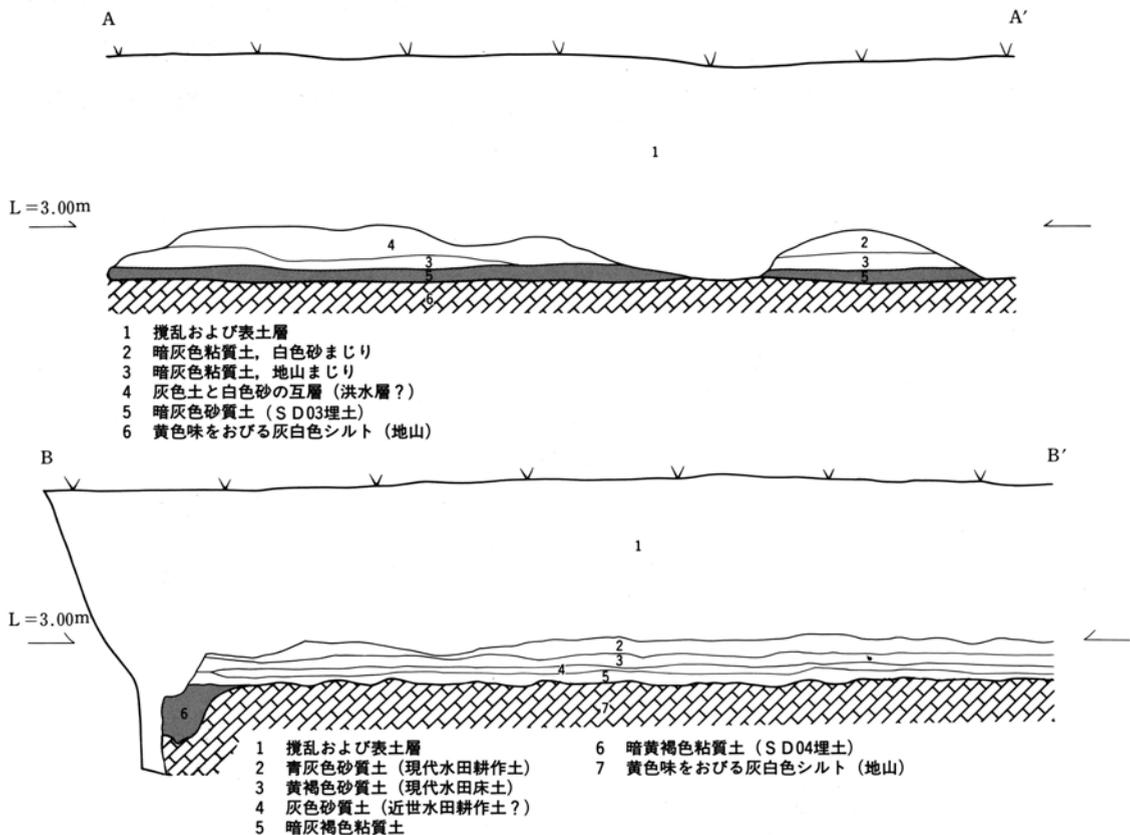


図4 A・B区北壁土層断面図(1:50)

SD04 B区西端を南北に走る溝。調査区にかかるのは東側の肩のみだが、北壁土層図(図4下)ではV字状の断面で、幅0.5m以上、深さ0.4mである。埋土は暗黄褐色粘質土で遺物はほとんど出土していない。

SD05 B区西半部の東端部を北西から南東に流れる溝である。幅は最も広いところで1.4m、深さは0.4mある。断面は皿状、埋土は地山ブロック混じりの暗茶褐色粘質土である。遺物は土師器片が若干出土している。

(3)II期の主要遺構 II期はI期同様B区全域にひろがる足跡状ピットのほか多数の小土坑・小溝、A区でSD01~03、B区東端部の自然流路NR02がある。埋土はおおむね地山ブロック混じりの暗青灰色粘質土である。

SD01~03 A区で検出した溝である。SD01は東西方向でSD02がそれに直交して接続する。埋土はいずれも暗灰褐色粘質土で、SD01は幅1.3mで深さ0.13m、SD02は幅0.8mで深さ0.2m、いずれも断面は皿状である。SD03はSD01に平行してSD02を切る東西溝で、南肩のみ検出している。幅は0.6m以上で深さは0.1m、埋土は暗灰色砂質土である。

NR02(図6) B区東端部で検出した南北方向の自然流路である。B区東半部より2段にテラスをもちながらゆるやかに下がっていく。最上部で幅14m以上、下部の肩からで約9mの幅である。深さは最上部から約1.8mあり、埋土は流水性の灰色砂質土と有機物を多く含む黒褐色粘土がそれぞれ10~20cmの厚さで幾重にも互層に堆積し、最下層は淡灰色細砂であった。出土遺物は古墳時代前期から中・近世の陶磁器までの時期幅をもち、そのほかに、西肩付近から後述する線刻をもつ滑石製有孔円板や、流木などがある。このNR02は北方で名古屋市教育委員会の第1次調査区で検出された流路につながるものとおもわれる。

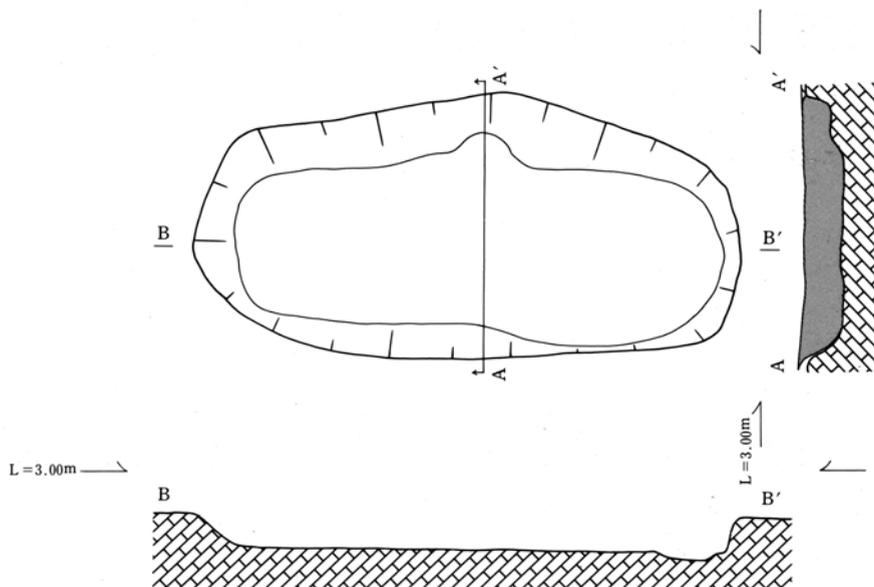


図5 SK04 平面断面図(1:50)

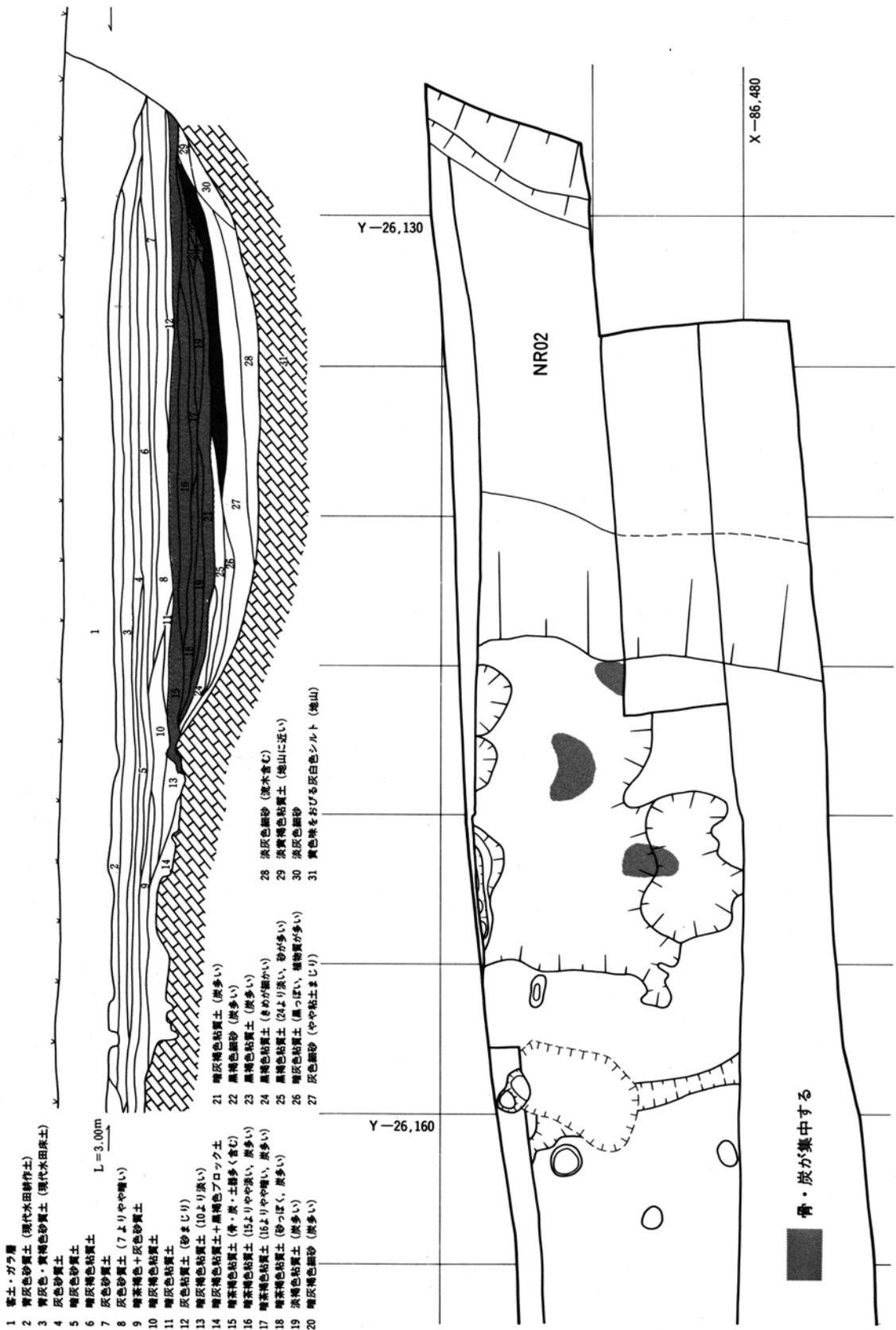


図6 NR02 平面断面図 (1:100)

2. 遺物

1. 土器・陶磁器

A・B区の土器・陶磁器のなかで遺構出土のものは少なく、またそのうちの大半はB区NR02からの出土である。NR02はI・II期両方の遺物をふくんでいる。このほかに図示しうる土器・陶磁器を出土した遺構としては、I期—A区SD01、B区—SK04、II期—A区SD03がある。

(1) I期 (図7) 1～6・13～20はS字状口縁台付甕である。口縁部の形状に若干の違いはみられるが、おおむね赤塚編年によるD類に属する。1はA区SD01、2～6はA区検出、13はB区SK04、14～20はB区NR02からの出土である。7～9・22～25は高杯。いずれも外面の摩滅が著しい。脚部内面に絞り痕をとどめる。脚部下半は強く屈曲し、円形の透孔をあけるものもみられる。25は半球状の杯部と大きく外反する脚部の高杯で、古い要素をもつ。外面にヘラミガキを施し、脚部には3方に円形の透孔をあける。7～9はA区検出。22～25はB区NR02出土。10・11は壺の口縁部で、口縁端部を若干上方につまみだす。いずれもA区検出。12・21はパレス壺。12は広口壺の肩部で、21は内彎長頸壺の口縁部。いずれも赤彩が部分的に残る。26は壺底部でB区NR02出土。

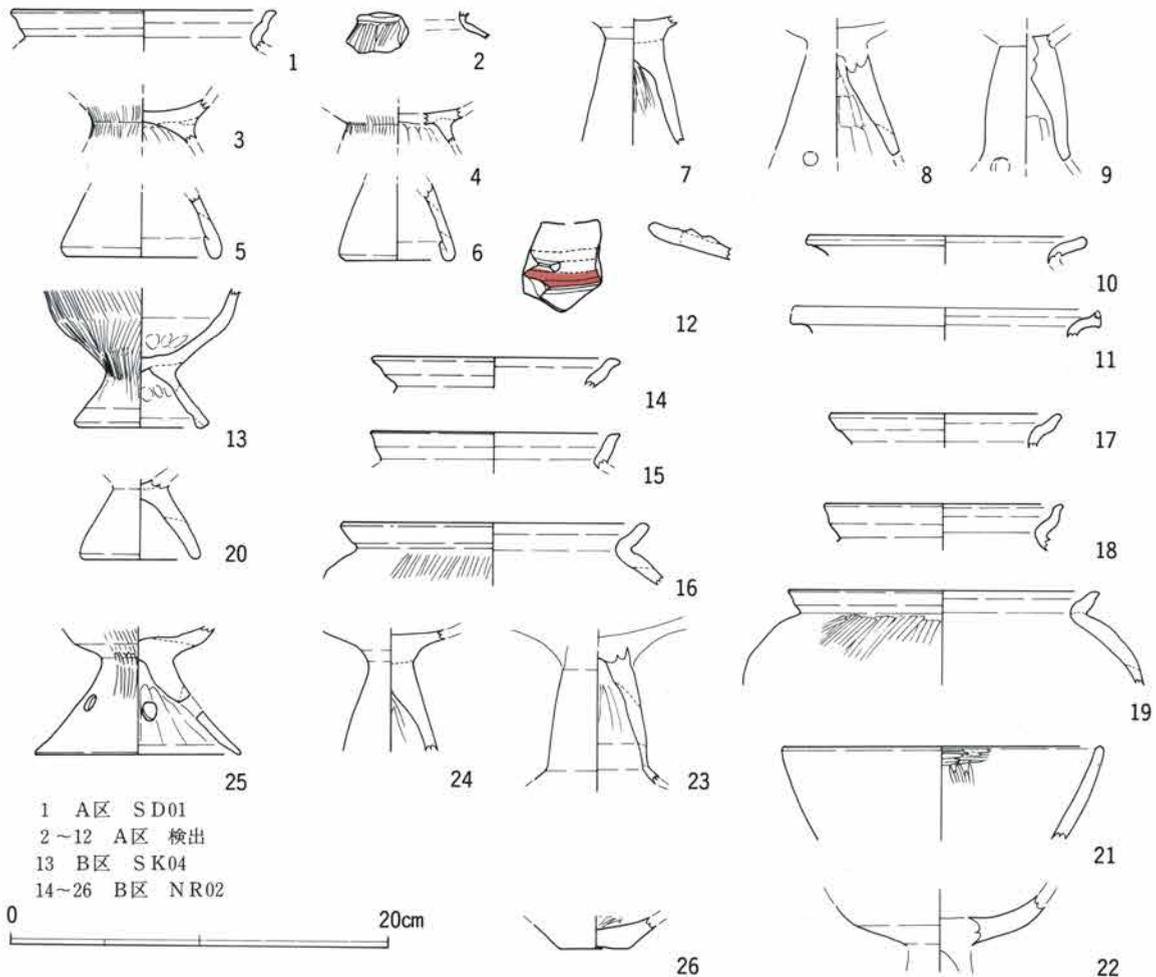


図7 I期土器実測図(1:4)

(2)II期の土器・陶磁器 (図8) 27・28はA区SD03出土。27は12～13世紀頃の四耳壺の肩部。28は大窯期の播鉢である。29～35はA区包含層からの出土。29・30は北部系の灰釉系陶器碗である。31は16世紀後半頃の内耳鍋で外面にスガが付着する。32・34は17世紀初めの鉄絵丸皿で内外面に長石釉を施す。33も長石釉の丸皿である。35は蓋物で口縁部を除いて灰釉をかける。時期は18世紀後半頃である。36～42はB区NR02出土。36～39は北部系の灰釉系陶器で、36には底部外面に墨書がある。38は皿で、口縁部内面にスガが付着し、灯明皿として使用したと考えられる。40・41は南部系の灰釉系陶器。42は大窯II期のひだ皿で灰釉がかかる。43は18世紀中～後半頃の輪禿灰釉皿である。44・45は包含層出土。44は17世紀初頭頃の灰釉折縁鉄絵皿で、45は19世紀前半の灰釉碗である。

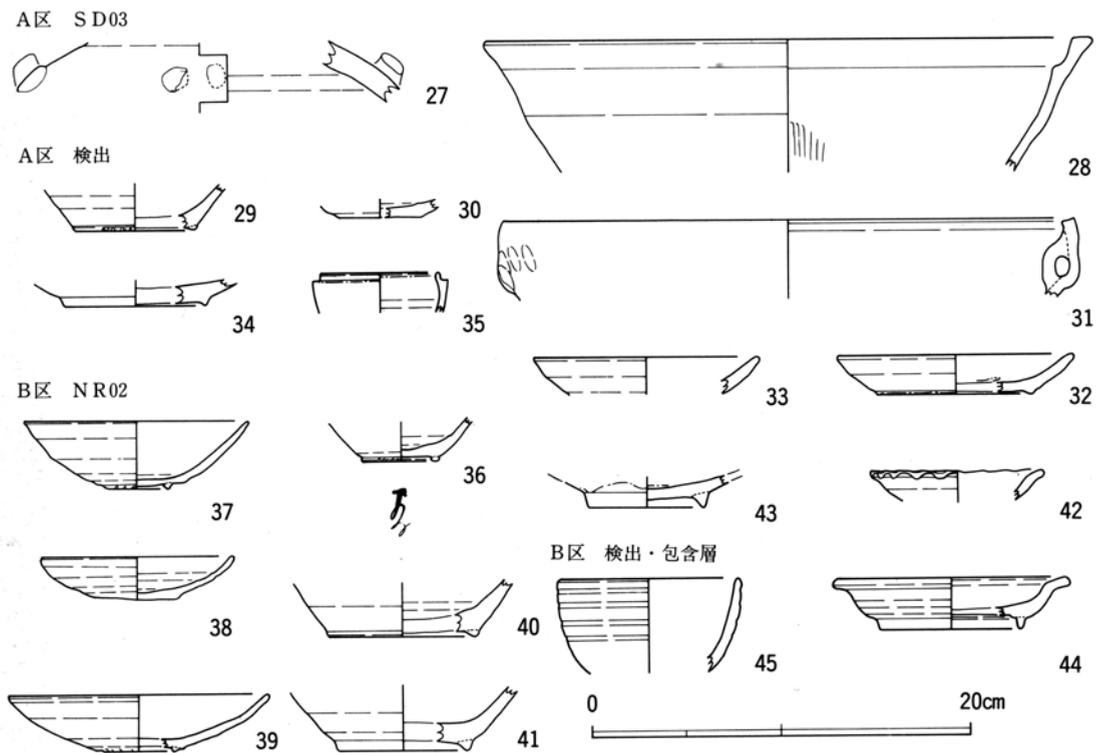


図8 II期土器・陶磁器実測図(1:4)

2. 石製品 (図9)

NR02の西肩付近から出土している。滑石製で、直径3.2cm、厚さ0.6cmで截頭円錐形を呈し、中央付近に直径0.3cmの円孔を2つあける。表面(凸面)には直弧紋に似た紋様を刻み、裏面にはなにか具

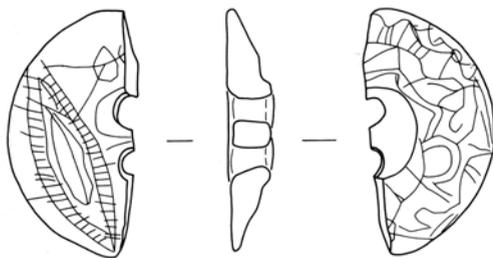


図9 線刻有孔円板実測図(1:1)

体的な絵画を線刻で表現しているが、約2分の1を欠損しているためその内容は不明である。材質・形状は紡錘車に似ているが、2つの穿孔をもつ例はみられないため、用途は不明。時期の決め手に欠けるが、材質・形状・線刻内容(直弧紋)などからI期に属する可能性が高い。

貴生町遺跡Ⅲ

III. 貴生町遺跡III

1. 調査区の設定

貴生町遺跡IIIとして記述をすすめる92C区は小田井山田共同溝建設にともなう国道302号北側側道部分の調査であり、92A・B区の北側にあたる。調査区は全長約100m、幅約4mである。

2. 主要遺構

調査区の西半部が約35mにわたって攪乱されているため、遺構の密度は低い。I期・II期にわけて記述していく。

(1) I期の遺構 (図10・11)

SK06 SX03東側の小ピット。埋土中よりS字状口縁台付甕の破片が出土している。

SD07 調査区西端部の南北溝。東肩が北壁付近で東へ折れてまた北に向かう。幅約1.6m、深さは0.45mで断面は逆台形である。埋土は灰色砂質粘土と淡灰色砂質土で、土師器片が若干出土しているが、図示しうるものはない。

SX03 SD07の東に掘削された浅い皿状の土坑。SD07によって西側が削られている。埋土は暗灰褐色粘質土で、S字状口縁台付甕の破片などが出土している。

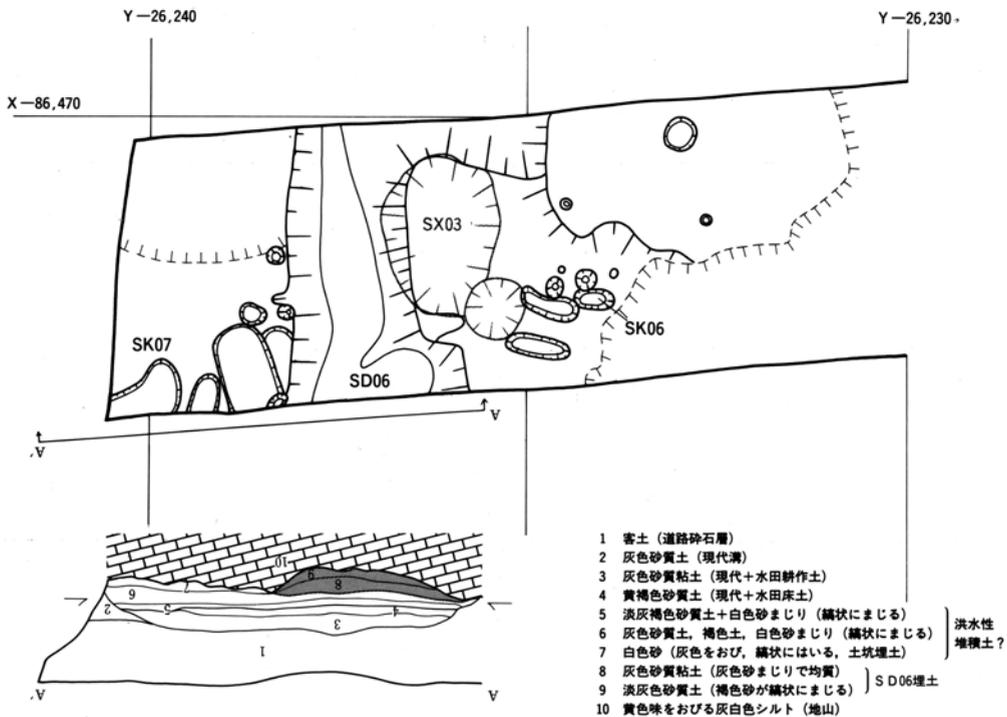


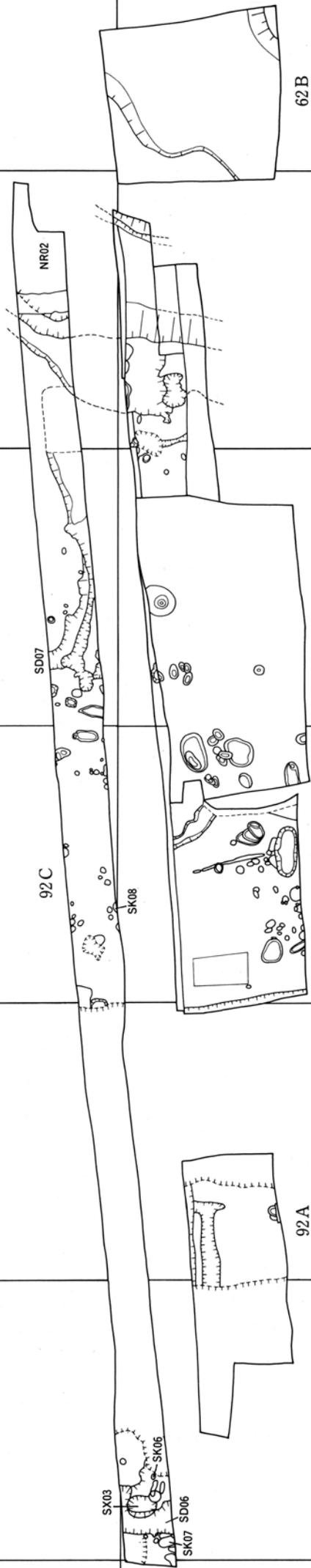
図10 SD06 平面断面図 (1:100)

Y-26,160

Y-26,200

X-86,450

Y-26,240



X-86,490

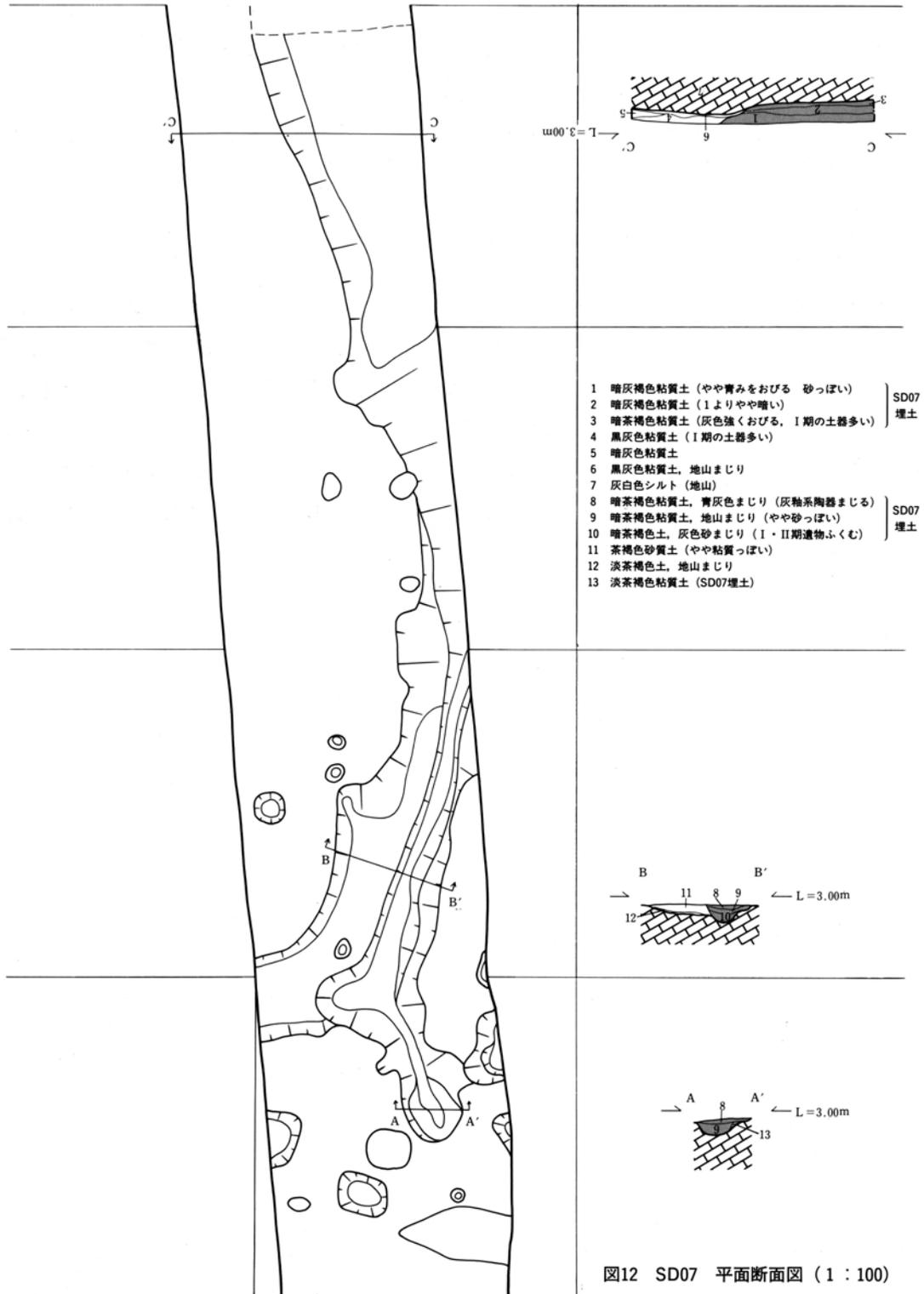
図11 貴生町遺跡遺構図 (1:400)

(2)II期の遺構

S K 07 調査区南西隅の土坑。平面は不整形で、大塚期の播鉢が出土している。

S D 07 (図12) 調査区東半部で検出した溝。北側より南流して東西方向の溝に接続し、N R 02に注ぐものとおもわれる。。幅1.8m、深さ0.15mの浅い皿状の断面をもつ溝が茶褐色砂質土で埋まったのち、幅約0.6m、深さ約0.25mの溝として再掘削している。再掘削された溝の埋土は上から青灰色混じりの暗茶褐色粘質土、地山混じりの暗茶褐色粘質土、灰色土混じりの暗茶褐色土の順である。

N R 02 92B区の北側で西肩のみ検出した。西肩は南西から北東に向かっている。遺物は少ない。



3. 遺物 (図13)

C区出土の遺物は基本的にA・B区と同様で、I期—古墳時代前期、II期—中・近世の2時期に属する土器・陶磁器がNR02をはじめとするいくつかの遺構から出土している。

(1) I期の土器 (1~24) I期の土器はSK06 (1・2)・SD07 (3・4)・SX03 (5・6)・NR02 (7~15・17~22)・検出 (16)・包含層 (23・24) などから出土している。

1~3・5・7~13・23はS字状口縁台付甕である。A・B区と同じくD類に属する。23は山陰系の口縁部をもつ。4・14~18は高杯の脚部。透孔をもつものはなく、4と9は下半部が強く屈曲する。6・19~22・24は壺。6は底部が若干くぼむ。19は狭い平底の底部の破片で下半部には板ナデ、底部外面および体部内外面にはヘラミガキを施す。20は短く外反する口縁部の破片である。21は広口壺で、大きく直線的にひらく口縁部をもつ。22は大形の壺の底部である。24は小型丸底壺。大半は摩滅が著しく、調整不明。

(2) II期の土器・陶磁器 (25~40)

25・26はSK07出土の播鉢で、大窯期に属する。25は内面にススが付着している。28~30はSD07出土の灰釉系陶器の椀である。28は南部系で高台が欠損している。28~30は北部系で、29・30には底部外面に墨書があるが、判読不明。31~40はNR02から出土した灰釉系陶器である。31・32は南部系の椀である。33~39は北部系の椀で、33・34・36~39には退化した三角高台がつく。38・39は底部外面に墨書がある。38は判読不明、39は「×」か。40は北部系の皿で、分厚い平底の底部と端部が肥厚する口縁部をもつ。灰釉系陶器の時期は、南部系が藤沢良祐氏の編年による第7型式で、北部系はおむね第VII~VIII期に属する¹⁾。

註)

1. 瀬戸市教育委員会 1990『尾呂』

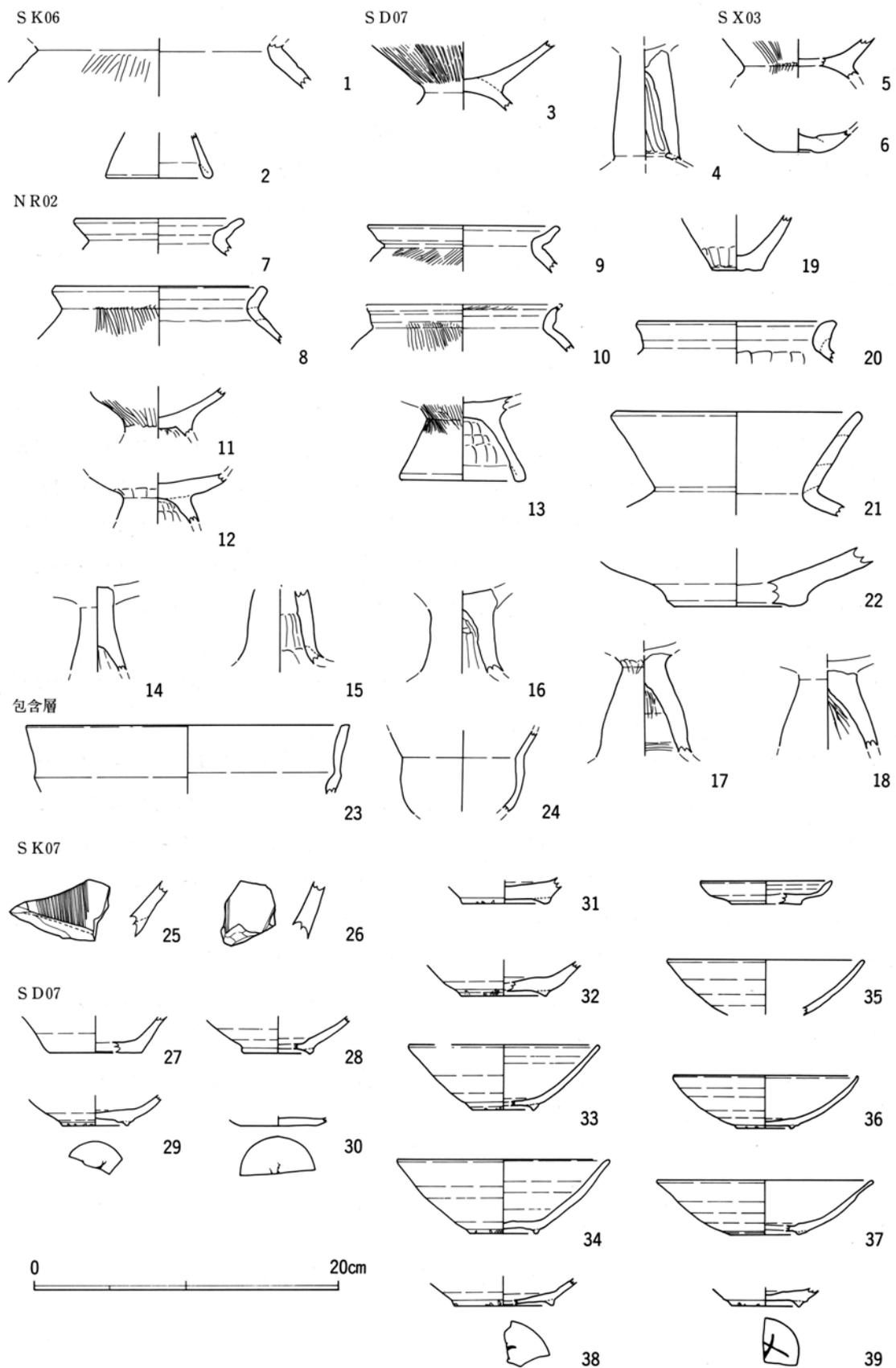


图13 C区出土遗物实测图(1:4)

4. まとめ

最後に、貴生町遺跡92A・B・C区の調査成果についてまとめる。

まずI期とした古墳時代前期だが、B区西端部とC区西端部でこの時期に属するとおもわれる南北方向の溝2条を検出した。いずれも比較的しっかりとした溝であるため、集落内におけるなんらかの区画にかかわるものかもしれない。B区SK04は大形の土坑でS字状口縁台付甕の下半部が出土した。そのほか、自然流路NR02からもI期の遺物が数多く出土していることから、NR02自体もI期にはすでに形成されていた可能性がある。

遺物に関してはS字状口縁台付甕D類の時期を中心として、それにやや古い時期の遺物が混じっているが、残念ながら土器は小片が多く、全体の器形をうかがえる資料はなかった。このような今回の出土遺物のなかで特に注目されるのは、両面に線刻を施した滑石製の有孔円板である。II期の遺物をふくむ自然流路NR02からの出土であるため、明確な時期の決め手には欠けるが、材質・紋様構成からみてI期に属するとみてよかろう。他に類例がなく、約半分が欠損しているために具体的な線刻の内容についてはあきらかにしえないが、特殊な用途にかかわる遺物とみてよかろう。しかし、全体に遺構は希薄で遺物も少ないため、今回の調査区がI期の集落における中心部分でないことは確かである。昭和62年度調査時の報告書では今次調査区の北側に集落中心部を想定しているが、これについても確たる証拠はえられなかった。

II期についても遺構・遺物は少ない。遺構は調査区全域にひろがる足跡状の小ピットと自然流路のほかには、わずかに土坑数基と溝数条があるのみであった。

II期の遺構のひろがりを見ていくと、おおむね名古屋市調査区から西側に展開している。名古屋市第1・7次調査区の流路1が今回の92B・C区NR02に、名古屋市第2・3次調査区の流路2が本センター62B区のNR01につながり、さらに南で合流するようである。これら地形的要因からみて、92C区の北側が遺跡の中心部と推定できるが、その性格をあきらかにするだけの資料には欠けている。

遺物は灰釉系陶器が南部系で13世紀中葉頃、北部系は14世紀末～15世紀初頭頃に属する。施釉陶器は16～17世紀を中心として、12世紀頃から19世紀前半頃におよんでいる。

以上、貴生町遺跡は2条の南北に走る自然流路の西側に遺構が展開していることがあきらかとなったが、今回の調査区では小土坑や溝が散漫に存在するのみであることから、かならずしも遺跡の中心部にあたっているとは考えられない。今後さらに広範な調査をおこなうことにより、貴生町遺跡の性格が徐々に解明されていくものと思われる。

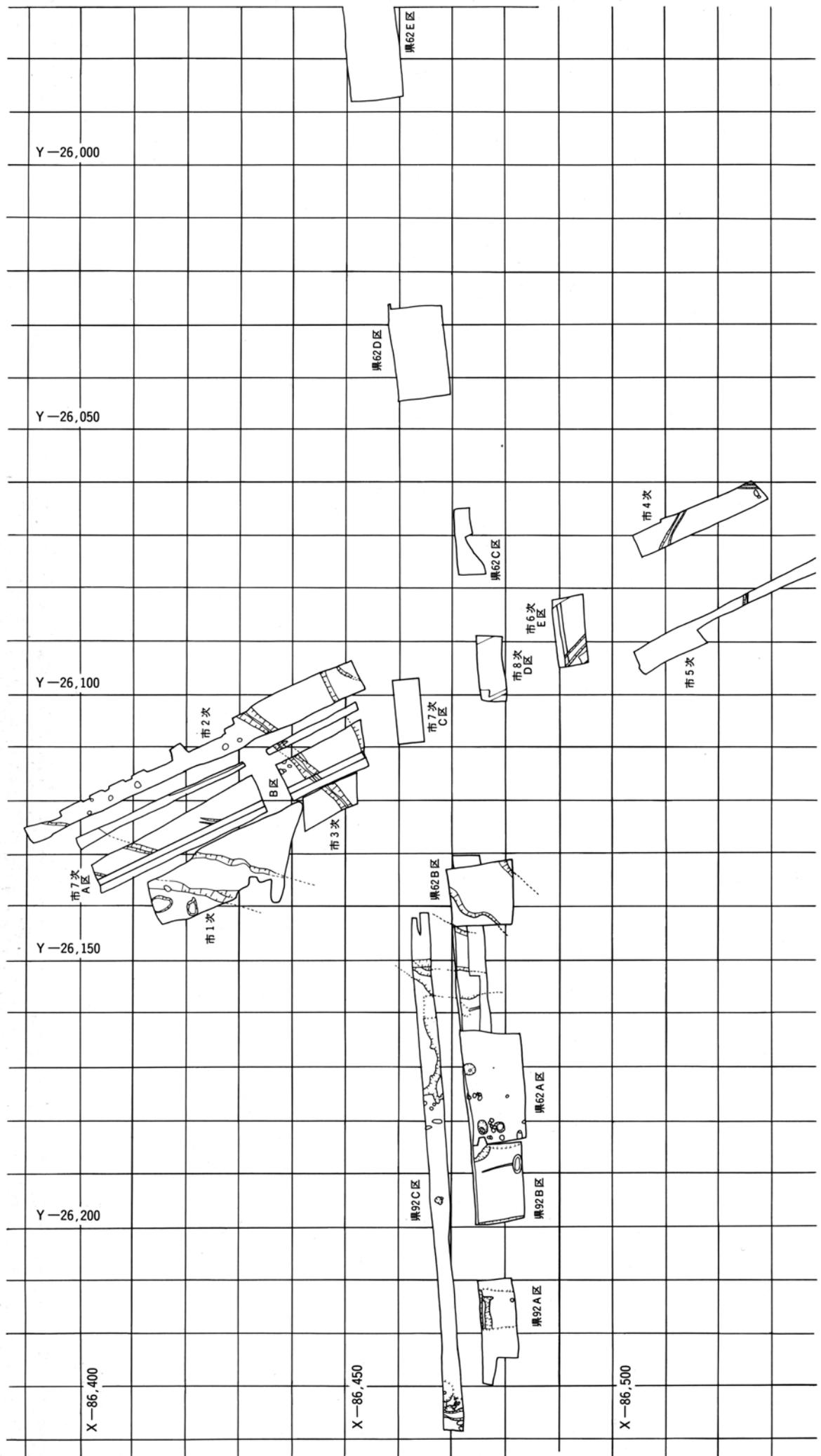


图14 貴生町遺跡 遺構全体図 (1 : 100)

(名古屋市教委 1992に加筆)

月繩手遺跡 II

IV. 月縄手遺跡II

1. 遺 構

1. 調査区の設定と基本層序

月縄手遺跡は名古屋環状2号線(国道302号)と名古屋市街地から北にぬける幹線道路のひとつである小口名古屋線が交わる月縄手の交差点にはほぼ位置している(図15)。昭和62年の調査では交差点の西側に1ヶ所(62A区)、東側に2ヶ所(62B・C区)の調査区を設け、62B区で弥生時代前期と古墳時代前期の2時期の遺構面を検出した。今回の調査ではその成果にかんがみ、62B区の東と西にそれぞれ1ヶ所ずつ(92A・B区)と、環状2号線に沿って走っている東海交通城北線(高架)の南側に1ヶ所の合計3つの調査区を設けることとなった(92C区)。そのうち、A区とC区は調査区内に埋設管や水路が位置するためにさらに2分割することとなり、それぞれAa・Ab区、Ca・Cb区と呼称している。

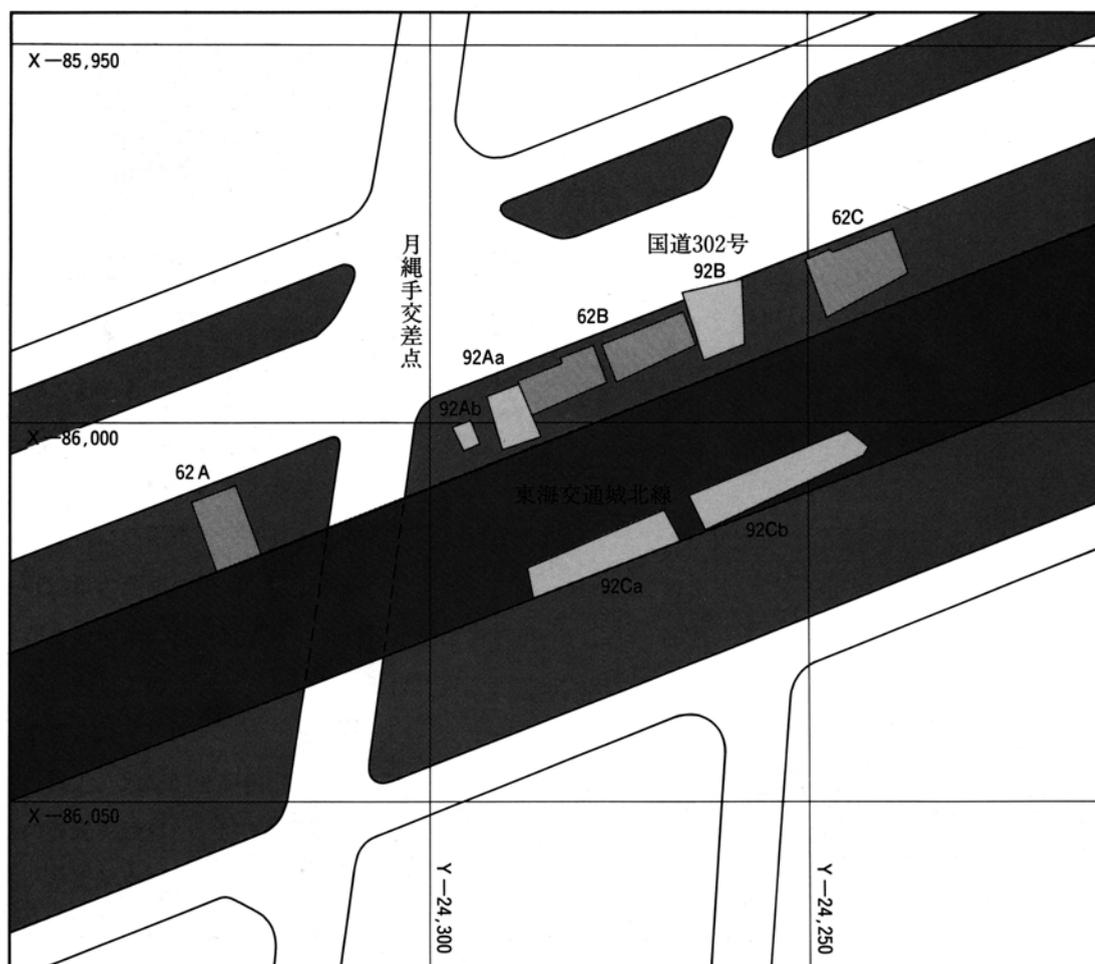


図15 調査区設定図(1:1,000)

つぎに基本層序について述べる。調査区によって若干異なる点はあるが、基本的には上からまず約1.5mにおよぶ客土層と旧水田耕作土があり、続いて黒褐色砂質シルトと暗灰褐色砂質シルトの2層からなる古墳前期包含層で、古墳前期の遺構検出面である淡灰色シルトにいたる。この淡灰色シルト層は0.2~0.4mの厚さがあり、弥生前期以降に河川の氾濫などにより堆積したものと考えられ、ヨシやアシの根によってできた鉄・マンガンなどの斑紋が一面にひろがっている。全く遺物をふくまない。この下は暗灰褐色砂質シルト層で、弥生前期の包含層である。包含層の下の弥生前期遺構面は、弥生前期のベースである淡灰色シルト層の上に堆積した黒灰色粘質土で、A区ではさらにその上の暗灰色粘質土から掘り込まれた遺構もある。地形的に高いB・Cb区では黒灰色粘質土がなく、淡灰色シルト層が遺構面となっている。淡灰色シルト層は古墳前期のそれとほぼ同質の自然堆積層で、鉄・マンガン斑があり、無遺物である。

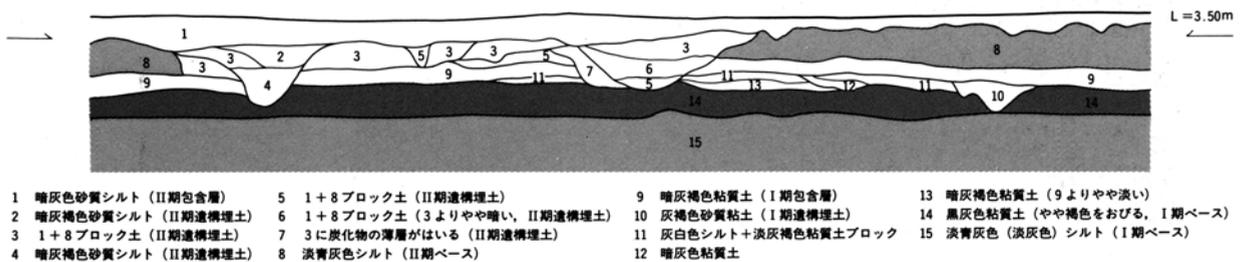
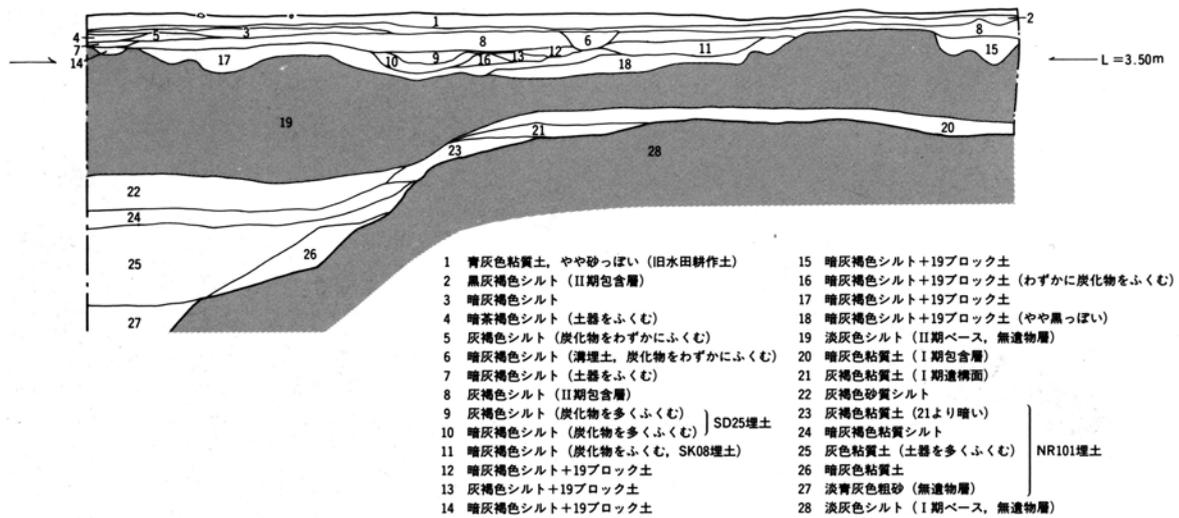


図16 BCa区 南壁土層断面図 (1:50)

2. I期の遺構 (図17)

前述のように月繩手遺跡は淡灰色シルトの間層をはさんで弥生時代前期と古墳時代前期の2時期にわかれる。そこで、本節以降は弥生前期—I期、古墳前期—II期として記述をすすめていく。

I期の遺構には集落の周囲にめぐらす環濠とそれが取りつく自然流路、竪穴住居跡の可能性が高い大形の土坑、多量の土器が出土した大小の土坑・溝・柱穴などがある。

A区

A区はAa区とAb区にわかれる。Aa区では調査区北側のSD101のほか土坑・ピットなどがあり、Ab区は調査区の半分をSD101が占めている。Aa区の南側で長さ77cm、直径28cmの円柱状の大石が横だおしの状態で出土したが、掘形などの明確な遺構はなく、性格は不明である。

SD101 (図18) Aa区の北半部に北東から南西方向に溝の肩が走る。調査区西壁の断面によると、幅2.8m以上、深さ0.9mで箱状に掘削されている。溝の埋土は上半部が古墳前期のベースである淡灰色シルトで、その下には滞水状況をしめす青灰色粘質土・淡黒褐色粘質土・灰色粘質土が堆積している。西壁断面ではさらに溝の肩の南側に幅2.6m、厚さ0.1~0.15mの暗灰色粘質土層が堆積している。この溝の北肩は、Ab区の北東隅から南西隅にかけて走る溝の肩がそれにあたる。Ab区の南壁では幅1.9m、深さ約1mの箱状断面を呈する。埋土は古墳前期ベースとその下がやや粘質の淡青灰色シルトである。Ab区西壁ではAa区と同じく溝の肩に接して、幅1.5m、厚さ約0.15mの暗灰褐色粘質土による高まりがみられる。Aa・Ab区をあわせると、SD101の幅は約3mの規模となる。Ab区ではほぼ南北方向で、Aa区でやや東に傾き、鍵の手状にまた北に向かっている。この溝は後述するCa区のSD101につながり、遺跡の西側を区画し、集落を囲む環濠と考えている。溝の両肩に接して堆積する暗灰褐色粘質土の高まりは環濠掘削土を積みあげた土塁の可能性が高い。とすれば従来、環濠の外側のみに築くとされる土塁が、環濠の両側に存在したことをしめすきわめて貴重な例といえよう。

B区

B区では調査区の北東側半分以上を自然流路NR101が占め、南西側の微高地状に浅い土坑・溝のほか、ピットが点在している。ピットのなかにはかなり深いものもあるが、建物としてまとまらない。

NR101 (図16) 調査区東半分を占める谷状の自然流路。南壁断面によると、深さは調査区東端で1.5m以上におよぶ。埋土は古墳前期ベースの淡灰色シルトの下に灰褐色砂質シルト・暗灰褐色粘質シルト・灰色粘質土・暗灰色粘質土・淡青灰色粗砂で、西肩付近と灰色粘質土層から土器が数多く出土している。最下層の淡青灰色粗砂は流水性の堆積で、流木が出土している。62C区でも同様の堆積状況をしめすことから、このNR101が遺跡の東端を限るものと考えている。

Ca区

C区はほぼ中央の水路をはさんで西側をCa区、東側をCb区とする。Ca区ではA区で検出した環濠の続きと竪穴住居跡の可能性のある土坑、多量の土器が出土した土坑・溝や小ピットがある。

SK113・114 (図19) 調査区東端付近にある大形の方形土坑。SK113は北が調査区外にのび、西を攪乱が破壊しているが、一辺2.5m以上、深さ0.34mの規模をもち、ゆるやかな曲線を描く南東のコー

X-85,960

X-86,000

X-86,020

Y-24,300

Y-24,250

Y-24,270

Y-24,280

■ は土器が集中して出土した地点

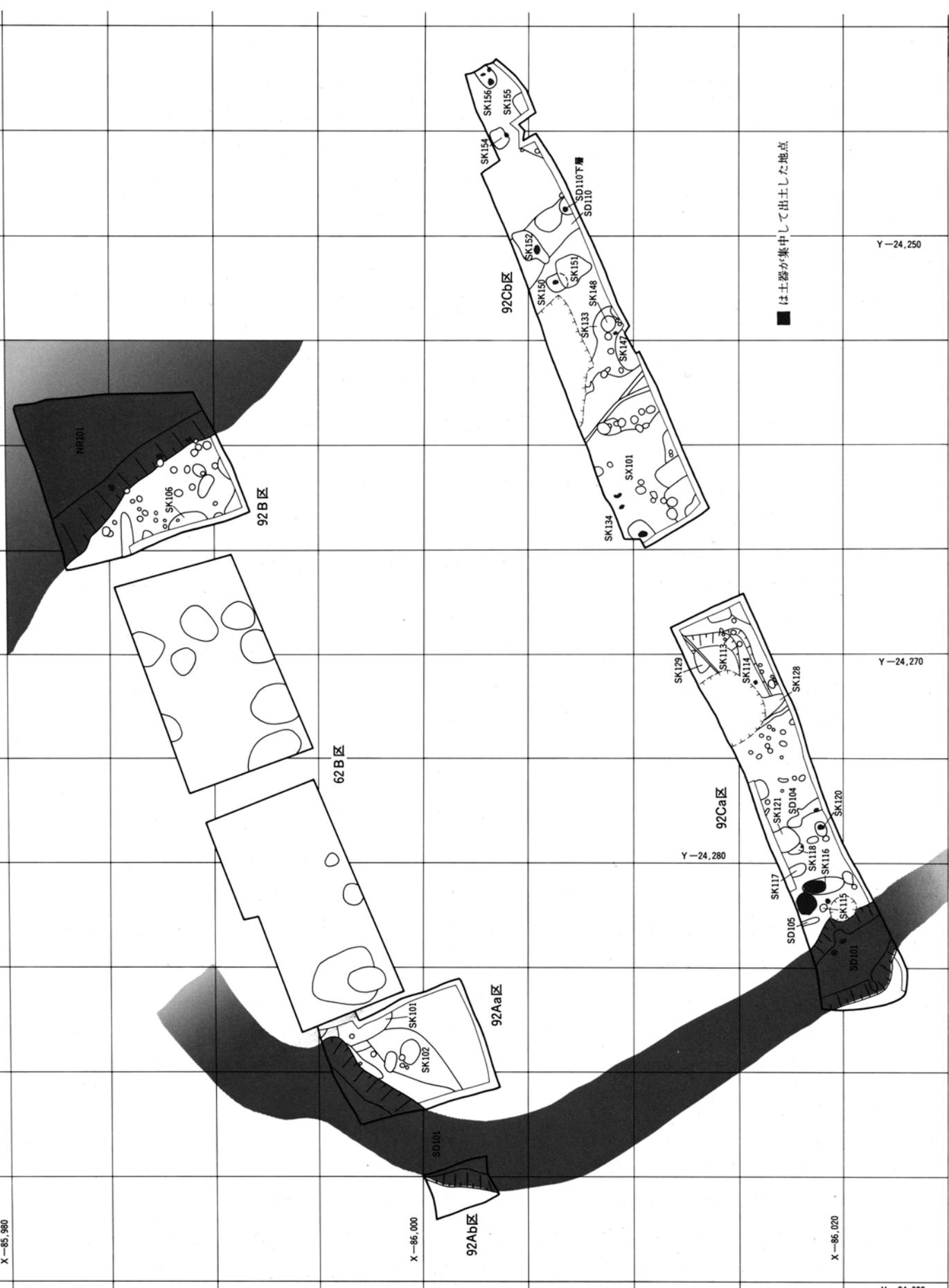


図17 I期 遺構全体図 (1:250)

ナ一部分を検出している。肩部の傾斜がゆるやかなこと・柱穴がないことなどから断定はできないが、
竪穴住居跡の可能性はある。S K114は北にS K113が重複し、西はS K128で切られているが、一辺が
3.7m以上、深さは0.15mで、南東側のコーナー部分を検出した。コーナー付近に複数の小ピットがあ
るが、柱穴かどうかは不明。S K113同様、竪穴住居の可能性はある。

S K116 (図19) S D101のすぐ東側で検出した南北に長い楕円形の土坑。長径2.0m、短径0.8m、
深さ0.4mの規模をもつ。なかからはほぼ完形の遠賀川系壺をふくみ、図示できたものだけでも23点に
およぶ弥生時代前期土器の良好な一括資料が出土した。

S D101 (図18) A区で検出したS D101の南延長部分にあたる。調査区の西端部を北西から南東に
向けて走る。南壁での規模は幅3.5m、深さ1.1mで箱状の断面である。埋土は古墳前期ベースの淡灰
色シルト、灰褐色粘質シルト、暗灰色粘質シルトの順である。A区同様、溝の両側に土塁状の盛土が
みられる。調査区のほぼ中央部では溝の幅が4.3mにひろがっており、下端には突出部があって傾斜が
ややゆるやかになっているため、環濠の出入口にあたる可能性が考えられる。

このほかにS K115・117・118・120・121・128・129、S D104・105からも土器が出土している。

Cb区

調査区の西側約4分の1は東側に比べて2～5cmほど低くなっており、暗灰色粘質土と炭化物の
層がひろがっている。これを除去した面で個別の遺構を検出した。この薄層のひろがりやをS X101とす
る。そのほかに土坑・溝・ピットなどがある。

S K133 (図20) 調査区ほぼ中央の竪穴住居状の土坑。一辺約3.3mの隅丸方形で、深さは約0.1m。
北側に溝状の遺構がつながっている。S K133内にはS K147～149が掘削されている。埋土はすべて
砂っぽい暗灰褐色粘質土である。S K147から比較的まとまって土器が出土した。

S K134 調査区北西隅にある一辺約1.2mの方形土坑。深さは約0.2mで、埋土は黒褐色粘質土。なか
から壺の上半部と甕が出土している。

S K150・151 (図20) S K150は径約0.9m、深さ約0.15mのほぼ円形の土坑で、S K151に切られれ
る。S K151は平面が約2.0×1.8mのいびつな台形を呈し、深さは約0.13m。埋土はいずれも炭化物を
多くふくむ暗灰色砂質粘土で、壺・甕などの土器が出土している。

S K152 (図20) S D110に重複する土坑。長径約4m、短径約2mの楕円形で、深さは0.57mあり、
断面は逆台形。埋土は暗褐色粘質土で、大形の壺の破片をふくむ多くの土器が出土した。

S K154 (図20) 平面が2.4×1.8mの隅丸方形で、深さは約0.2mの皿状の断面である。埋土は上層
が炭を多くふくむ黒灰色粘質土で、下層は暗灰色粘質土。上層から甕が主体の土器が多数出土した。

S K156 (図19) 調査区東端部にあり、平面は楕円形。長径2.8m以上、短径1.9mで、深さが約0.5m
で、断面は逆台形。埋土は炭を多くふくむ暗灰色粘質土で、多様な器種の土器が出土している。

S D110 (図20) S K152を切って掘削された溝で、北西から南東に流れる。深さ0.1m程度の浅い皿
状の断面を呈するが(S D110上層)、南壁付近で土坑状に急激に深くなる(S D110下層)。下層から
は赤彩土器をふくめ、まとまった土器が出土している。

このほかにS K155からも土器が出土している。

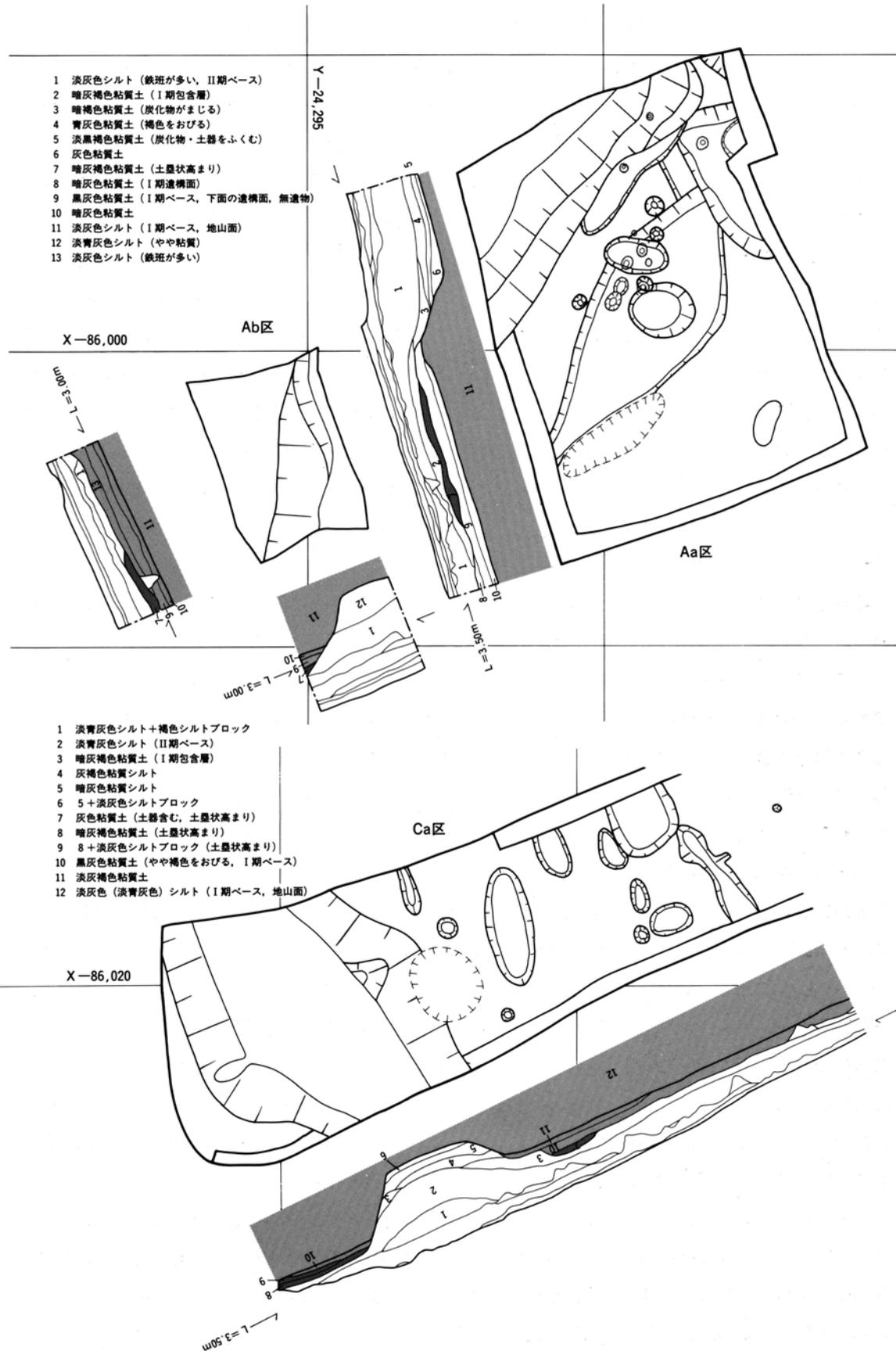


図18 A区(上)・Ca区(下) SD101 平面断面図 (1 : 100)

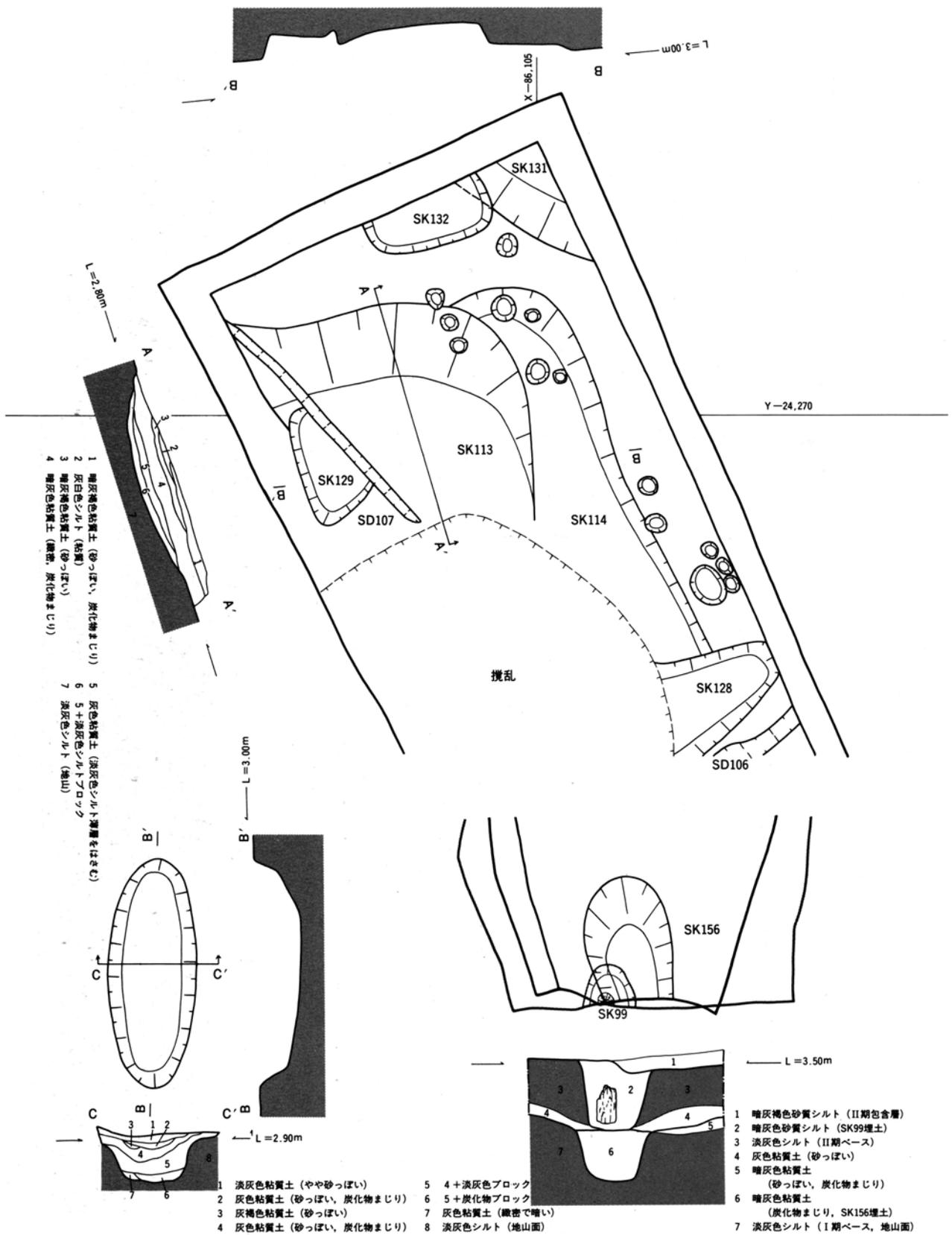


図19 SK113・114 (上), SK116 (下左)・SK156・99 平面・断面図 (1:50)

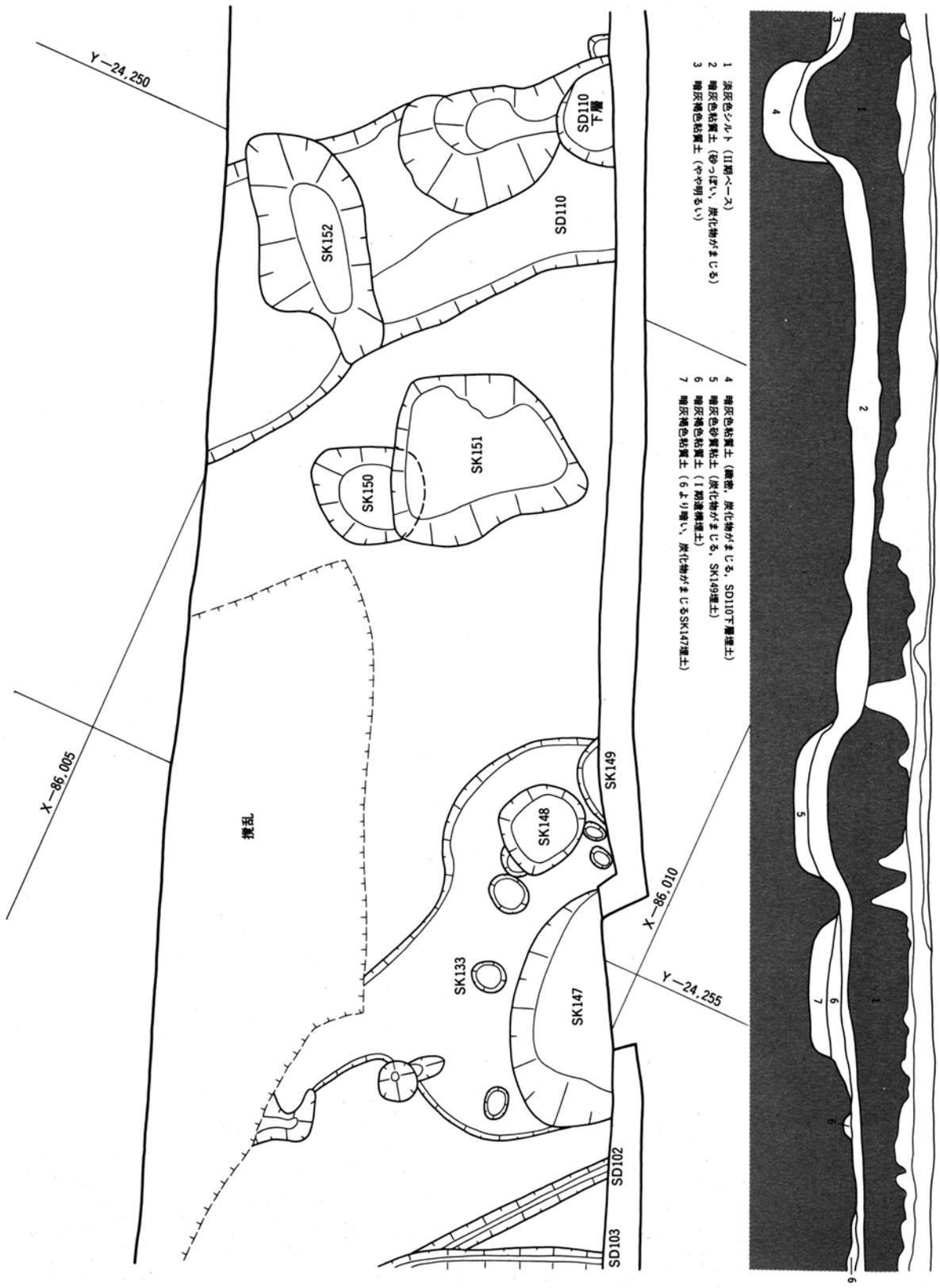


図20 Cb₂区 SK133・SK147~152・SD110 平面断面図 (1:50)

3. II期の遺構 (図21)

調査区全域で、複雑に重複する溝や土坑・自然流路・ピットなどの遺構を検出した。特に溝は東西方向のものは東で北方向に約40°~50°、南北方向は北で西方向に約40°~60°ふれるなど、ほぼ一定の方向性をもっている。

A区

東西方向の溝3条と南北方向の溝21条、それに土坑がある。

S D 01 62B区のS D 09の西延長部分にあたる。幅1.2m、深さ0.6mで箱状の断面をもつ。埋土は炭化物をふくむ暗灰褐色砂質シルトである。直交する溝をすべて切っており、東側で同じ方向の溝S D 24に重なる。

S D 02 Aa区北端からAb区に連なる溝。下層のS D 101が埋まりきらない時点で淡灰色シルト層が堆積したために、古墳時代前期に溝状のくぼみとなって残っていたものである。埋土は上層が暗灰褐色砂質シルトで、下層は暗灰褐色砂質シルトに淡灰色シルトブロックが混じったものである。

S K 01 S D 01の南で検出した柱穴。直径約40cm、深さ45cmの掘形に直径18cmの柱根が遺存していた。掘形の埋土は暗青灰色粘質シルトである。周辺でこれと一連の柱穴を検出しえなかったため、残念ながら掘立柱建物の平面プランを復元することができなかった。

B区

I期同様、調査区の北東側半分は自然流路N R 01が占める。南西側の微高地上では数多くの溝が直交して掘削されている。おおむね南西から北東方向に走る溝群が南東から北西方向の溝群を切ってN R 01に流れ込む。これらすべての遺構の上にS D 25が掘削されている。

S D 25 (図22) 62B区S D 03の東延長部分。西壁から1.8mで南東に折れ曲がる。幅は1~1.5mで深さは0.15mで、断面は浅い逆台形を呈し、埋土は炭化物をふくむ黒色がかった暗灰褐色シルトである。62B・92B区をつないでみると溝はコの字状にめぐり、北側では約10mにわたって直線部分をなすことや、溝内から若干の土器が出土することなどから、このS D 25は一辺約10mの方形墳の周溝である可能性が高い。

N R 01・S X 01 調査区北西側約半分を占める谷状の自然流路。深さは約0.35m、中央部で東西方向に溝状に深くなっている。北東隅付近に堆積する黒灰色砂質シルト層には松河戸I式に属する完形に近い土器が数多くふくまれており、西側の微高地上より廃棄されたものと考えられる。この土器集積をS X 01と呼称する。

Ca区

Ca区は調査区の東半を竪穴住居の可能性をもつ大形の方形土坑群が占め、西半部には松河戸式期に属する大量の土器を意識的に廃棄したとおもわれる灰褐色砂質シルト層とその面で検出した土坑S X 02・03上層、土器廃棄層の下で検出したS K 58・S X 02・03下層・S X 04などの土坑と溝がある。

S K 16~20 (図23) 調査区東端の方形土坑群。複雑に重複しており、全形のわかるものはない。小さいもので一辺が1.7m (S K 16)、大きいもので一辺2.5m (S K 19)程度の規模をもつ。深さはおお

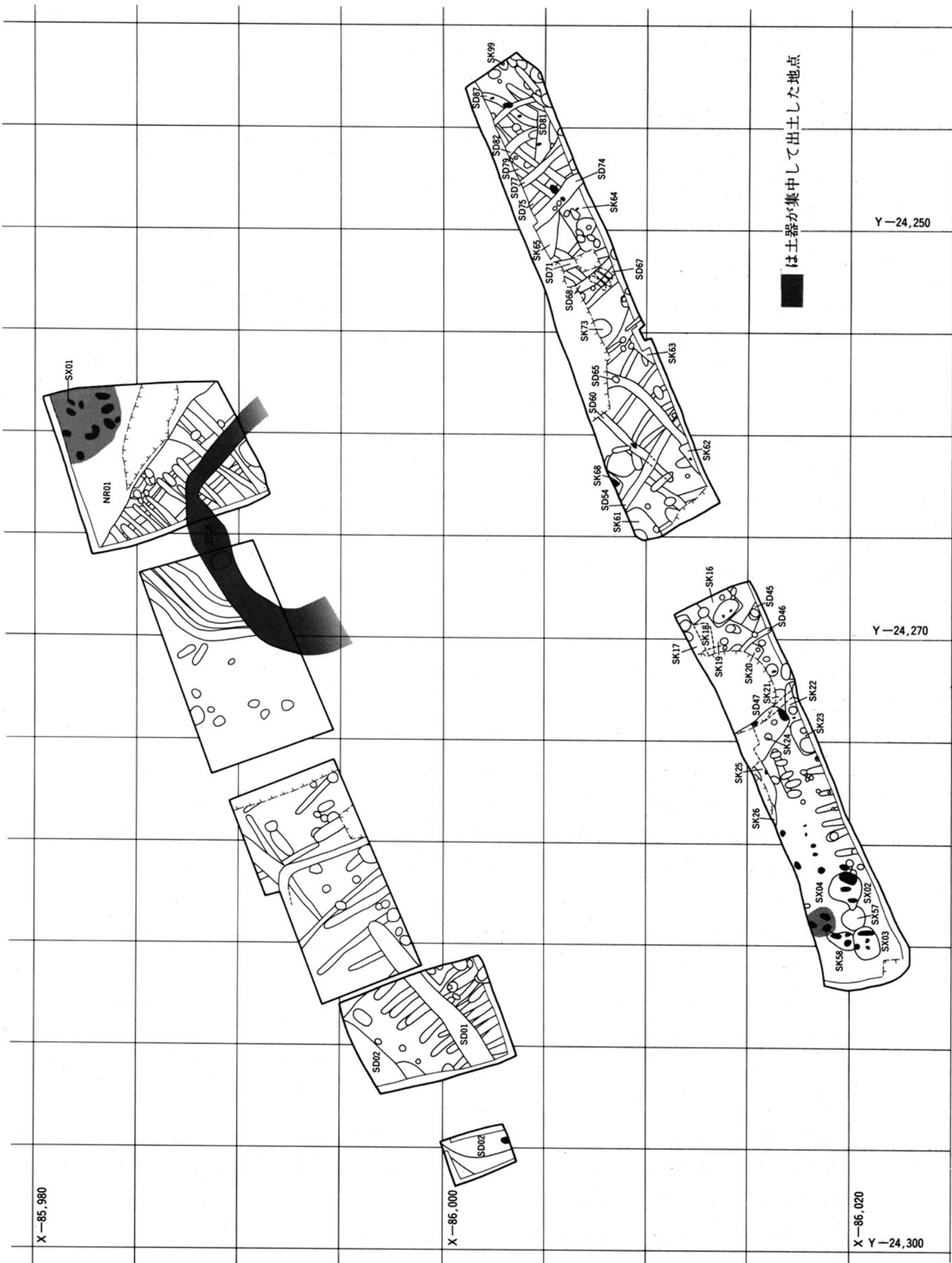


图21 II期 遺構全体图 (1 : 250)

むね5 cm前後である。それぞれにいくつかのピットが付属するが、明確に柱穴といえるものは柱根が遺存していたS K20のそれ以外にはない。埋土はS K16上層・17が暗灰褐色砂質シルト、S K16下層・18~20は淡灰色シルトブロックが混じる暗灰褐色砂質シルトである。

S K21~24 (図23) 巨大な攪乱をはさんでS K16~20の西側に位置する。S K22・23はそれぞれ一辺2.2m・1.8mと小規模で、S K24は一辺2.7m以上、深さ0.1mの規模をもち、南隅から廻間I式期の土器が数点出土している。北西から南東に走る溝SD47はこれらの土坑群を切って掘削されている。埋土はS K21が暗灰褐色砂質シルトで、S K22~24は淡灰色シルトブロック混じりの暗灰褐色砂質シルトである。

S K25・26 (図23) 調査区のほぼ中央北側に位置する。両者とも北側が攪乱によって破壊されているため、ごく一部を検出したにすぎない。S K25は一辺2.4m以上、深さが0.13mで、埋土は淡灰色シルトブロックが混じる暗灰褐色砂質シルトである。S K26は一辺1.2m以上、深さが0.1mで、暗灰褐色砂質シルトが埋土である。

S K58 調査区西側でS X03の北に接して掘削された洋梨形を呈する土坑。規模は南北1.4m、東西0.9m、深さ約0.2mで、断面は逆台形。埋土は淡灰色シルトブロックが混じる暗灰褐色砂質シルトである。なかから廻間I式期に属する土器群が出土している。

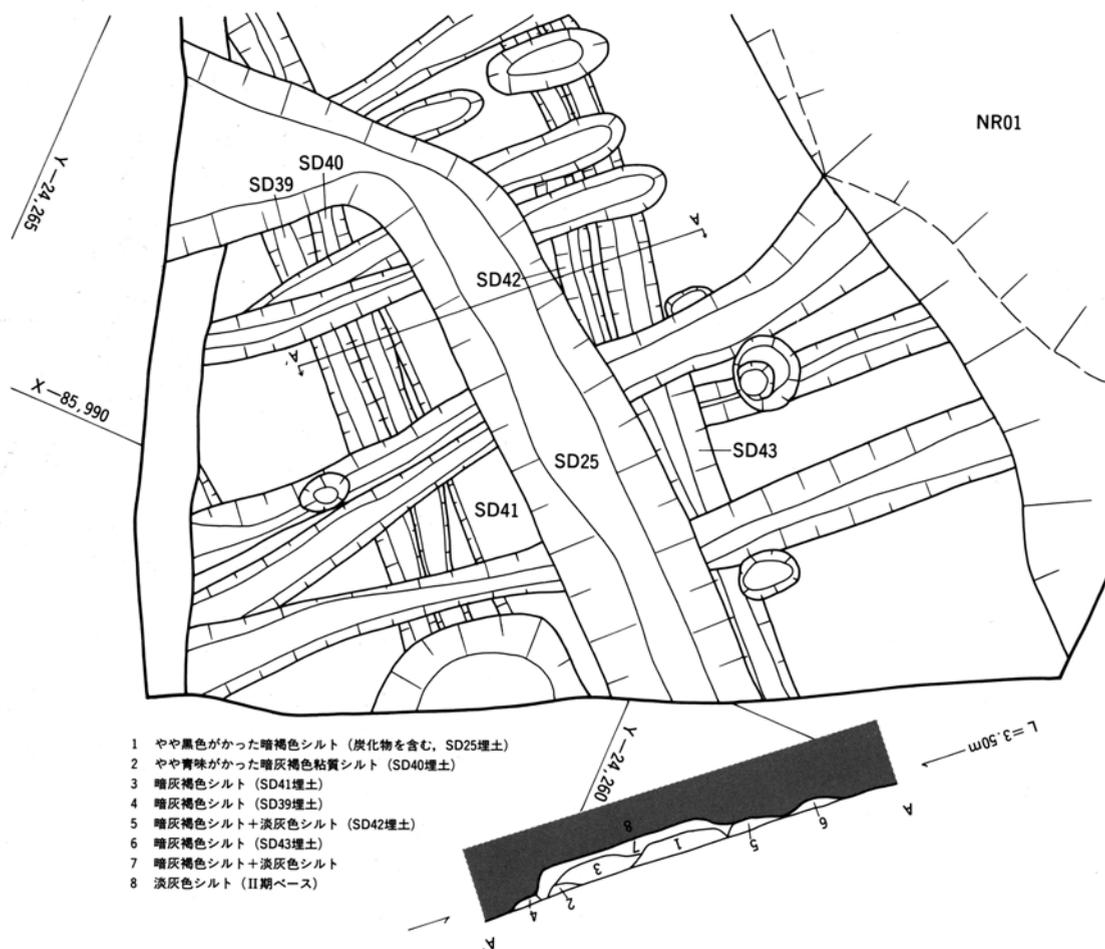


図22 B区 SD25・39~43 平面断面図 (1 : 50)

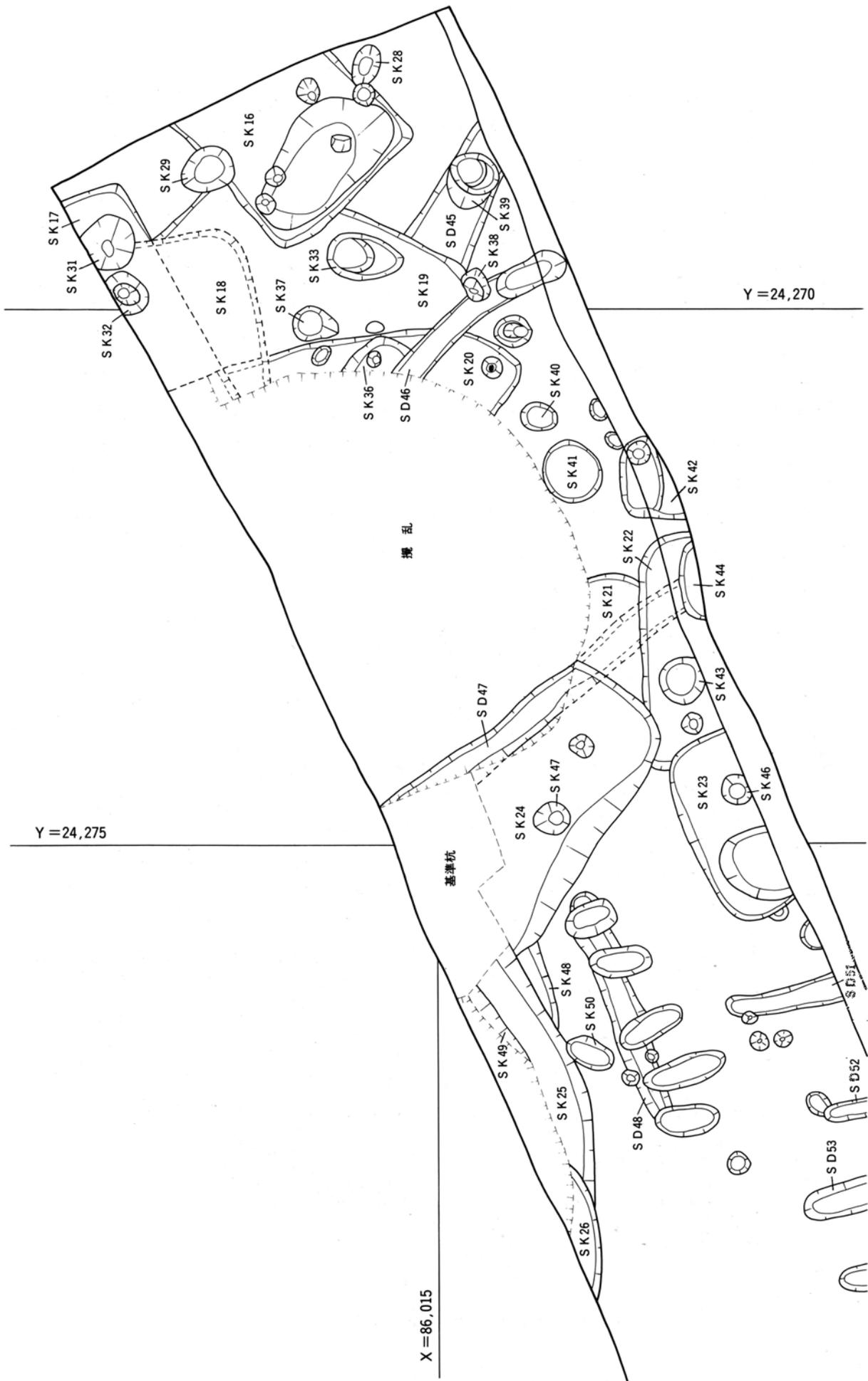


图23 Ca区東半部遺構平面図 (1 : 50)

S X 02 (図24) 調査区西側にある大形の円形土坑で、上層と下層では平面プランと土器の堆積状況が異なる。上層は調査区西半部をおおう灰褐色砂質シルトの土器廃棄層の面で検出した。規模は南北1.2m、東西1.6mで、深さ0.4mである。埋土は上から黒褐色砂質シルト・黒灰色砂質シルト・暗灰褐色砂質シルトの順で、あとに述べるS X 02下層が埋没しきらない状態のくぼみに堆積したものとおもわれる。下層は上層より平面形がさらに大きくなり、南北1.6m、東西1.5m、深さ0.6mで、底は平坦だが、中央北寄り南北0.4m、東西0.45mの範囲が円形に0.32mの深さでもう1段掘りくぼめられている。層位は細かくわかれ、炭化物を多くふくんでいる。断面の形状から井戸の可能性が高い。上・下層ともに多くの土器が出土しており、松河戸I式の良好な基準資料である。

S X 03 (図24) S X 02の西側、S K 58の南に位置する土坑で、S X 02と同様に最上層・上層と下層の平面プランが異なる。灰褐色砂質シルトの土器廃棄層の上面で最上層・上層を検出し、土器廃棄層を除去した面で下層を検出した。最上層・上層は南北1.36m、東西1.6mの楕円形で、深さは0.33mである。埋土は黒褐色砂質シルトと暗灰褐色砂質シルトで、いくつかの群にまとまって廃棄されていた。これら土器群のうち最も高いレベルから出土した一群を、出土状況や土器の型式差から最上層として区別した。下層は南北1m、東西0.88m、深さは0.85mの円筒状で、埋土は暗灰褐色砂質シルトである。完形ないしはそれに近い多量の土器のほか曲柄鋏・槽などの木製品が出土している。底は湧水層に達しており、S X 02と同様に井戸の可能性が高い。

S X 04 明確な掘り込みはないが、S K 58に一部が重なり、さらに北側にひろがって出土している土器群をその一括性の高さからS X 04としておく。廻間II式4段階の良好な土器群である。

Cb区

調査区ほぼ全域で、縦横に走る溝、竪穴住居の可能性をもつ大形土坑のほか、小土坑・ピットなどを検出した。東に向かって徐々に低くなるが、遺跡の範囲は調査区よりさらに東にひろがる。

S K 61 調査区北西隅にある方形土坑。一辺が1.6m以上、深さは0.25mある。なかにピット2基がある。埋土に炭化物が混じる。

S K 62 調査区西端付近で南壁に接して検出した方形土坑。一辺1.8m以上、深さ0.17mである。

S K 63 調査区中央やや西よりの方形土坑。一辺1.8m以上、深さ0.1mで、東側がS D 66に切られる。

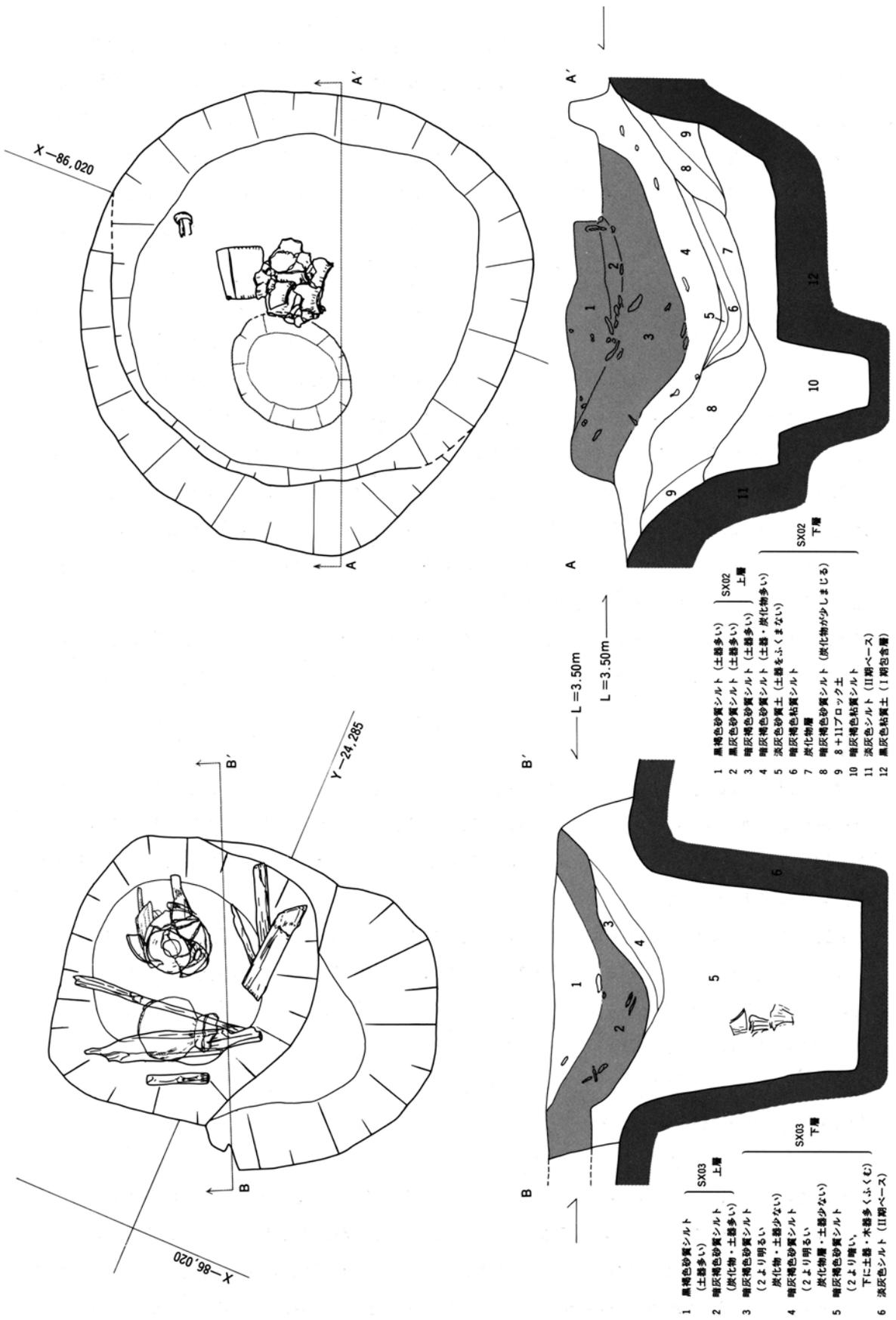
S K 64 調査区中央やや東よりの方形土坑。一辺3m以上、深さ0.06mで、東はS D 74に、西はS D 71に切られている。S K 64内には小土坑・ピットが掘削されている。

S K 65 S K 64の北側にある土坑。一辺2.5m以上、深さ0.05mで、東側がS D 74に切られている。

S K 68 S K 61の東側で北壁に接して検出した土坑。一辺1m以上、深さ0.18mで、S字甕が1点出土した。埋土は暗灰褐色砂質シルトである。

S K 99 (図19) 調査区東端で検出した柱穴。下層のS K 156にほぼ重なって掘削されている。掘形は径46cm、深さ64cmで、埋土は暗灰色砂質シルトである。柱根が遺存しており、径は17cmある。

S D 74 S K 64・65の東で北西から南東にのびている。幅0.7m、深さ0.3mの規模をもつ深い丸底の溝である。埋土は上層が暗灰褐色砂質シルトで、下層はこれに淡灰色シルトブロックが混じる。パレス壺などが出土している。



- | | |
|-------------------------|---------|
| 1 黒褐色砂質シルト (土器多い) | SX02 上層 |
| 2 黒灰色砂質シルト (土器多い) | |
| 3 暗灰褐色砂質シルト (土器多い) | |
| 4 暗灰褐色砂質シルト (土器・炭化物多い) | |
| 5 淡灰色砂質土 (土器をふくまない) | SX02 下層 |
| 6 暗灰褐色粘質シルト 炭化物層 | |
| 7 暗灰褐色粘質シルト | |
| 8 暗灰褐色砂質シルト (炭化物が少しまじる) | |
| 9 8+11ブロック土 | |
| 10 暗灰褐色粘質シルト | |
| 11 淡灰色シルト (II期ベース) | |
| 12 黒灰色粘質土 (I期包層) | |
-
- | | |
|----------------------------------|---------|
| 1 黒褐色砂質シルト (土器多い) | SX03 上層 |
| 2 暗灰褐色砂質シルト (炭化物・土器多い) | |
| 3 暗灰褐色砂質シルト (2より明るい) | |
| 4 暗灰褐色砂質シルト (2より明るい) | |
| 5 暗灰褐色砂質シルト (炭化物層・土器少ない) (2より暗い) | SX03 下層 |
| 6 淡灰色シルト (II期ベース) 下に土器・木器多くふくむ | |

図24 Ca区 SX02 (上) SX03 平面断面図 (1:20)

2. 遺物

1. I期の遺物

(1)土器

月繩手遺跡から出土したI期（弥生時代前期）の土器には、同時期に属するこの地域における他の遺跡と同様に、系統の異なる複数の土器群が相伴している。まずは、その系統ごとに器種分類をおこない、そののちに遺構別の記述をすすめることとする。

器種分類（図25・26）

第I系土器

いわゆる正統遠賀川系の土器群である。器種は蓋・壺・甕・鉢がある。

蓋 壺あるいは甕の蓋である。A～C類にわかれ、A・CはそれぞれA1・A2、C1・C2に細分できる。外面調整は、上下両面にヘラミガキを施す。

A類 蓋の頂部が笠形に高まる形態で、頂部に小孔をあける例が多い。

A1類 上面の周縁部を削り出し突帯状に一段高く残すタイプ。

A2類 頂部から周縁部にかけて段をもたないタイプ。

B類 A2類の頂部に2ヶ所ツマミ状の突起がつく形態である。

C類 頂部付近がわずかに盛りあがる程度の、ほとんど偏平な形態である。上面に線刻による紋様をもつ例が多い。

C1類 上面に木ノ葉状の紋様を線刻で表現するタイプ。周縁部付近に小孔をうがつ。

C2類 頂部の小孔を中心に十字に2本ずつの線刻を描く。

壺 壺はA～D類にわかれ、そのうちA類はA0～A4に細分できる。調整は内外面ともに、おおむねヘラミガキを施すが、なかにはハケメが残る例もある。

A類 外反する口縁部と球状の体部、平底の底部で、頸部や肩部・胴部に削り出しによる突帯とヘラ描きの沈線、ないしは貼りつけの突帯をもつ。口縁部に蓋を紐でゆわえるために小孔をあける例がある。外面を意識的に黒色化させているものが多く、赤色の顔料を塗布する例もわずかながら認められる。

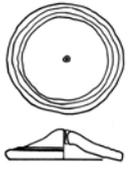
A0類 肩部にヘラ描きの沈線を施さず、削り出しの段のみをもつタイプ。破片が1点あるのみ。

A1類 肩部に削り出しの段やヘラ描き沈線をもたず、頸部に削り出し突帯と3条以下の沈線を施す。体部は下ぶくれの形状をしめす。口縁部を欠くため、形状は不明。

A2類 頸部と肩部に削り出し突帯を施し、それぞれ3条以下のヘラ描き沈線を描く。胴部最大径はA1類より上方に位置する。頸部は短く、口縁部は強く外反する。

A3類 頸部・肩部・胴部の3ヶ所に削り出し突帯を施し、それぞれ4条以上の沈線を描く。

第 I 系土器
蓋



A₁



A₂



B

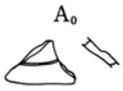


C₁

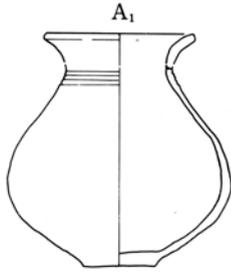


C₂

壺



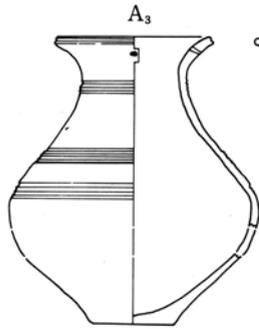
A₀



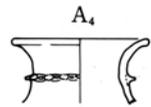
A₁



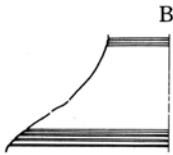
A₂



A₃



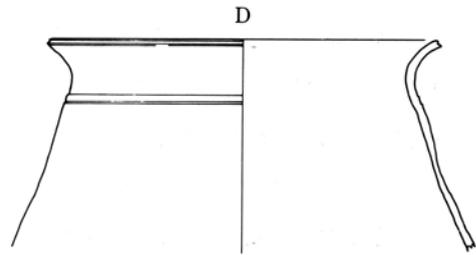
A₄



B

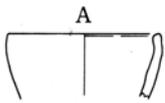


C

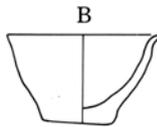


D

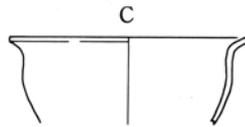
鉢



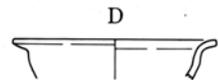
A



B



C



D

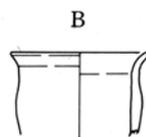
甕



A₁



A₂



B

图25 I 期土器器種分類 (1) (1 : 8)

胴部最大径はA2類より上方に位置し、頸部が長くなり、口縁部の外反度はゆるやかになる。

A4類 頸部ないしは肩部に貼りつけによる突帯を設ける。ヘラ描き沈線を平行して施す例もみられる。点数は少なく、全形をうかがえる資料はない。

B類 肩部から頸部にかけての資料が数点あるのみで、全形はわからないが、色調は淡赤褐色で、外面にハケメを施す。頸部および肩部に2～5条の沈線を描く。削り出しの段は不明瞭である。

C類 ほぼ球状を呈する胴部のみ破片。外面調整にはヘラミガキとハケメの両者がみられる。

D類 口径30cmをこえる大形の壺。頸部に削り出しの段と沈線1条を施す。胴部以下の形状は不明。

鉢 底部まで遺存する例は1点しかないが、おおむね口径にくらべて器高は低い。形態の違いにより、A～Dの4類にわかれる。内外面の調整にはハケメとヘラミガキを併用する。

A類 口縁部は内彎し、端部に平坦面をもつ。底部にかけてゆるやかにすぼまる。

B類 短く外反する口縁部と狭い平底の底部で、胴部に若干のふくらみをもつ。

C類 B類よりさらに発達した口縁部で、端部に外傾面をもつ。胴部のふくらみは大きい。

D類 口縁部の外反度は強く、ほぼ真横にのびて端部に外傾面をもつ。胴部のふくらみは小さい。

甕 長胴で狭い平底の底部と短く外反する口縁部をもち、胴部上半から底部にかけてゆるやかにすぼまる形状を呈する。口径25cmをこえる大形、20cm以上の中形、20cm未満の小形と3種類の大きさにわかれる。口縁端部に施された刻みの有無により、A・B2類にわけられる。底部に穿孔をおこない、甑として使用した例もみられる。

A類 口縁端部にヘラによる刻みを施す一群。外面調整はハケメが多く、ヘラケズリ+ヘラミガキの例もある。内面はハケメおよびヘラケズリで、部分的にヘラミガキを施す例もみられる。口縁部の形状により、A1類とA2類にわかれる。

A1類 口縁部は肥厚し、屈曲が短くてゆるやか。端部を丸くおさめるのを特徴とする。胴部の張りが強い。

A2類 口縁部は薄く長くつくられ、強く外反する。端部に外傾面をもつ。堅緻に焼成された例が多い。

B類 口縁端部に刻みをもたない一群。概して口縁部の外反度はゆるい。大形品はない。

第II系土器

伊勢湾沿岸地域に特徴的な、亜流遠賀川系とよばれる一群。本遺跡からの出土例はきわめて少ない。器種としては壺と甕がある。

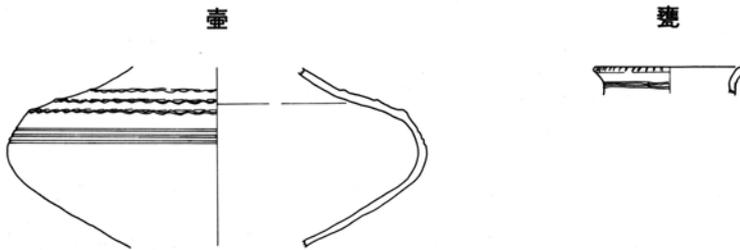
壺 口縁部と底部を欠く。胴部はソロバン玉状に偏平化してほぼ最大径の位置に3条の沈線を描き、肩部に指で押圧を施した突帯を3条つくりだす。明赤褐色の色調を呈する。

甕 口縁部は肥厚しつつ外反し、端部にヘラで刻みを入れる。頸部に半截竹管で2条以上の沈線を施す。

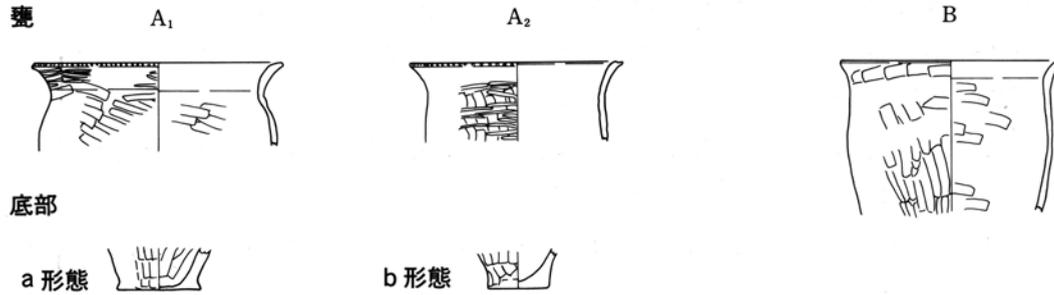
第III系土器

器壁の調整にヘラケズリを多用する甕の一群で、一般に削痕系とよばれている。ヘラケズリのほか、ヘラミガキを施す例も多い。口縁は肥厚しつつゆるやかに外反して端部はすぼまる。外面の色調は白色から暗褐色で、断面は黒色を呈し、径1mm程度の砂粒を多く含む特徴的な胎土である。口縁端部に施す刻みの有無により、A・B2類にわけられる。なお、底部の形状には周縁部に突出部をもつa形態ともたないb形態がある。

第II系土器



第III系土器



第IV系土器

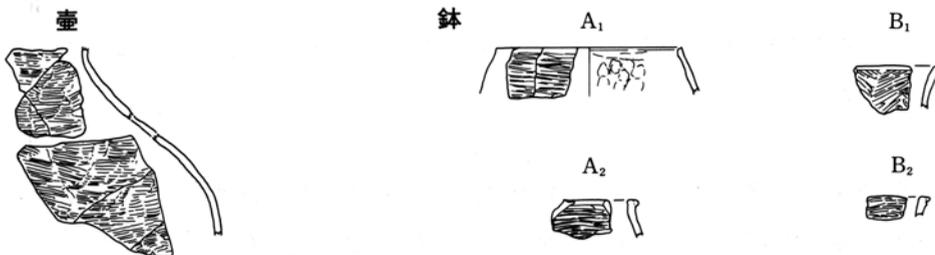


図26 I期土器器種分類(1)

A類 口縁端部にへらによる刻みをもつ。端部上面の形態により、さらにA1・A2類にわかれる。

A1類 口縁端部が単純にすぼまるタイプ。頸部のくびれが強く、口縁部の外反度が大きい。

A2類 口縁端部の上面にナデによる凹線がめぐるタイプ。頸部のくびれがゆるやかで、口縁部の外反度が小さい。

B類 口縁端部に刻みを施さず、単純にすぼまるタイプ。口縁部の外反は少ない。

第IV系土器

外面調整に主として貝殻による条痕を施した、いわゆる条痕紋系土器の一群である。本遺跡からの出土例は比較的少なく、全形をうかがいうる資料はない。器形としては壺と深鉢がある。

壺 全形は不明だが、胴部下半に最大径をもち、肩部から口縁部にかけてゆるやかにすぼまる器形をていする。口縁端部は外側に折り返す。

鉢 胴部下半を欠くため、全体の形状はわからない。口縁部が内彎するA類と外反するB類にわかれ、さらに、それぞれ口縁端部に縁帯を貼りつけるA2・B2類と単純に面取りのみでおわるA1・B1類にわけられる。

第V系土器

以上述べてきた第I～IV系のいずれにも入らず、単体でのみ出土しており、群を形成しない土器。他地域からの搬入品である可能性が高い。

Aa区 SK102 (図27)

1は第I系の甕A1の破片で、口縁部は短く外反が弱い。

Ca区 SK113 (図27)

2～13は第I系に属する。2～8は壺A類の口縁部で、うち、7はA1あるいはA2類。頸部の沈線は2条で外面の調整はハケメののちヘラミガキ。8はA4類で、頸部に角条の突帯を貼りつける。9～11は壺Aの底部である。11は大形の壺で、外面にハケメをとどめる。12・13は甕の破片。12はB類の中形品で、内面にヘラミガキを施す。13は頸部に2条の沈線を描き、その間にヘラで刺突をおこなう。14は第III系の甕B。口縁の外反と胴部のふくらみは弱い。15・16は第IV系の壺あるいは鉢の底部である。15は外傾する粘土紐の接合面を明瞭にとどめる。

Ca区 SK114 (図27)

17～22は第I系。17～20は壺A類の破片である。17はA1類に属する。18・19は外面に赤色顔料を塗布している。19はA4類。21は甕A1類で、頸部にヘラ描き沈線を4条施す。22は甕の底部で、わずかに上げ底状になる。23～26は第IV系。23は壺の口縁部で、端部を外側に折り返す。24～26は壺あるいは鉢の底部。外面に貝殻条痕、内面にヘラケズリを施す。

Ca区 SK115 (図29)

27は第III系でa形態の甕底部である。外面は縦方向のヘラケズリを施す。

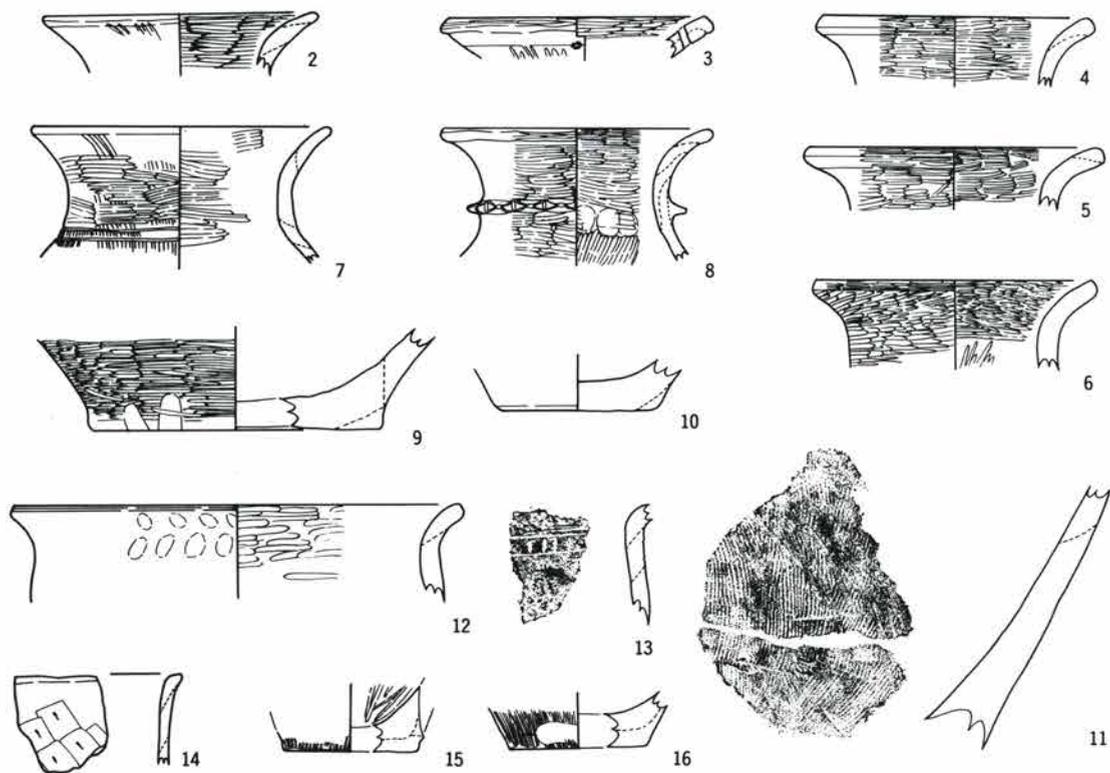
Ca区 SK116 (図28・29)

28～43は第I系。28は蓋B類。中央部に焼成前穿孔を施す。上面の突起と周縁部は欠損している。29～34は壺A類である。30は外面のヘラミガキを縦方向におこなう。31は口縁部の一部を欠損するのみで、ほとんど完形品。頸部と肩部に沈線を2条描き、内外面ともヘラミガキを施すが、肩部の突帯部分のみにハケメが残る。A2類の典型例である。33はA4類で、肩部に3条の沈線と角状の貼りつけ突帯を施す。35は壺D類の口縁部。頸部に沈線を1条施し、端部は丸くおさめる。36～38は鉢。36は鉢Aで、外面にハケメを残す。37は鉢Bで、内外面とも摩滅のため、調整不明。38は鉢Cの大形品である。外面はヨコハケ、内面は体部がヘラミガキ、口縁部はヨコハケである。39～43は甕。39は甕A1で、底部に焼成前穿孔をおこなう。外面調整は底部から頸部にかけて単位の長いハケメを施す。43は39とほぼ同形の甕A1。頸部に3条の沈線を描く。調整は内外面とも縦位のヘラケズリ。44～47は第III系の甕。44はB類。45・46はa形態、47はb形態の底部。48・49は第IV系の鉢。48はA1類、49はB1類である。

Ca区 SK117 (図29)

50は第I系の甕A2類である。頸部の沈線は2条。外面は単位の短いナナメハケ、内面は口縁部がハケ、胴部はヘラケズリである。51は第II系の甕。半截竹管による沈線2条を頸部に施す。口縁部は肥

SK113



SK102



SK114

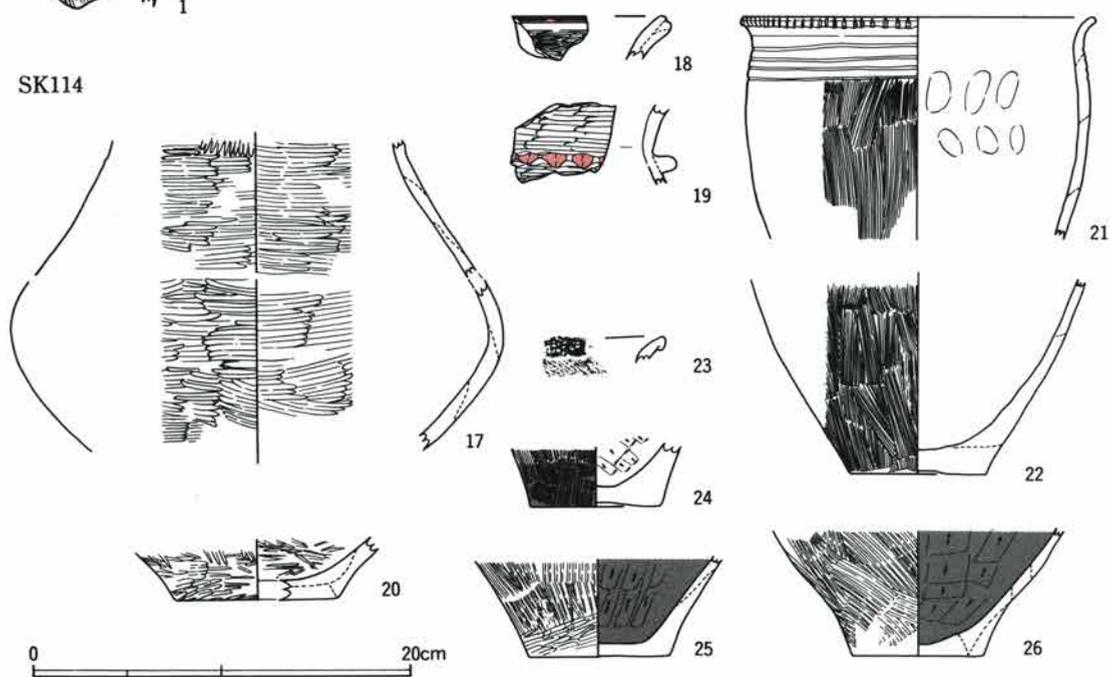


图27 SK102·113·114 出土土器实测图(1:4)

SK116(1)

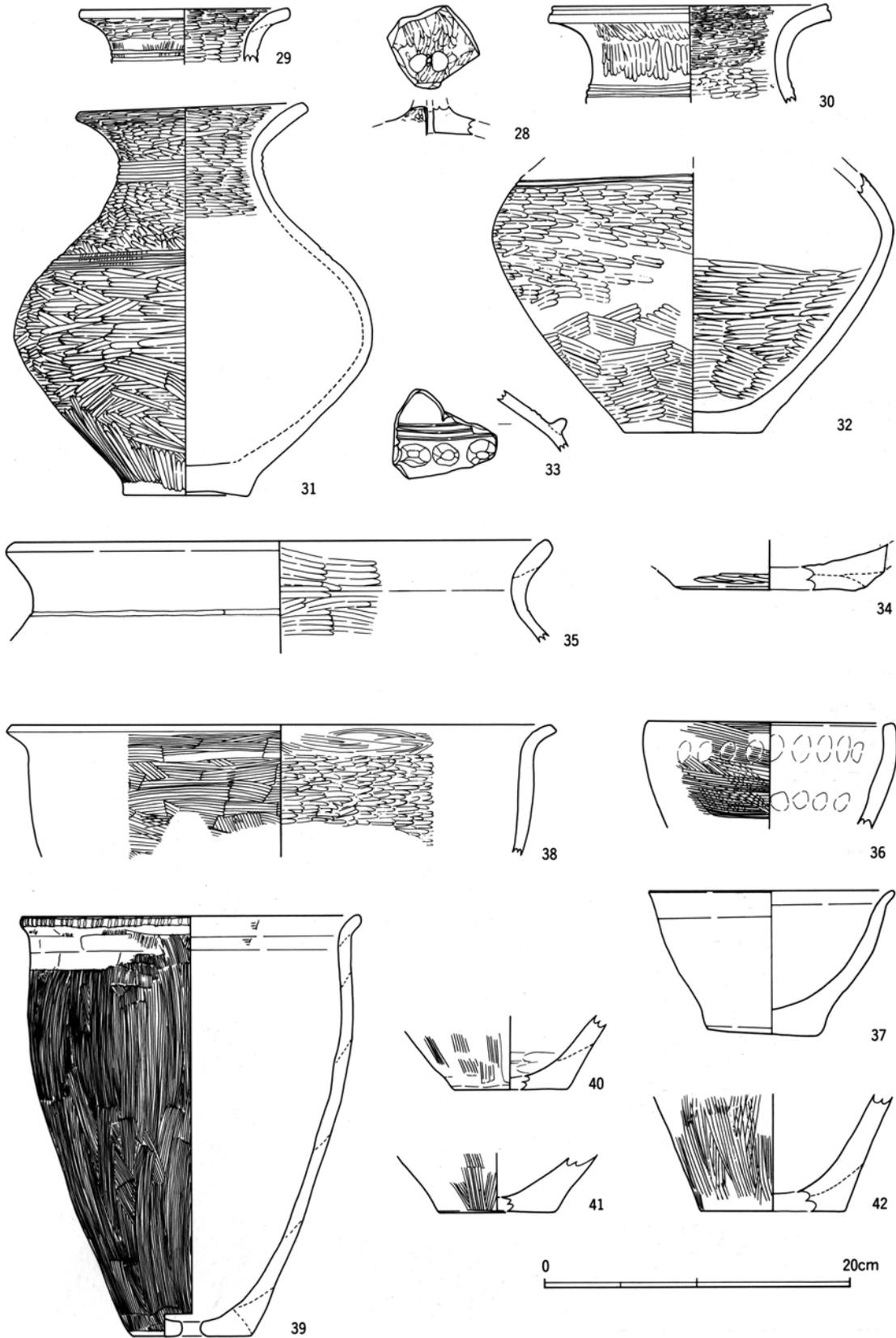
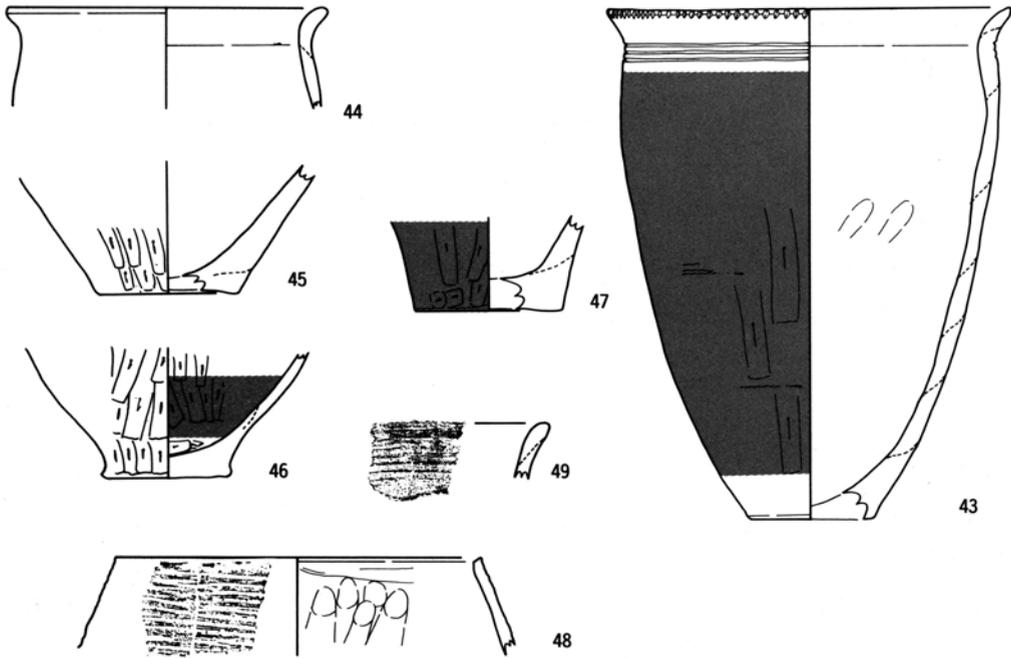
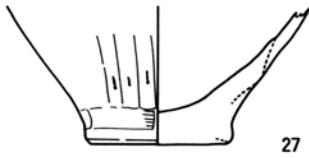


图28 SK116 出土土器实测图(1) (1 : 4)

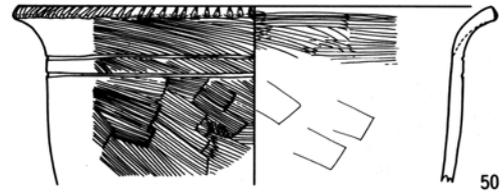
SK116(2)



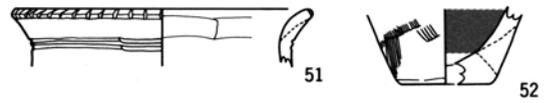
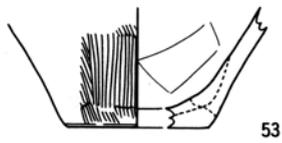
SK115



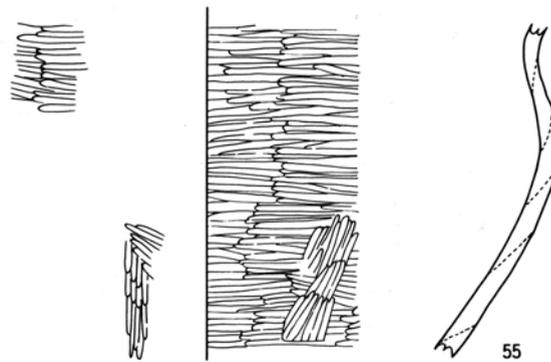
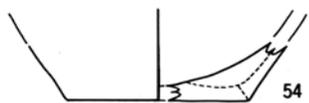
SK117



SK118



SK120



0 20cm

图29 SK116(2) · 115 · 117 · 118 · 120 出土土器实测图 (1 : 4)

厚し、外反はやや弱い。52は第Iあるいは第II系の甕底部。

Ca区 SK118 (図29)

53は第I系の甕底部。外面にタテハケ、内面には板状工具によるナデを施す。

Ca区 SK120 (図29)

いずれも第I系で、54は壺底部。焼成が甘く灰白色の色調で、摩滅のため調整は不明。55は大形の鉢C類である。内外面ともヘラミガキを施す。

Ca区 SK121 (図30)

56は第I系の壺A類で、肩部以上を欠く。沈線が2条遺存している。

Ca区 SK128 (図30)

57は第I系の壺A類口縁部で、2ヶ所に焼成前穿孔をおこなう。58は第III系の甕B類。一部にヘラケズリの痕跡をとどめるのみで、外面はほぼ全面にヘラミガキを施す。

Ca区 SK129 (図30)

59は第I系の壺A類底部。底部外面にヘラケズリ、胴部下半には縦方向のナデを施す。

Cb区 SK133 (図30)

両者とも第I系で、60は壺底部。外面は摩滅、内面にはヘラミガキが残る。61は甕の底部。外面に細かいタテハケを施す。

Cb区 SK134 (図30)

いずれも第I系。62は甕A3類で、頸部・肩部とも沈線を7条描く。口縁部には焼成前穿孔を1ヶ所あける。63は甕A1類。頸部の沈線は3条。外面はタテハケ、内面は底部内面と胴部上半にヘラミガキ、胴部下半には縦方向、中央部には横方向のヘラケズリを施す。

Cb区 SK147 (図31)

64~67は第I系土器。64は蓋A2類。65は壺C類で、外面はヘラミガキを施し、黒色化させる。66は甕A1類で、67は甕A2類。67は頸部に沈線を3条描き、その間を棒状工具(細い竹管か?)の刺突で埋める。68は第IV系の壺。外面は貝殻条痕、内面はヘラケズリののちナデ。

Cb区 SK148 (図31)

69は第I系に属する大形の甕A1類である。頸部にヘラ描き沈線2条。胴部は外面がナナメハケ、内面はヘラケズリを施す。

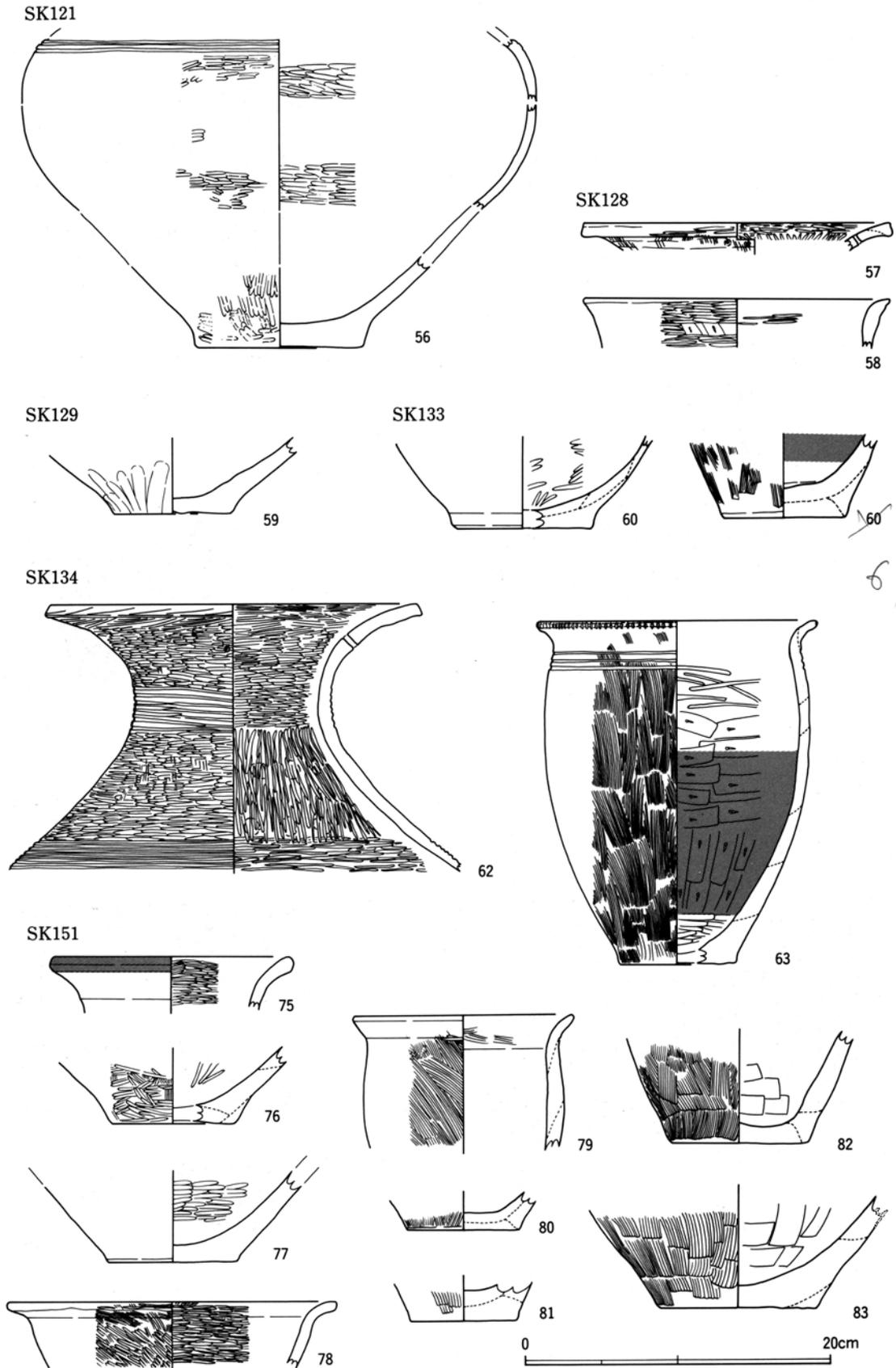
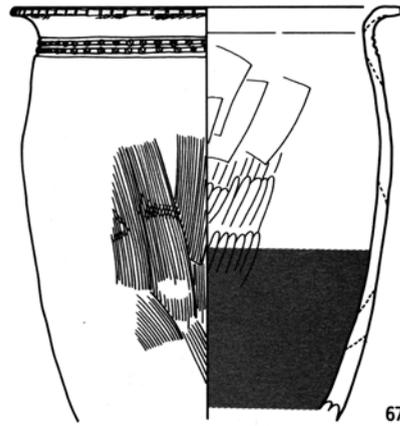
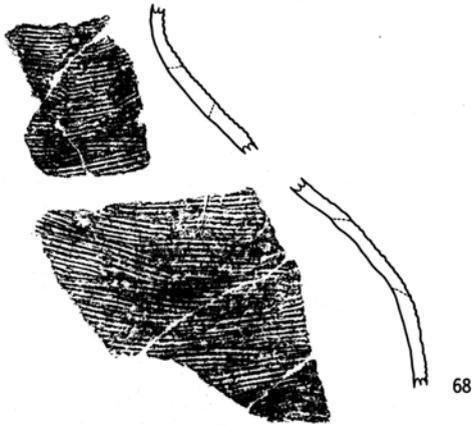
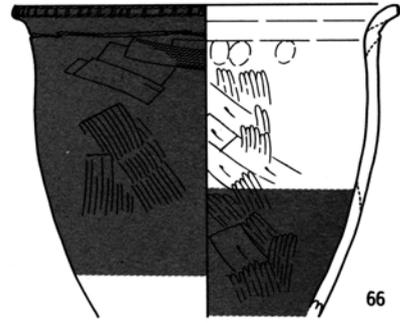
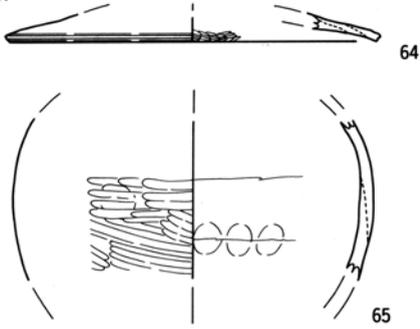
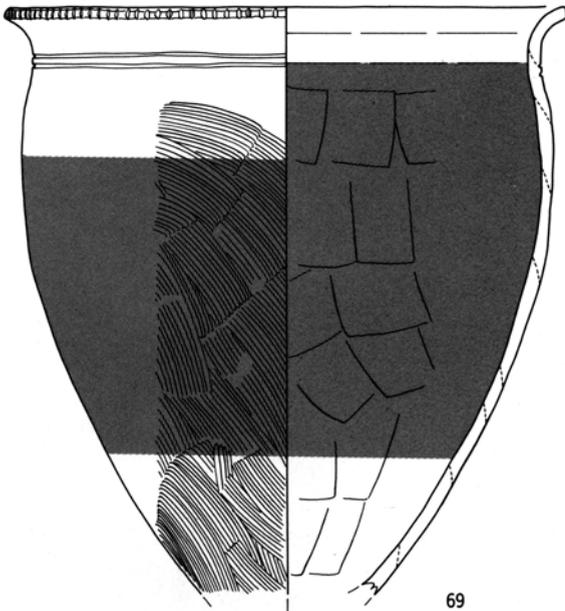


图30 SK121·128·129·133·134·151 出土土器实测图(1:4)

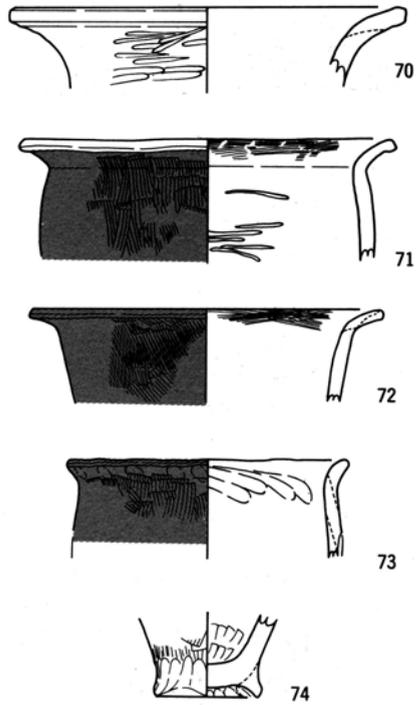
SK147



SK148



SK150



0 20cm

图31 SK147·148·150 出土土器实测图(1:4)

Cb区 SK150 (図31)

いずれも第I系土器である。70は壺A類口縁部。71～73は甕B類である。71は口縁端部が肥厚する。72は口縁部が強く外反し、胴部はほとんどふくらみをもたない。73は短く外反度のゆるい口縁をもつ。74は甕の底部。丸底の周縁部に高台状に粘土紐を接合し、縦方向に強くナデつける。

Cb区 SK151 (図30)

いずれも第I系。75～77は壺A類。75は頸部にわずかに稜をもつ。78は鉢D類。頸部にハケメをとどめるほかは、全面にヘラミガキを施す。79は甕B類。口縁部は逆「ハ」字にまっすぐに開き、胴部はほとんどふくらまない。80～83は甕の底部。83は底径が10.6cmときわめて大きい。

Cb区 SK152 (図32)

84～88は第I系土器。84は蓋A2類。85は蓋C1類で、上面に木ノ葉状の紋様を描く。86は壺A1類あるいはA2類。87は大形の壺D類である。頸部に段と沈線が1条めぐり、口縁端部に凹線をめぐらす。なお、これとほぼ同形同大の土器が三重県の中ノ庄遺跡から出土している¹⁾。88は小形の甕A2類。焼成はきわめて堅緻で、外面と口縁部内面に単位の短いナナメハケを施す。底部はやや上げ底で、頸部に沈線2条をめぐらす。89は第IV系の鉢。外面は条痕、内面はヘラケズリである。口縁端部に沈線がめぐり、

Cb区 SK154 (図32)

90～95は第I系の土器。90は蓋A2類。91は壺A類である。頸部に沈線をもたず、外面にはハケメを施す。92は甕A1類。口縁部は大きく外反し、体部はふくらみをもたない。93は甕A2類で、頸部には沈線を3条描く。94・95は甕の底部。いずれも胴部が直立ぎみにたちあがる。95は上げ底。96～99は第III系土器。96は甕B類である。97はa形態、98・99はb形態の底部。

Cb区 SK155 (図33)

100は第I系に属する大形の甕の下半部。底部の周縁がわずかに張りだしている。

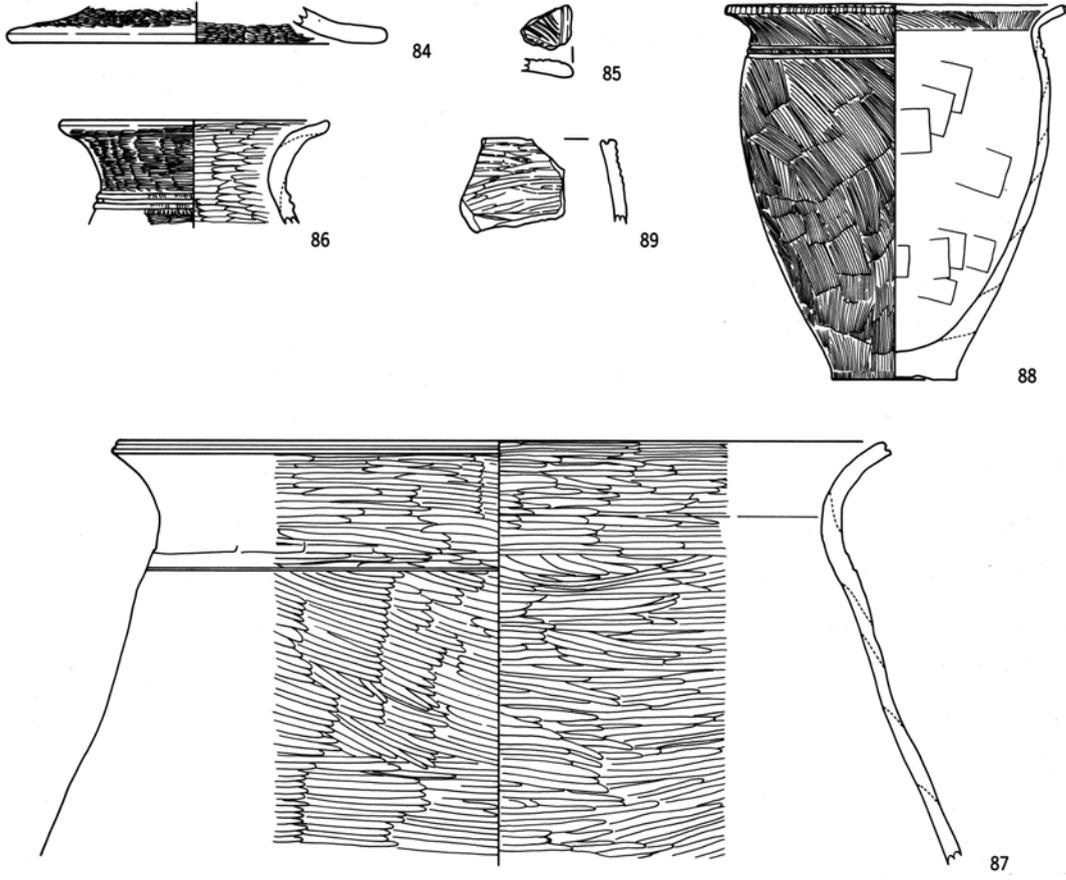
Cb区 SK156 (図33)

101～107は第I系土器。101・102は蓋A2類。103は壺A類の口縁部。口縁の外反度は小さい。104・105は壺底部。106は鉢C類。外面はタテハケののち横方向のヘラミガキ、内面は口縁部がヨコハケ、胴部は横方向のヘラミガキである。107は甕の底部。108～112は第III系の土器。108～111は甕A1類で、108・111は端部を若干上方につまみだす。112はa形態の底部。

Aa区・Ca区 SD101 (図33)

SD101はAa区とCa区で検出されているため、出土遺物の記述もわけておこなうこととする。

SK152



SK154

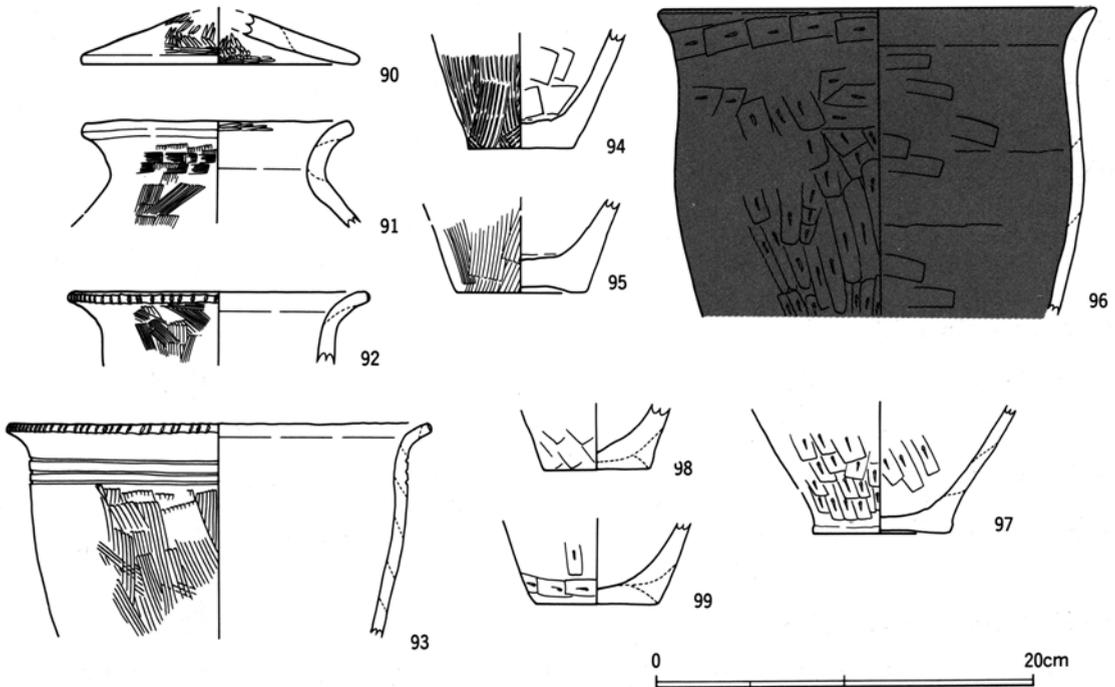


图32 SK152·154 出土土器实测图(1:4)

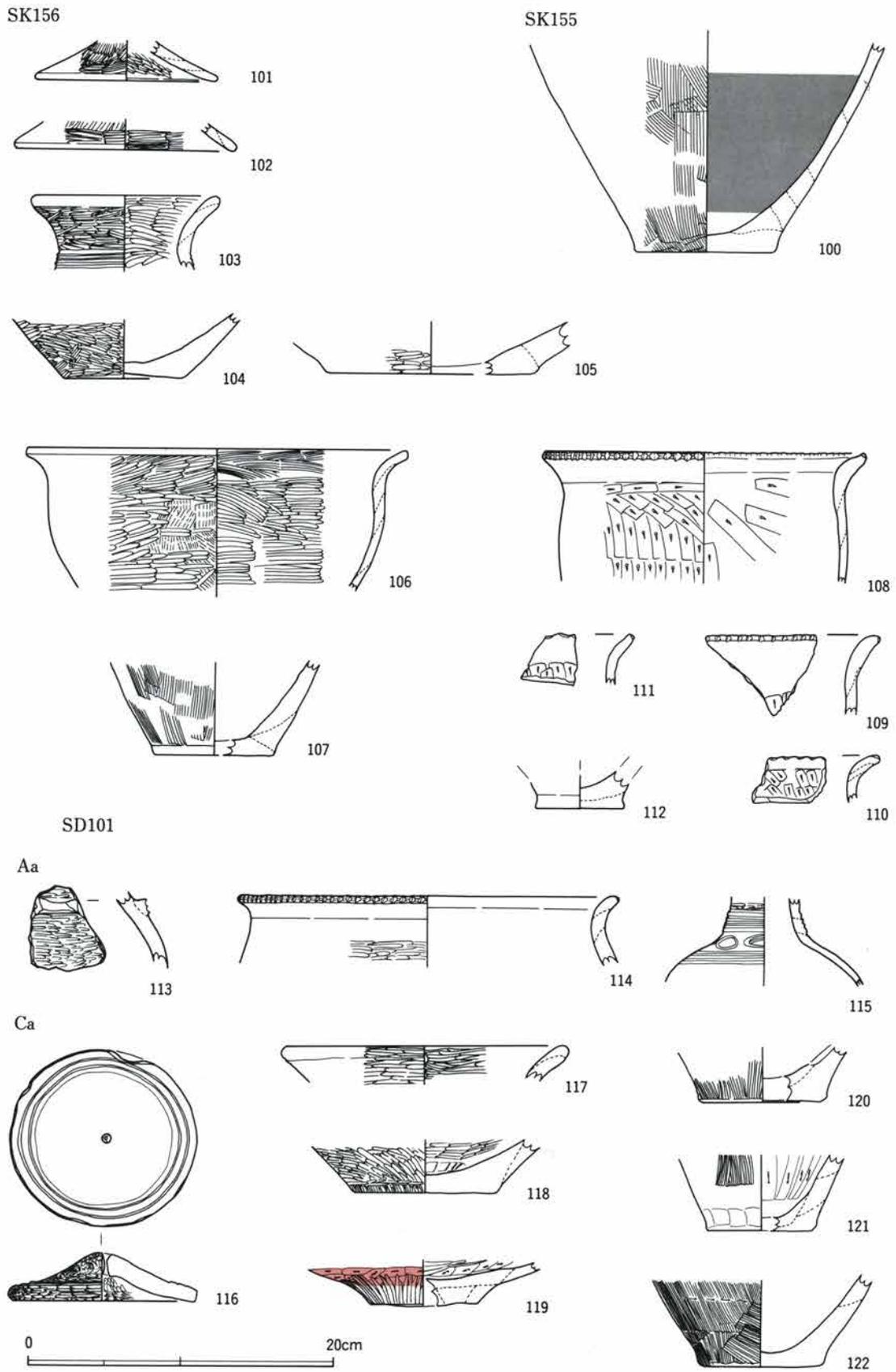


图33 SK155·156·SD101 出土土器实测图(1:4)

Aa区 113は第I系の壺A4類の破片である。肩部に突帯を貼りつけている。114は第III系の甕A1類である。外面にはヘラミガキを施す。115は本遺跡において他に類例をもたないため、第V系に分類される土器である。細く直立する頸部と大きくひろがる肩部からなる。頸部には削り出し突帯と沈線が3条で、その上にはヘラミガキを施す。肩部には細い沈線が6条あり、頸部と肩部の境に2重ないし3重にヘラで楕円を描き、そのなかに斜線を2条入れた紋様を配置している。内面はヨコナデで、器壁は薄く、色調は淡黄褐色から灰褐色を呈し、焼成はやや甘い。

Ca区 すべて第I系土器。116は蓋A1類で、ほぼ完形である。周縁部に削り出し突帯と沈線2条を施し、頂部に焼成前穿孔をおこなう。117は壺A類の口縁端部である。118・119は壺A類の底部で、119には外面に赤色顔料を塗布する。120～122は甕の底部。

Ca区 S D104 (図34)

123は第III系の甕底部で、a形態を呈する。調整は内外面ともヘラケズリのみ。

Ca区 S D105 (図34)

いずれも第I系である。124は蓋A2類。125は甕の胴部下半で、周縁部が突出する底部をもつ。

Cb区 S D110 (図34)

S D110の埋土は上層と下層からなっているため、それぞれをわけて記述する。

上層 126は第I系の壺底部。外面はタテハケののち横方向のヘラミガキ、内面はヘラミガキである。127は第III系の甕で、底部はa形態である。

下層 128～130は第I系。128は壺A1類あるいはA2類で、突帯部分には赤色顔料を塗布する。129は壺A類の口縁部で、蓋をゆわえるため、2ヶ所に焼成前穿孔をおこなう。130は甕の底部。131は第II系の壺で、肩部には指で押圧した突帯が3条、その下に沈線が3条入り、全面にヘラミガキを施す。132は第III系の甕B類である。

Cb区 S X101 (図34)

133～135は第I系土器。133は本遺跡で1点しか出土していない壺A0類の破片である。肩部は削り出しによる段のみで沈線はない。内外面ともヘラミガキを施す。134は壺A2類で口縁部と胴部下半を欠損する。135は壺A類の底部である。136・137は第III系の甕である。136はA1類で、調整は口縁部がヘラミガキ、胴部外面はヘラケズリ。137はB類で、外面にヘラケズリを施す。138は加工円板である。第I系の壺A類の胴部を打ち欠いてつくられている。

B区 N R101 (図35・36)

139～161は第I系土器である。139は蓋A2類。140～149は壺A類である。140はA3類で、頸部・肩部・胴部に沈線をめぐらす。口縁部には焼成後に小孔をあける。141～146は底部の破片。145は大形の壺の口縁部。146はA4類で、肩部に5条の沈線を描く。148は外面全体に赤色顔料を塗布している。149

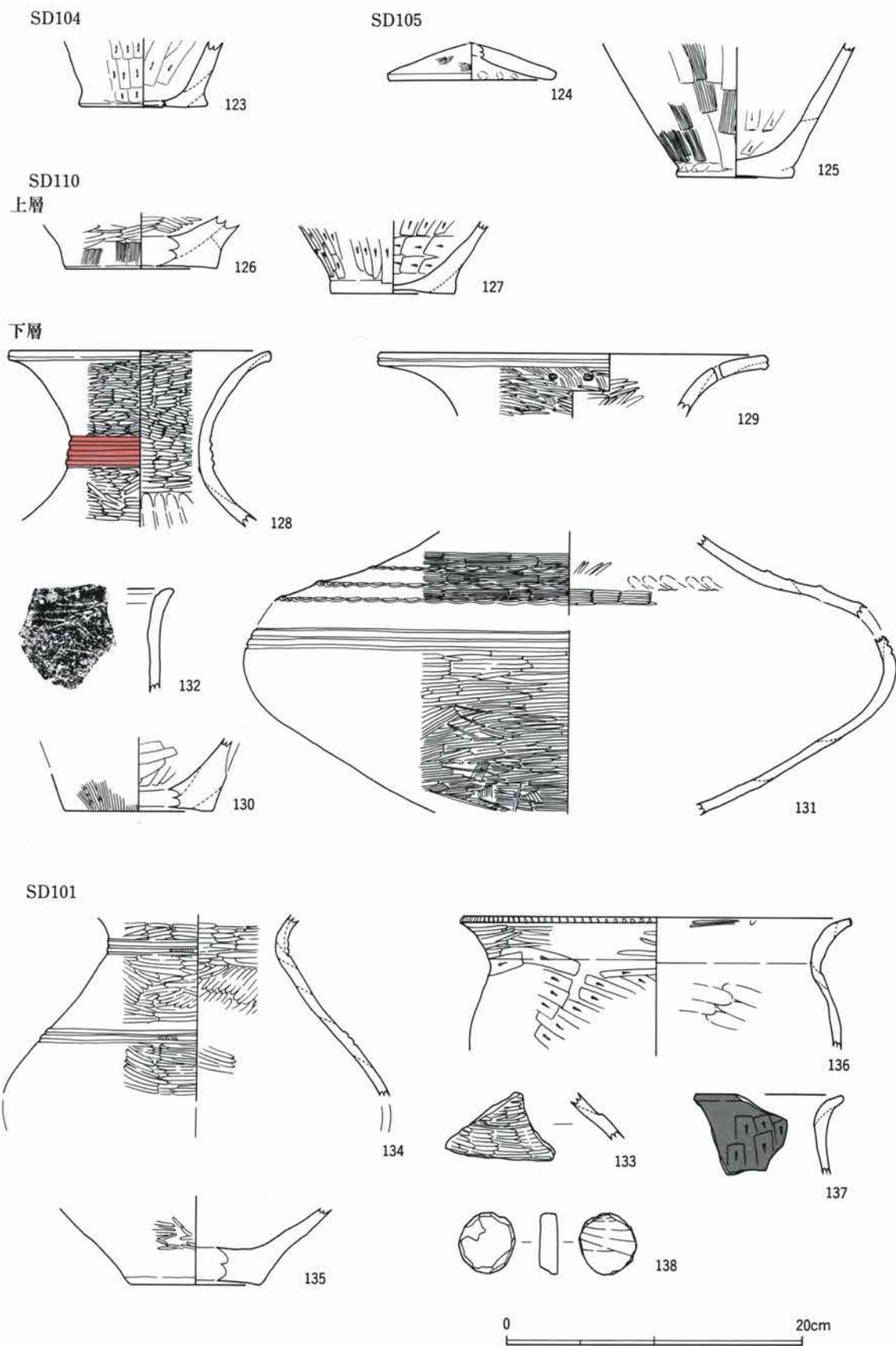


图34 SD104·105·110·SX101 出土土器实测图(1:4)

NR101(1)

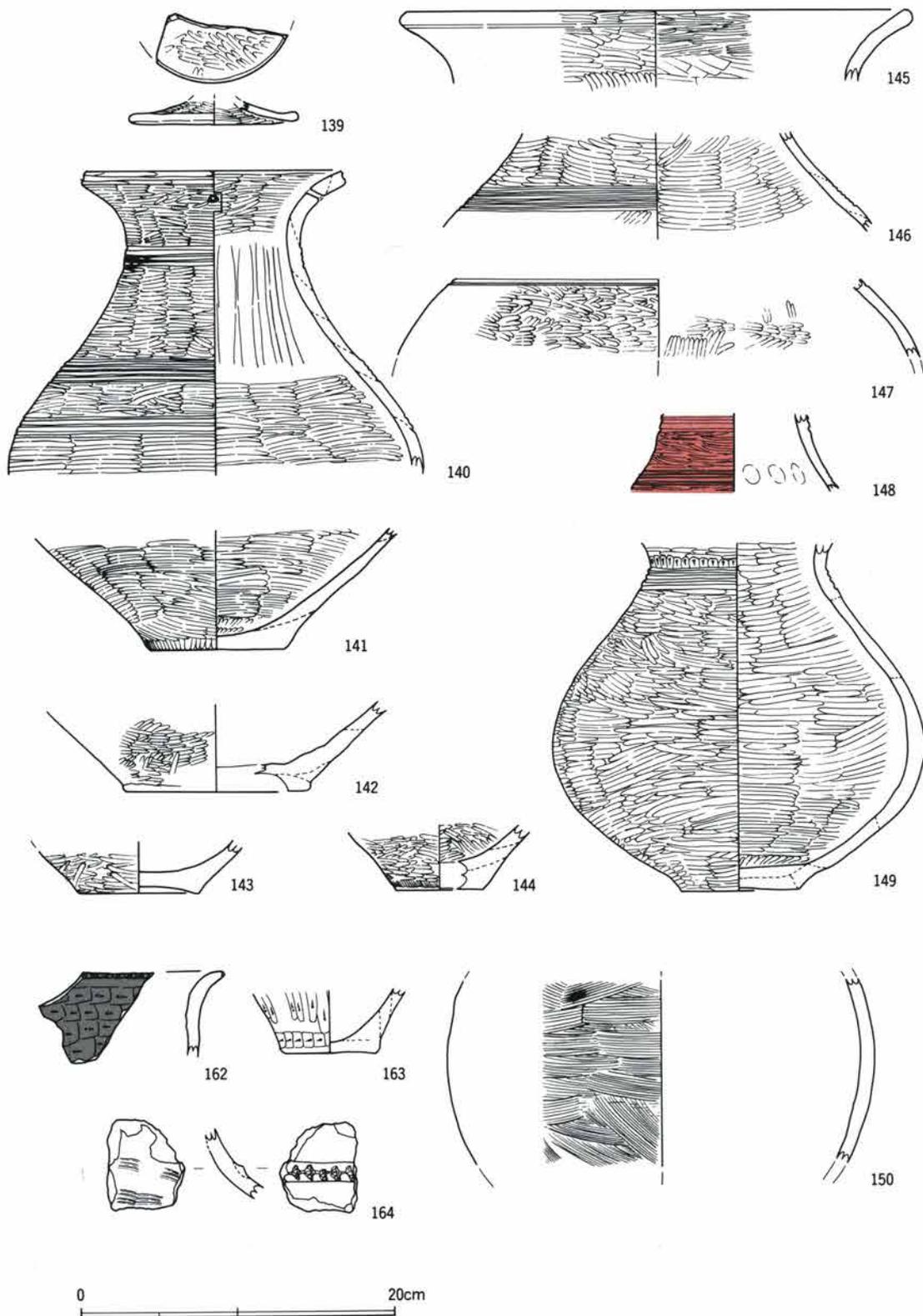


图35 NR101 出土土器实测图(1) (1 : 4)

はA0類である。頸部のみに突帯を削り出し、沈線を3条加える。150は壺C類で、外面にヨコハケを施す。151～161は甕。151はA2類で、152～154はA1類である。157は底部の周縁が張り出すタイプ。158は底部外面にモミの圧痕が残る。162・163は第Ⅲ系の甕。162はA1類で、163はb形態。164は第Ⅳ系の壺肩部で、刻みを施した突帯を貼りつける。

B区 NR101西肩 (図36)

NR101のうち、西肩に接して出土した土器のみを区別して記述する。165～168は第Ⅰ系の甕。166は底径が15.6cmときわめて大形である。169～171は第Ⅲ系の甕。169・170は口縁部上面に凹線がめぐるA2類。171はb形態の底部である。

包含層 (図37・38)

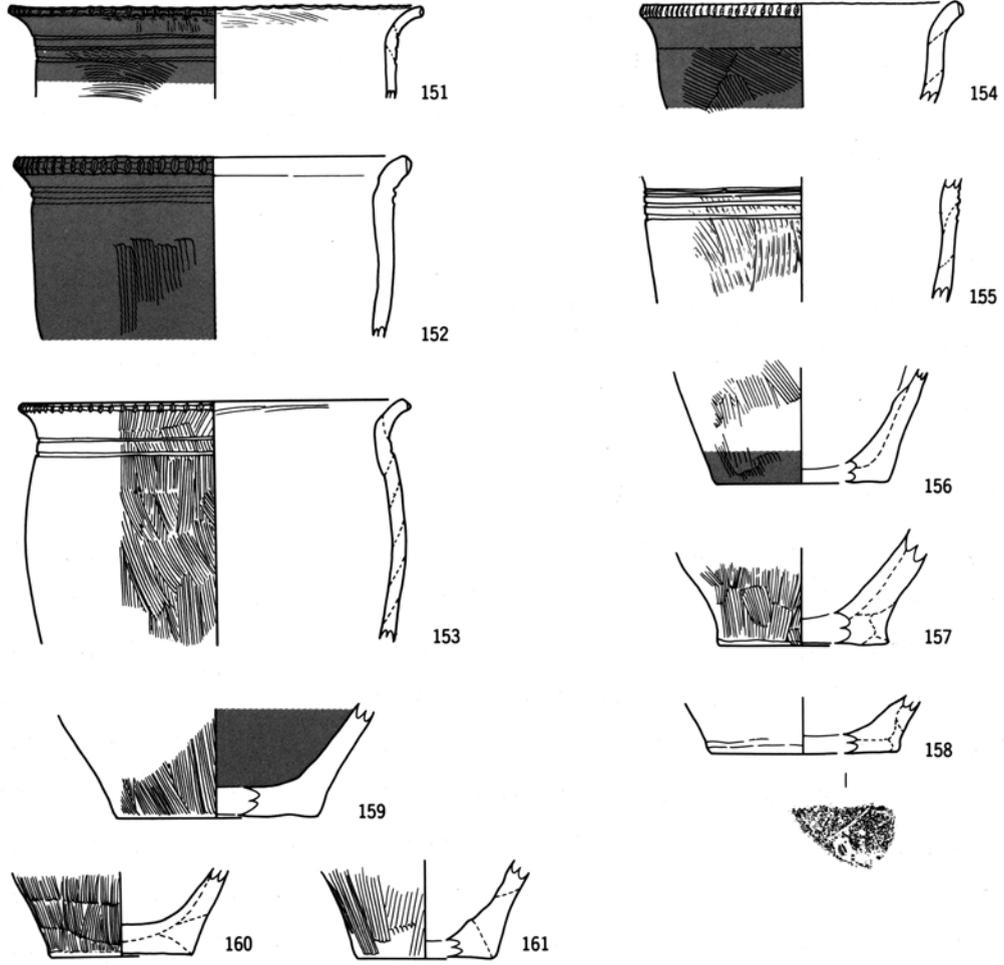
172～217は第Ⅰ系土器。172は蓋A1類で、周縁部付近に沈線が1条めぐる。173～176は蓋A2類。174は頂部を中心にヘラで3条の沈線を描く。175は頂部を高くつくりだす。177～180は蓋C1類で、上面にヘラで木ノ葉状の紋様を描く。177は周縁部に小孔をあける。181は蓋C2類で、頂部の小孔を中心として十字に2本の沈線を描く。182～195は壺A類。183は外面に縦方向のヘラミガキを施す。186は口縁部が短く、頸部に沈線を3条めぐらせている。183・184・186・187は口縁部に蓋をゆわえるための小孔をあけている。197～200は壺B類。頸部から口縁部が長くなだらかなつくりで、頸部と肩部に沈線をめぐらしており、197は削り出し突帯に沈線1条、198は3条、199は5条、200は4条である。調整は外面がハケメ、内面はヘラミガキである。196は壺の胴部下半で、底部から内彎気味にたちあがり、胴部の径が小さい。外面にヘラミガキを施す。201は鉢Bで、外面と口縁部内面にハケメが残る。202は甕A1。内外面とも摩滅のため調整は不明。203～205は甕A2である。206～217は甕の底部。208は周縁部が張りだす。213は内面がヘラミガキを施す。218は第Ⅱ系の壺である。SD110下層の131と同様に指で押圧した3条の突帯を肩部につくりだしている。219～228は第Ⅲ系の甕。220・223はA1類で、219はA2類、221・222はB類である。底部は225がb形態で、他はa形態に属する。229～233は第Ⅳ系土器で、229～231は鉢、232・233は壺である。229はB1類で、外面には羽状に条痕を施す。230はB2類で、口縁部に縁帯を付着させる。231はA2類で、231と同じく口縁部外面に縁帯をつけている。234～236は第Ⅴ系土器である。234は内外面にヘラミガキを施し、外面にはヘラで直線と三角形の紋様を描きだす。235は胴部の破片。外面をハケで調整し、貼りつけ突帯により紋様を施す。236は壺の胴部上半である。肩部にヘラで3条の直線紋と5～7条の弧紋を描いて赤色顔料を塗布し、紋様部分以外にはヘラミガキを施す。内面は暗灰色を呈し、ナデ調整をおこなうが、粘土紐の継目が残る。砂粒を多くふくむ胎土をもちいている。237は加工円板である。第Ⅰ系土器の壺の胴部をもちいている。

(樋上 昇)

註)

1. 三重県教育委員会 1972『一志郡三雲村 中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告10

NR101(2)



NR101西肩

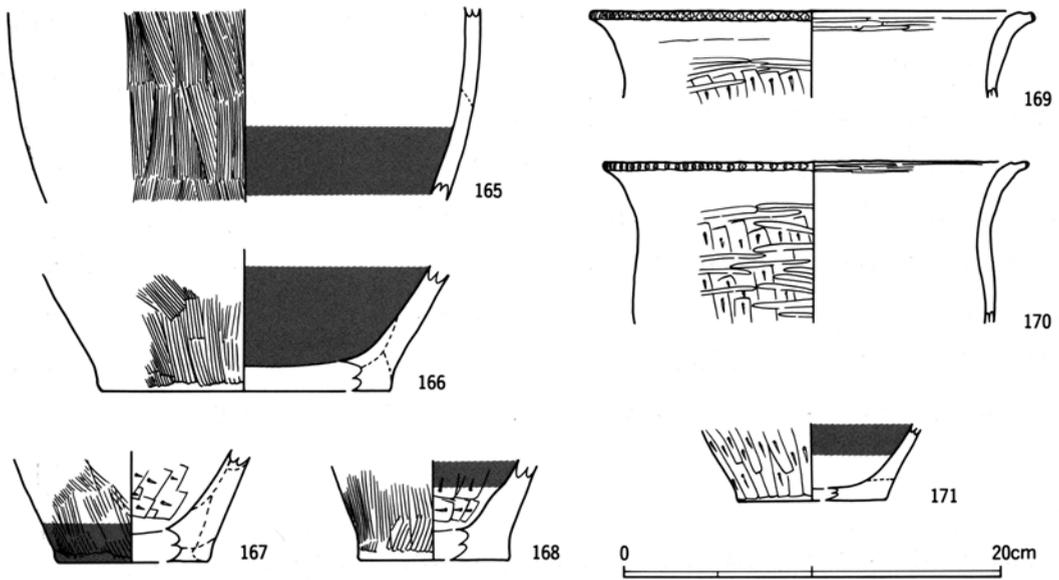


图36 NR101(2)·NR101 西肩出土土器实测图(1:4)

包含層(1)

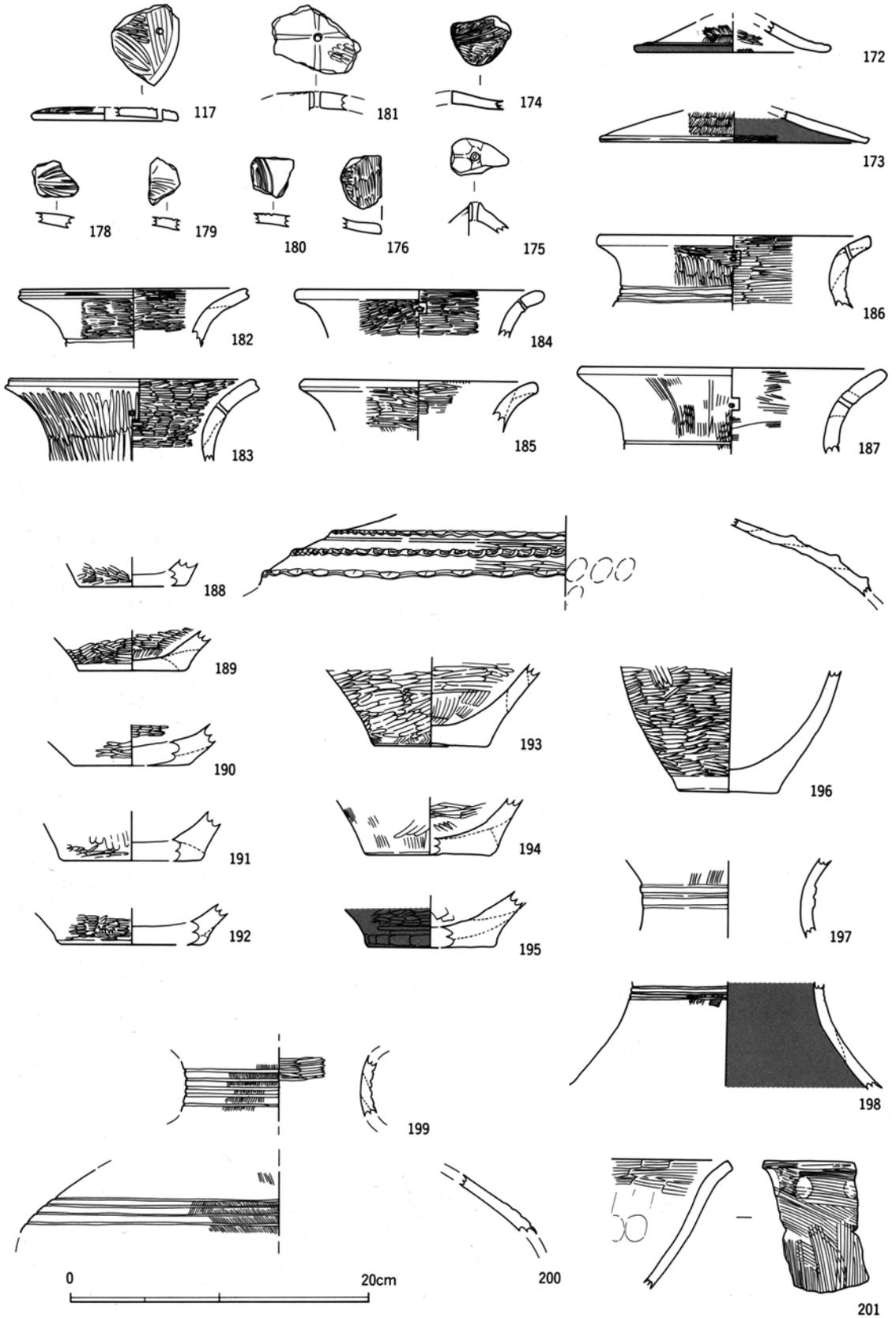


图37 包含層出土土器实测图(1) (1 : 4)

包含層(2)

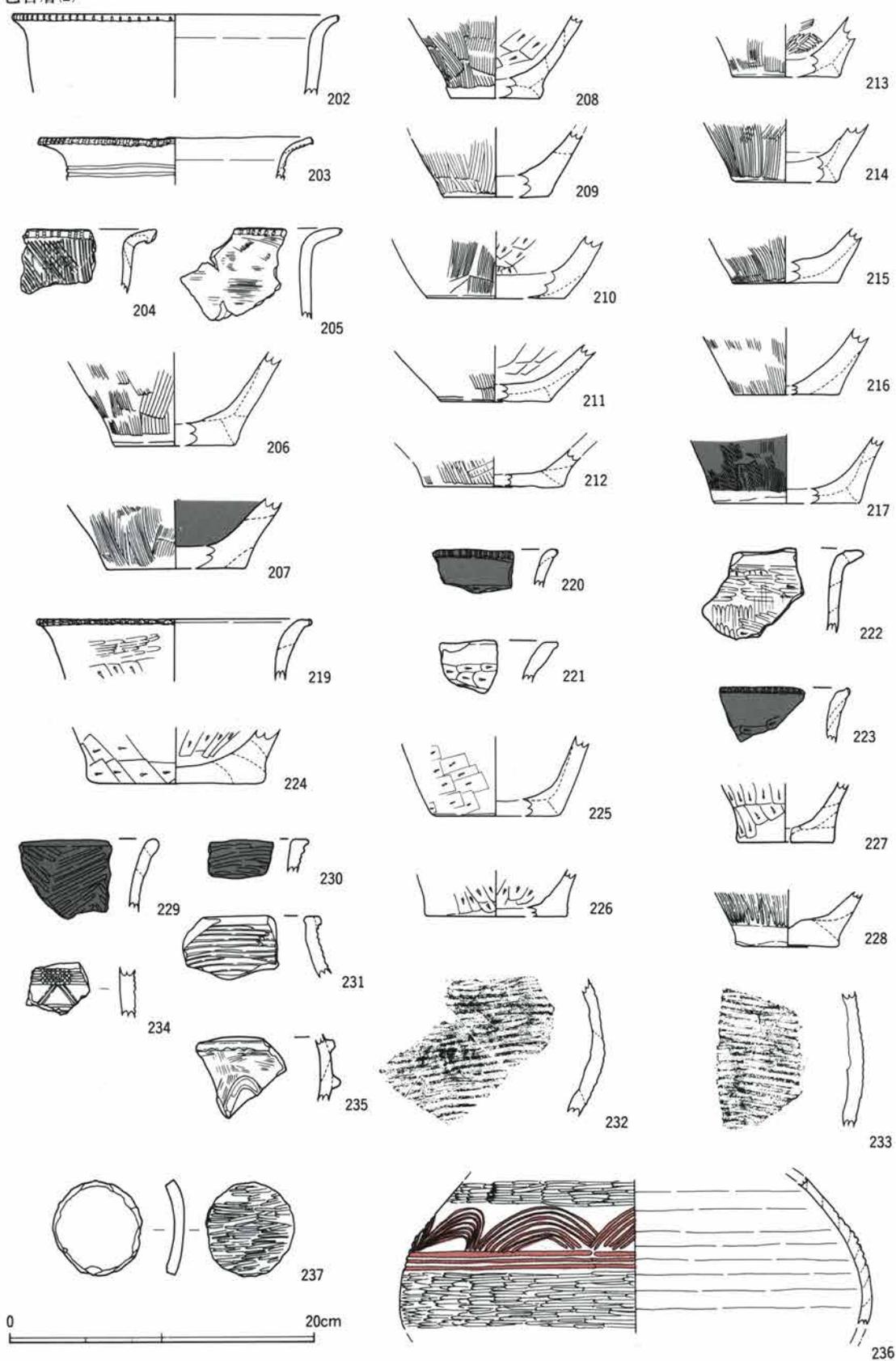


图38 包含層出土土器実測図(2) (1 : 4)

(2)石器

月縄手遺跡の発掘調査によって出土した石器の総数は剥片等の資料を含め50点を数えるにすぎない。出土した石器は、すべて弥生時代前期の遠賀川系土器を含む遺構及び包含層中からであり、当地方では数少ない確実に弥生時代前期に比定することができる資料と言える。しかし、残念ながら弥生石器を特色づける所謂大陸系磨製石器は1点も出土していない。また、石核・剥片等（ガラス質石英安山岩が多い）が若干ながら出土しており、集落内で石器製作が行われていた可能性が高いが、石器製作過程を類推することができるような資料は、今回の調査においては確認されていないので、ここでは、製品を中心に説明していくことにする。

a 石鏃（1～3）

1は小形の平基無茎鏃であり、2・3は1次調査時に出土した資料を再実測したものである。2は基部に僅かばかりのえぐりを入れた凹基無茎鏃、3は基部部分が未調整の未製品である。いずれもガラス質石英安山岩製。

b 石錐（4・5）

石錐は2点出土しているが明瞭な摘み部を形成するものはみられない。4は錐部を欠損する。5は側縁部に連続的に調整を加え錐部を形成しているが、ローリング痕は不明瞭である。ガラス質石英安山岩製。

c 搔器（6・7）

搔器と考えられる資料は2点出土している。6は珪化木（一部樹脂が琥珀化している）を利用した横長剥片の下端に打撃を加え刃部を形成する。7は剥片の側縁に表裏両面より連続的に調整を加えたもので、ガラス質石英安山岩を利用している。

d 粗製剥片石器（13）

13は川原石（石英斑岩）を母岩とし、それから打ち剥した自然面を残す剥片に調整を加え刃部を形成した粗製剥片石器である。図のトーン表示で示したように刃部に不規則ながら研磨した痕跡が確認でき、山陰地方島根県西川津遺跡等で多数確認されている大形石包丁の可能性も十分考えられる。

e 叩き石（8）

8は、チャートの残核を転用した叩き石であり、図の下部に明瞭な敲打の痕跡が確認できる。

f 砥石（9）

9は火山岩性の石材（石英斑岩か）を利用した砥石である。

g クサビ形石器（10～12）

10～12はガラス質石英安山岩を利用した剥片であり、平行する2辺の両側から打撃を加えたクサビ形石器である。断面は凸レンズ状をなしている。1次調査時には15点のクサビ形石器の出土が報告されているが、今次の調査においては4点確認できたにすぎない。 (服部信博)

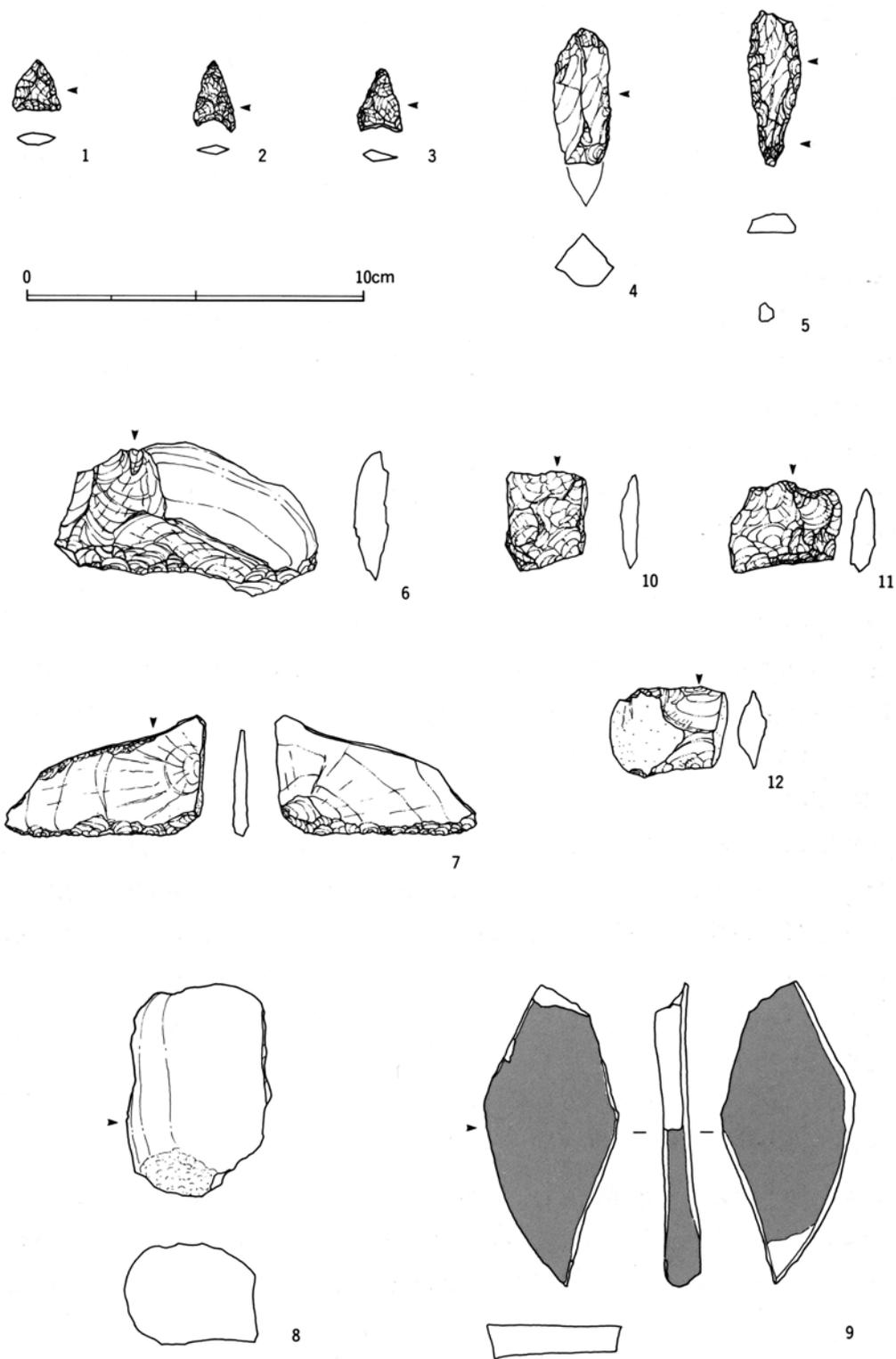


图39 II期石器实测图(1)

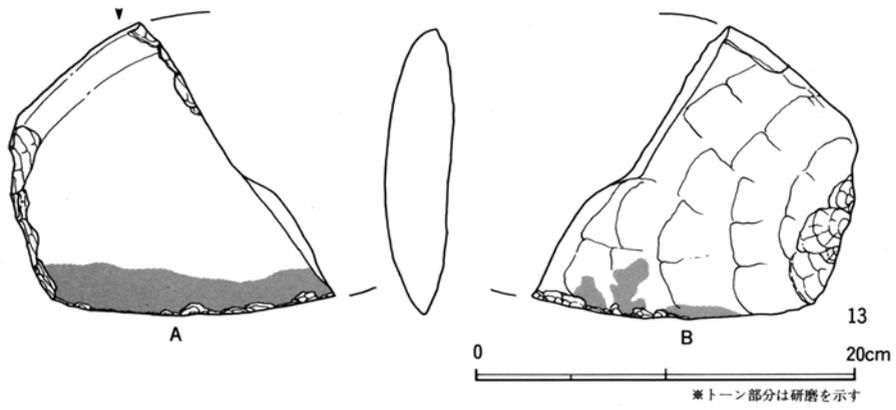
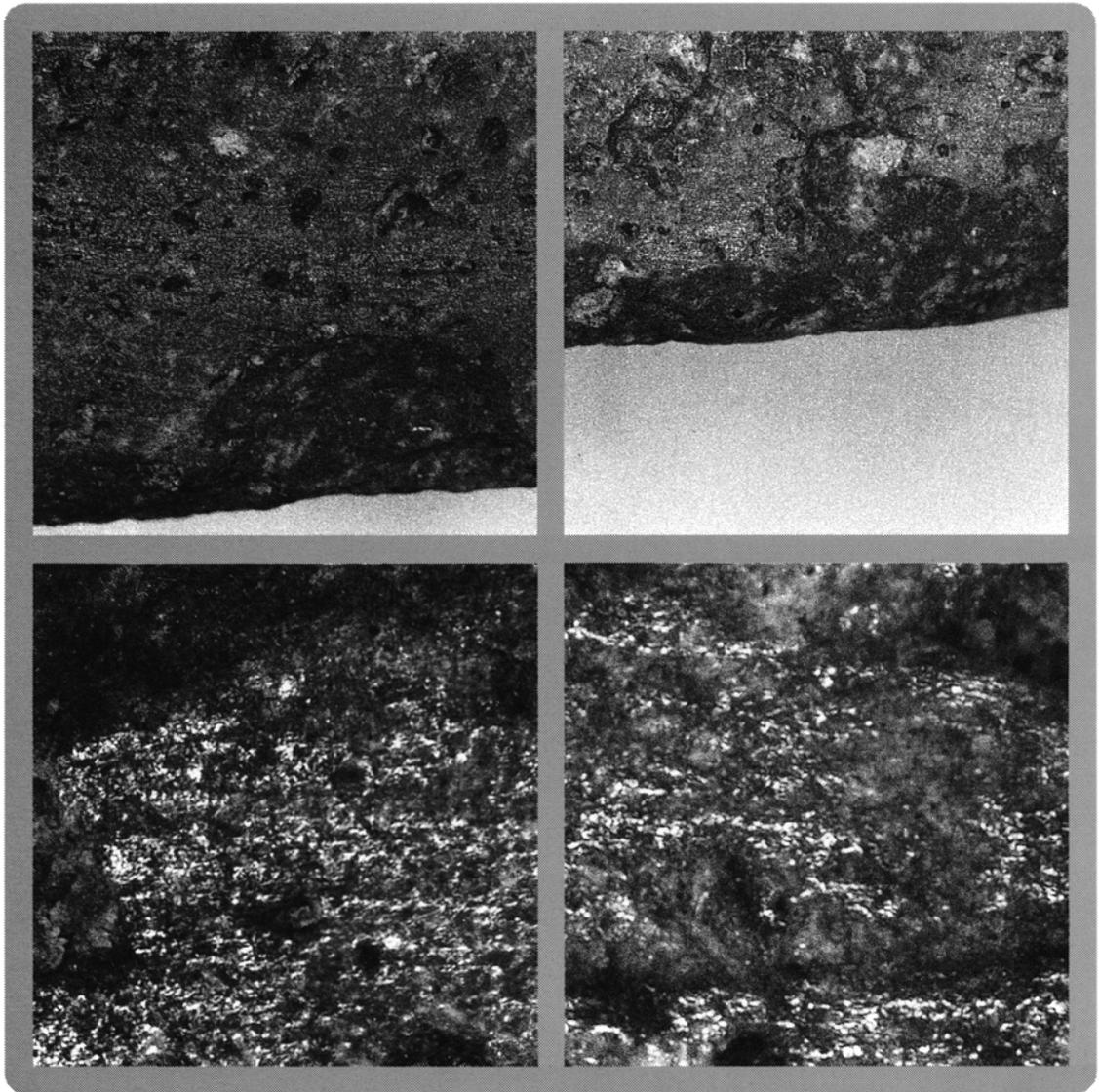


図40 II期石器実測図(2)



粗製剝片石器顕微鏡写真

2. II期の遺物

(1)土器

Ca区 SK58 (図41)

1はく字口縁台付甕で、台部を欠損する。外面はナナメのハケを施し、口縁部は大きく外傾し、端部は面をもつ。2は脚部をもつ内彎直口壺で、大きく内彎する口頸部には4段に刺突文が施されている。3・4は有段高杯で、その内の4はやや杯部の比率が脚部を凌駕するものの、杯部稜径が大きく、脚部には縦位2組の円形透孔が3方向に穿たれる。これらの特徴からおおよそ廻間I式2段階に併行する資料と考えられよう。

Ca区 SK24内土器集積No.4 (図41)

5はS字甕A類、6は内面ケズリ調整を施す有段口縁台付甕で、口縁部と体部に刺突文が見られる。7は横方向のミガキが見られる加飾壺で、外面には波状文と横線文を組み合わせ、内面は鋸歯状の波状文が施される庄内式系の壺。

Cb区 SD74 (図41)

8は有段高杯の杯部で、ナナメ方向のミガキ調整が認められる。9はパレス壺の口縁部であり、口頸部は全体に内彎して内面文様面は大きく、すでに面としての面影はほとんどない。端部拡張面には擬凹線と浮文が施される。こうした特徴は廻間II式前半期に見られ、それは共伴する8の高杯の形状と矛盾しない。

Ca区 SX04 (図41)

10～12はS字甕B類で、ヨコハケは頸部から離脱し、10は明らかにB類新段階のものである。13・14は壺で、13は二重口縁壺。内外面はヨコ方向のミガキ調整が見られる。口縁部は大きく外方に拡張し、内面の段は彎曲する。15・16は低脚の小型高杯であり、15は彎曲する杯部に外面ハケメ後タテ方向のミガキ調整を施す。18は小型の鉢。19は小さい口縁部に球形の体部を持つ甕で、外面はハケメ後ヨコ方向にナデ、内面調整はケズリを頸部まで施すことが見られる。こうした内外面の調整法から畿内系の技法とその形態が類推できよう。21・22は有段高杯であるが、21は脚部に今だ彎曲が残存するも、22は明確に外反する脚部をもつ。杯部は若干の内彎形状が痕跡的に見られる。以上こうした形態及び技法は廻間II式4段階の資料に相当するものと考えられよう。

B区 SX01 (図42)

一部に器種の混乱があるものの比較的まとまった資料と考えられる。23～27はS字甕で、23はS字甕C類新、24・25は口縁端部に明瞭な面をもつS字甕D類古段階の資料である。26・27はS字甕台部で、大きく八字状に開き、補充技法は痕跡的に内面部にのみ見られる。28～30は壺の口縁部であるが、いずれも当地域に系譜を置く形態と異なるものである。33は柳ヶ坪型壺の口縁部であり、34は体部上位に横線文と波状文を施し、外面はヨコ方向にミガキ調整が見られる。35は口頸部を欠損する壺で、

体部上位には横線文と弧線文の組み合わせが見られる。体部外面はヨコ方向にハケを施し、部分的に粗いヨコミガキが痕跡的に見られる。36～45は高杯で、36は浅く大きく開く杯部に裾部が大きく外反する脚部を組み合わせる。脚部中央部には3方向に透孔を穿ち、脚端部は下方に僅かに突出が見られる。41・42は同様な形態をもつもので、深い杯部に大きく八字状に開く脚部を持つ形態で、廻間Ⅲ式後半期からの系譜で考えられるものである。その他の高杯は無透孔屈折脚高杯の一群の形態のもので、外面全面にはタテ方向の明確なミガキ調整が見られ、柱状部内面は指頭ナデという共通の特色が認められる。46は口縁部が大きく有段鉢の形骸化したものと考えられ、内面と底部はケズリ調整。47・48・49は平底の小型壺で、ミガキ調整は痕跡的である。50は中型壺の脚部。

Ca区 SX02 (図43)

SX02出土遺物は51～63の上層と64～76の下層出土品の2群に区分できる。まず上層では、51は端部に面を持つ広口壺の口頸部。52は柳ヶ坪型壺の頸部。53～55は台付甕で、63はS字甕台部。56～58は屈折脚高杯で、56は杯部内外面及び脚部外面にタテミガキを施すもので、57は杯部においてミガキの痕跡を留めるものの、脚部ではへら状工具による調整(以下へら調整)が認められる。柱状部内面は指頭ナデであるが、58はヨコケズリが見られる。59・61・62は粗製の小型壺で、体部外面にはへら調整が見られる。60は粗製の小型甕で、外面はタテハケが施され、口縁端部は指で押さえ整えるのみのものである。

下層では64～70までのS字甕が目立ち、64・67・68がS字甕C類であり、65・66・69はS字甕D類古の良好な資料である。特に66は全体の形状を復元することができたもので、その形態は体部において長胴化を志向しつつも未だS字甕C類の肩部の張りを僅かに残存させている。おそらくS字甕D類の最も初源的な形状を保つものと考えられる。口縁部は端部に明確な面を保有し、頸部調整が整い、外面はヨコハケが欠損して羽状のハケメのみで構成される。体部内面にはヨコ方向の板ナデが丁寧に施されている。台部は大きく八字状に開き、補充技法は内面のみ認められる。71は柳ヶ坪型壺の口頸部で、72はその体部の破片と考えられよう。73は小型丸底土器であるが、外面の調整はヨコ方向の細かいミガキが形骸化し、全体にハケメが表面化している。74・75・76は屈折脚高杯で、外面の調整はタテミガキが丁寧に施される。脚部柱状部内面は指頭ナデである。

Ca区 SX03 (図44・45)

SX03の土器群は層位的に3群の土器に区分できる。77～79の上層の資料と87～93の下層、さらに94～117の最上層の土器である。

下層においては、88～90はS字甕であるが、88は口縁部が山陰系甕と融合したもので、89はS字甕D類古の典型的な形状を留めたもの。91は屈折脚高杯で、外面にはタテミガキが施され、脚部柱状部内面には指頭ナデが見られる。92は二重口縁壺の頸部で、やはり外面にはタテミガキ調整が残る。93は広口壺で、体部中位外面は搔壁技法が見られる。なお体部下位に焼成後の穿孔が認められる。

上層では77が広口壺であるが、調整にハケメの使用が見られず、内面はケズリ技法を採用している。78・79は山陰系口縁をもつS字甕で、体部のヨコハケは欠損し、変わって痕跡的に1条の沈線が残る。

体部の形状は最大径がほぼ中央部へ下がった長胴的なもので、口縁部の屈折も鋭さが消失した有段状となる。山陰系口縁をもつS字甕の最後の形態と思われる。80～85は屈折脚高杯で、調整はタテミガキを用いるが、やや散漫な施し方に変化している。

最上層では、94・95・96・103・104・105が台付甕で、外面には搔壁及びケズリ技法が多用される。97・98はS字甕D類中段階の資料と考えられる。100は搔壁技法による外面調整が見られる壺で、口縁部は小さく外反するのみ。101は有段口縁を有する小型壺で、外面にはハケメが見られる。109～117は屈折脚高杯で、外面調整はミガキはほとんど見られず、多くはヘラ調整に留まる。柱状部内面は指頭ナデが主体である。116・117は浅く口径が大きい杯部を持つもので、脚部は低く柱状部に膨らみをもつ。その他102は手づくね土器、99は山陰系の大型壺の口縁部の可能性が考えられる。

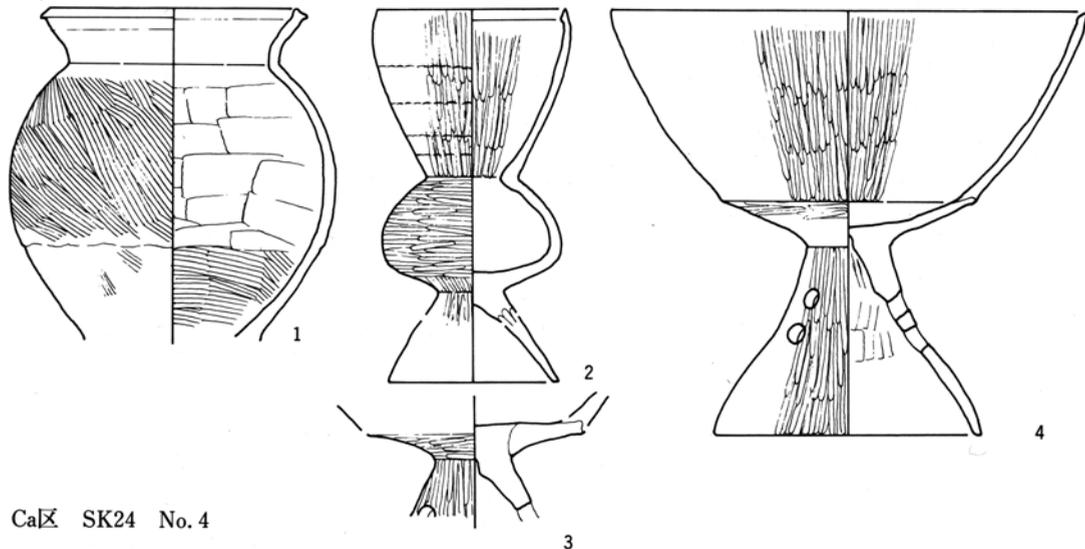
小結

月繩手上層資料の主体はS X 01・02・03出土品を中心とした「松河戸I式」の資料であり、その他に廻間I式～II式にかけての資料が点在する。その内S X 04は廻間II式4段階の比較的整った資料と考えられる。

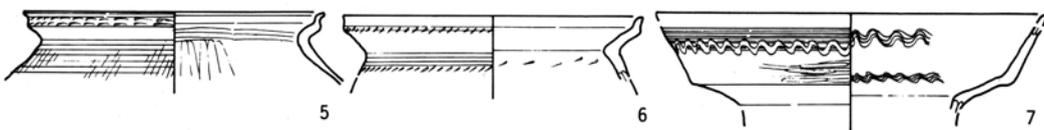
松河戸I式の土器群は特にS X 03における層位的な3群の在り方を考慮すると、大きく3つの段階に区分して考えることが可能と思われる。それは同時に松河戸I式の小区分を考える上での基準資料でもある。さてまず第1段階はS X 03下層資料及びS X 01・S X 02下層資料をもって考えることができ、S字甕D類古段階の資料にS字甕C類新段階の資料が共伴する段階である。また屈折脚高杯が伴ない、それらには調整技法にタテミガキを用いるという共通点がある。次にS X 03上層及びS X 02上層の資料をもって第2段階を想定できよう。これらの資料は基本的に第1段階と大きく変化するものではないが、S字甕C類が消失し、屈折脚高杯ではミガキ調整が早くも簡素化する。粗製の小型土器群が一気に増加する。こうした変化は、新たな型式の定着と廻間III式から残存する型式との変換期を表わしているものと考えられよう。最後にS X 03最上層の土器が存在する。屈折脚高杯の外面調整がタテミガキからヘラ調整に変化し、117のような形態が登場する。S字甕はD類中段階の資料となる。

以上の3つの段階は松河戸I式の1～3段階の変遷であり、様式的には1・2と3段階では大きく異なるようであり、それは松河戸I式前半期と後半期の区分に相当する。 (赤塚次郎)

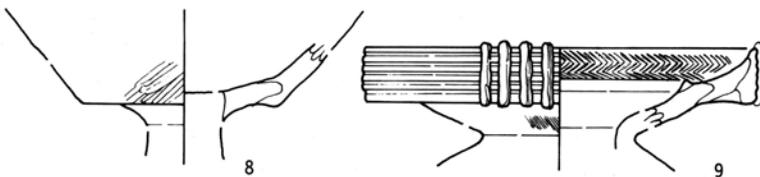
Ca区 SK58



Ca区 SK24 No. 4



Cb区 SD74



Ca区 SX04

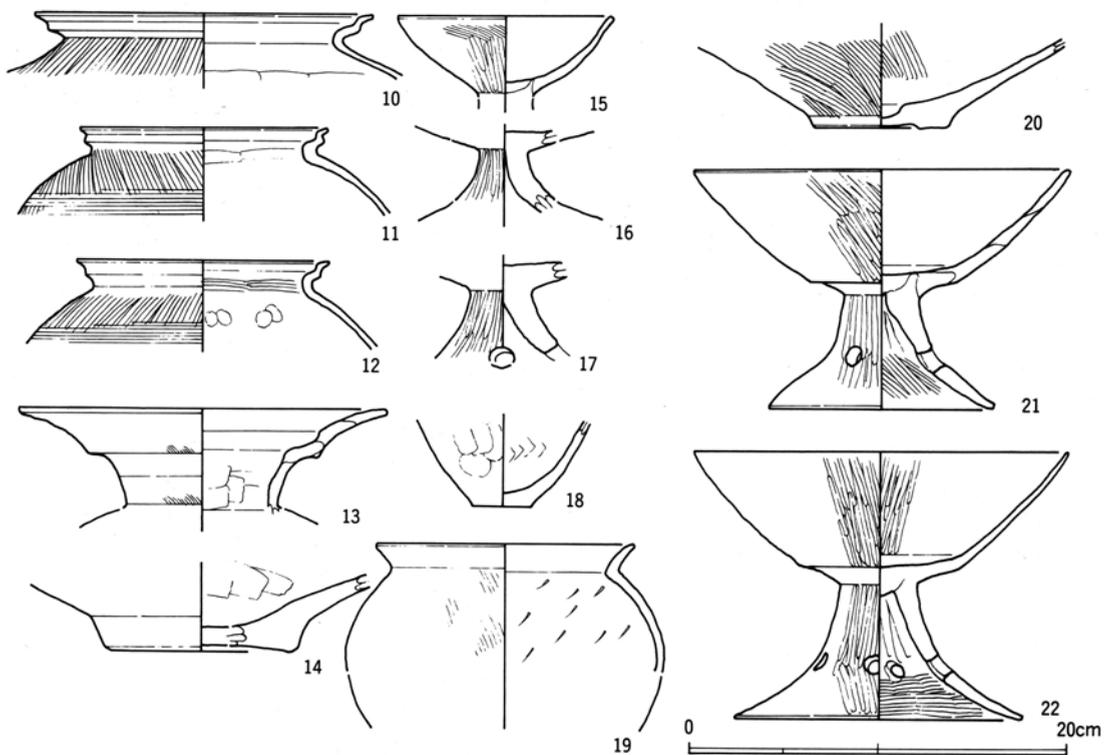


图41 SK58·24·SD74·SX04 出土土器实测图 (1:4)

B区 SX01

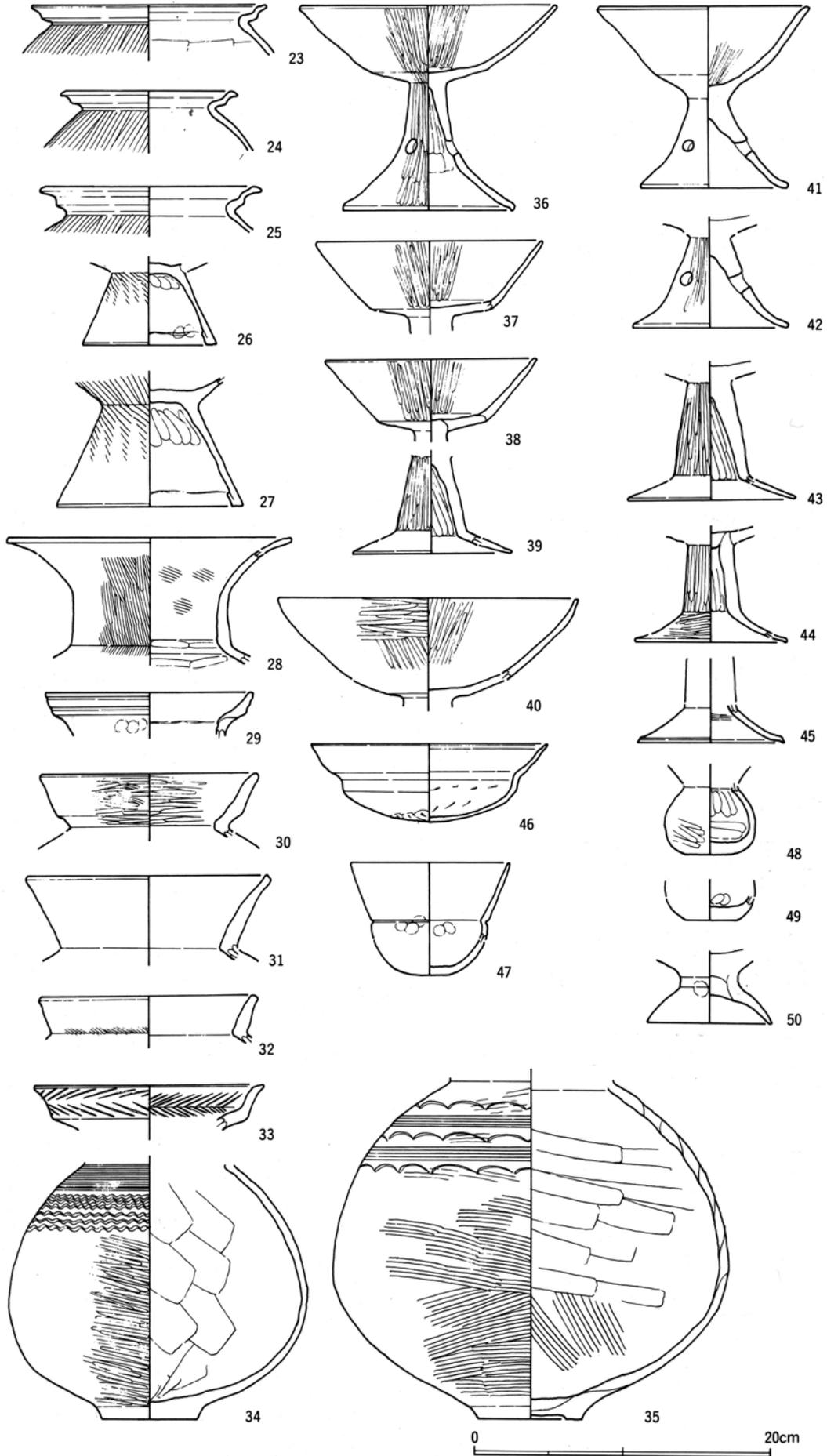
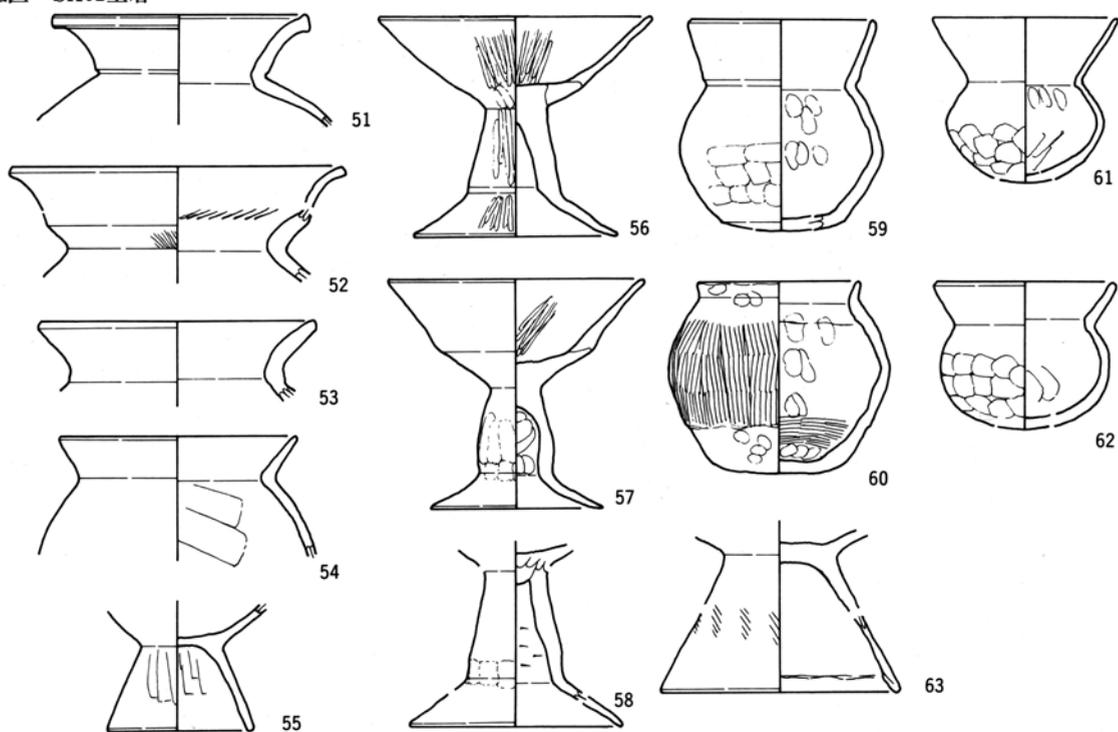


图42 SX01 出土土器实测图 (1:4)

Ca区 SX02上層



Ca区 SX02下層

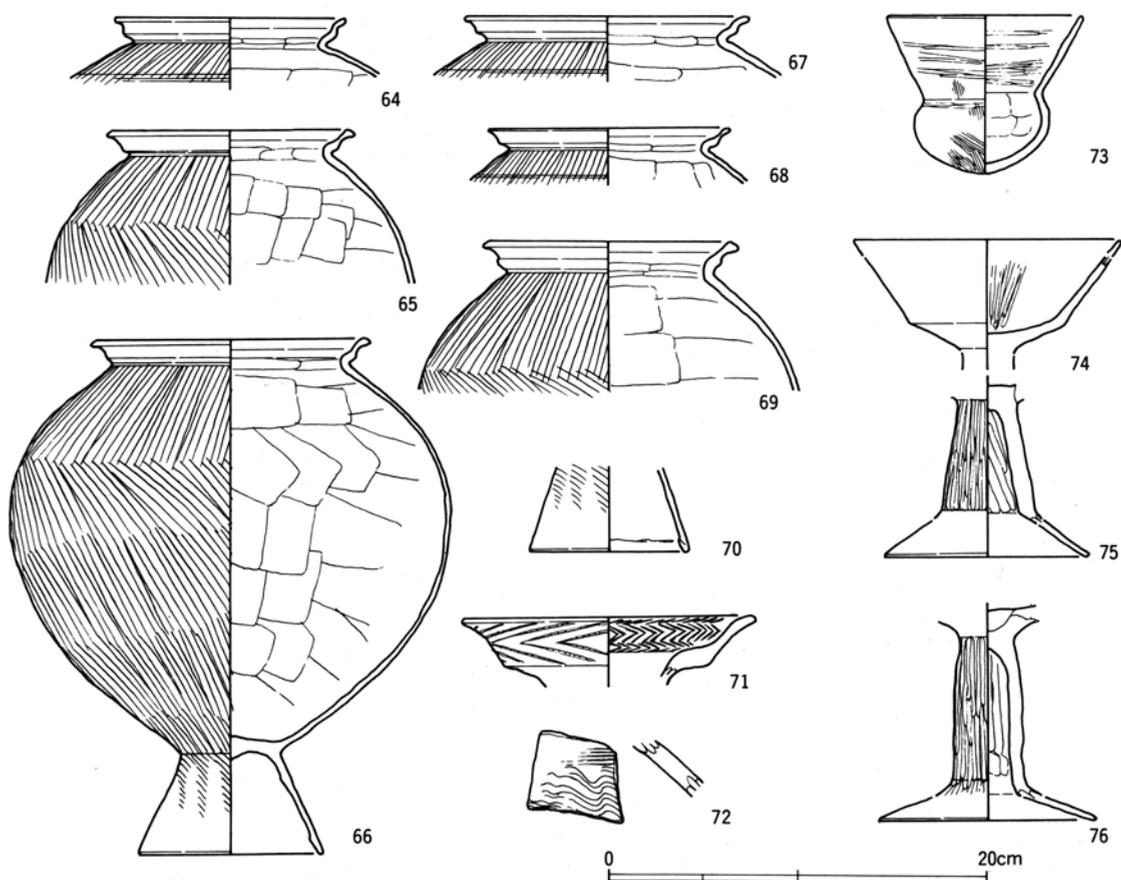
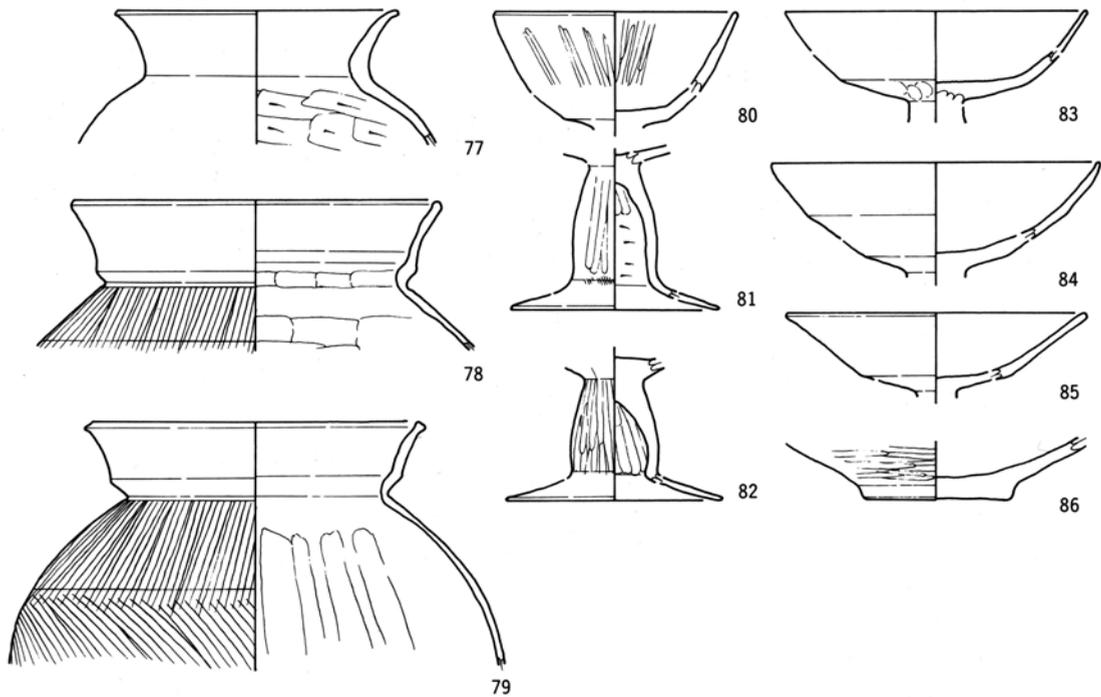


图43 SX02 上層・同下層出土土器実測図(1:4)

Ca区 SX03上層



Ca区 SX03下層

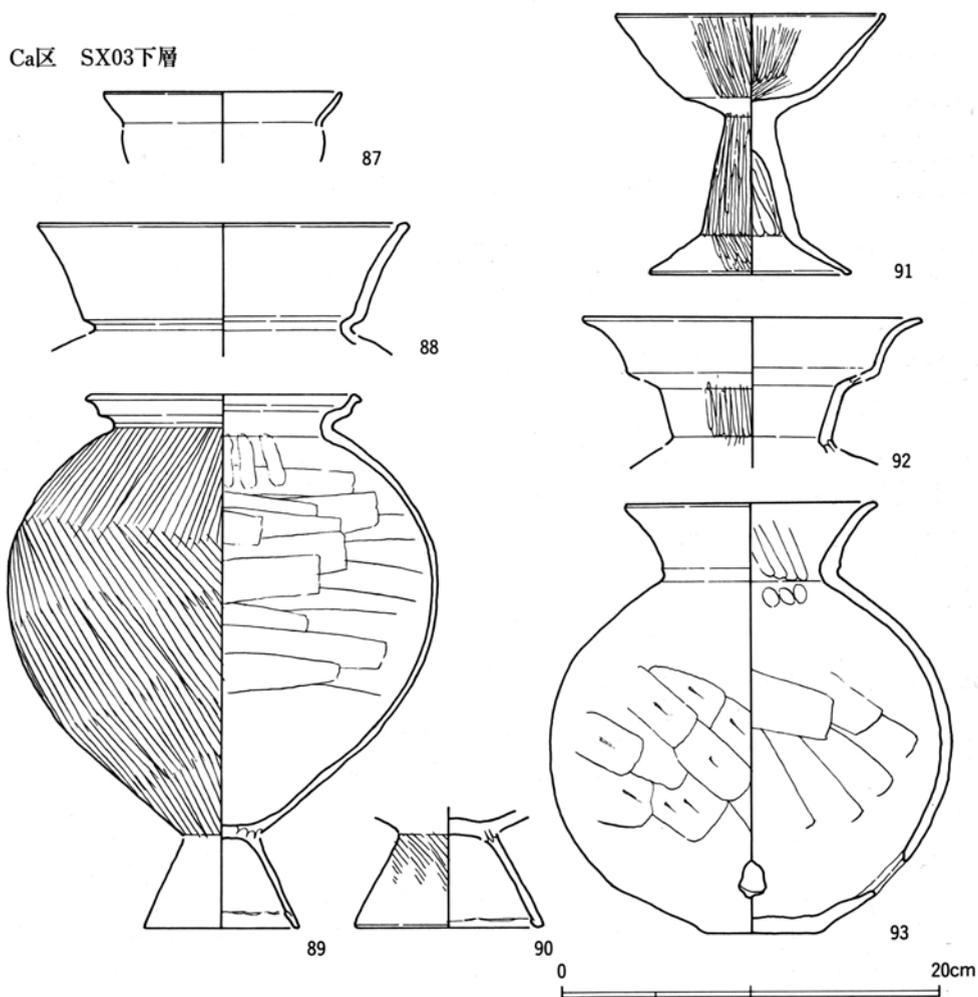


图44 SX03 上層・同下層出土土器実測図(1:4)

Ca区 SX03 最上層

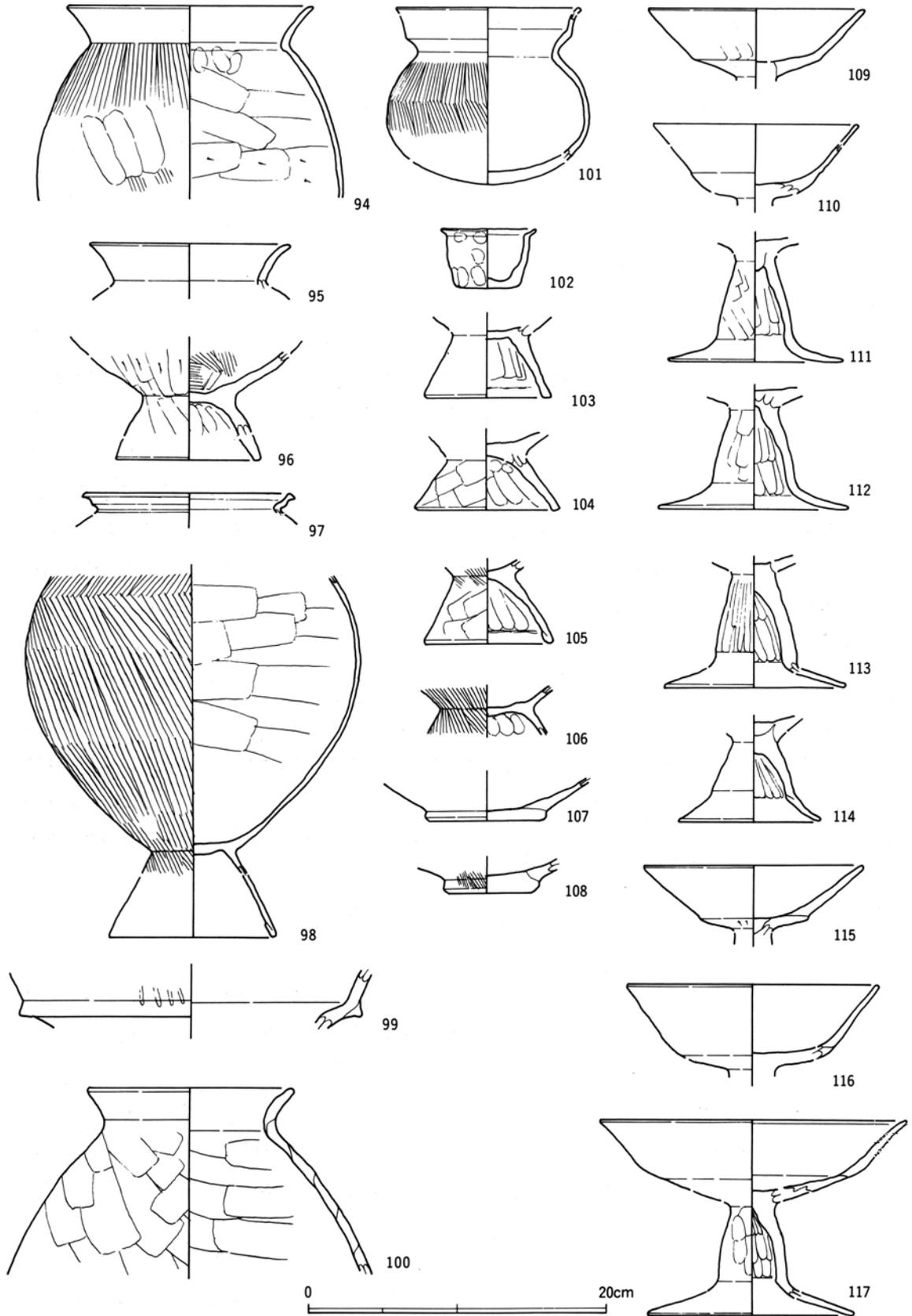


图45 SX03 最上層出土土器实测图 (1 : 4)

(2)木器

木器はCa区S X 02・03・S K 20、Cb区S K 99から出土している。

Ca区 S X 02 (図46)

1の板材はS X 02最下層から出土している(図24上)。縦18.1cm、横15.2cm、厚さ0.9cmの長方形を呈するヒノキの柾目材である。表面には刀子状の工具によると思われる細かな傷跡が図上の右上から左下にかけて無数についている。裏面は剥離しており、使用痕は遺存していない。なんらかの工作あるいは調理にもちいられた可能性がある。

Ca区 S X 03 (図46・47)

S X 03の下層で農耕具・容器・板材などが出土している。2は東海系曲柄鋏で、これまで筆者が膝柄鋏と呼称してきたものである¹⁾。上半部は断面がカマボコ形をなす棒状の軸部で下半部は幅が広く薄いつくりの刃部で、軸部前面(使用者側からみて)の平坦部に、木の枝わかれ部分を利用した柄(膝柄)をくみあわせて紐でしばりつけ、鋏として使用する。その際、柄との結合部がずれないように後面の上端部付近に一条溝を刻んでいる。全長は59.3cmで、軸部の長さ13.9cm、幅3.5cm、厚さ2.2cm、刃部は幅9.5cm、厚さ1.8cmである。後面の右半分の破損が著しい。樹種は不明だが広葉樹をもちいている。東海系曲柄鋏としては最末期に属する。3は槽とよばれる浅い容器である。図上の左約半分が破損している。部分的に炭化しているが、破損面にも炭化がおよんでいることから、破損したのちに火をうけたことがわかる。たちあがり部分は上半部しかなく、上側縁は高く急激に、右側縁は低くゆるやかにたちあがる。内外面とも鉄斧による加工痕がところどころに残っている。残存長は37.8cm、幅9.9cm、高さ2.8cmで、深さは2.0cmをはかる。樹種はヒノキである。4・5は用途不明品。4は断面が薄いカマボコ状で、下端部は鋭い加工具で削られている。広葉樹をもちいていることから、農耕具類の破損品を再加工したものであろう。長さ10.1cm、幅5.9cm、厚さ1.5cmである。5はヒノキの板材で、全側面が残存している。部分的に炭化した痕跡がある。長さ20.9cm、幅5.6cm、厚さ1.5cmである。

Ca区 S K 20 (図47)

S K 20の南コーナー部分に柱穴があり、柱根(6)が遺存していた。残存高15.4cm、幅10.4cm、厚さ7.1cmで、芯をはずして断面が長方形に加工されている。樹種はツガ類をもちいている。

Cb区 S K 99 (図47)

Cb区東端のS K 99には柱根(7)が遺存していた(図19右下)。残存高は34.7cmで、直径は12.7cmある。ナラ類の芯もち材で、八角形に面取りされ、底部にも加工痕が明瞭に残る。(樋上 昇)

註)

1. 樋上 昇 1993「木製農耕具研究の一側面—ナスビ形農耕具の出現から消滅まで—」『考古学フォーラム』第3号

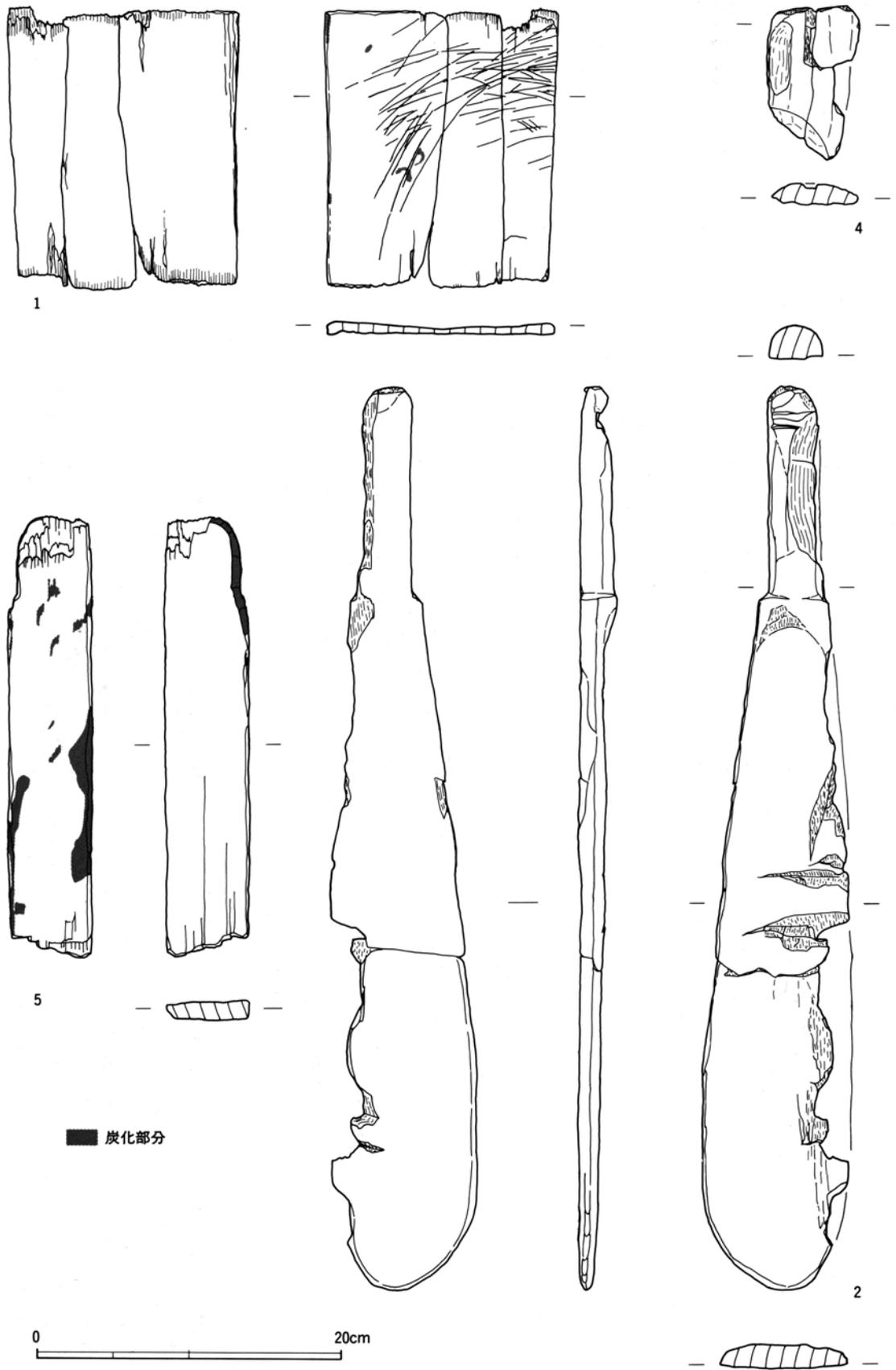


图46 SX02·03(1) 出土木器实测图 (1 : 4)

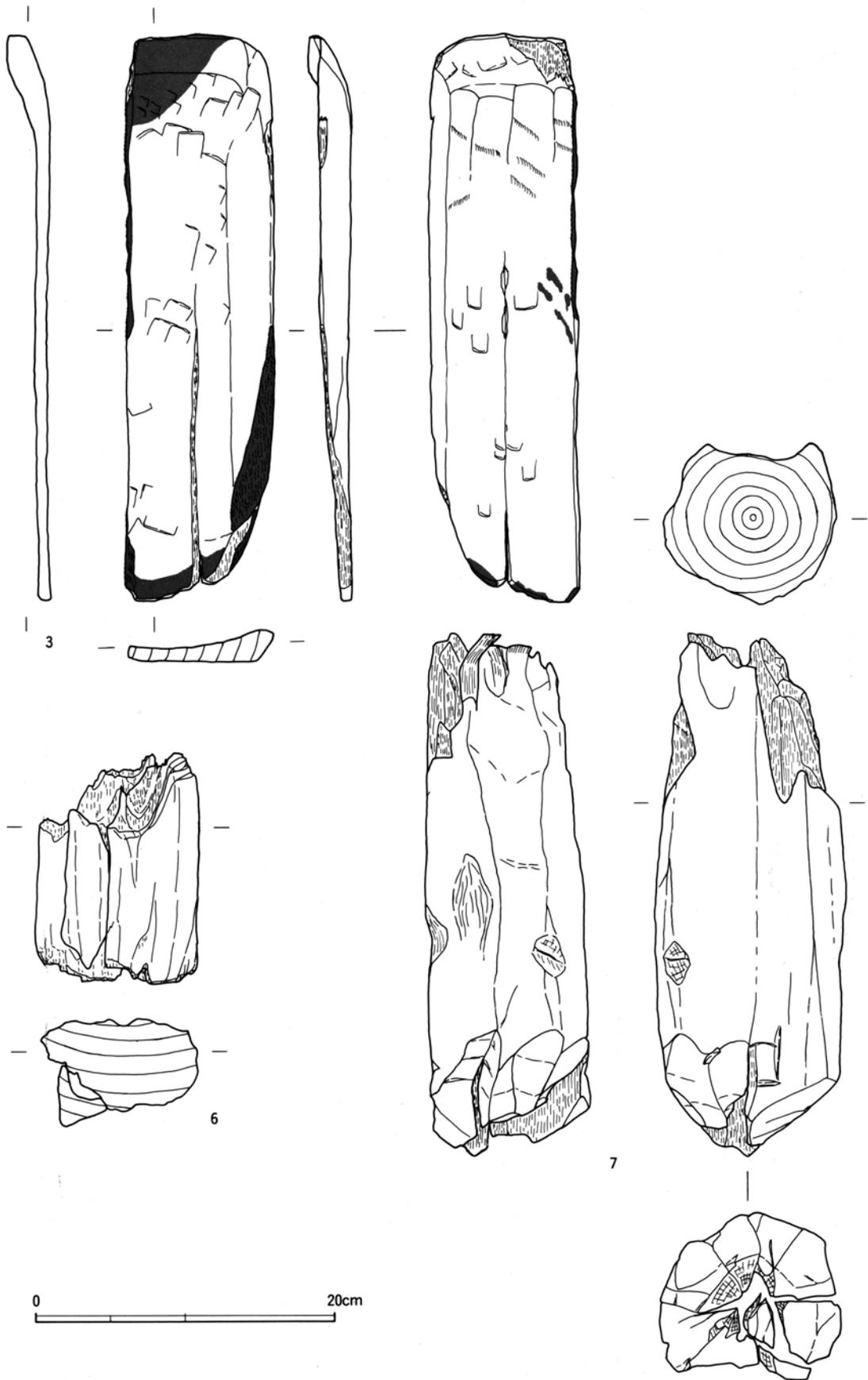


图47 SX03(2)·SK20·SK99 出土木器实测图 (1 : 4)

3、自然科学分析

1、月縄手遺跡の環濠から検出された珪藻遺骸群集について

I. はじめに

月縄手遺跡は名古屋市西区比良に所在し、名古屋市北西部を流れる庄内川右岸の微高地上に立地している。平成4年度にはA・B・C区の発掘調査が行われ、古墳時代前期の遺物包含層（上面）と、その下層からは弥生時代前期の遺物包含層（下面）の存在が確認されている。上面の遺構からは廻間Ⅲ式など古墳時代前期の遺物が多量に出土し、下面の遺構からは遠賀川系壺を含む多くの遺物と、弥生時代前期にあたる環濠が検出された。

珪藻分析は、下面遺構の92A a区・92A b区から92C a区西端部につながる溝（SD101）中の92C a区にあたる位置より採取した連続試料について実施した。この溝は、集落の周囲にめぐらされた弥生時代前期に属する環濠であると考えられており、つまり人為的な土地改変を直接受けた場所である。そのため環濠から採取した珪藻の分析結果は、遺跡周辺の古環境を十分に反映しているとは言えない。したがって今回の珪藻分析の目的は、遺跡をとりまく古環境の復元に重点をおくのではなく、環濠という人為的な影響を受けた場所において、珪藻の群集組成がどのようなものであり、そのことからどのような事実を引き出したらよいか考察することを目標とする。そして今後このような人為度の高い環境下において、珪藻分析を実施する際の資料提供のひとつとなれば幸いである。

II. 試料採取位置および分析方法

分析試料は、92C a区の環濠SD101より採取した25試料である。分析試料の採取位置・地層断面図（柱状図）および地層の層相などについては、図48・49に示したとおりである。

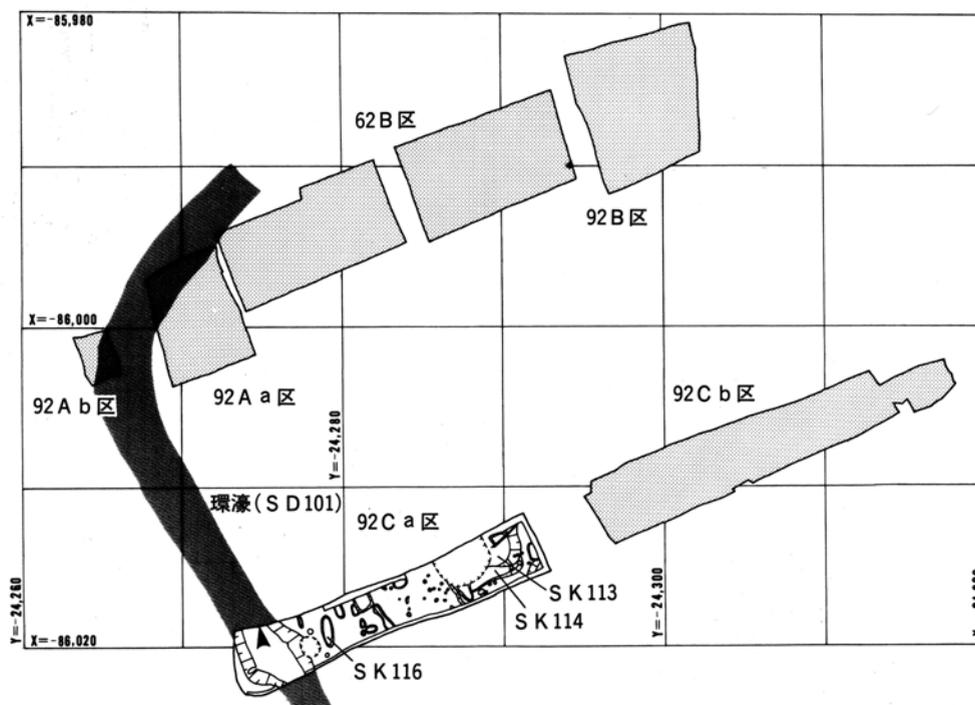


図48 分析試料採取地点（▲印）

試料の分析にあたって、乾燥重量 1 g をトールピーカーにとり、過酸化水素水(35%)を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散を行なった。岩片除去ののち、水洗を 4~5 回繰り返しながら、同時に比重選別を行なった。次に分離した試料を希釈し、マウントメディア(和光純薬製)にて封入した。検鏡は 1000 倍の光学顕微鏡を使用し各試料とも 200 個の珪藻殻を同定した。しかし、試料中に含まれる珪藻殻が極端に少ない場合は、200 個に達しなくても検鏡を打ち切った。

III. 分析結果

同定した珪藻遺骸のリストを表 1 に、その生態値の百分率と出現頻度等を図 50 に示した。出現した珪藻遺骸は、33 属 184 種(22 変種および 4 未同定種を含む)計 3081 個体であった。

珪藻遺骸群集は群集組成の特徴から、下位より A~C 帯の 3 帯に区分され、B 及び C 帯はさらに B 1~B 2 亜帯、C 1~C 2 亜帯に細分される。以下、各帯の群集組成の特徴、優占種などについて述べる。

A 帯(試料 1~3)

含有殻数は試料 1、2 では極めて少ない (1.4×10^4 個/g、 1.6×10^5 個/g) が、試料 3 では 3.0×10^6 個/g と多くなる。この帯では、試料 3 において好アルカリ・好止水性で、浮遊生種の *Cyclotella meneghiniana*、pH・水流性とも不定性で、底生種の *Navicula capitata* がそれぞれ 22%、19.5% と高率で出現し、かつ、この 2 種は試料 3 のみより出現した。*Cyclotella meneghiniana* は、Hustedt (1930) によれば、沿岸性で、海岸近くの汽水生プランクトンとして広く分布するものであり、*Navicula capitata* は、Krammer and Lange-Bertalot (1986) によれば、塩気のある水域を好み、水質汚濁に耐性のある中腐水性種として記載されている富栄養型の珪藻である。その他に本試料からは汽水~海水生種の *Cocconeis scutellum* および *Navicula peregrina*, *Nitzschia tryblionella* などが認められ、汽水~海水生種は合計 30.5% を占めた。生態性では、試料 3 では底生種 (46%) が半数近くを占め、また浮遊生種も 24% と他の試料に比べ高率に出現した。また試料 1、2 では、底生種 (平均 58.7%) が優占した。pH については、試料 2 のみで *Pinnularia gibba*, *Pinnularia microstauron*, *Eunotia pectinalis* var. *minor* などの真~好酸性種 (37%) が高い出現率を示した。

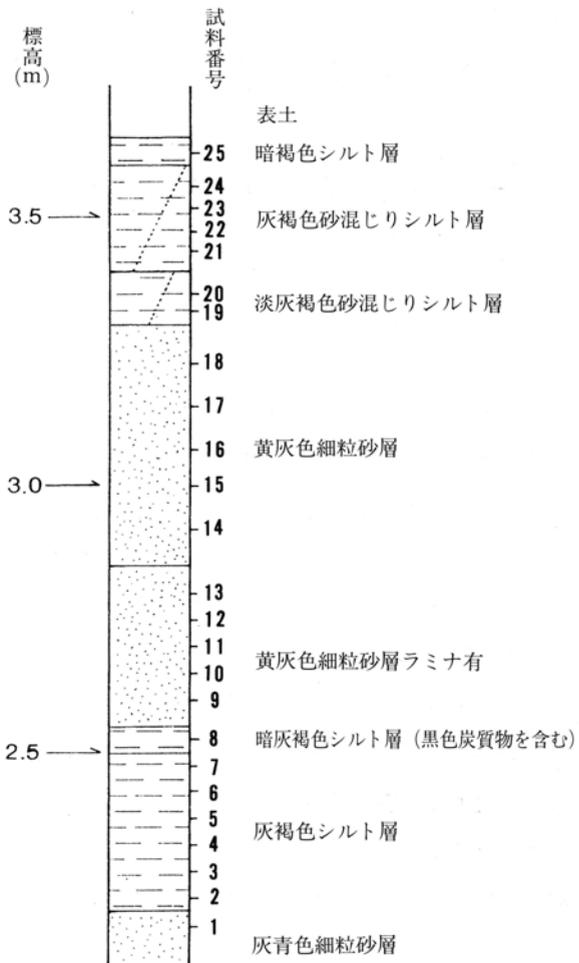


図49 分析試料採取地点における地質柱状図

B帯 (B 1 亜帯：試料 4～8、B 2 亜帯：試料 9～14)

含有殻数は B 1 亜帯で平均約 2.1×10^6 個/g、B 2 亜帯で平均約 1.4×10^6 個/g であり、A 帯に比べ増加している。*Cyclotella meneghiniana* などの汽水～海水生種が姿を消し、かわって *Achnanthes* 属、*Cocconeis* 属、*Cymbella* 属、*Eunotia* 属などの付着生種群が急増する。本帯ではとくに優占種は認められないが、B 1 亜帯では *Cocconeis placentula* (変種の *Cocconeis placentula* var. *euglypta* も含む) (平均 11.7%)、*Achnanthes linearis* (同 6.9%)、*Eunotia pectinalis* var. *minor* (同 6.1%) が比較的多く出現し、B 2 亜帯では、*Achnanthes linearis* (平均 19.4%)、*Cymbella turgidula* (同 11.3%) の 2 種が高率で出現した。

pH については、B 1 亜帯、B 2 亜帯とも不定性種 (平均 54.8%) が多く認められ、真～好アルカリ性種 (平均 33.3%) がそれにつづいた。水流性については、両亜帯において、70% 前後が不定性種によって占められた。生態性については、両亜帯とも付着生種が優占するが、B 1 亜帯は B 2 亜帯よりも底生種の出現率が高く (B 1 亜帯は平均 31.4%、B 2 亜帯は平均 10.8%)、その分 B 1 亜帯では付着生種の割合が低くなっている。なお陸生珪藻の出現率は、B 1 亜帯 (平均 11.6%) において高く、B 2 亜帯 (平均 2.4%) では減少している。なお、試料 8 (B 1 亜帯) では、浮遊生種の *Aulacosila ambigua* (18%) に加え、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia subcapitata*、*Navicula mutica*、*Navicula contenta* などの陸生珪藻が合計 18% 出現した。

C帯 (C 1 亜帯：試料 15～17、C 2 亜帯：試料 18～25)

含有殻数は上位にむかうにつれて減少し、試料 15 では 4.0×10^4 個/g (C 1 亜帯)、試料 24 では 5.6×10^3 個/g (C 2 亜帯) と極めて少なくなる。試料 24 では、珪藻殻の保存が悪く検鏡時に同定が困難であったため、分析結果が欠落している。比較的多く認められた種としては、C 1 亜帯では、pH・水流性とも不定性で付着生種の *Achnanthes linearis* (平均 12.1%)、同じく *Cymbella turgidula* (同 8.2%) などであった。pH については、C 1 亜帯では不定性種が平均 52% を占め、水流性については両亜帯とも B 帯同様不定性種が多数を占めた。生態性については、C 1 亜帯では付着生種が平均 77.3%、試料 15 では底生種が 33% と高い出現率を示した。C 2 亜帯になると付着生種が減少しその分底生種 (平均 53%) が増加している。また、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia subcapitata*、*Navicula mutica*、*Amphora montana* などの陸生珪藻が試料 24、25 を除く C 帯全体を通じて高率 (平均 38.6%) で出現するのが特徴といえる。

IV. 考察

以上の結果より推定される環濠の水質について述べる。

環濠内に堆積した地層最下部 (A 帯：標高 +2.25m 付近) では底生種が平均 58.7% を占め、水深の浅い環境だった可能性が考えられる。注目すべきこととして、試料 3 において汽水生種の *Cyclotella meneghiniana*、塩気のある水域を好み富栄養型の *Navicula capitata* がそれぞれ 20% 前後と高い出現率を示したことであろう。その他に本試料からは汽水～海水生種の *Cocconeis scutellum*、*Navicula peregrina*、*Nitzschia tryblionella* などが出現し、汽水～海水生種は合計 30.5% に達した。このことより、試料 3 は海水の影響を強く受けた感潮域に堆積した地層であることが考えられる。しかし、近年明らかに淡水と考えられる水域に有機物等による人為的な汚染が進行し、富栄養化した場合に汽水

～海水生種が増殖するケース（長野県野尻湖、滋賀県琵琶湖、長野県諏訪湖など）を筆者らは観察しており、月縄手遺跡の環濠内の水質もこのようなものであった可能性が推定される。なお環濠・溝中の堆積物に汽水～海水生種が認められた例としては、愛知県朝日遺跡（森ほか、1992）、大阪府池上曾根遺跡（渡辺ほか、1990）の報告が知られている。

環濠内の下部から中部（B 1 亜帯から B 2 亜帯：標高+2.3～2.9m付近）では、*Achnanthes linearis*, *Cymbella* 属などの付着生種（平均76.2%）が大部分を占め、下部から中部にかけて流水的な環境のもとで堆積したものと考えられる。

環濠最上部（C 1 亜帯：標高+3.0～3.3m付近）から古墳時代前期の遺物包含層（C 2 亜帯：標高+3.5m付近）では、陸生珪藻が著しく増加し、水深の浅い環境で堆積したことを推定させる。あるいは、環濠が人為的な営力で急速に埋められた状況を反映している可能性も考えられる。

（森 勇一・小澤美紀）

謝 辞

珪藻遺骸の抽出作業には、服部恵子・中村明実氏にご協力頂いた。以上の方々に厚くお礼申し上げます。

文 献

- Cleve-Euler, A. (1952), Die Diatomeen von Schweden und Finnland. Part. 5. K. svenska Vetensk. -Akad. Handl., 3,3:1-153.
- Hustedt, F (1930), Bacillariophyta, Die Süßwasser Flora Mitteleuropas, 10. G. Fischer. Jena, 466p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986・1988), Bacillariophyceae. Teil 1, Teil 2, Süßwasserflora von Mitteleuropa, 876p., 596p.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1990b), 清洲城下町遺跡の中堀から検出された珪藻遺骸（付・昆虫遺体）, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第17集）, 清洲城下町遺跡報告書, 103-108.
- 森 勇一・前田弘子・伊藤隆彦 (1992), 珪藻および昆虫化石から得られた朝日遺跡の古環境変遷, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書（第31集）, 朝日遺跡II（自然科学編）, 71-131.
- 渡辺正巳・古谷正和 (1990), 花粉・珪藻・火山灰分析, 史跡池上曾根遺跡発掘調査概要, 71-82. 大阪府教育委員会.

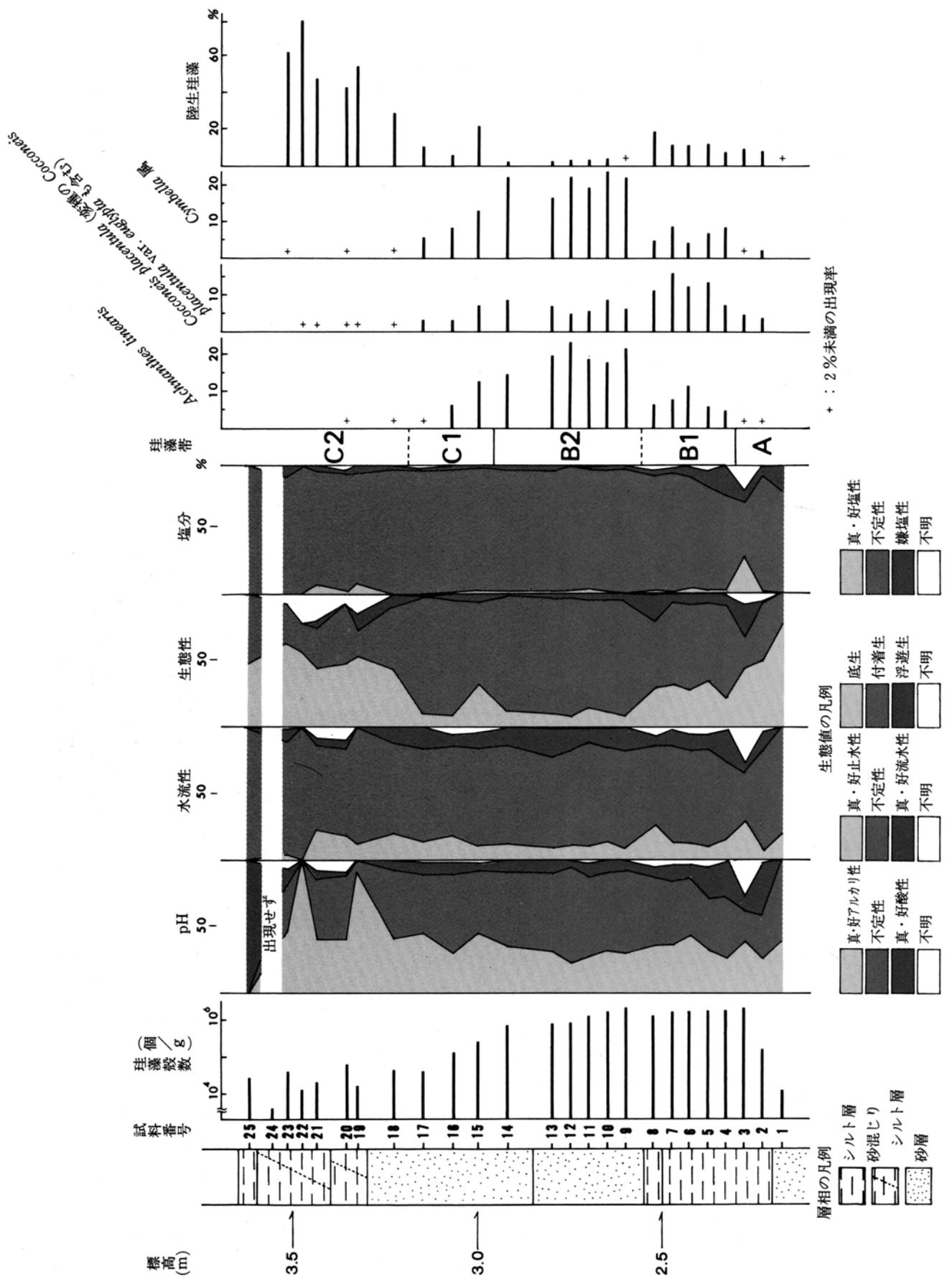
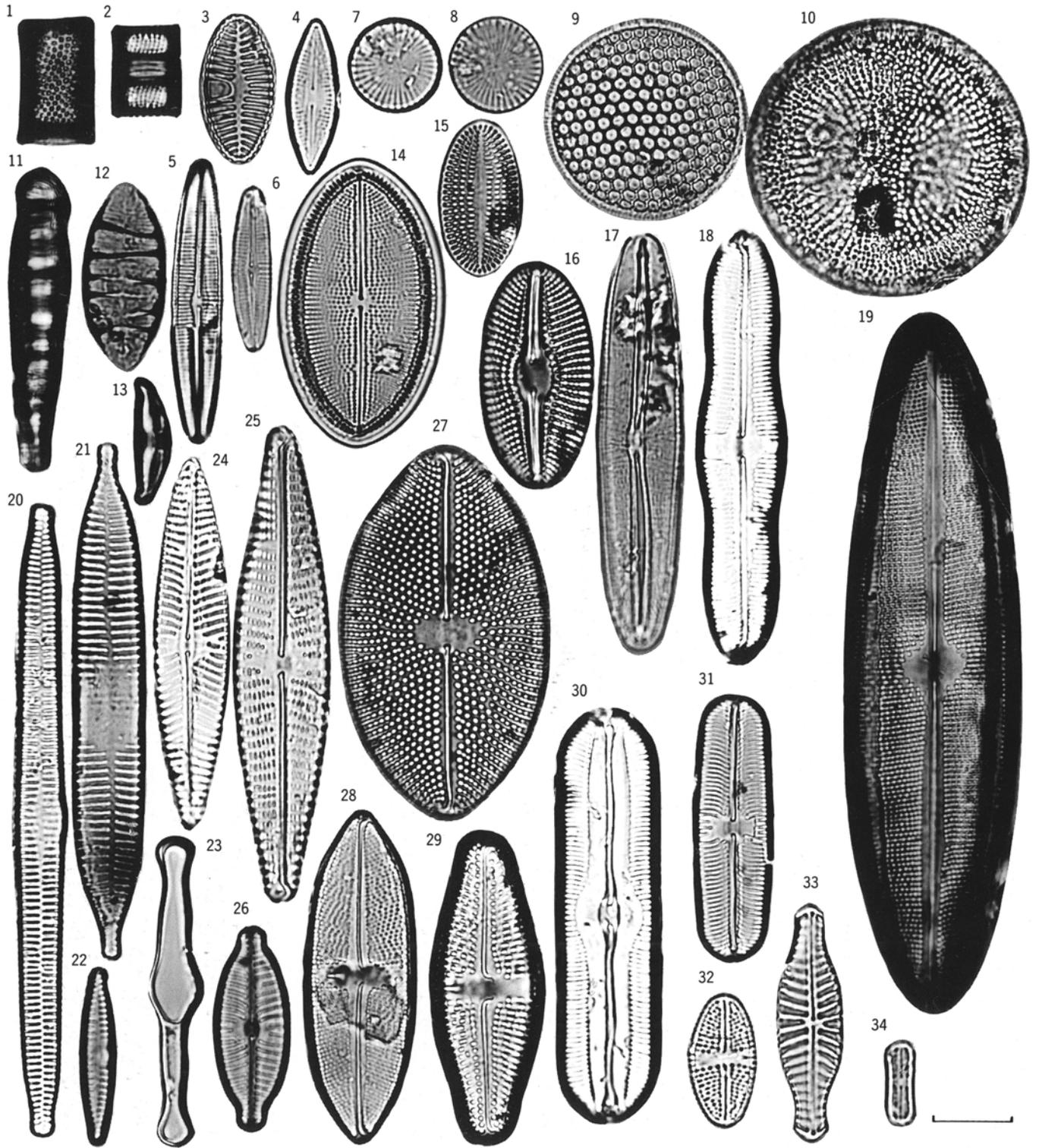


図50 月縄手遺跡の珪藻遺骸分析結果

Species	Ecological Value			Sample																									TOTAL	
	pH	CUR	RECOL	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25		
129 <i>Navicula viridula</i> (Kütz.) Ehrenberg	Alph	R-ph	Bent	Ind	.	1	.	1	.	.	1	3
130 <i>Neidium affine</i> var. <i>amphirhynchus</i> (Ehr.) Cleve	Ind	Ind	Bent	Ind	.	.	1	.	1	.	.	2	4	
131 <i>Neidium affine</i> var. <i>longiceps</i> (Greg.) Cleve	Ind	Liph	Bent	Ind	.	.	2	1	2	.	.	.	1	6	
132 <i>Neidium bisulcatum</i> (Lagerstedt) Cleve	?	?	Bent	?	.	1	.	.	3	.	1	6	.	2	13	
133 <i>Neidium dubium</i> (Ehr.) Cleve	Ind	Liph	Bent	Ind	1	1	
134 <i>Neidium hitchcockii</i> (Ehr.) Cleve	Ind	Ind	Bent	Ind	1	.	.	.	1	
135 <i>Neidium iridis</i> (Ehr.) Cleve	Ind	Liph	Bent	Hpho	1	.	1	4	3	.	4	.	1	2	1	1	1	1	1	21	
136 <i>Neidium iridis</i> var. <i>amphigomphus</i> (Ehr.) Mayer	Ind	Liph	Bent	Ind	.	.	1	1	
137 <i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Albi	Ind	Bent	Ind	.	.	.	1	.	1	1	2	2	.	.	1	8	
138 <i>Nitzschia frustulum</i> Kützing	Alph	Ind	Bent	Ind	1	.	1	1	19	.	.	2	1	1	26	
139 <i>Nitzschia hantzschiana</i> Rabenhorst	Ind	Ind	Bent	Ind	1	
140 <i>Nitzschia holsatica</i> Hustedt	?	?	Best	Ind	3	1	4	
141 <i>Nitzschia obtusa</i> W. Smith	Alph	?	Bent	Meha	.	.	1	1	1	5	.	3	.	1	.	.	1	2	15	
142 <i>Nitzschia palea</i> (Kütz.) W. Smith	Ind	Ind	Bent	Ind	1	1	
143 <i>Nitzschia parvula</i> W. Smith	Ind	Ind	Bent	Ind	1	.	1	3	
144 <i>Nitzschia romana</i> Grunow	Alph	Ind	Bent	Ind	1	1	
145 <i>Nitzschia tryblionella</i> Hantzsch	?	?	Bent	?	.	.	5	.	1	6	
146 <i>Pinnularia acrosphaeria</i> Rabenhorst	Ind	Ind	Bent	Ind	.	1	.	.	1	.	1	3	
147 <i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	Ind	.	.	1	.	1	1	.	1	1	1	6	
148 <i>Pinnularia braunii</i> (Grun.) Cleve	Acph	Ind	Bent	?	3	3	
149 <i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Acph	Ind	Bent	Ind	.	.	.	1	.	.	1	2	
150 <i>Pinnularia dactylus</i> Ehrenberg	Acph	Ind	Bent	Ind	.	1	1	2	
151 <i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Acph	Ind	Bent	Ind	.	19	3	1	5	.	2	.	1	.	.	1	32	
152 <i>Pinnularia hemiptera</i> (Kütz.) Cleve	Acph	Libi	Bent	Ind	1	1	
153 <i>Pinnularia intermedia</i> (Lagerstedt) Cleve	Ind	Ind	Bent	Ind	1	1	
154 <i>Pinnularia interrupta</i> W. Smith	Ind	Ind	Bent	Ind	.	3	.	2	7	2	1	15	
155 <i>Pinnularia karelica</i> Cleve	Ind	Ind	Bent	Ind	1	1	
156 <i>Pinnularia leptosoma</i> (Grun.) Cleve	Acph	Ind	Bent	Ind	.	1	1	2	
157 <i>Pinnularia lundii</i> Hustedt	Ind	Ind	Bent	Ind	2	2	
158 <i>Pinnularia major</i> (Kütz.) Rabenhorst	Acph	Ind	Bent	Ind	.	1	1	.	2	4	
159 <i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve	Acph	Ind	Bent	Ind	.	11	5	3	5	1	6	1	1	2	2	2	3	.	.	1	1	44	
160 <i>Pinnularia stomatophora</i> Grunow	Acph	Ind	Bent	Ind	.	1	1	
161 <i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ind	Libi	Bent	Ind	.	3	5	8	6	5	8	10	.	.	1	2	.	12	1	.	2	.	5	2	.	1	.	.	71	
162 <i>Pinnularia subsolaris</i> Grunow	Acph	Ind	Bent	Ind	1	.	2	3	
163 <i>Pinnularia viridis</i> (Nitzsch) Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	Ind	.	2	3	1	1	1	4	2	.	.	1	1	1	17	
164 <i>Rhoicosphenia curvata</i> (Kütz.) Grunow	Alph	Ind	Epip	Haph	1	1	2	4	
165 <i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.) O. Müller	Alph	Ind	Epip	Haph	1	.	.	3	1	.	.	1	.	Epip	6	
166 <i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Müller	Alph	Ind	Epip	Meha	.	.	1	.	1	.	1	1	5	
167 <i>Rhopalodia musculus</i> (Kütz.) O. Müller	Alph	Ind	Epip	Haph	.	.	1	1	
168 <i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	Ind	.	1	.	.	2	.	1	.	1	1	1	.	.	.	7	
169 <i>Stauroneis kriegerii</i> Patrick	Ind	Ind	Bent	Ind	1	1	
170 <i>Stauroneis laenburgiana</i> Hustedt	Ind	Ind	Bent	Ind	1	1	
171 <i>Stauroneis legumen</i> Hustedt	Ind	Ind	Bent	Ind	1	1	
172 <i>Stauroneis parvula</i> Grunow	Ind	Ind	Bent	Ind	.	.	.	1	1	
173 <i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	Ind	.	1	6	1	2	.	1	.	.	1	13	
174 <i>Stauroneis smithii</i> Grunow	Ind	R-ph	Bent	Ind	2	2	
175 <i>Surirella ovata</i> Kützing	Alph	Ind	Bent	Haph	2	1	.	.	1	4	
176 <i>Surirella tenera</i> Gregory	?	?	Bent	?	1	.	.	.	1	2	
177 <i>Synedra affinis</i> var. <i>minuta</i>	Ind	Ind	Epip	Ind	1	1	
178 <i>Synedra inaequalis</i> H. Kobayasi	Ind	Ind	Epip	Ind	4	2	3	3	4	2	1	19	
179 <i>Synedra rumpens</i> Kützing	Ind	Liph	Epip	Ind	2	2	.	1	.	1	1	7	
180 <i>Synedra ulna</i> Ehrenberg	Alph	Ind	Epip	Ind	1	6	3	8	6	7	11	9	7	10	10	3	7	6	3	3	3	3	2	108	
181 <i>Synedra vaucheriae</i> Kützing	Alph	R-ph	Epip	Ind	.	.	.	2	4	8	2	1	11	4	3	3	4	5	1	1	3	1	53	
182 <i>Tabellaria fenestrata</i> (Lyng.) Kützing	Acph	Ind	Epip	Hpho	.	.	.	1	.	.	2	.	.	.	1	4	
183 <i>Tebellaria flocculosa</i> (Roth) Kützing	Ind	Ind	Epip	Ind	.	.	.	2	.	3	1	.	.	.	2	.	1	.	1	10	
184 <i>Thalassiosira bramauptriae</i> (Ehr.) Hakanton Locker				Euha	.	.	.	1	3	.	1	1	6	
TOTAL					5	135	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	200	70	60	43	15	43	17	5	23	0	2	3,081

生態値凡例

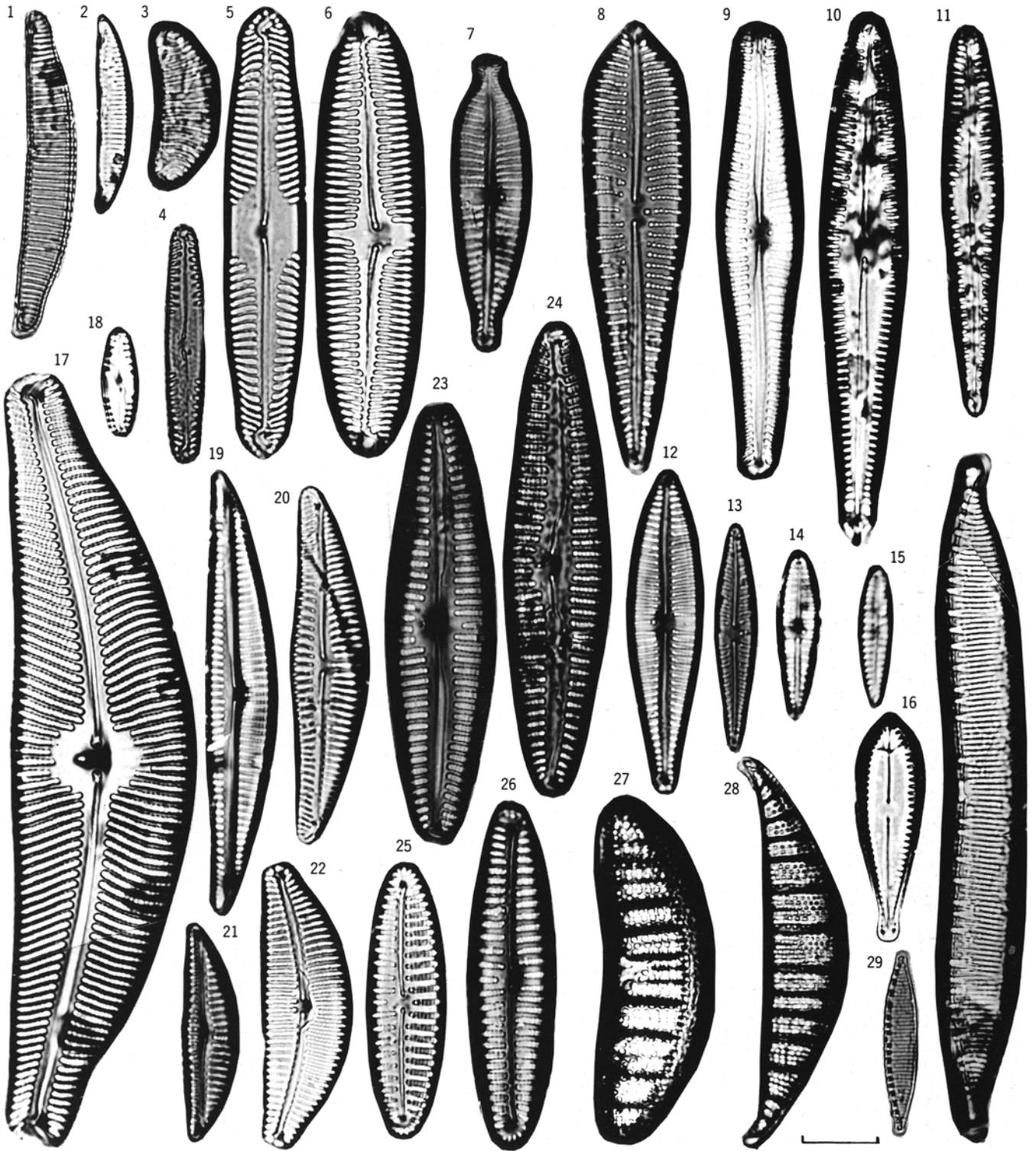
pH (pH spectra)	水流性 (Current spectra)	生態性 (Ecology)	塩分 (Halobion spectra)
Albi : Alkalibiontic forms (真アルカリ性種)	Libi : Limnobiontic forms (真止水性種)	Bent : Benthonic forms (底生種)	Euha : Euhalobous forms (真塩性種)
Alph : Alkaliphilous forms (好アルカリ性種)	Liph : Limnophilous forms (好止水性種)	Epip : Epiphytic forms (付着生種)	Meha : Mesohalobous forms (中塩性種)
Ind : Indifferent forms (不定性種)	Ind : Indifferent forms (不定性種)	? : Unknown (不明種)	Haph : Halophilous forms (好塩性種)
Acph : Acidophilous forms (好酸性種)	R-ph : Rheophilous forms (好流水性種)		Ind : Indifferent forms (不定性種)
Acbi : Acidobiontic forms (真酸性種)	R-bi : Rheobiontic forms (真流水性種)		Hpho : Halophobous forms (嫌塩性種)
? : Unknown (不明種)	? : Unknown (不明種)		? : Unknown (不明種)



図版 I 月繩手遺跡の珪藻遺骸の顕微鏡写真 (1)

- | | |
|---|---|
| 1. <i>Aulacosila ambigua</i> (Grun.) Simonsen | 18. <i>Caloneis silicula</i> (Ehr.) Cleve |
| 2. <i>Aulacosila distans</i> (Ehr.) Simonsen | 19. <i>Neidium iridis</i> (Ehr.) Cleve |
| 3. <i>Achmanthes lanceolata</i> (Bréb.) Grunow | 20. <i>Ceratoneis arcus</i> Kützing |
| 4. <i>Achmanthes lapidosa</i> Krasske | 21. <i>Synedra inaequalis</i> H. Kobayasi |
| 5. <i>Achmanthes minutissima</i> Kützing | 22. <i>Synedra rumpens</i> Kützing |
| 6. <i>Achmanthes linearis</i> W. Smith | 23. <i>Tabellaria flocculosa</i> (Roth) Kützing |
| 7. <i>Cyclotella meneghiniana</i> Kützing | 24. <i>Navicula oppugnata</i> Hustedt |
| 8. <i>Cyclotella meneghiniana</i> Kützing | 25. <i>Navicula peregrina</i> (Ehr.) Kützing |
| 9. <i>Coscinodiscus</i> sp. | 26. <i>Navicula elginensis</i> (Greg.) Ralfs |
| 10. <i>Thalassiosira bramaputrae</i> (Ehr.) Hakanton Locker | 27. <i>Navicula marina</i> Ralfs |
| 11. <i>Meridion circulare</i> Agardh | 28. <i>Navicula goeppertiana</i> (Bleisch) H. L. Smith |
| 12. <i>Diatoma vulgare</i> Bory | 29. <i>Navicula goeppertiana</i> (Bleisch) H. L. Smith |
| 13. <i>Amphora montana</i> Krasske | 30. <i>Navicula americana</i> Ehrenberg |
| 14. <i>Cocconeis placentula</i> Ehrenberg | 31. <i>Navicula pupula</i> var. <i>rectangularis</i> (Greg.) Grunow |
| 15. <i>Cocconeis diminuta</i> Pantsek | 32. <i>Navicula mutica</i> Kützing |
| 16. <i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve | 33. <i>Navicula capitata</i> Ehrenber |
| 17. <i>Frustulia vulgaris</i> Thwaites | 34. <i>Navicula contenta</i> Grunow |

(バースケールは10μm)



図版II 月繩手遺跡の珪藻遺骸の顕微鏡写真(2)

- | | |
|---|--|
| 1. <i>Eunotia pectinalis</i> (Kütz.) Rabenhorst | 16. <i>Gomphonema linglatum</i> . Hustedt |
| 2. <i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kütz.) Rabenhorst | 17. <i>Cymbella tumida</i> (Bréb.) Van. Heurck |
| 3. <i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow | 18. <i>Cymbella sinuata</i> Gregory |
| 4. <i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory | 19. <i>Cymbella gracilis</i> (Rabh.) Cleve |
| 5. <i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve | 20. <i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch |
| 6. <i>Pinnularia viridis</i> (Nitzsch) Ehrenberg | 21. <i>Cymbella minuta</i> Hilse |
| 7. <i>Gomphonema angustatum</i> (Kütz.) Rabenhorst | 22. <i>Cymbella turgidula</i> Grunow |
| 8. <i>Gomphonema augur</i> var. <i>turris</i> (Ehr.) Lange-Bertalot | 23. <i>Cymbella leptoceros</i> (Ehr.) Kützing |
| 9. <i>Gomphonema longiceps</i> Ehrenberg | 24. <i>Cymbella leptoceros</i> (Ehr.) Kützing |
| 10. <i>Gomphonema clevei</i> var. <i>inaequilongum</i> H. Kobayasi | 25. <i>Cymbella lacustris</i> (Agardh) Cleve |
| 11. <i>Gomphonema sumatrense</i> Fricke | 26. <i>Cymbella lacustris</i> (Agardh) Cleve |
| 12. <i>Gomphonema parvulum</i> Kützing | 27. <i>Epithemia zebra</i> (Ehr.) Kützing |
| 13. <i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg | 28. <i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Müller |
| 14. <i>Gomphonema exiguum</i> Kützing | 29. <i>Nitzschia frustulum</i> Kützing |
| 15. <i>Gomphonema exiguum</i> Kützing | 30. <i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow |

(バースケールは10μm)

2. 月縄手遺跡における弥生時代前期の花粉化石

I. はじめに

月縄手遺跡は、名古屋市北区比良地内に位置する弥生時代前期から古墳時代にかけての複合遺跡である。今回本遺跡の古植生を復元することを目的として、花粉分析を実施した。

なお、昭和62年度に隣接する地域の発掘調査が行われ、その際に古墳時代の遺物包含層の花粉分析が行われている（森，1990）。

II. 分析試料および分析方法

分析試料は、珪藻分析と同じ92 Ca 区から採取した。試料採取位置および模式柱状図を図51・52に示す。このうち、試料番号3・5・9・10は弥生時代前期の溝の埋土であり、試料番号25は古墳時代前期の遺物包含層である。

分析方法は以下の通りである。約20gの試料を10% KOH 溶液処理（1晩）→60メッシュの篩に通し粗粒物質を除去→水洗→10% KOH 溶液を加え湯煎（4分間）→傾斜法により細粒物質を除去→ZnCl₂溶液による比重分離（1500回転/分の遠心分離を2回繰り返す）→HF 溶液処理（1晩）で鉱物片を除去→水洗→アセトリシス処理（40秒）→水洗→グリセリン・ゼリーによる封入。

検鏡は400倍で、木本花粉が200個体以上に達するまで行った。出現率の算出は、木本花粉については木本花粉の総数を基数とし、草本花粉は木本花粉と草本花粉の和を基数として行った。

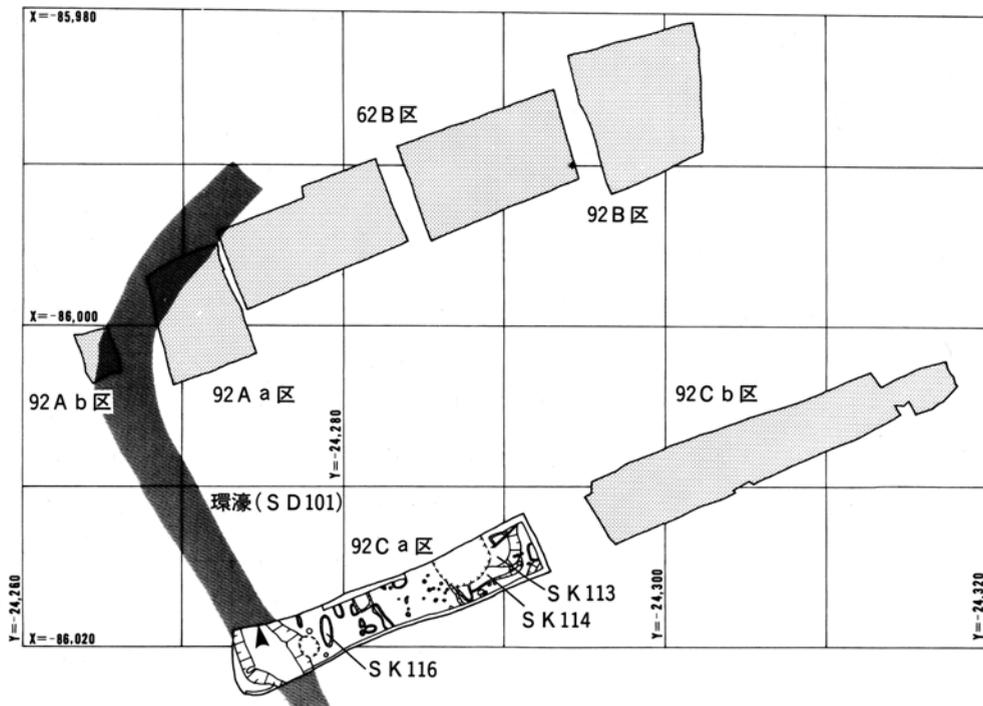


図51 分析試料採取地点（◀印）

III. 分析結果

分析を行った25試料のうち大部分の試料では花粉化石の保存が悪く、木本花粉を200個体以上検出できたものはわずか6試料であった。分析結果の概要を図53に示した。

これらのうち下位に位置する5試料については、針葉樹では *Pinus* がほぼ安定して出現した。広葉樹では *Lepidobalanus* や *Castanopsis* が多く認められた。草本花粉では Gramineae が優勢に出現し、*Artemisia*, *Chenopodiaceae* なども多く認められた。

また、試料3においては *Salix* が29.0%と高い出現率を示し、試料9では Taxaceae-Cupressaceae (21.2%) および *Cryptomeria* (12.4%) が高い出現率を示した。最上部の試料25においては、針葉樹で Taxaceae-Cupressaceae (12.3%), *Cryptomeria* (11.8%) が多く出現する。広葉樹では *Cyclobalanopsis* (23.5%) と最も高い出現率を示し、次いで *Lepidobalanus* (12.7%) が多く認められた。草本花粉では Gramineae (30%) が多く出現した。

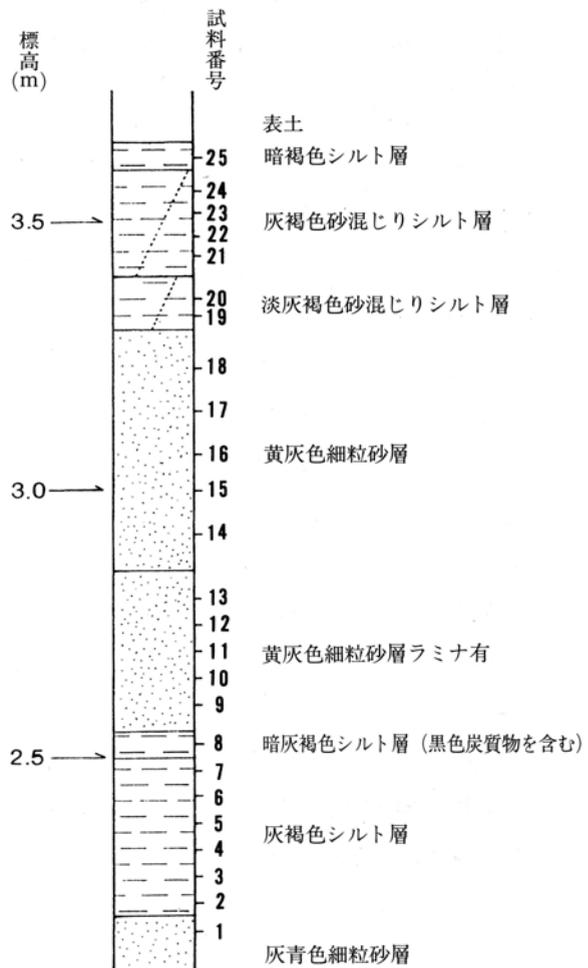


図52 分析試料採取地点における地質柱状図

IV. 古植生の復元

分析を行った試料では、古植生の変遷をするに十分な資料を得ることはできなかった。乏しい情報ながら、試料番号3・5・9・10の分析結果より、弥生時代前期の頃には *Lepidobalanus* (コナラ亜属) および *Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属) からなる広葉樹林が存在し、*Artemisia* (ヨモギ属) や Gramineae (イネ科) などの植物が繁茂するような開けた土地が存在していたことが推定される。

古墳時代前期の遺物包含層(試料番号25)では、*Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属) が、*Lepidobalanus* (コナラ亜属) より高率に出現した。また草本花粉では Gramineae (イネ科) がもっとも高い出現率を示し、ついで *Artemisia* (ヨモギ属) が出現している。また、昭和62年度の分析結果では、*Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属) が10%、*Lepidobalanus* (コナラ亜属) が7%、草本花粉では *Artemisia* (ヨモギ属) 9%、Gramineae (イネ科) が27%出現しており、今回の分析結果とよく似た傾向を示している。また勝川遺跡や朝日遺跡の花粉分析結果においても同様に、古墳時代では *Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属) が *Lepidobalanus* (コナラ亜属) より多く出現する傾向が認められる(楯ほか, 1993)。また、以上のことより、古墳時代前期の頃の気候は、弥生時代前期と比べてやや温暖であったものと推定される。

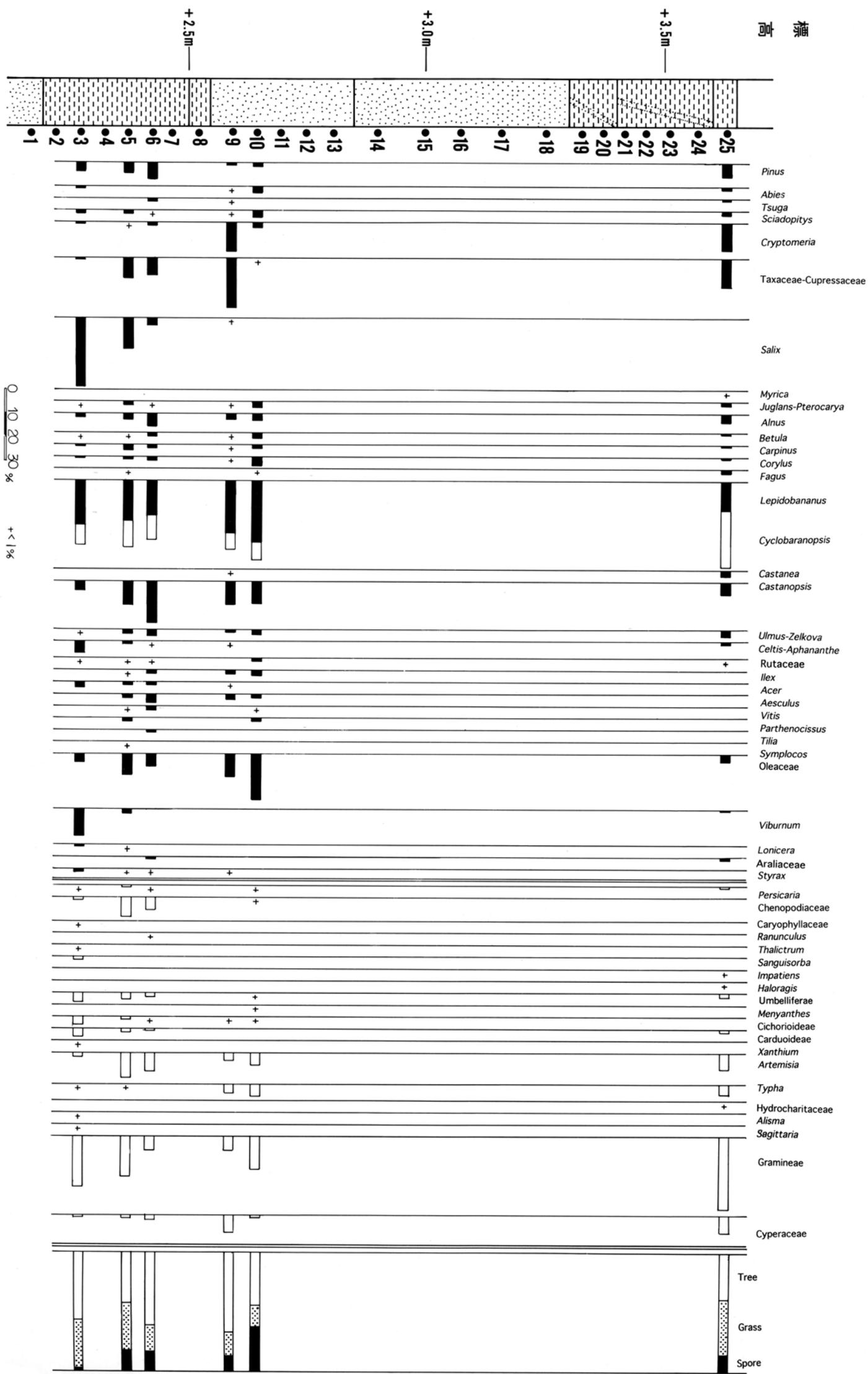


図53 月繩手遺跡の花粉分析結果

V. 今後の課題

今回の分析では花粉化石の保存が悪く、月縄手遺跡における古植生の変遷を考察するには至らなかった。しかしこれまで濃尾平野周辺地域においては、弥生時代前期の花粉分析試料が乏しく、古植生の変遷をたどることを困難にしていた。今後は弥生時代前期を中心に、この地域の花粉分析のデータを積極的に蓄積してゆきたい。
(堀木真美子・吉野道彦・萬谷さつき)

謝 辞

本論をまとめるにあたり、愛知県立明和高等学校教諭 森 勇一氏には、多大なご協力を頂いた。記して感謝の意を表します。

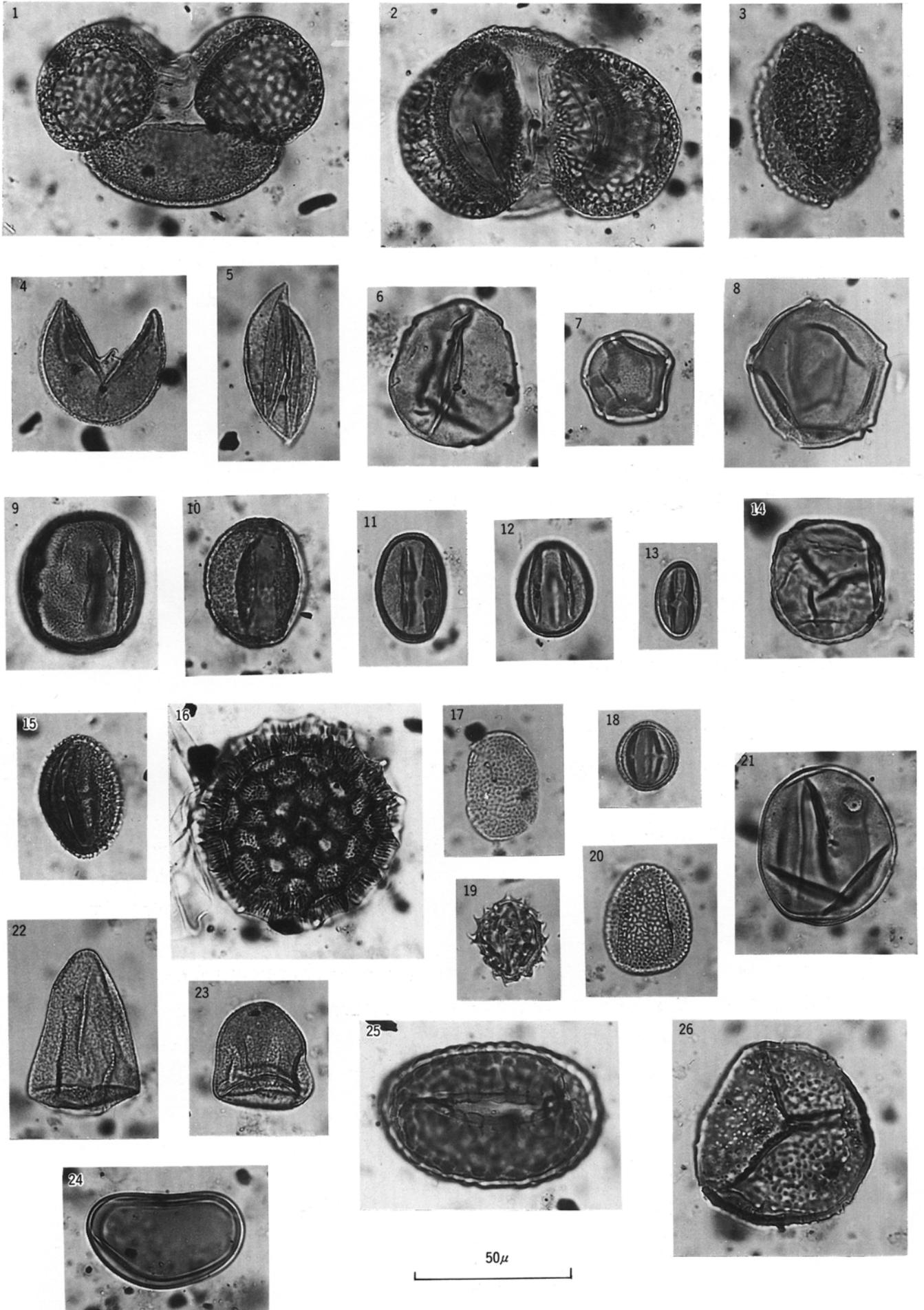
参考文献

- 森 勇一 (1990) 月縄手遺跡包含層の堆積環境について。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第12集「月縄手遺跡・貴生町遺跡」, 36-40.
- 堀真美子・中垣内薫・服部俊之 (1993) 自然科学データの活用その1—花粉分析と樹種同定—。(財)愛知県埋蔵文化財センター年報 平成4年度, 141-153.

図版Ⅲ 月縄手遺跡出土の花粉化石

- | | | | |
|--------------------------|----------------------------|-----------------------|----------------|
| 1. <i>Pinus</i> | 8. <i>Carpinus</i> | 15. Rutaceae | 22. Cyperaceae |
| 2. <i>Pinus</i> | 9. <i>Fagus</i> | 16. <i>Persicaria</i> | 23. Cyperaceae |
| 3. <i>Sciadopitys</i> | 10. <i>Lepidobalanus</i> | 17. <i>Imapatiens</i> | 24. Spore |
| 4. <i>Cryptomeria</i> | 11. <i>Cyclobalanopsis</i> | 18. <i>Artemisia</i> | 25. Spore |
| 5. Taxaceae-Cupressaceae | 12. <i>Cyclobalanopsis</i> | 19. Carduoideae | 26. Spore |
| 6. <i>Pterocarya</i> | 13. <i>Castanopsis</i> | 20. <i>Typha</i> | |
| 7. <i>Alnus</i> | 14. <i>Ulmus-Zelkova</i> | 21. Gramineae | |

图版 III



3. 愛知県月縄手遺跡における植物珪酸体分析

I. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定、および古植生・古環境の推定などに応用される (杉山、1987)。今回、古環境研究所に依頼して、月縄手遺跡の植物珪酸体分析を行った。分析方法および分析結果は古環境研究所の報告書を要約したものである。

II. 試料および分析方法

調査地点は、92B区、92A b区の2地点である。試料は、古墳時代および弥生時代前期とされる土層を中心に、計37が採取された。

植物珪酸体の抽出と定量は、プラトン・オパール定量分析法 (藤原、1976) をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料の絶乾 (105℃・24時間)
- (2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加 (直径約40 μm 、約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- (5) 沈底法による微粒子 (20 μm 以下) 除去、乾燥
- (6) 封入剤 (オイキット) 中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5} b) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族なススキの値を用いた。その値はそれぞれ2.94 (種実量は1.03)、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ族は0.75である。

III. 分析結果および考察

分析結果を表2および図54・55に示す。

1. 稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（古環境研究所）。また、その層に植物珪酸体密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

(1) 92B区

最下位の黄褐色中～粗粒砂層から古墳時代とされる黒灰色シルト屈までの各層準について分析を行った。その結果、古墳時代とされる黒灰色シルト層（試料No.25～No.28）および弥生時代前期とされる暗灰色シルト層の下部（No.15）でイネの植物珪酸体が検出された（図54）。

このうち前者では密度が2,000個/g程度と比較的低い値であるが、わずかなピークが認められることなら、土層から後代の植物珪酸体が混入していた可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。後者でも密度が700個/gと低い値であるが、直上の灰色シルト～極細粒砂層ではまったく検出されないことから、上層から後代の植物珪酸体が混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

(2) 92A b区

最下位の灰褐色シルト層から盛土直下の黄灰色砂質シルト層までの各層準について分析を行った。その結果、盛土直下の黄灰色砂質シルト層（No.9）、古墳時代包含層の黒灰色砂質シルト層（No.8）およびその直下の暗灰色砂質シルト層（No.7）でイネの植物珪酸体が検出された（図55）。

このうち、盛土直下の黄灰色砂質シルト層では密度が6,100個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。古墳時代包含層の黒灰色砂質シルト層では密度が2,700個/gと比較的低い値であり、その直下の暗灰色砂質シルト層でも1,900個/gと低い値である。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層などから植物珪酸体が混入した可能性も否定できない。

以上のことから、本遺跡では弥生時代前期には調査区の一部で稲作が開始されていたものと推定される。その後、稲作は河川の影響など何らかの原因で一時中断されるが、古墳時代には調査区の比較的広い範囲で再開されたものと推定される。なお全体的にイネの植物珪酸体密度が低い値であるが、その原因として、1) 稲作が行われていた時期が短かったこと、2) 洪水などによって耕作地が流出したこと、3) 土層の堆積速度が速かったこと、4) 稲葉の大部分が水田外に持ち出されていたこと、5) 採取地点が畦畔など耕作地以外であったこと、6) 上層もしくは近辺の水田からの混入によるものであることなどが考えられる。ここでは、土層の堆積状況などから河川の影響が認められることから、2) および3) の要因が大きかったものと考えられる。

2. イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、キビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる）、オヒシバ属（シコクエビが含まれる）、トウモロコシ属、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがあるが、本遺跡の試料からは

これらの分類群は検出されなかった。イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。
(堀木真美子)

表2 月繩手遺跡の植物珪酸体分析結果

分類群	92B地点											92B地点											92A b地点																																												
	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1																					
イネ科																																																																			
イネ	5	20	12	18												7												61	27	19																																					
イネ糠殻(穎の表皮細胞)	6																																																																		
ヨシ属	60	26	41	24												8	6	12	20	12	8												8	15	8												20	34	6	11	12	24	14	7													
ウシクサ族(ススキ属など)	55	39	41	42	7												19	64	48	26	37												8	8												7	34	74	17	54	65	34	54	23													
キビ族型	7 7 8																																																																		
ウシクサ族型	131	85	70	65	15	11	13												12	84	60	39	37	15												8	8	8	8	8	15												61	75	25	44	48	30	75	20	51						
ウシクサ族型(大型)	6																																																																		
くさび型	6																																																																		
タケ亜科																																																																			
ネザサ節型	27	33	18	18	15	42	54	67	15	45	87	19	30	39	6	23	30	23	53	23	23	38	23	53	60	8	8	38												67	75	43	55	60	427	109	60	23																			
クマザサ属型	5	13	12	8	7	11	7	8												19	6												8	8	23	15												8	15												7	12	6	6	12	14	29
メダケ節型	15 19 6 7																																																																		
未分類等	22	46	47	42	23	56	27	67	30	38	44	90	36	52	31	8	30	38	8	15	8	8	8	23	16	8												88	21	31	33	30	290	88	13	11																					
その他のイネ科																																																																			
表皮毛起源	27	13	23	30												7	6	6	12												8												8	7	27	25	6	12	6	20	7	6															
棒状珪酸体	191	124	147	261	15	35	54	34	45	68	50	302	120	59	25	15	8	15	8	8	8	15	23	8	8												121	137	118	154	125	379	245	208	51																						
茎部起源	33	20	24	8	21												15	15	6	6	7	6												8	8												15	15												20	14	12	24	7	27		
地下茎部起源	7																																																																		
未分類等	279	334	217	368	38	202	225	276	45	98	261	347	288	209	93	61	8	23	38	15	30	30	8	8	16	15	8												330	342	310	292	250	575	469	389	131																				
カヤツリグサ科	8																																																																		
樹木起源																																																																			
はめ絵パズル状(広葉樹)	6																																																																		
(海綿骨針)	6 6																																																																		
植物珪酸体総数	837	759	634	896	121	355	402	478	150	285	504	965	631	463	249	129	53	98	181	53	60	90	98	113	90	57	53	113	801	794	683	628	601	1184	1107	797	326																														

参考文献

杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点, 植生史研究, 第2号, 27-37.
 藤原宏志 (1976 a) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物珪酸体標本と定量分析法—, 考古学
 と自然科学, 9, 15-29.
 藤原宏志 (1976 b) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥
 生時代)水田におけるイネ (*O. sativa* L.) 生産総量の推定—, 考古学と自然科学, 12, 29-41.
 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—,
 考古学と自然科学, 17, 73-85.

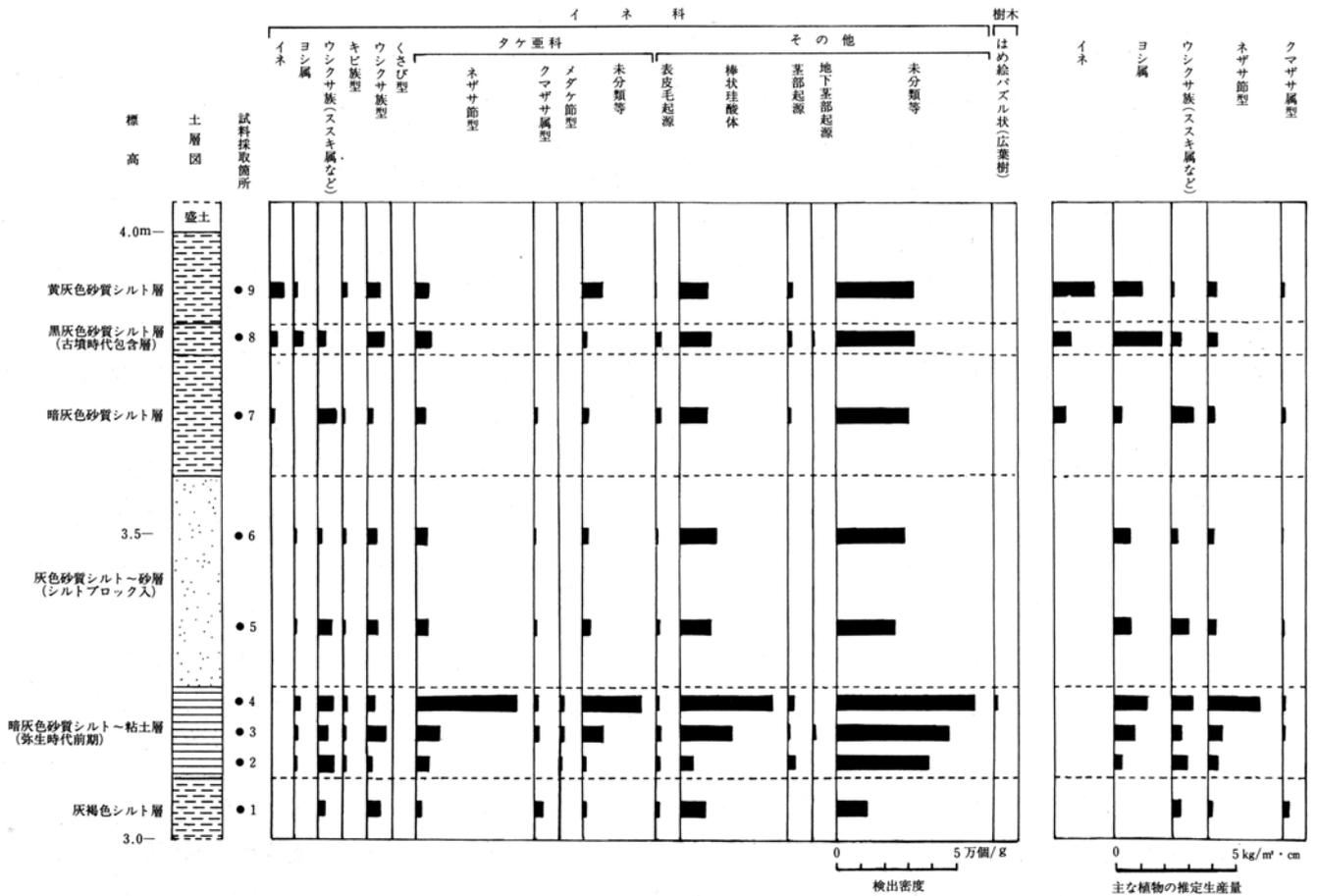


図54 月縄手遺跡92A b地点における植物珪酸体分析結果

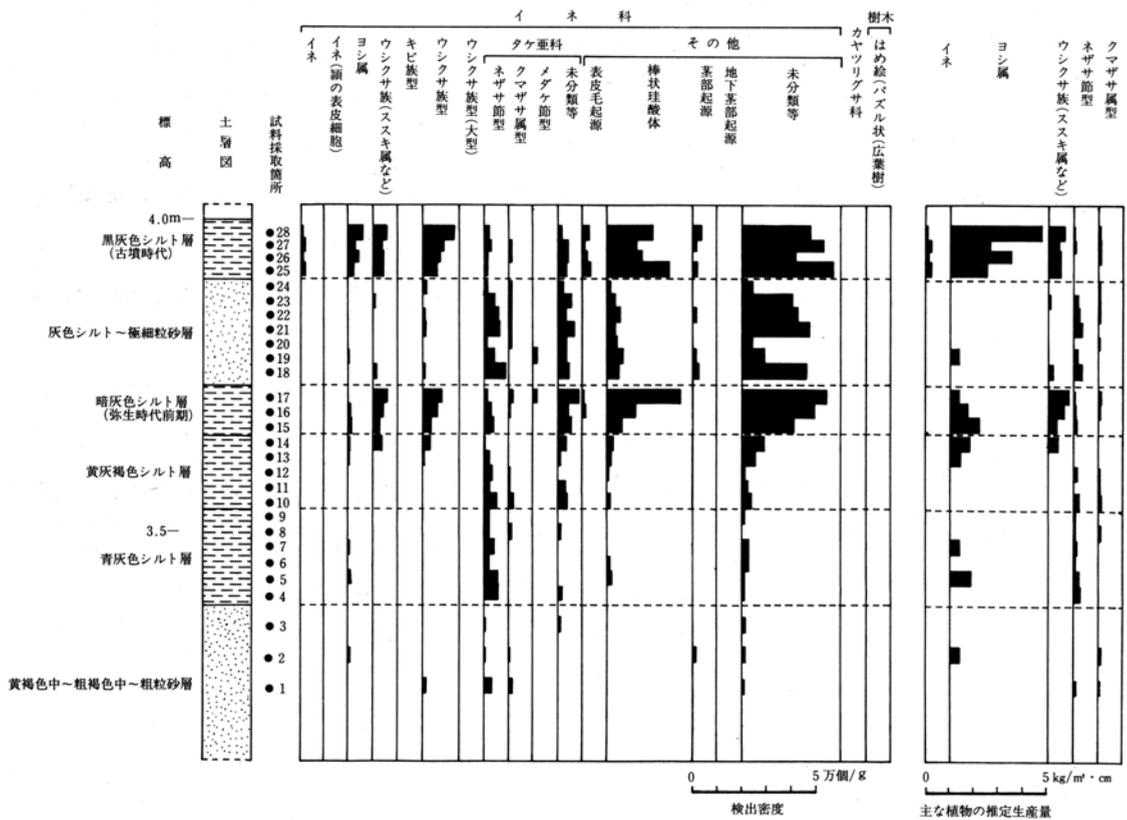


図55 月縄手遺跡92B地点における植物珪酸体分析結果

4. 自然科学分析からみた月縄手遺跡

月縄手遺跡では、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を行った。これらの分析結果を総合し、月縄手遺跡の古環境および堆積環境の復元を試みた。

弥生時代前期では、花粉分析結果より広葉樹林やイネ科植物などが繁茂する開けた土地の存在が推定される。植物珪酸体分析からは、ウシクサ族やヨシ属などの他にイネ (*Oryza sativa*) の植物珪酸体も検出されることから、稲作が行われていたと推定できた。また、珪藻分析からは、環濠が浅い水域であったと推測されると共に、人為的な汚染で富栄養化していた可能性が指摘できた。

古墳時代前期の頃は、珪藻分析において陸生珪藻が著しく多く出現することから、水深の浅い環境であったことが推測される。また花粉分析において草本花粉中イネ科が最も高い出現率を示し、植物珪酸体分析においても、2,700個/gと比較的小さい密度ではあるがイネの植物珪酸体が検出されており、稲作の可能性が考えられる。

弥生時代前期と古墳時代前期の間の砂層の堆積環境については、地層下部でラミナが発達していることなどから、洪水性の堆積が推測される。このことは珪藻分析において付着生種が多いことや、花粉化石や植物珪酸体の保存状態が悪いことから支持される。すなわち弥生時代前期をすぎた頃に、月縄手遺跡周辺が河川の影響を強く受ける環境となり、遺跡が放棄されたものと推定される。

次に考古学的に考えてみる。まず、水田域の想定だが、A b 区の環濠埋土では古墳時代前期の層からはプラントオパールが検出されているが、弥生時代前期の層にはみられない。一方、B 区の自然流路 NR01 (101) からは古墳前期・弥生前期それぞれの層からプラントオパールが検出されている。このことから、弥生前期には NR101 から水路をひきいれ、集落の北あるいは南側に水田を開いたものと推定される。その後、弥生前期末頃に NR101 あるいは周辺の河川 (庄内川など) の氾濫により、集落を放棄してより高燥な土地 (朝日遺跡か?) に移動していったのではなかろうか。

その後しばらくこの地は湿地化してヨシ・アシが生い茂るような状況が続き、また徐々に陸地化していったと考えられる。古墳前期ごろには弥生前期とほぼ同じ広さの微高地上に集落が営まれ、その周囲の低地部で弥生前期より大規模に水田が開かれたが、古墳中期には、また集落そのものが放棄されるのである。

この弥生前期から古墳前期にかけての状況は、本遺跡のみならず、濃尾平野一帯に広く認められるようである。一宮市山中遺跡は弥生前期に環濠をもつ集落が築かれたのち、中期には洪水などの理由により放棄され、後期に再び人が住み始める。春日井市松河戸遺跡では縄文晩期から弥生前期の集落がやはり中期には廃絶している。このような状況において、中期以降も存続していく地理的条件に恵まれた数少ない遺跡 (名古屋市高蔵遺跡・朝日遺跡など) こそがいわゆる拠点集落なのであろう。

(堀木真美子・樋上 昇)

4. まとめ

月縄手遺跡は昭和60年に発見された、いまだ歴史の新しい遺跡である。そのため、発掘調査そのものも昭和62年に名古屋環状2号線の建設にともなう第1次調査がおこなわれたのち、今回がようやく第2次調査に相当するにすぎない。しかしながら、すでに第1次調査において、古墳時代前期と弥生時代前期の遺構面が厚い自然堆積の間層をはさんで良好に遺存していることが判明し、一躍注目をあびることとなった。特に弥生時代前期は、検出遺構こそわずかではあるが、当地方ではいまだ調査例の少ない遠賀川系土器を主体とする、弥生時代前期中段階の単純層をほぼ形成していたために、しばしばこの時期の基準資料として活用されている。このような成果をふまえたうえで今回の発掘調査をおこなったわけだが、前回にもまして貴重な調査成果をもたらすことができたといえよう。

以下、箇条書きにより、今回の調査成果をまとめることとする。

1. 弥生前期の環濠の検出

92A区と92Ca区において、環濠と考えられる大溝を検出した。規模は、幅が約3m、深さ約1mで、断面の形状は逆台形を呈する。溝の両肩には土塁状の高まりが15cm程度の厚さで遺存していた。これは環濠の掘削土を盛りあげた土塁の残骸と考えられる。とすれば、従来は環濠の内側にのみ築くものとされてきた土塁を本遺跡では環濠の内と外の両側に積みあげていた、きわめて珍しい例といえよう。また、92Ca区では溝の幅が両肩とも急激にひろがる箇所を検出した。あるいはこれが集落の出入口になるのかもしれない。

2. 遺跡の範囲の確定

前回の調査では比較的遺構が希薄なことや、現況の地形などからみて、遺跡の中心は調査区(62B区)の北側にひろがると推定されてきた。しかし、今回の調査において、逆に南側の92C区がほぼ遺跡の中央を横断する調査区であることが判明した。すなわち、62B区の西側の調査区(92A区)で環濠が南北方向から東西方向に変わる屈曲点を検出し、62B区の東側の92B区では北西から南東に向かう自然流路が調査区の半分を占めていた。さらに、92Ca区の西端で92A区につながる環濠の南延長部分を検出し、地形的には92Ca区と92Cb区の境が最も高く、そこからは東に向かって徐々に低くなっていることが判明した。これらのことから、月縄手遺跡は東側を自然流路でかぎられ、環濠が他の3方を一辺約50～60mの範囲で取り囲んでいる状況が復元できる。また、古墳時代前期の遺構のひろがりもほぼ同様の規模である。

3. 弥生時代前期の遺構と遺物

弥生時代前期の遺構は前述の環濠や自然流路のほかにも92C区において、きわめて密に展開していることがわかった。SK113・114・133は竪穴住居である可能性が高い。また、これらの遺構やSK116・151・152・154・156・SD110からは弥生前期中・新段階に属する良好な一括資料がえられたことは注目にあたいしよう。これらの遺物は『山中遺跡』報告書における石黒立人氏の編年¹⁾によるI-2からI-3期にあたる。主な遺構をこの時期区分にあてはめると、

I-2期：SK116・117・152・154・SX101

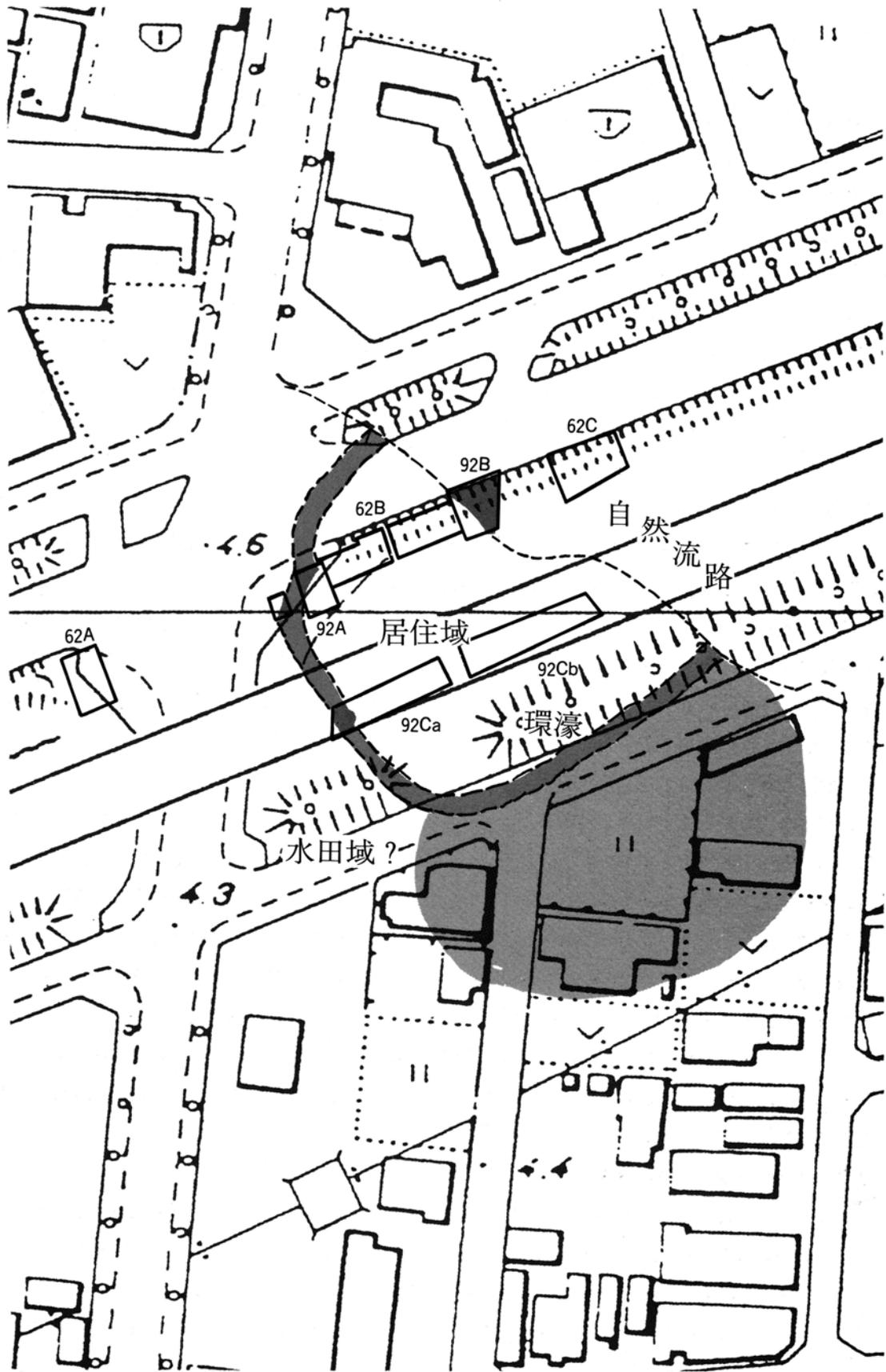


図56 月繩手遺跡展開想定図 (1:1,000)

I—3期：S K113・114・134・150・156・S D101・110・N R101

ということになろう。また、本遺跡出土土器の特徴としては、本文中で第II系土器とした垂流遠賀川系土器と第IV系の条痕紋系土器がきわめて少ない・第III系の削痕系土器の比率が高い・赤彩土器が比較的多い、などがあげられよう。また、S X101から小破片ではあるがI—1期にまでさかのぼりうる土器が出土したことは特筆すべきことであろう。これらについてのさらに詳細な分析は今後の検討課題としたい。

4. 弥生時代前期における水稲耕作の可能性

今回、弥生時代前期の土器に、底部にモミの圧痕をとどめるものが1点出土したことは、東海地方における水稲耕作のはじまりにかかわる直接的な資料として注目される。さらに本遺跡における水稲耕作の可能性を高める有力な傍証として、92B区N R101の埋土で採取した土壌の分析結果がある。わずかながらではあるが、稲のプラントオパールが検出されたことは、少なくとも本遺跡において水稲耕作がおこなわれていたことを立証するものといえよう。水田の位置は未確定だが（集落の南側の微低地か?）、今後の調査によっては愛知県下で最古の水田が発見される日も近いであろう。

5. 古墳時代前期の遺構と遺物

前回に調査では、古墳時代前期の遺構は溝と土坑のみで、出土遺物も弥生時代前期に比べると少なめであった。今回もやはり前回同様、複雑に重複する数多くの溝を検出した。その性格について断定できるだけの資料はえられなかったが、その方向性は北で西へ約40°ふれるものと、約50°ふれるもののほぼ2群にわかれており、それぞれに直交する溝をもつ。時期的にはおおむね前者が古いことがわかっている。なかでも注目されるのは62B区S D03とその延長にあたる92B区S D25である。その形状から、一辺約10mの方墳である可能性が高い。今回の調査では多数の溝のほかに、C区で竪穴住居の可能性をもつ大形の方形土坑や、井戸と思われる円形の土坑をいくつか検出した。それらの遺構からは廻間I～II式および松河戸I式の良い土器群が出土した。ことに松河戸I式に属する土器群は当地方における古墳時代前期の編年研究の基準となるきわめて良好な一括資料である。また、この土器群とともに出土した木製品のなかには東海系曲柄鍬がふくまれている。このタイプの曲柄鍬としては最も新しい時期の資料といえよう。

以上、5つの項目にわたって月縄手遺跡の調査成果をまとめてきたが、まだようやく2回目の調査がおこなわれた段階であり、本遺跡がもつ情報量は弥生時代前期における未知の水田の存在とともにまだまだ大きなものがあるといえよう。さらに調査のメスが加えられることによって、この遺跡は当地方の歴史を解明していくうえできわめて重要な位置を占めていくものと思われる。そのためにも、周辺地域での遺漏のない丹念な発掘調査の積み重ねが期待される。 (樋上 昇)

註)

1. 石黒立人・服部信博・野口哲也 1992「尾張地方を中心とした弥生時代前期の諸相」『山中遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第40集

付表

表4 貴生町遺跡II・III 遺構番号新旧対照表

	新番号	旧番号									
92A区	SD01	SD02	92B区	SK05	SK04	92C区	SK06	SK06	92C区	SD07	SD04
	SD02	SD03		SD04	SD04		SK07	SK01		SX07	SX01
	SD03	SD01		SD05	SD05		SK08	SK12		NR02	NR01
92B区	SK04	SK03		NR02	NR01		SD06	SD01			

表5 貴生町遺跡II・III 遺物観察表

土器番号	E番号	調査区	出土遺構	口径 (復元径) cm	底径 (復元径) cm	器高 (復元高) cm	胎土	焼成				色調			残存率	備考
								堅致	良好	やや甘い	甘い	外面	内面	断面		
1	E-1	92A	SD02	(14.0)	—	(2.2)	砂粒含む			○		2.5Y 1/2 浅黄	2.5Y 1/2 黄灰	2.5Y 1/2 黄灰	1/12	
2	E-2	"	検出	—	—	(2.0)	"			○		10YR 1/2 浅黄橙	10YR 1/2 赤黄橙	10YR 1/2 褐灰	-/12	
3	E-3	"	"	—	—	(2.5)	1mm以下の砂粒含む			○		7.5YR 1/2 黄	7.5YR 1/2 黒	7.5YR 1/2 浅黄橙	-/12	
4	E-4	"	"	—	—	(2.0)	"			○		7.5YR 1/2 黄	7.5YR 1/2 黄	7.5YR 1/2 黄	-/12	
5	E-5	"	"	—	(8.6)	(3.4)	砂粒含む			○		7.5YR 1/2 黄	10YR 1/2 浅黄橙	7.5YR 1/2 浅黄橙	2/12	
6	E-6	"	"	—	(6.2)	(4.2)	"			○		10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 黄	10YR 1/2 黄	1/12	
7	E-7	"	"	—	—	(6.7)	1mm以下の砂粒含む			○		2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	-/12	
8	E-8	"	"	—	—	(5.3)	砂粒含む			○		10YR 1/2 黄	10YR 1/2 黄	10YR 1/2 黄	-/12	
9	E-9	"	"	—	—	(6.7)	1mm以下の砂粒含む			○		10YR 1/2 浅黄橙	10YR 1/2 浅黄橙	10YR 1/2 黄	-/12	
10	E-10	"	"	(14.8)	—	(1.5)	砂粒含む			○		7.5YR 1/2 明褐	7.5YR 1/2 明褐	7.5YR 1/2 黄	1/12	
11	E-11	"	"	(16.2)	—	(1.6)	2mm以下の砂粒含む			○		2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 黄	1/12	
12	E-12	"	"	—	—	—	4mm以下の礫含む			○		7.5YR 1/2 浅黄橙	2.5Y 1/2 黄灰	2.5Y 1/2 黄	-/12	
13	E-13	92B	SK03	—	(7.2)	(6.7)	8mm大の礫含む			○		10YR 1/2 黄	10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 黄	12/12	杯脚部上半残存
14	E-14	"	NR01下層	(13.2)	—	(1.6)	1mm以下の砂粒含む			○		10YR 1/2 黒	10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 黒	1/12	
15	E-15	"	"	(13.2)	—	(1.9)	砂粒含む			○		10YR 1/2 黄	10YR 1/2 黄	10YR 1/2 黄	1/12	
16	E-16	"	"	(16.3)	—	(3.3)	3mm大の礫含む			○		5Y 1/2 灰	5Y 1/2 オリーブ黒	5Y 1/2 オリーブ黒	1/12	
17	E-17	"	"	(12.4)	—	(1.8)	1mm以下の砂粒含む			○		7.5YR 1/2 黄	7.5YR 1/2 浅黄橙	7.5YR 1/2 灰白	2/12	
18	E-18	"	"	(13.4)	—	(2.3)	"			○		10YR 1/2 灰白	10YR 1/2 灰白	10YR 1/2 灰白	1/12	
19	E-19	"	土器No.1	(16.4)	—	(5.0)	"			○		2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 淡黄	1/12	
20	E-20	"	NR01下層	—	—	(4.2)	砂粒含む			○		10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 黄	10YR 1/2 黄	3/12	
21	E-21	"	"	(20.8)	—	(4.3)	1mm以下の砂粒含む			○		10YR 1/2 黄	10YR 1/2 黄	10YR 1/2 黄	1/12	
22	E-22	"	"	—	—	(2.7)	極めて密、砂粒ほとんど目立たず			○		7.5YR 1/2 黄	10YR 1/2 浅黄橙	10YR 1/2 灰白	4/12	
23	E-23	"	"	—	—	(7.3)	砂粒含む			○		7.5YR 1/2 褐灰	7.5YR 1/2 明褐灰	7.5YR 1/2 黄	5/12	
24	E-24	"	"	—	—	(6.4)	3mm大の礫含む			○		7.5YR 1/2 黄	7.5YR 1/2 黄	7.5YR 1/2 黄	12/12	杯脚部上半残存
25	E-25	"	"	—	—	(6.5)	砂粒含む			○		10YR 1/2 黄	10YR 1/2 黄	10YR 1/2 黄	1/12	
26	E-26	92B	NR01下層	—	(3.8)	(1.7)	1mm以下の砂粒含む			○		2.5Y 1/2 淡黄	25Y 1/2 黒	25Y 1/2 灰白	3/12	
27	E-27	92A	SD01	—	—	—	"			○		灰釉	無釉		0/12	
28	E-28	92A	"	(32.2)	—	(7.1)	2mm以下の			○		鉄釉	鉄釉		1/12	
29	E-29	92A	検出	—	(6.4)	(2.3)	極めて密			○		2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 8.1 灰白	2.5Y 8.1 灰白	2/12	
30	E-30	92A	"	—	(4.4)	(1.9)	密・砂粒ほとんど含まず			○		2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2 黄灰	2.5Y 1/2 灰白	4/12	
31	E-31	92A	"	(30.2)	—	(4.2)	1mm以下の砂粒含む 4mm前後の礫含む			○		7.5YR 1/2 黄	7.5YR 1/2 黄	7.5YR 1/2 黄	1/12	
32	E-32	92A	"	(12.6)	(8.2)	2.1	密・砂粒ほとんど含まず			○		灰釉	灰釉・鉄釉		1/12	
33	E-33	92A	"	(12.0)	—	(1.9)	—			○		灰釉	灰釉		1/12	
34	E-34	E92A	"	(7.6)	(4.1)	—	—			○		灰釉	灰釉・鉄釉		-/12	
35	E-35	92A	"	(6.8)	—	(2.1)	緻密			○		灰釉	灰釉		1/12	
36	E-36	92B	NR01下層	(—)	(4.0)	(2.3)	密・砂粒ほとんど含まず			○		2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 淡黄	5/12	墨書有り
37	E-37	92B	"	(12.0)	3.4	3.6	—			○		2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	3/12	
38	E-38	92B	NR01下層 土器No.2	(10.2)	4.2	2.3	極めて密・砂粒含まず			○		2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 淡黄	3/12	
39	E-39	92B	NR01下層	(13.8)	(4.0)	3.0	緻密 5mmの礫含む			○		5Y 1/2 灰白	5Y 1/2 灰白	5Y 1/2 灰白	2/12	

40	E-40	92B	" "	—	(8.0)	(3.0)	やや粗い・1mm以下の礫含む	○				5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	1/12	
41	E-41	92B	" "	—	(7.0)	(3.4)	密・0.5mm以下の黒・白色の砂粒若干含む	○				2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 灰白	4/12	
42	E-42	92B	NR01上層	(9.2)	—	(1.6)	密	○				緑軸	緑軸		2/12	
43	E-43	92B	" "	—	(6.2)	(1.7)	密	○				灰軸	灰軸		3/12	
44	E-44	92B	—	(12.6)	(7.6)	2.7	緻密	○				灰軸	灰軸・鉄軸		1/12	
45	E-45	92B	検出	(9.8)	—	(5.6)	"	○				灰軸	灰軸		1/12	
46	E-46	92C	SK06	—	—	—	2mm以下の砂粒含む		○			10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 灰白	1/12	頸部残存
47	E-47	92C	"	—	(7.1)	(2.9)	1mm " 白い砂粒含む		○			10 Y R 1/2 灰白	10 Y R 1/2 灰白	10 Y R 1/2 灰白	1/12	
48	E-48	92C	SD04	—	—	(4.6)	4mm以下の礫含む	○				10 Y R 1/2 灰黄褐	10 Y R 1/2 におい黄褐	10 Y R 1/2 灰黄褐	12/12	頸部残存
49	E-49	92C	"	—	—	(7.0)	1mm以下の白い砂粒含む		○			10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 褐灰	7.5 Y R 1/2 橙	12/12	
50	E-50	92C	SX01	—	—	—	" " 砂粒含む		○			2.5 Y 1/2 灰黄	2.5 Y 1/2 灰黄	2.5 Y 1/2 灰黄	2/12	
51	E-51	92C	SX01	—	—	(1.4)	1mm以下の砂粒含む		○			10 Y M 1/2 灰白	10 Y R 1/2 灰白	12/12		
52	E-52	92C	NR01西側	(11.2)	—	(2.5)	砂粒含む		○			2.5 Y 1/2 浅黄	2.5 Y 1/2 浅黄	2.5 Y 1/2 浅黄	1/12	
53	E-53	92C	NR01 "	(14.2)	—	(4.0)	1mm以下の砂粒含む		○			2.5 Y 1/2 明黄褐	2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 浅黄	1/12	
54	E-54	92C	" 下層	(12.6)	—	(3.0)	" " "	○				10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	1/12	
55	E-55	92C	NR01 "	—	—	(2.8)	砂粒含む	○				10 Y R 1/2 におい黄褐	10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	1/12	
56	E-56	92C	" 下層	—	(4.4)	(3.2)	" "	○				10 Y R 1/2 浅黄橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	1/12	
57	E-57	92C	" 西側	—	—	(3.4)	3~5mmの有色礫含む	○				7.5 Y R 1/2 におい橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	12/12	
58	E-58	92C	" 下層	—	8.4	(5.6)	砂粒含む	○				2.5 Y 1/2 浅黄	2.5 Y 1/2 浅黄	2.5 Y 1/2 灰黄	9/12	脚部残存
59	E-59	92C	" "	—	—	(5.5)	" "		○			5 Y R 1/2 におい橙	2.5 Y R 1/2 淡赤橙	7.5 Y R 1/2 におい橙	12/12	"
60	E-60	92C	" "	—	—	(4.9)	" "		○			7.5 Y R 1/2 浅黄橙	7.5 Y R 1/2 浅黄橙	7.5 Y R 1/2 明褐灰	3/12	"
61	E-61	92C	検出	—	—	(5.2)	3mm以下の砂礫含む		○			10 Y R 1/2 浅黄橙	10 Y R 1/2 浅黄橙	10 Y R 1/2 浅黄橙	12/12	"
62	E-62	92C	NR01西側	—	—	(6.6)	砂粒含む		○			2.5 Y 1/2 灰白	10 Y R 1/2 明黄褐	2.5 Y 1/2 灰白	3/12	
63	E-63	92C	" 下層	—	—	(5.1)	1mm以下の砂粒含む	○				10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	12/12	
64	E-64	92C	" "	—	(3.2)	(3.7)	0.5mm以下の " "	○				10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 明黄褐	10 Y R 1/2 褐灰	10/12	
65	E-65	92C	" 西側	(13.2)	—	(7.2)	6mm以下の礫・粗い	○				10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 褐灰	10 Y R 1/2 黒褐	2/12	
66	E-66	92C	" 下層	(18.0)	—	(6.2)	8mm以下の礫含む	○				7.5 Y R 1/2 橙	7.5 Y R 1/2 明褐	7.5 Y R 1/2 におい褐	2/12	頸部残存
67	E-67	92C	" "	—	(8.6)	(3.6)	7mm " "	○				7.5 Y R 1/2 橙	7.5 Y R 1/2 橙	7.5 Y R 1/2 におい橙	3/12	
68	E-68	92C	南壁清掃	(21.2)	—	(4.4)	1mm " 砂粒含む		○			10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	10 Y R 1/2 におい黄橙	1/12	
69	E-69	92C	"	—	—	(6.2)	有色砂粉含む		○			2.5 Y 1/2 浅黄	7.5 Y R 1/2 橙	7.5 Y R 1/2 浅黄橙	2/12	頸部残存
70	E-70	92C	SK02	—	—	—	1mm以下の砂粒含む	○				鉄軸	鉄軸		—/12	
71	E-71	92C	" 01	—	—	—	" " "	○				鉄軸	鉄軸		—/12	
72	E-72	92C	SD04	—	(4.6)	(2.5)	緻密	○				2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 灰白	3/12	
73	E-73	92C	" "	—	(6.0)	(2.4)	白色(3mm)赤褐色(5mm)礫含む	○				5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	3/12	
74	E-74	92C	" "	—	(4.4)	(2.0)	緻密	○				5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	4/12	墨書有り
75	E-75	92C	" "	—	5.0	0.7	白色4mm大の礫含む	○				5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	6/12	" "
76	E-76	92C	NR01下層	—	(5.6)	(1.7)	3mm以下の礫含む・粗い		○			2.5 Y 1/2 黄褐	2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 灰白	2/12	
77	E-77	92C	" "	—	(5.6)	(2.4)	砂・礫多く、粗い		○			N. 7 灰白	N. 7 灰白	N. 7 灰白	2/12	
78	E-78	92C	" "	(12.6)	(4.0)	4.2	緻密	○				5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	2/12	
79	E-79	92C	" "	(10.4)	4.3	4.9	"	○				2.5 Y 1/2 淡黄	2.5 Y 1/2 淡黄	2.5 Y 1/2 淡黄	1/12	
80	E-80	92C	" "	(13.0)	—	(3.2)	" 白色微砂粒若干含む	○				2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 灰白	2/12	
81	E-81	92C	NR01	(12.2)	3.8	3.4	緻密	○				5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	3/12	
82	E-82	92C	" 下層	(14.3)	(4.5)	3.6	" 白色微砂粒・白色粘土混じる	○				2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 灰白	2/12	
83	E-83	92C	" "	—	(6.5)	(1.7)	" 0.5mm程度の白色砂粒若干含む	○				5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	2/12	墨書有り
84	E-84	92C	検出	—	(4.4)	(1.2)	緻密	○				2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 灰白	2.5 Y 1/2 灰白	4/12	
85	E-85	92C	NR01下層	(8.6)	(4.6)	1.5	"	○				5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	5 Y 1/2 灰白	1/12	

表6 月繩手遺跡II 新旧遺構番号対照表

II期(上層)

A a・b₁区

B₁区

新番号	旧番号										
SK01	P1	SD05	SD05	SD06	SD16	SK08	SK01	SD27	SD11	SD37	SD03
SK02	SK02	SD06	SD06	SD17	SD17	SK09	SK06	SD28	SD09	SD38	SD17
SK03	SK03	SD07	SD07	SD18	SD18	SK10	SK05	SD29	SD08	SD39	SD16
SK04	SK04	SD08	SD08	SD19	SD19	SK11	SK02	SD30	SD07	SD40	SD15
SK05	SK05	SD09	SD09	SD20	SD20	SK12	SK08	SD31	SD06	SD41	SD19
SK06	SK06	SD10	SD10	SD21	SD21	SK13	SK03	SD32	SD06	SD42	SD18
SK07	SK07	SD11	SD11	SD22	SD22	SK14	SK07	SD33	SD05	SD43	SD14
SD01	SD01	SD12	SD12	SK15	SK05	SD34	SD02	SD44	SD20		
SD02	SD02	SD13	SD13	SD24	SD24	SD25	SD01	SD35	SD04	SX01	SX01
SD03	SD03	SD04	SD14			SD26	SD12	SD36	SD13	NR01	NR10
SD04	SD04	SD15	SD15								

II期(上層)

C a₁区

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SK16	SK41 (SB?)	SK26	SK71 (SB?)	SK36	SK83	SK46	SK62	SK56	SK87	SD50	SD35
SK17	SK44 (SB?)	SK27	SK40	SK37	SK85	SK47	SK65	SK57	SK77	SD51	SD36
SK18	SK47 (SB?)	SK28	SK42	SK38	SK53	SK48	SK66	SK58	SK74	SK52	SD37
SK19	SK48 (SB?)	SK29	SK43	SK39	SK52	SK49	SK68	SK59	SK86	SD53	SD38
SK20	SK58 (SB?)	SK30	SK84	SK40	SK55	SK50	SK69	SK60	SK75	SK54	SD39
SK21	SK58 (SB?)	SK31	SK45	SK41	SK56	SK51	SK70	SD45	SD44	SD55	SD40
SK22	SK59 (SB?)	SK32	SK46	SK42	SK57	SK52	SK72	SD46	SD31	SX02	SX01
SK23	SK63 (SB?)	SK33	SK49	SK43	SK60	SK53	SK73	SD47	SD32	SX03	SX02
SK24	SK64 (SB?)	SK34	SK50	SK42	SK57	SK54	SK76	SD48	SD33		
SK25	SK67 (SB?)	SK35	SK51	SK45	SK78	SK55	SK88	SD49	SD34		

II期(上層)

C b₁区

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SK61 (SB?)	SK01	SK74	SK14	SK87	SK26	SK100	SK39	SD68	SD11	SD81	SD23
SK62 (SB?)	SK04	SK75	SK15	SK88	SK79	SD56	SD01	SD69	SD43	SD82	SD24
SK63 (SB?)	SK11	SK76	SK16	SK89	SK27	SD57	SD02	SD71	SD13	SD83	SD26
SK64 (SB?)	SK05	SK77	SK82	SK90	SK29	SD58	SD03	SD71	SD13	SD84	SD25
SK65 (SB?)	SK28	SK78	SK17	SK91	SK30	SD59	SD04	SD72	SD14	SD85	SD42
SK66	SK02	SK79	SK18	SK92	SK31	SD60	SD05	SD73	SD15	SD86	SD28
SK67	SK03	SK80	SK19	SK93	SK32	SK61	SD06	SD74	SD16	SD87	SD27
SK68	SK07	SK81	SK20	SK94	SK81	SD62	SD07	SD75	SD21	SD88	SD29
SK69	SK06	SK82	SK21	SK95	SK33	SD63	SK09	SD76	SD17	SD89	SD30
SK70	SK08	SK83	SK22	SK96	SK34	SD64	SD08	SD77	SD18		
SK71	SK10	SK84	SK23	SK97	SK35	SK65	SD09	SD78	SD19		
SK72	SK12	SK85	SK24	SK98	SK36	SD66	SD41	SD79	SD20		
SK73	SK13	SK86	SK25	SK99	SK37	SD67	SD10	SD80	SD22		

I 期 (下層)

A a₂・b₂区

B₂区

C a₂区

C b₂区

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SK101	SK101	SK106	SK01	SK113 (SB?)	SK126	SK127	SK145	SK133 (SB?)	SK109	SK147	SK108
SK102	SK102	SK107	SK06	SK114 (SB?)	SK127	SK128	SK129	SK134	SK121	SK148	SK110
SK103	SK103	SK108	SK05	SK115	SK142	SK129	SK125	SK135	SK118	SK149	SK143
SK104	SK104	SK109	SK04	SK116	SK141	SK130	SK130	SK136	SK117	SK150	SK107
SK105	SK105	SK110	SK03	SK117	SK137	SK131	SK144	SK137	SK120	SK151	SK106
SD101	SD101 SD108	SK111	SK02	SK118	SK136	SK132	SK128	SK138	SK119	SK152	SK105
SD102	SD102	SK112	SK07	SK119	SK139	SD104	SD106	SK139	SK122	SK153	SK104
SD103	SD103	NR101	NR01 (SX01)	SK120	SK138	SD105	SD107	SK140	SK123	SK154	SK103
				SK121	SK135	SD106	SD105	SK141	SK115	SK155	SK102
				SK122	SK134	SD107	SD104	SK156	SK101		
				SK123	SK133			SK143	SK114	SD108	SD103
				SK124	SK146			SK144	SK113	SD109	SD102
				SK125	SK132			SK145	SK112	SD110	SD101
				SK126	SK131			SK146	SK111	SX101	SX101

表 7 月繩手遺跡II 遺物観察表 (I 期土器)

土器番号	E番号	調査区	出土遺構	口径 (復元径) cm	底径 (復元径) cm	器高 (残存高) cm	胎 土	焼 成				色 調			残存率	備 考
								堅致	良好	欠均	甘い	外 面	内 面	断 面		
1	E-1	92Aa ₁	SK102	—	—	(4.3)	1~2mmの砂粒含む		○			10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	—/12	
2	E-51	92Ca ₂	SK113	(14.6)	—	(3.3)	2mm以下の砂粒多く含む		○			2.5Y 7/1 灰白	10Y R 7/2 灰黄褐	2.5Y 7/2 灰白	2/12	
3	E-49	92Ca ₂	"	(14.4)	—	(2.1)	2mm以下の砂粒含む		○			10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 灰白	2/12	
4	E-59	92Ca ₂	"	(14.8)	—	(3.7)	3~5mmの礫含む		○			10Y R 7/2 黄橙	10Y R 7/2 黄橙	10Y R 7/2 黄橙	2/12	
5	E-56	92Ca ₂	"	(16.0)	—	(3.3)	1~3mmの礫含む		○			5Y R 7/2 暗褐灰	2.5Y 7/2 暗灰黄	2.5Y 7/2 灰白	3/12	
6	E-55	92Ca ₂	"	(15.2)	—	(4.7)	"	○				5 R 7/1 赤黒	2.5Y 7/2 灰黄	2.5Y 7/2 浅黄	2/12	
7	E-57	92Ca ₂	"	(15.8)	—	(7.2)	3~7mm礫含む			○		2.5Y 7/2 淡黄	2.5Y 7/2 暗灰黄	2.5Y 7/2 灰白	2/12	
8	E-58	92Ca ₂	"	(14.6)	—	(7.0)	3mm大の礫含む	○				2.5Y 7/2 灰黄	2.5Y 7/2 灰黄	2.5Y 7/2 灰黄	2/12	
9	E-45	92Ca ₂	"	—	(15.6)	(5.8)	4mm以下の砂粒多く含む			○		2.5Y 7/2 淡黄	2.5Y 7/2 灰白	2.5Y 7/2 灰白	4/12	
10	E-48	92Ca ₂	"	—	(8.2)	(2.7)	2mm以下の砂粒多く含む		○			7.5Y R 7/2 明褐灰	7.5Y 7/1 灰	10Y R 7/2 浅黄橙	4/12	
11	E-52	92Ca ₂	"	—	—	—	2~3mmの砂粒多く含む		○			10Y R 7/2 灰黄褐	2.5Y 7/2 灰黄	2.5Y 7/2 灰白	—/12	
12	E-54	92Ca ₂	"	(24.0)	—	(5.1)	1~7mm礫含む			○		10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 浅黄橙	10Y R 7/2 浅黄橙	1/12	
13	E-53	92Ca ₂	"	—	—	—	2mm以下の砂粒多く含む	○				7.5Y R 7/2 褐灰	10Y R 7/2 灰白	N 41 灰	—/12	
14	E-50	92Ca ₂	"	—	—	(4.8)	1mm以下の砂粒多く含む	○				2.5Y R 7/2 淡黄	2.5Y R 7/2 淡黄	2.5Y R 7/2 淡黄	—/12	
15	E-47	92Ca ₂	"	—	(7.0)	(3.5)	3mm以下の砂粒多く含む 1cmの小石含む	○				7.5Y R 7/2 にふい橙	7.5Y R 7/2 にふい橙	7.5Y R 7/2 にふい橙	5/12	第IV系
16	E-46	92Ca ₂	"	—	(7.0)	(2.9)	2mm以下の砂粒多く含む 5mmの小石含む		○			10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 灰白	10Y R 7/2 灰白	3/12	第IV系
17	E-68	92Ca ₂	SK114	—	—	(16.3)	1mm以下の砂粒若干含む・密			○		10Y R 7/2 灰黄褐	5 Y 7/1 灰	5 Y 7/1 灰	3/12	胴部残存
18	E-62	92Ca ₂	"	—	—	—	1mm以下の砂粒含む	○				10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 褐灰	—/12	赤彩
19	E-61	92Ca ₂	"	—	—	—	3mm以下の砂粒多く含む・密	○				10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 灰白	—/12	"
20	E-66	92Ca ₂	"	—	(8.6)	(2.6)	1~3mm礫含む		○			10Y 7/1 黒	2.5Y 7/2 灰白	5 Y 7/1 灰	5/12	
21																
22	E-60	92Ca ₂	"	—	7.2	(10.4)	2mm以下の砂粒多く含む		○			5 Y R 7/2 褐灰	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	12/12	
23	E-63	92Ca ₂	"	—	—	—	"	○				10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	—/12	第IV系
24	E-64	92Ca ₂	"	—	7.0	(3.1)	1~3mm礫含む粗い		○			5 Y R 7/2 明赤褐	5 Y R 7/2 にふい赤褐	5 Y R 7/2 にふい橙	12/12	"
25	E-65	92Ca ₂	"	—	7.4	(5.2)	1~4mm礫含む		○			5 Y R 7/2 暗赤褐	5 Y R 7/2 にふい赤褐	5 Y R 7/2 赤褐	12/12	"
26	E-67	92Ca ₂	SK114	—	7.0	(6.7)	3mm大の礫含む 粗		○			10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 灰白	10Y R 7/2 褐灰	10/12	"
27	E-69	92Ca ₂	SK115	—	7.8	(7.0)	5mm以上の礫多く含む			○		2.5Y 7/2 灰黄	2.5Y 7/2 灰黄	2.5Y 7/2 灰黄	12/12	第III系
28	E-91	92Ca ₂	SK116	—	—	—	1mm以下の砂粒多く含む	○				10Y R 7/2 褐	7.5Y R 7/2 明褐	10Y R 7/2 浅黄橙	—/12	

29	E-73	92Ca ₂	"	(13.8)	—	(3.5)	1mm以下の砂粒含む	○				7.5YR 1/2 にふい橙	10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 にふい黄橙	2.5Y 1/2	2/12	
30	E-84	92Ca ₂	"	(18.6)	—	(6.4)	1~6mmの礫含む	○				2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 黄灰	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	4/12	
31	E-86	92Ca ₂	"	15.2	8.2	25.4	2mm以下の砂粒を多く含む	○				10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 灰白	10YR 1/2 灰白	10YR 1/2	10/12	胴部最大径 43.4
32	E-83	92Ca ₂	"	—	9.0	(16.8)	4~5mmの礫を含む	○				10YR 1/2 にふい黄橙	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	12/12	胴部 " (26.2)
33	E-76	92Ca ₂	"	—	—	—	1mm以下の砂粒含む		○			2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	—/12	
34	E-70	92Ca ₂	"	—	12.2	(3.1)	2mm以下の砂粒多く含む	○				7.5YR 1/2 にふい橙	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 黄灰	2.5Y 1/2	2/12	
35	E-79	92Ca ₂	"	(35.6)	—	(6.8)	3~8mmの礫含む		○			2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	1/12	
36	E-85	92Ca ₂	"	(16.2)	—	(6.9)	1~6mmの礫含む	○				N 3 暗灰	10YR 1/2 灰白	10YR 1/2 灰白	2.5Y 1/2	4/12	
37	E-90	92Ca ₂	"	16.1	7.5	9.4	5mm以下の礫多く含む極めて粗い	○				2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 黄灰	2.5Y 1/2	12/12	
38	E-87	93Ca ₂	"	(36.0)	—	(8.6)	2mm以下の砂粒多く含む	○				10YR 1/2 灰黄褐	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	2/12	
39	E-88	92Ca ₂	"	(22.4)	(7.6)	27.5	3mm以下の砂粒含む	○				10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 にふい黄橙	2.5Y 1/2	7/12	ほぼ完形
40	E-74	92Ca ₂	"	—	7.4	14.3	2mm以下の砂粒多く含む		○			2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	10/12	
41	E-72	92Ca ₂	"	—	(7.6)	(3.7)	"		○			2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	3/12	
42	E-71	92Ca ₂	"	—	(9.4)	(5.5)	5mmの小石含む	○				10YR 1/2 褐灰	2.5Y 1/2 灰白	10YR 1/2 にふい黄橙	2.5Y 1/2	3/12	
43	E-89	92Ca ₂	"	(21.6)	(6.6)	(27.0)	1~2mmの砂粒含む		○			10YR 1/2 浅黄橙	10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 浅黄橙	2.5Y 1/2	4/12	外面スス付着部分 7.5Y 1/2 オリーブ黒
44	E-80	92Ca ₂	"	(17.2)	—	(5.2)	1mm程度の砂粒多く含む		○			5YR 1/2 橙	2.5Y 1/2 黒褐	2.5Y 1/2 黒褐	2.5Y 1/2	1/12	第三系
45	E-78	92Ca ₂	"	—	7.4	(6.7)	3mm以下の砂粒多く含む		○			2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	8/12	"
46	E-75	92Ca ₂	"	—	6.9	(6.7)	"	○				10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 灰黄褐	2.5Y 1/2	12/12	"
47	E-82	92Ca ₂	"	—	(7.8)	(4.5)	1~4mmの礫含む	○				10YR 1/2 黒	10YR 1/2 灰白	10YR 1/2 灰白	2.5Y 1/2	4/12	"
48	E-92	92Ca ₂	"	(19.4)	—	(4.7)	5mm以下の礫多く含む	○				7.5YR 1/2 灰褐	7.5YR 1/2 にふい褐	7.5YR 1/2 灰白	2.5Y 1/2	1/12	第四系
49	E-77	92Ca ₂	"	—	—	(3.0)	1mm以下の砂粒多く含む	○				10YR 1/2 黒褐	10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 褐灰	2.5Y 1/2	—/12	"
50	E-93	92Ca ₂	SK117	(25.6)	—	(9.4)	2mm以下の砂粒、6mmの小石含む	○				10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 灰白	2.5Y 1/2	1/12	
51	E-94	92Ca ₂	SK117	(16.0)	—	(3.0)	2mm以下の砂粒多く含む	○				2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2	1/12	第二系
52	E-95	"	"	—	(4.8)	(3.7)	3mm以下の "	○				2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2	2/12	
53	E-96	"	SK118	—	(7.4)	(6.4)	3~5mmの礫含む		○			10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 浅黄褐	10YR 1/2 浅黄褐	2.5Y 1/2	3/12	
54	E-97	"	"	—	(9.6)	(3.0)	3mm程度の礫含む		○			7.5Y 1/2 灰白	7.5Y 1/2 灰白	7.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	4/12	
55	E-98	"	SK120	—	—	(17.5)	3mm以下の砂粒多く含む9mmの小石含む		○			2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	2/12	胴部残存
56	E-99	"	SK121	—	(11.0)	(20.2)	1~5mmの礫含む	○				5Y 1/2 オリーブ黒	5Y 1/2 灰	2.5Y 1/2 浅黄	2.5Y 1/2	4/12	胴部最大径 (33.6)
57	E-100	"	SK128	(20.4)	—	(1.8)	2mm以下の砂粒多く含む	○				2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	2/12	
58	E-101	"	"	(20.2)	—	(3.3)	1mm以下の砂粒多く含む極めて粗い	○				10YR 1/2 にふい黄橙	7.5YR 1/2 明褐灰	5B 1/2 青黒	2.5Y 1/2	1/12	
59	E-102	"	SK129	—	7.8	(4.9)	1mm以上の砂粒極めて多い粗	○				5Y 1/2 灰白	5YR 1/2 橙	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	12/12	
60	E-134	92Cb ₂	SK133	—	(9.3)	(6.0)	2mm以下の砂粒含む		○			2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2	3/12	
61	E-133	"	"	—	(7.8)	(5.4)	3mm以下 1cmの礫含む	○				2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2	5/12	
62	E-135	"	SK134	(24.8)	—	(17.6)	極めて密 2mm以下の砂粒含む	○				10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 黒褐	10YR 1/2 灰白	2.5Y 1/2	3/12	
63	E-136	"	"	(18.4)	7.7	(22.5)	2mm以下の砂粒、10mm以下の礫含む	○				10YR 1/2 灰黄褐	10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 にふい黄橙	2.5Y 1/2	2/12	
64	E-139	"	SK147	(20.0)	—	(1.4)	砂粒含む	○				7.5YR 1/2 にふい褐	7.5YR 1/2 褐	7.5YR 1/2 褐灰	2.5Y 1/2	1/12	
65	E-140	"	"	—	—	(8.5)	密、3~4mmの礫含む		○			10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 褐灰	2.5Y 1/2	6/12	胴部残存
66	E-138	"	"	(20.6)	—	(11.5)	3mm大の礫含む	○				10YR 1/2 にふい橙	10YR 1/2 にふい橙	10YR 1/2 にふい橙	2.5Y 1/2	3/12	
67	E-137	"	"	(20.8)	—	(21.8)	"	○				2.5YR 1/2 オリーブ褐	5YR 1/2 にふい橙	5YR 1/2 にふい橙	2.5Y 1/2	2/12	
68	E-141	"	"	—	—	—	1~4mmの砂粒含む	○				5YR 1/2 橙	5YR 1/2 橙	5YR 1/2 橙	2.5Y 1/2	—/12	第四系
69	E-142	"	SK148	(30.0)	—	(31.0)	砂粒含む	○				10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 にふい黄橙	2.5Y 1/2	5/12	
70	E-143	"	SK150	(21.0)	—	(4.2)	3~5mmの礫多く含む		○			7YR 1/2 にふい橙	10YR 1/2 浅黄橙	10YR 1/2 灰白	2.5Y 1/2	3/12	
71	E-145	"	"	(20.0)	—	(6.4)	1~4mmの礫含む	○				5Y 1/2 オリーブ黒	2.5Y 1/2 浅黄	2.5Y 1/2 浅黄	2.5Y 1/2	2/12	
72	E-147	"	"	(18.8)	—	(5.0)	1~3mmの礫多く含む	○				2.5Y 1/2 黒褐	2.5Y 1/2 浅黄	2.5Y 1/2 浅黄	2.5Y 1/2	2/12	
73	E-146	"	"	(15.0)	—	(5.2)	1~5mmの礫多く含む	○				5Y 1/2 黒	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2	2/12	
74	E-144	"	"	—	3.8	(4.4)	3~8mmの礫含む	○				2.5Y 1/2 灰黄	2.5Y 1/2 黄灰	2.5Y 1/2 黒褐	2.5Y 1/2	12/12	
75	E-156	"	SK151	(16.0)	—	(3.6)	1~4mmの礫含む	○				10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 灰黄褐	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2	3/12	
76	E-153	92Cb ₂	SK151	—	(8.0)	(5.1)	2mm以下の砂粒含む	○				2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	3/12	
77	E-157	"	"	—	8.4	(6.0)	1~4mmの礫含む		○			2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2 淡黄	2.5Y 1/2	12/12	
78	E-154	"	"	(21.7)	—	(4.3)	4mm以下の礫含む	○				10YR 1/2 にふい黄橙	10YR 1/2 灰白	10YR 1/2 灰白	2.5Y 1/2	1/12	
79	E-151	"	"	(14.5)	—	(8.9)	4mm以下の礫含む やや粗い		○			2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2 灰白	2.5Y 1/2	3/12	

80	E-150	"	"	—	(7.4)	(2.5)	3mm以下の砂粒含む	○		10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/2 浅黄橙	10YR 5/2 浅黄橙	3/12	
81	E-152	"	"	—	(7.0)	(2.5)	"	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 灰白	10YR 5/2 灰白	4/12	
82	E-149	"	"	—	9.3	(7.3)	"	○		2.5Y 5/2 灰白	2.5Y 5/2 灰白	2.5Y 5/2 灰白	11/12	
83	E-148	"	"	—	10.5	(7.3)	6mm前後の礫含む	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/2 灰白	7/12	
84	E-161	"	SK152	(20.2)	—	(1.9)	2mm以下の砂粒含む 8mmの礫含む	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/2 灰白	1/12	
85	E-160	"	"	—	—	—	1mm以下の砂粒含む	○		10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 灰白	—/12	
86	E-158	"	"	(14.4)	—	(5.4)	3mm以下の砂粒含む	○		10YR 5/2 灰黄橙	10YR 5/2 灰黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	2/12	
87	E-163	"	"	41.4	—	(22.0)	3～5mmの礫多く含む	○		7.5YR 5/2 にふい橙	7.5YR 5/2 にふい橙	7.5YR 5/2 にふい橙	6/12	
88	E-162	"	"	(18.1)	6.6	(19.8)	2mm以下の砂粒多く含む	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 浅黄橙	10/12	
89	E-159	"	"	—	—	—	1mm以下の砂粒含む	○		2.5Y 5/2 黒褐	2.5Y 5/2 灰黄	2.5Y 5/2 黒褐	—/12	第IV系
90	E-173	"	SK154	(14.8)	—	(2.7)	1～5mmの礫含む	○		10YR 5/2 黒	10YR 5/2 黒褐	10YR 5/2 にふい黄橙	1/12	蓋
91	E-169	"	"	14.4	—	(5.5)	1～4mmの礫含む 極めて粗	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	7/12	
92	E-172	"	"	(16.0)	—	(3.8)	1～10mmの礫含む	○		7.5YR 5/2 橙	10YR 5/2 にふい黄橙	7.5YR 5/2 にふい橙	1/12	
93	E-168	"	"	(22.6)	—	(11.2)	1～2mmの砂粒含む	○		7.5YR 5/2 黒褐	7.5YR 5/2 にふい橙	7.5YR 5/2 にふい橙	1/12	
94	E-164	"	"	—	5.6	(6.3)	3～10mmの礫多く含む	○		5YR 5/2 にふい橙	10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	12/12	
95	E-170	"	"	—	6.9	(5.0)	1～6mmの礫含む	○		5YR 5/2 にふい赤褐	10YR 5/2 浅黄橙	10YR 5/2 褐灰	12/12	
96	E-167	"	"	(23.0)	—	(16.3)	砂粒含む 粗	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 黒褐	3/12	第III系
97	E-171	"	"	—	7.2	(6.8)	2mm以下の砂粒多く含む	○		7.5YR 5/2 にふい橙	7.5YR 5/2 灰褐	7.5YR 5/2 灰褐	12/12	"
98	E-166	"	"	—	(5.6)	(3.4)	3mm大の礫含む	○		10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 5/2 褐灰	3/12	"
99	E-165	"	"	—	6.4	(4.3)	砂粒含む	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 褐灰	11/12	"
100	E-174	"	SK155	—	(9.4)	(12.8)	3～5mm大の礫含む	○		2.5Y 5/2 灰黄	2.5Y 5/2 浅黄	2.5Y 5/2 灰白	5/12	
101	E-186	92Cb ₂	SK156	(12.0)	—	(2.6)	2mm以下の砂粒含む	○		2.5Y 5/2 灰白	2.5Y 5/2 灰白	2.5Y 5/2 灰白	4/12	
102	E-185	"	"	(14.6)	—	(1.8)	3mm以下の砂粒多く含む	○		7.5YR 5/2 にふい褐	"	7.5YR 5/2 にふい橙	1/12	
103	E-184	"	"	(12.4)	—	(4.7)	2mm以下の砂粒多く含む	○		2.5Y 5/2 灰白	2.5Y 5/2 灰白	2.5Y 5/2 灰白	2/12	
104	E-178	"	"	—	7.8	(4.2)	1～4mm礫多く含む	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 褐灰	10YR 5/2 灰白	12/12	
105	E-180	"	"	—	(13.4)	(3.4)	1～5mm礫含む	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	5Y 5/2 灰	1/12	
106	E-182	"	"	(25.0)	—	(9.2)	2mm以下の砂粒含む	○		2.5Y 5/2 灰黄	2.5Y 5/2 灰黄	2.5Y 5/2 灰黄	2/12	
107	E-179	"	"	—	(7.8)	(6.3)	1～7mm礫多く含む	○		7.5YR 5/2 橙	2.5Y 5/2 赤灰	7.5YR 5/2 にふい橙	3/12	
108	E-183	"	"	(21.3)	—	(8.4)	1mm以下の砂粒多く含む	○		7.5YR 5/2 にふい橙	"	7.5YR 5/2 褐灰	3/12	第III系
109	E-175	"	"	—	—	(5.3)	砂粒多く含む やや粗	○		5YR 5/2 にふい橙	"	7.5YR 5/2 黒	—/12	"
110	E-176	"	"	—	—	(3.0)	砂粒含む	○		5YR 5/2 褐灰	5YR 5/2 にふい橙	5YR 5/2 褐灰	—/12	"
111	E-177	"	"	—	—	(3.3)	"	○		5YR 5/2 黒褐	5YR 5/2 灰褐	5YR 5/2 黒	—/12	"
112	E-181	"	"	—	(5.6)	(2.4)	2mm以下の砂粒含む	○		5YR 5/2 灰	5GY 5/2 オリーブ黒	5GY 5/2 オリーブ黒	3/12	"
113	E-3	92Aa ₃	SD101	—	—	(4.7)	1～2mmの砂粒含む	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	—/12	
114	E-2	"	"	(25.0)	—	(4.5)	1mm以下の砂粒多し	○		7.5YR 5/2 にふい褐	10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 黒	1/12	第III系
115	E-4	92Aa ₂ 92Aa ₂	"	—	—	(5.8)	1mm以下の砂粒含む " " 10mmの礫含む	○		5YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	—/12	第V系
116	E-109	92Ca ₂	"	12.4	(11.8)	3.1	3mm以下の礫含む	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	11/12	(蓋) ほぼ完形
117	E-107	92Ca ₂	"	(17.9)	—	(2.3)	3mm以下の礫砂粒含む	○		2.5Y 5/2 灰黄	2.5Y 5/2 灰黄	2.5Y 5/2 灰黄	1/12	
118	E-104	92Ca ₂	"	—	9.4	(3.5)	2mm以下の砂粒多く含む	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 灰白	10YR 5/2 灰白	12/12	
119	E-103	92Ca ₂	"	—	(7.0)	(2.7)	緻密で6mmの礫含む	○		10YR 5/2 黒褐	10YR 5/2 褐灰	10YR 5/2 灰白	4/12	赤彩
120	E-106	92Ca ₂	"	—	(8.2)	(3.3)	2mm以下の砂粒含む	○		2.5Y 5/2 灰白	2.5Y 5/2 灰白	2.5Y 5/2 灰白	4/12	
121	E-105	92Ca ₂	"	—	(6.8)	(4.8)	3mm以下の礫含む 粗い	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 灰白	10YR 5/2 灰白	4/12	
122	E-108	92Ca ₂	"	—	(8.3)	(6.0)	1～11mmの礫多く含む	○		10YR 5/2 灰黄褐	2.5Y 5/2 灰白	2.5Y 5/2 灰黄	12/12	
123	E-112	92Ca ₂	SD104	—	(8.8)	(4.3)	1mm以下の砂粒多く含む 粗	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 灰白	10YR 5/2 褐灰	2/12	第III系
124	E-111	92Ca ₂	SD105	(11.4)	—	(2.4)	1～4mmの礫含む	○		7.5Y 5/2 黒	2.5Y 5/2 灰白	2.5Y 5/2 灰白	2/12	蓋
125	E-110	92Ca ₂	"	—	(7.6)	(8.9)	1～5mmの礫含む	○		5Y 5/2 灰白	5Y 5/2 灰	5Y 5/2 灰白	12/12	
126	E-188	92Cb ₂	SD110	—	(10.2)	(3.5)	3mm以下の砂粒含む	○		2.5Y 5/2 灰黄	2.5Y 5/2 灰白	2.5Y 5/2 灰白	2/12	
127	E-187	"	"	—	(8.4)	(4.9)	1mm以下の砂粒多く含む	○		10YR 5/2 灰白	10YR 5/2 灰白	2.5YR 5/2 橙	6/12	第III系
128	E-192	"	"	(17.8)	—	(12.0)	1～4mm礫多く含む	○		2.5Y 5/2 黒褐	10YR 5/2 にふい黄褐	10YR 5/2 にふい黄褐	2/12	赤彩
129	E-189	"	"	(26.4)	—	(4.2)	密 1mm程度の砂粒含む	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 浅黄橙	3/12	
130	E-191	"	"	—	(10.0)	(4.9)	1～4mm礫多く含む	○		10YR 5/2 にふい黄橙	10YR 5/2 黒	2.5Y 5/2 灰白	3/12	

131	E-193	"	"	—	—	上部(8.4) 下部(12.0)	1～4mm礫含む	○		7.5YR 1/2 橙	7.5YR 1/2 に よ い 橙	7.5YR 1/2 に よ い 橙	2/12	最大径(44.0) 胴部残存 第二系
132	E-190	"	"	—	—	(7.0)	1mm前後の砂粒含む	○		10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 褐 灰	-/12	第三系
133	E-195	"	SX101	—	—	—	2mm以下の砂粒含む	○		10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 灰 白	10YR 1/2 灰 白	-/12	加工円盤
134	E-195	"	"	—	—	(12.3)	5mm大の礫含む	○		10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 灰 白	6/12	胴部残存
135	E-194	"	"	—	(8.8)	(5.2)	2mm以下の砂粒 4mmの礫	○		2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 白	4/12	
136	E-196	"	"	(26.5)	—	(8.9)	1mm以下の砂粒含む	○		7.5YR 1/2 浅 黄 橙	7.5YR 1/2 浅 黄 橙	7.5YR 1/2 褐 灰	2/12	第三系
137	E-197	"	"	—	—	—	"	○		7.5YR 1/2 浅 黄 橙	7.5YR 1/2 灰 白	7.5YR 1/2 褐 灰	-/12	"
138	E-198	"	"	—	—	—	2mm以下の砂粒含む	○		10YR 1/2 黒	10YR 1/2 灰 白	10YR 1/2 灰 白	-/12	加工円盤
139	E-14	92B ₂	NR101	(10.8)	—	(1.4)	2mm以下の砂粒含む	○		10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 褐 灰	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	3/12	
140	E-6	92B ₂	NR101	(16.6)	—	(19.2)	2mm以下の砂粒含む	○		10YR 1/2 灰 黄 褐	10YR 1/2 灰 黄 褐	10YR 1/2 灰 白	6/12	
141	E-11	92B ₂	NR101	—	9.0	(7.5)	3～5mmの礫含む	○		10YR 1/2 灰 黄 褐	10YR 1/2 灰 白	10YR 1/2 灰 白	10/12	
142	E-23	92B ₂	NR101	—	(11.4)	(5.6)	2mm以下の砂粒含む	○		10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 褐 灰	2.5Y 1/2 灰 白	2/12	
143	E-9	92B ₂	NR101	—	7.6	(3.5)	3mm以下の砂粒 7 mmの礫含む	○		2.5Y 1/2 黒	2.5Y 1/2 灰 黄	2.5Y 1/2 灰 黄	5/12	
144	E-30	92B ₂	NR101	—	(5.6)	(4.1)	1～5の礫含む	○		10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 黒 褐	10YR 1/2 灰 白	4/12	
145	E-21	92B ₂	NR101	(32.2)	—	(4.5)	3～5mm礫含む	○		5YR 1/2 に よ い 橙	5YR 1/2 明 褐 灰	1/12		
146	E-26	92B ₂	NR101	—	—	(6.2)	3～4mmの礫含む 極めて緻密	○		5Y 1/2 灰 白	5Y 1/2 灰 白	5Y 1/2 黒	3/12	胴部残存
147	E-12	92B ₂	NR101	—	—	(4.7)	2mm以下の砂粒多く 含む	○		10YR 1/2 黒 褐	2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 淡 黄	2/12	
148	E-8	92B ₂	NR101	—	—	(4.7)	2mm以下の砂粒多く 含む	○		10YR 1/2 黒 褐	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 灰 白	2/12	赤彩
149	E-22	92B ₂	NR101	—	7.4	(22.0)	3～9の礫含む	○		上部 2.5Y 1/2 前 5YR 1/2 明 褐 灰	7.5YR 1/2 灰 白	10YR 1/2 灰 白	11/12	
150	E-7	92B ₂	NR101	—	—	(11.6)	2mm以下の砂粒含む	○		2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 黄	2.5Y 1/2 灰 白	2/12	胴部残存
151	E-10	92B ₂	NR101	(22.0)	—	(4.8)	砂粒含む	○		7.5YR 1/2 に よ い 褐	7.5YR 1/2 明 褐 灰	7.5YR 1/2 明 褐 灰	2/12	
152	E-25	92B ₂	NR101	(21.0)	—	(9.5)	1～3mmの礫多く 含む	○		7.5YR 1/2 黒	2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 白	1/12	
153	E-20	92B ₂	NR101	(20.6)	—	(12.7)	2mm以下の砂粒含む	○		2.5Y 1/2 黒	2.5Y 1/2 灰 黄	2.5Y 1/2 黒	2/12	
154	E-29	92B ₂	NR101	(17.0)	—	(5.5)	2mm以下の砂粒 "	○		10YR 1/2 黒	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	1/12	
155	E-13	92B ₂	NR101	—	—	(6.5)	4mm以下の礫多く 含む	○		10YR 1/2 黒	10YR 1/2 灰 黄 褐	10YR 1/2 灰 白	2/12	胴部残存
156	E-17	92B ₂	NR101	—	(9.0)	(6.0)	1～3mmの礫多く 含む	○		2.5YR 1/2 淡 赤 橙	2.5Y 1/2 灰 白	2.5YR 1/2 赤 灰	2/12	
157	E-16	92B ₂	NR101	—	(8.8)	(6.0)	1～4mmの " "	○		10YR 1/2 灰 黄 褐	2.5Y 1/2 灰 黄	2.5Y 1/2 灰 黄	4/12	
158	E-18	92B ₂	NR101	—	(10.0)	(2.5)	1～3mmの " "	○		5YR 1/2 灰 褐	5YR 1/2 褐 灰	5YR 1/2 灰 褐	2/12	底部にモミ痕
159	E-15	92B ₂	NR101	—	(10.8)	(5.9)	2mm以下の砂粒含む	○		2.5Y 1/2 灰 黄	2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 白	3/12	
160	E-28	92B ₂	NR101	—	(7.6)	(4.5)	3mm以下の礫多く 含む	○		10YR 1/2 褐 灰	10YR 1/2 灰 白	10YR 1/2 褐 灰	5/12	
161	E-24	92B ₂	NR101	—	(7.4)	(5.2)	1～4mmの " "	○		2.5Y 1/2 暗 灰 黄	2.5Y 1/2 灰 黄	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	3/12	
162	E-31	92B ₂	NR101	—	—	(5.3)	1mm以下の砂粒多く 含む	○		10YR 1/2 黒	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	N 1/2 暗 灰	-/12	第三系
163	E-27	92B ₂	NR101	—	(3.2)	(4.3)	3mm大の礫含む	○		7.5YR 1/2 に よ い 褐	7.5YR 1/2 に よ い 褐	7.5YR 1/2 明 褐 灰	6/12	"
164	E-19	92B ₂	NR101	—	—	—	1～4mmの礫多く 含む	○		7.5YR 1/2 橙	7.5YR 1/2 橙	7.5YR 1/2 橙	-/12	第四系
165	E-37	92B ₂	NR101	—	—	(10.0)	3mm大の礫含む	○		10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 灰 白	3/12	胴部残存
166	E-33	92B ₂	NR101 西層	—	(15.6)	(6.5)	2mm以下の砂粒含む	○		2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 黄	2.5Y 1/2 灰 白	1/12	
167	E-36	92B ₂	NR101	—	(8.0)	(5.9)	1～3mmの礫多く 含む	○		5YR 1/2 に よ い 橙	2.5Y 1/2 淡 黄	2.5Y 1/2 灰 白	6/12	
168	E-34	92B ₂	NR101	—	(8.0)	(5.3)	2mm以下の砂粒・5 mmの礫含む	○		2.5Y 1/2 灰 黄	2.5Y 1/2 灰 黄	2.5Y 1/2 灰 黄	3/12	
169	E-32	92B ₂	NR101	(23.6)	—	(4.6)	1mm以下の砂粒多く 含む	○		10YR 1/2 灰 黄 褐	10YR 1/2 浅 黄 橙	10YR 1/2 褐 灰	3/12	第三系
170	E-35	92B ₂	NR101	(22.4)	—	(8.5)	" " " "	○		7.5YR 1/2 に よ い 褐	10YR 1/2 灰 白	10YR 1/2 褐 灰	3/12	"
171	E-38	92B ₂	NR101	—	7.8	(4.1)	砂粒含む	○		7.5YR 1/2 に よ い 橙	7.5YR 1/2 に よ い 橙	7.5YR 1/2 褐 灰	7/12	"
172	E-220	92Cb ₂	包含層	(13.2)	—	—	1～4mmの礫含む	○		10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	2/12	蓋
173	E-129	92Ca ₂	攪乱	(18.0)	—	(2.1)	1～2mmの砂粒含む	○		10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	2/12	"
174	E-41	92B ₂	包含層	—	—	—	1mm以下の砂粒含む	○		10YR 1/2 灰 黄 褐	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	2.5Y 1/2 浅 黄	-/12	"
175	E-231	92Cb ₂	包含層	—	—	(2.1)	2mm以下の砂粒含む	○		2.5Y 1/2 灰 黄	2.5Y 1/2 灰 黄	2.5Y 1/2 灰 黄	-/12	"
176	E-232	92Cb ₂	包含層	—	—	—	2mm以下の砂粒含む	○		10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	-/12	蓋
177	E-227	"	"	(9.8)	—	(0.8)	2mm以下の砂粒含む	○		2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 白	2/12	"
178	E-230	"	"	—	—	—	1mm以下の砂粒 5mmの礫	○		2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 白	-/12	"
179	E-228	"	"	—	—	—	2mm以下の砂粒 4mmの礫	○		2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 白	2.5Y 1/2 灰 白	-/12	"
180	E-229	"	"	—	—	—	1mm以下の砂粒 4mmの礫	○		"	"	"	-/12	"
181	E-130	92Ca ₂	攪乱	—	—	(1.2)	1～4mmの礫多く 含む	○		10YR 1/2 に よ い 黄 褐	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	10YR 1/2 に よ い 黄 橙	-/12	"

182	E-226	92Cb ₂	包含層	(15.4)	—	(3.7)	2mm以下の砂粒含む	○				10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 灰白	3/12	
183	E-116	92Ca ₂	土器群No2	(17.0)	—	(5.5)	1～3mmの礫含む	○	○			7.5Y 7.5/2 灰白	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	7.5Y 7.5/2 灰白	1/12	
184	E-224	92Cb ₂	包含層	(16.8)	—	(3.1)	2mm以下の砂粒含む	○				10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 灰白	8/12	
185	E-205	"	甕型トレンチ	(16.0)	—	(3.4)	3～4mmの礫含む	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 灰白	2/12	
186	E-119	92Ca ₂	包含層	18.4	—	(4.8)	2mm以下の砂粒含む	○				10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 灰白	9/12	
187	E-211	92Cb ₂	包含層	(20.8)	—	(5.7)	2mm以下の砂粒含む	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 灰白	1/12	
188	E-239	"	"	—	(7.2)	(1.7)	1～3mmの礫多く含む	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 褐灰	7.5YR 7.5/2 灰褐	3/12	
189	E-207	"	甕型トレンチ	—	(7.4)	(2.7)	1mm前後の砂粒含む	○	○			10YR 7.5/2 灰白	10YR 7.5/2 浅黄橙	10YR 7.5/2 灰白	4/12	
190	E-124	92Ca ₂	包含層	—	(7.8)	(2.7)	1～3mmの礫多く含む	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	2.5YR 7.5/2 赤黒	2.5YR 7.5/2 明赤灰	3/12	
191	E-125	92Ca ₂	"	—	(9.2)	(3.3)	1～2mmの砂粒多く含む	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 褐灰	2/12	
192	E-238	92Cb ₂	"	—	(10.0)	(2.7)	1～3mmの礫多く含む	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	2/12	
193	E-202	"	甕型トレンチ	—	8.0	(5.5)	3～5mmの礫含む	○	○			2.5YR 7.5/2 灰黄	2.5YR 7.5/2 浅黄	2.5Y 7.5/2 灰白	12/12	
194	E-203	"	土器No1	—	(8.8)	(4.0)	3mm以下の砂粒含む 7mmの礫	○	○			2.5Y 7.5/2 灰白	2.5Y 7.5/2 黄灰	2.5Y 7.5/2 灰白	6/12	
195	E-218	"	包含層	—	(8.4)	(8.3)	1mm前後の砂粒多く含む 密	○	○			2.5Y 7.5/2 黒	2.5Y 7.5/2 灰白	10YR 7.5/2 褐灰	3/12	
196	E-114	92Ca ₂	土器群No2	—	6.6	(8.4)	1～5mmの礫含む	○	○			2.5Y 7.5/2 灰白	10YR 7.5/2 黒	10YR 7.5/2 褐灰	12/12	
197	E-113	92Ca ₂	"	—	—	(5.2)	1～9mmの礫含む	○	○			7.5YR 7.5/2 にぶい橙	10YR 7.5/2 灰白	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	5/12	頸部残存
198	E-115	92Ca ₂	"	—	—	(8.0)	1～5mmの礫含む	○	○			10YR 7.5/2 浅黄橙	10YR 7.5/2 褐灰	10YR 7.5/2 浅黄橙	2/12	"
199	E-221	92Cb ₂	包含層	—	—	(4.0)	1mm前後の砂粒含む	○	○			10YR 7.5/2 灰黄褐	10YR 7.5/2 灰黄褐	10YR 7.5/2 灰黄褐	2/12	胴部残存
200	"	"	"	—	—	(4.3)	1～3mmの礫含む	○	○			10YR 7.5/2 灰黄褐	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 浅黄橙	2/12	
201	E-128	92Ca ₂	包含層	—	—	(8.7)	3～5mmの礫含む	○	○			2.5Y 7.5/2 灰白	2.5Y 7.5/2 灰白	2.5Y 7.5/2 黄灰	-1/12	
202	E-225	92Cb ₂	"	(21.4)	—	(5.1)	2mm以下の砂粒含む	○	○			2.5Y 7.5/2 灰白	2.5Y 7.5/2 淡黄	2.5Y 7.5/2 灰白	1/12	
203	E-212	92Cb ₂	"	(18.1)	—	(2.8)	3mm以下の砂粒含む	○	○			7.5YR 7.5/2 にぶい褐	7.5YR 7.5/2 にぶい橙	7.5YR 7.5/2 明褐灰	2/12	
204	E-132	92Ca ₂	攪乱	—	—	(4.2)	3～5mm大の礫多く含む	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	-1/12	
205	E-117	92Ca ₂	甕型トレンチ	—	—	(6.0)	3mm大の礫含む	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	-1/12	
206	E-242	92Cb ₂	包含層	—	(8.0)	(6.2)	1～5mmの礫多く含む	○	○			5YR 7.5/2 にぶい橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	7/12	
207	E-40	92B ₂	包含層	—	(9.2)	(4.5)	2mm以下の砂粒含む	○	○			2.5YR 7.5/2 灰白	2.5Y 7.5/2 淡黄	2.5Y 7.5/2 灰白	2/12	
208	E-223	92Cb ₂	包含層	—	(5.8)	(5.5)	6mm大の礫含む	○	○			7.5YR 7.5/2 灰褐	7.5YR 7.5/2 灰褐	7.5YR 7.5/2 灰褐	4/12	
209	E-43	92B ₂	検II	—	(6.8)	(3.7)	砂粒含む 粗	○	○			7.5YR 7.5/2 明褐灰	7.5YR 7.5/2 褐灰	7.5YR 7.5/2 褐灰	3/12	
210	E-236	92Cb ₂	包含層	—	(9.4)	(4.2)	1～3mmの礫多く含む	○	○			10YR 7.5/2 褐灰	10YR 7.5/2 灰黄褐	10YR 7.5/2 黒褐	2/12	
211	E-237	92Cb ₂	"	—	(7.2)	(3.8)	1～2mmの砂粒多く含む	○	○			2.5Y 7.5/2 灰白	2.5Y 7.5/2 黒	2.5Y 7.5/2 灰白	3/12	
212	E-131	92Ca ₂	検II	—	(9.2)	(2.6)	1～3mm礫多く含む	○	○			2.5Y 7.5/2 暗灰黄	2.5Y 7.5/2 浅黄	2.5Y 7.5/2 にぶい黄	3/12	
213	E-241	92Cb ₂	包含層	—	(7.0)	(4.0)	1～3mmの礫多く含む 密	○	○			7.5YR 7.5/2 にぶい褐	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	3/12	
214	E-205	92Cb ₂	甕型トレンチ	—	(7.0)	(3.5)	1～3mmの礫多く含む	○	○			2.5Y 7.5/2 黄灰	2.5Y 7.5/2 黄灰	2.5Y 7.5/2 黄灰	4/12	
215	E-217	92Cb ₂	包含層	—	(7.0)	(3.5)	1mm前後の砂粒多く含む	○	○			10YR 7.5/2 黒褐	10YR 7.5/2 褐灰	10YR 7.5/2 褐灰	3/12	
216	E-123	92Ca ₂	"	—	(6.8)	(4.3)	1～3mmの礫多く含む 粗	○	○			10YR 7.5/2 灰黄褐	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	9/12	
217	E-240	92Cb ₂	"	—	(9.6)	(4.3)	1mm前後の砂粒多く含む	○	○			2.5Y 7.5/2 黒褐	2.5Y 7.5/2 黄灰	2.5Y 7.5/2 灰白	4/12	
218	E-215	92Cb ₂	"	—	—	(5.1)	5mm大の礫含む	○	○			7.5YR 7.5/2 明赤褐	2.5YR 7.5/2 明赤褐	2.5YR 7.5/2 脳灰	1/12	胴部残存、第II系
219	E-39	92B ₂	"	(18.0)	—	(4.0)	1mm以下の砂粒多く含む 粗	○	○			7.5YR 7.5/2 にぶい褐	7.5YR 7.5/2 にぶい褐	7.5YR 7.5/2 褐灰	2/12	第III系
220	E-214	92Cb ₂	"	—	—	—	1mm以下の砂粒含む	○	○			2.5Y 7.5/2 灰白	2.5Y 7.5/2 灰白	N 41 灰	-1/12	"
221	E-234	92Cb ₂	"	—	—	—	"	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 褐灰	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	-1/12	"
222	E-42	92B ₂	検II	—	—	(5.3)	砂粒含む 粗	○	○			10YR 7.5/2 にぶい橙	10YR 7.5/2 にぶい橙	7.5YR 7.5/2 褐灰	-1/12	"
223	E-213	92Cb ₂	包含層	—	—	—	1mm以下の砂粒含む	○	○			10YR 7.5/2 灰黄褐	10YR 7.5/2 浅黄橙	10YR 7.5/2 褐灰	-1/12	"
224	E-201	92Cb ₂	甕型トレンチ	—	(11.6)	(3.6)	3mm大の礫含む	○	○			10YR 7.5/2 灰黄褐	10YR 7.5/2 褐灰	N 6 灰	4/12	"
225	E-122	92Ca ₂	包含層	—	(8.2)	(5.2)	1～3mmの礫多く含む	○	○			2.5Y 7.5/2 灰黄	2.5Y 7.5/2 灰白	2.5Y 7.5/2 灰黄	3/12	"
226	E-235	92Cb ₂	包含層	—	(9.4)	(3.1)	1mm以下の砂粒含む	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 褐灰	1/12	"
227	E-44	92B ₂	検II	—	(6.4)	(4.1)	砂粒含む 粗い	○	○			7.5YR 7.5/2 灰白	7.5YR 7.5/2 にぶい橙	7.5YR 7.5/2 褐灰	3/12	"
228	E-126	92Ca ₂	包含層	—	(7.0)	(3.7)	1～3mmの礫多く含む	○	○			10YR 7.5/2 灰黄褐	10YR 7.5/2 灰白	10YR 7.5/2 灰白	9/12	"
229	E-209	92Cb ₂	包含層	—	—	—	2mm以下の砂粒含む	○	○			10YR 7.5/2 黒	10YR 7.5/2 褐	10YR 7.5/2 灰白	-1/12	第IV系
230	E-233	92Cb ₂	"	—	—	—	2mm以下の砂粒多く含む	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 灰白	-1/12	"
231	E-208	92Cb ₂	包含層	—	—	—	2mm以下の砂粒含む 5mmの礫	○	○			5YR 7.5/2 暗赤褐	5YR 7.5/2 にぶい赤褐	5YR 7.5/2 赤褐	-1/12	"
232	E-210	92Cb ₂	包含層	—	—	—	2mm以下の砂粒含む	○	○			10YR 7.5/2 にぶい黄橙	10YR 7.5/2 にぶい黄橙	2.5Y 7.5/2 灰白	-1/12	"

233	E-204	92Cb ₂	南壁トレンチ	—	—	—	3mm以下の砂粒含む 8mmの礫	○	2.5Y 7/2 灰黄	2.5Y 7/2 灰黄	2.5Y 7/2 灰黄	—/12	第IV系
234	E-203	92Cb ₂	南壁トレンチ	—	—	—	極めて密 0.5mm程度の 砂粒をわずかに含む	○	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 褐灰	—/12	第V系
235	E-5	92Aa ₂	検III	—	—	—	2mm以下の砂粒含む 赤色砂粒目立つ	○	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	—/12	"
236	E-118	92Ca ₂	包含層	—	—	—	砂粒多く含む	○	10Y R 7/2 褐灰	10Y R 7/2 褐灰	5PB 7/2 青黒	—/12	赤彩 " 最大径 (31.0)
237	E-222	92Cb ₂	包含層	長径 6.2	短径 5.8	—	2mm以下の砂粒含む	○	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	10Y R 7/2 にふい黄橙	12/12	加工円盤

表8 月縄手遺跡II 遺物観察表 (I期石器)

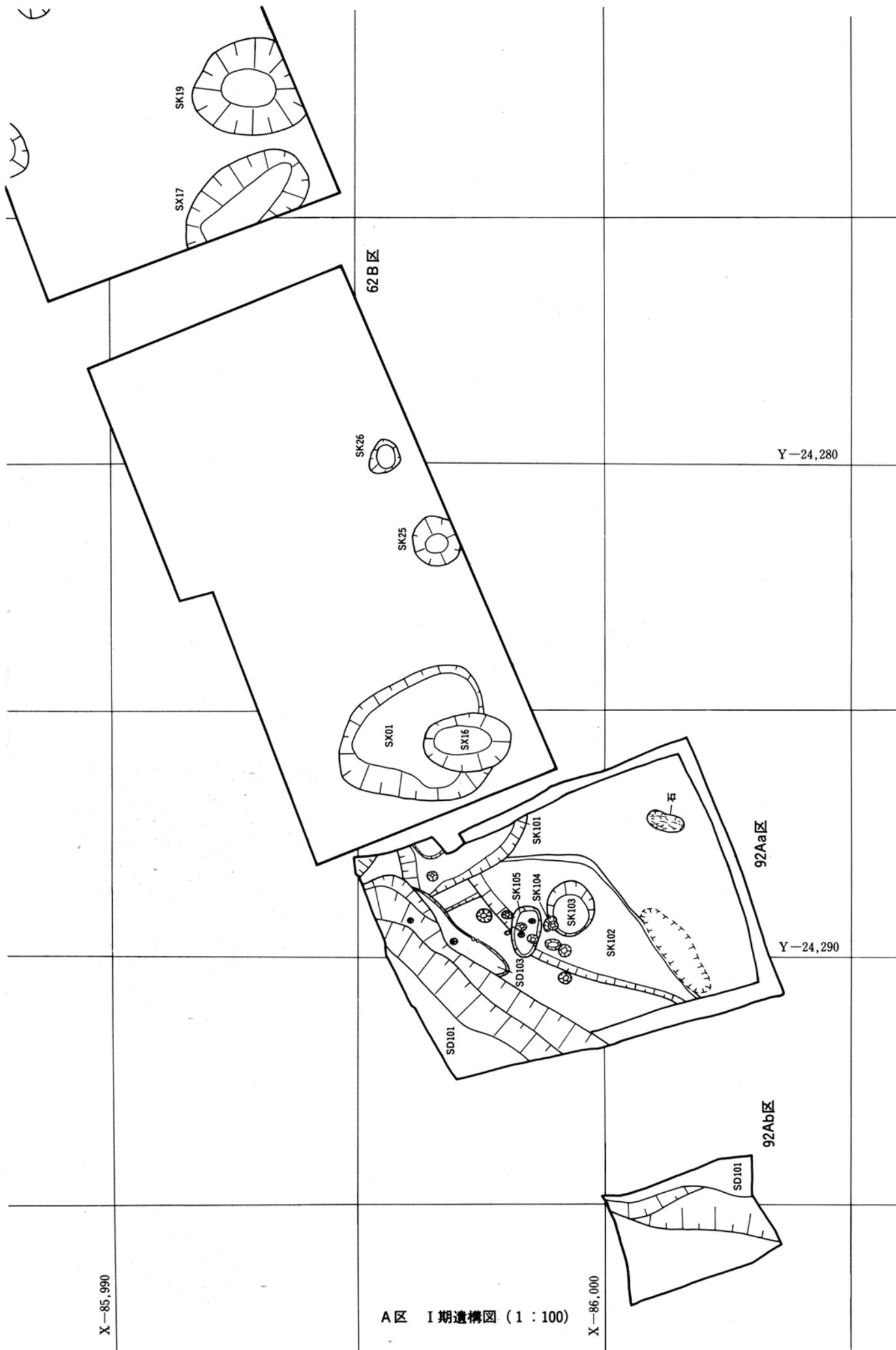
石器番号	登録番号	調査区	出土遺構	種別	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	岩質	備考
1	S-1	92Cb ₂	SK121	石鏃	1.5	1.4	0.4	0.7	下呂石	
4	S-2	92Ca ₂	下面包含層	石鏃	(0.4)	1.7	1.6	10.0	"	
5	S-3	"	"	"	4.6	1.5	0.5	4.8	"	
6	S-4	92Cb ₂	"	搔器	(3.8)	(7.8)	(1.0)	39.7	コハク	
7	S-5	"	SD101上層	"	3.5	5.8	0.5	12.8	下呂石	
8	S-6	"	下面包含層	叩き石	6.3	4.2	2.9	112.9	チャート	コアの転用か?
9	S-7	92Ca ₂	"	砥石	9.0	3.9	1.1	34.0	石英斑岩?	
10	S-8	92Cb ₂	SK103	クサビ形石器	2.9	2.3	0.5	8.3	下呂石	
11	S-9	"	下面包含層	"	2.5	3.2	0.7	4.7	"	
12	S-10	92Ca ₂	"	"	2.7	3.4	0.8	14.0	"	
13	S-11	92Cb ₂	"	粗製剥片石器	7.7	7.8	1.7	132.6	石英斑岩	刃部のみ部分的にみかく

表9 月繩手遺跡II 遺物観察表 (II期土器)

土器番号	E番号	調査区	出土遺構	口径 (復元径) cm	底径 (復元径) cm	器高 (残存高) cm	胎土	焼成				色調			残存率	備考
								堅致	良好	やや甘い	甘い	外面	内面	断面		
1	E-243	92Ca	SK58	13.0	—	(18.0)	密(直径2mm以下の砂礫長石雲母含む)		○			暗茶灰色 (体部煤付着)	淡茶灰色	茶褐色	9/12	
2	E-244	92Ca	SK58	(10.0)	—	(17.2)	密(直径2mm以下の砂礫含む)		○			赤黄灰色	淡茶灰色	淡黄灰色	1/12	
3	E-245	92Ca	SK58	—	—	(4.7)	粗(直径5mm以下の礫含む及び砂粒をかなり含む)		○			" "	" "	黄茶灰色	12/12	脚上部残存(径4.0)
4	E-246	92Ca	SK58	25.4	(14.2)	(23.0)	密		○			赤黄灰色	淡赤黄灰色	淡黄灰色	1/12	
5	E-247	92Ca	SK24内 No.4	(16.0)	—	(3.8)			○			淡茶 "	黄 灰色	" "	2/12	
6	E-248	92Ca	SK24内 No.4	(16.0)	—	(3.4)									2/12	
7	E-249	92Ca	SK24内 No.4	—	—	(4.5)									2/12	口縁部下半残存 (径8.5)
8	E-250	92Cb	SD74	—	—	(4.3)									5/12	" " " (径7.0)
9	E-251	"	"	(20.6)	—	(4.3)									2/12	
10	E-252	92Ca	SX04	(18.0)	—	(3.5)									1/12	
11	E-253	92Ca	SX04	13.2	—	(4.7)									10/12	
12	E-254	92Ca	SX04	(13.4)	—	(4.8)									1/12	
13	E-255	92Ca	SX04	(19.6)	—	(5.3)									3/12	
14	E-256	92Ca	SX04	—	(10.3)	(4.2)									2/12	
15	E-257	92Ca	SX04	11.5	—	(4.3)									7/12	
16	E-258	92Ca	SX04	—	—	(4.3)									12/12	脚上部残存 頸部径2.6
17	E-259	92Ca	SX04	—	—	(5.2)									12/12	" 頸部径3.2
18	E-260	92Ca	SX04	—	3.1	(4.5)									12/12	
19	E-261	92Ca	SX04	(13.7)	—	(6.9)									2/12	
20	E-262	92Ca	SX04	—	7.4	(4.9)									12/12	
21	E-263	92Ca	SX04	20.0	(12.0)	13.0									8/12	
22	E-264	92Ca	SX04	(19.8)	(15.2)	(15.0)									7/12	底部残存
23	E-265	92B	SX01	(16.0)	—	(3.5)									2/12	
24	E-266	92B	SX01	(12.0)	—	(4.1)									2/12	
25	E-267	92B	SX01	(15.0)	—	(3.2)									2/12	
26	E-268	92B	SX01	—	9.0	(5.7)									7/12	
27	E-269	92B	SX01	—	(12.5)	(8.8)									3/12	
28	E-270	92B	SX01	—	—	(7.7)									12/12	頸部残存
29	E-271	92B	SX01	(14.5)	—	(3.0)									2/12	
30	E-275	92B	SX01	(15.2)	—	(4.3)									2/12	
31	E-273	92B	SX01	(17.0)	—	(5.6)									1/12	
32	E-274	92B	SX01	(15.2)	—	(3.3)									1/12	
33	E-275	92B	SX01	(16.0)	—	(3.0)									1/12	
34	E-276	92B	SX01	—	6.5	17.5	やや密(直径4mm以下の礫及び砂粒含む)		○			黄茶灰色	黒褐色	やや密	12/12	
35	E-277	92B	SX01	—	(7.0)	(23.3)									4/12	
36	E-278	92B	SX01	17.9	12.0	13.8	密(直径1.5mm以下の砂粒多く含む)		○			赤茶褐色	赤茶灰色	黄赤灰色	9/12	
37	E-279	92B	SX01	(15.4)	—	(4.7)									2/12	
38	E-280	92B	SX01	(14.3)	—	(5.0)									2/12	
39	E-281	92B	SX01	—	—	(5.9)									12/12	脚上部残存 頸部径2.6
40	E-282	92B	SX01	(20.8)	—	(5.5)									2/12	
41	E-283	92B	SX01	14.8	10.3	12.2	やや密(直径2mm以下の礫多く含む)		○			黄赤灰色	黄灰色	黄茶灰色	10/12	
42	E-284	92B	SX01	—	(10.8)	(6.3)									2/12	
43	E-285	92B	SX01	—	—	(6.6)									12/12	
44	E-286	92B	SX01	—	—	(7.2)									12/12	脚上部残存 頸部径3.1
45	E-287	92B	SX01	—	(10.2)	(2.4)									2/12	
46	E-288	92B	SX01	16.1	—	5.4	密(直径2mm以下の砂粒多く含む)		○			赤黄灰色	赤茶灰色		9/12	
47	E-289	92B	SX01	(11.0)	—	(5.1)									1/12	頸部残存 頸部径(7.9)
48	E-290	92B	SX01	—	3.3	(4.8)									7/12	

跡遺手繩月
版図構遺

(1 : 100)



X-85,990

A区 I期遺構図 (1:100)

X-86,000

Y-24,280

Y-24,290

92Aa区

92Ab区

SD101

SD101

SK101

SK102

SK103

SK104

SK105

SX01

SX16

SK25

SK26

SX17

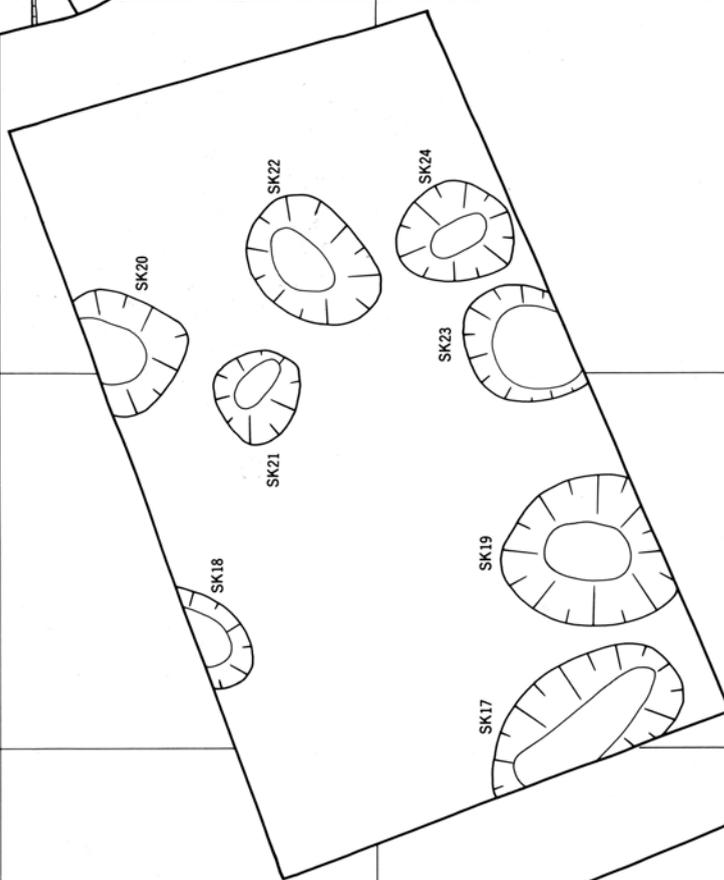
SK19

62B区



Y-24,260

Y-24,270



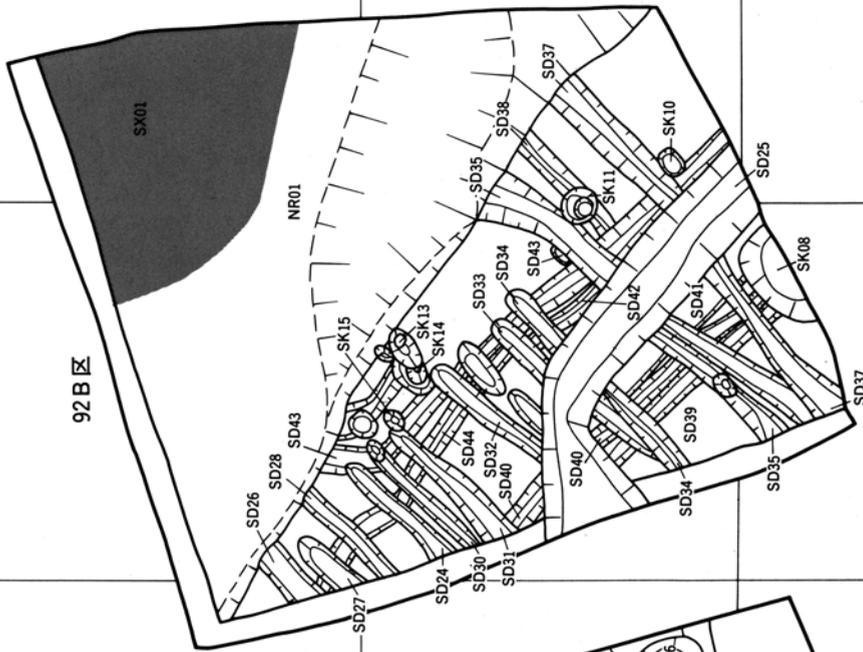
Y-24,280

X-85,990



X-85,980

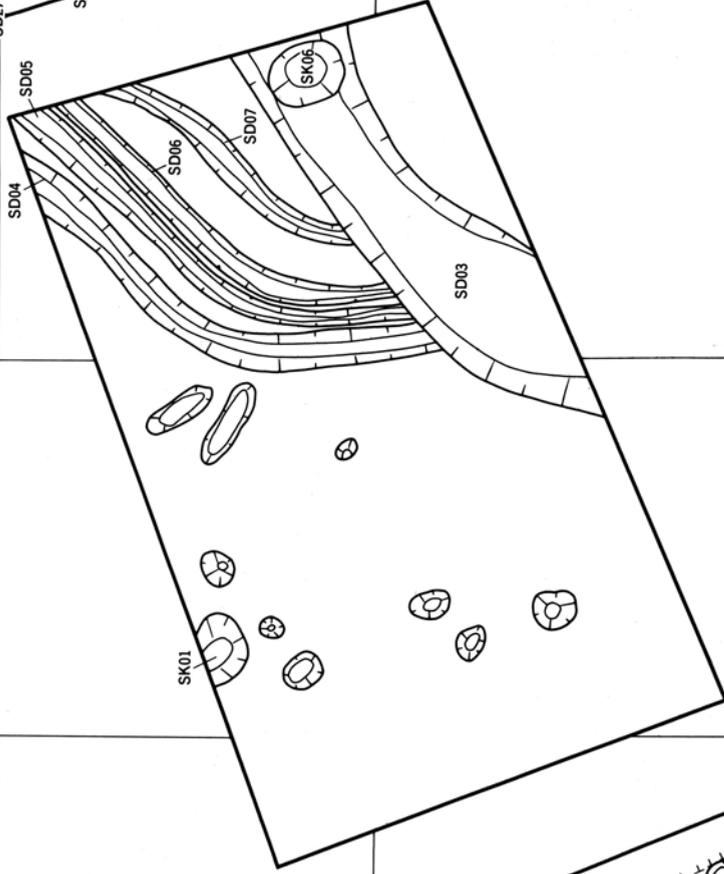
B区 I期遺構図 (1:100)



92B区

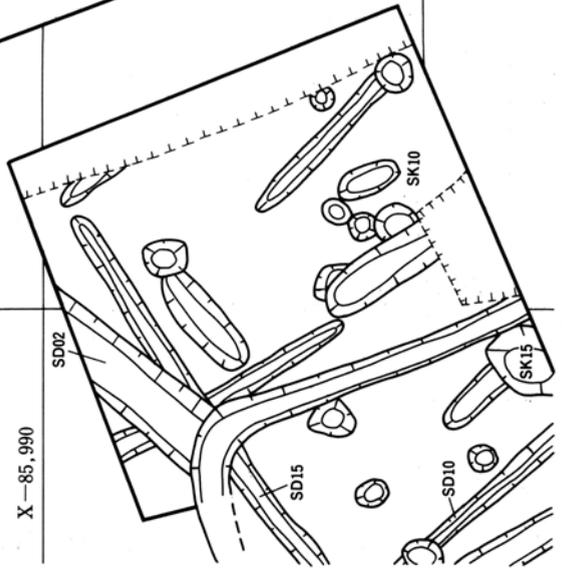
Y-24,260

Y-24,270



62B区

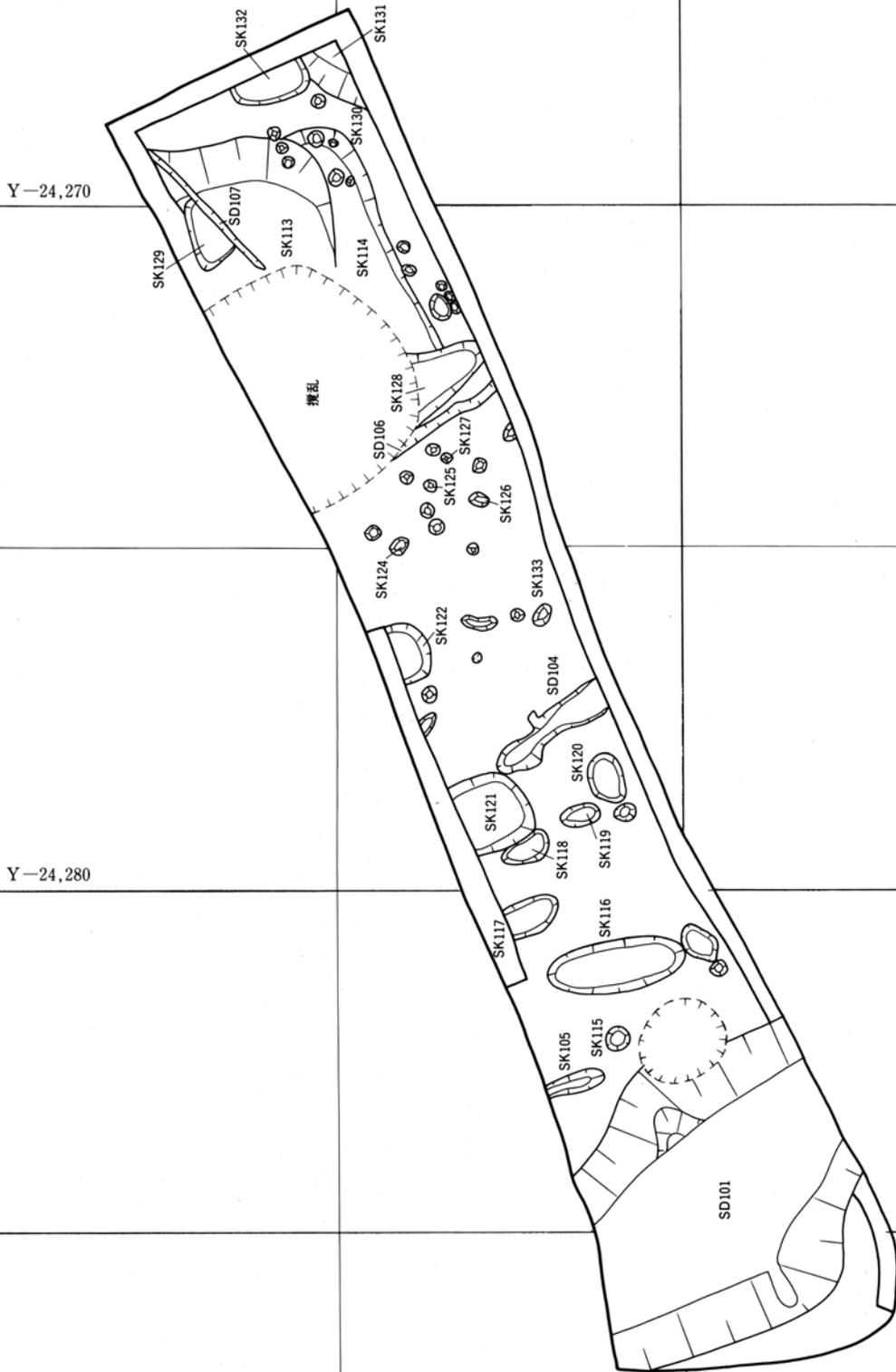
Y-24,280



X-85,990

X-85,980

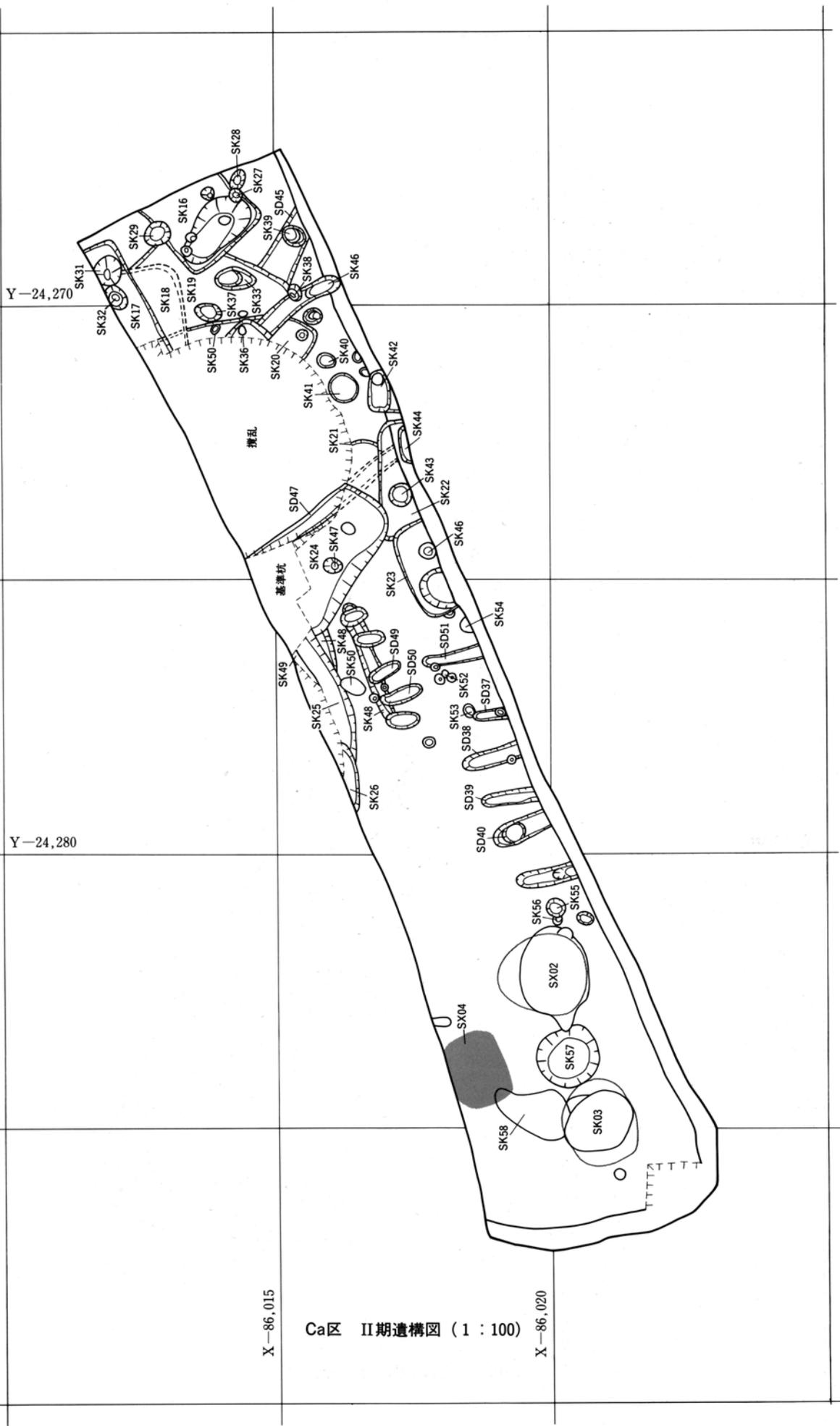
B区 II期遺構図 (1:100)

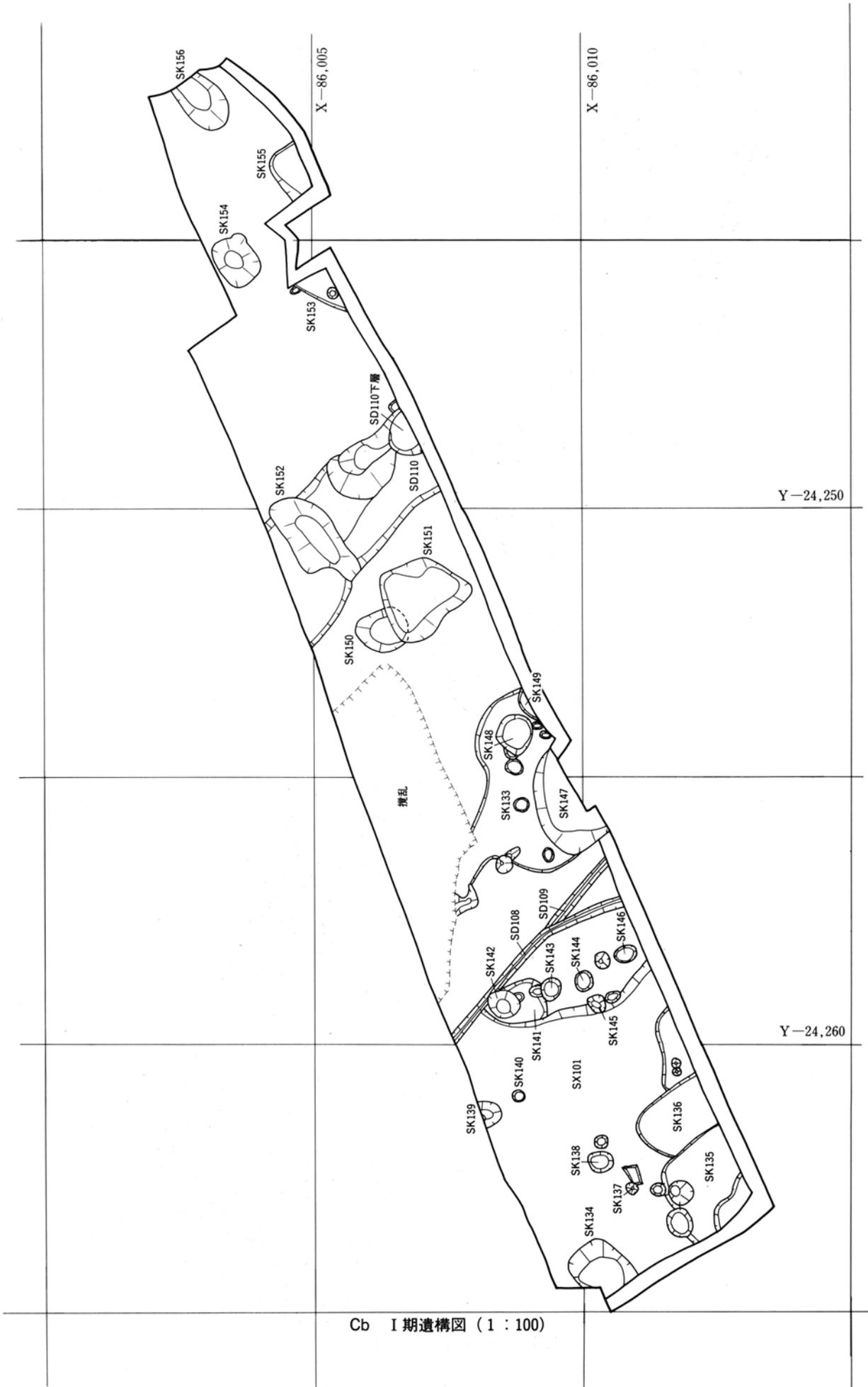


X-86,015

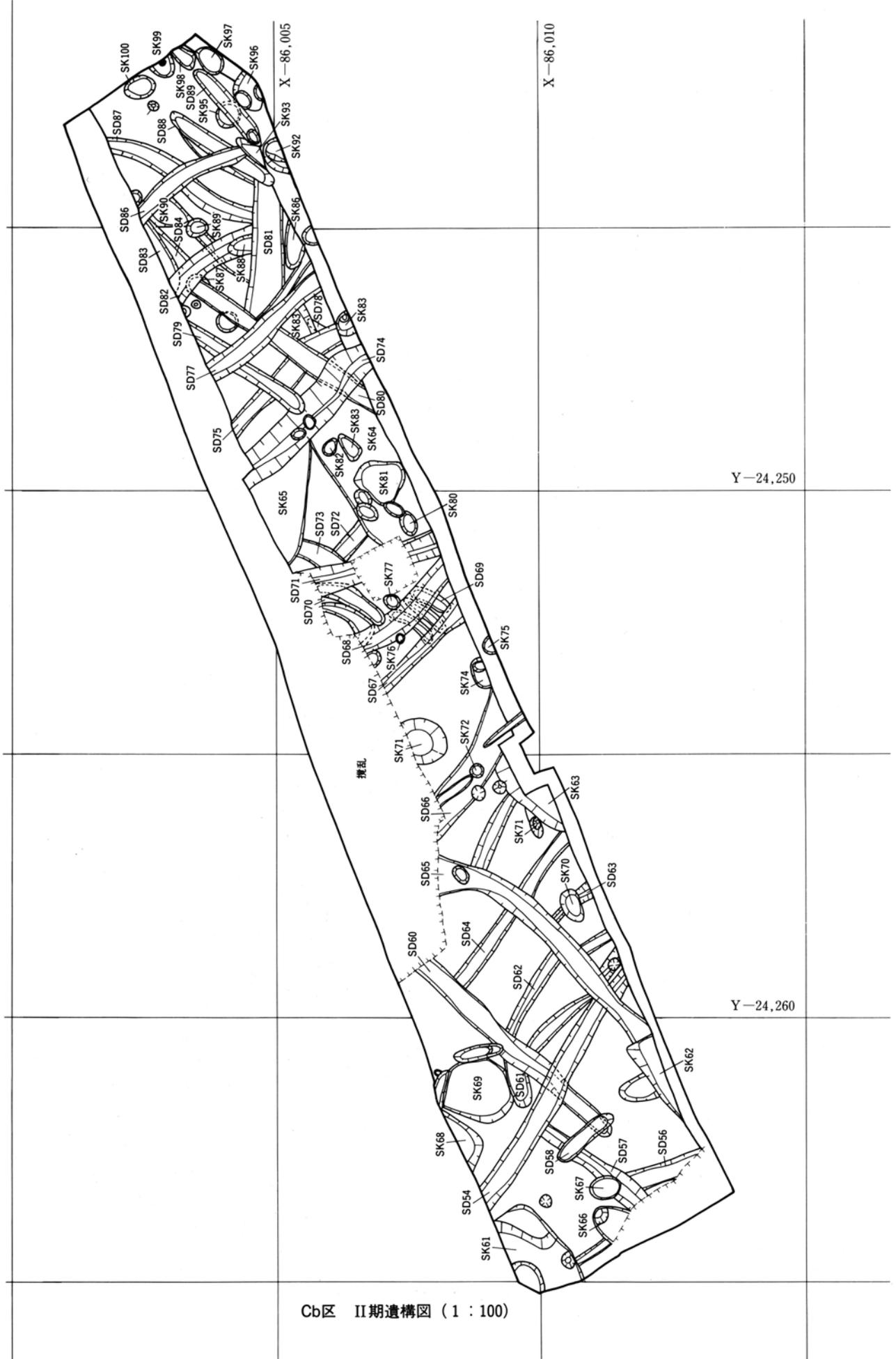
Ca区 I期遺構図 (1:100)

X-86,020





Cb I期遺構図 (1:100)



Cb区 II期遺構図 (1:100)

貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ
月繩手遺跡Ⅱ
写真図版

A区
全景
東から



A区
SD01~03
東から



A区
SD03
播鉢出土状況
東から





B区
西半部全景
南東から



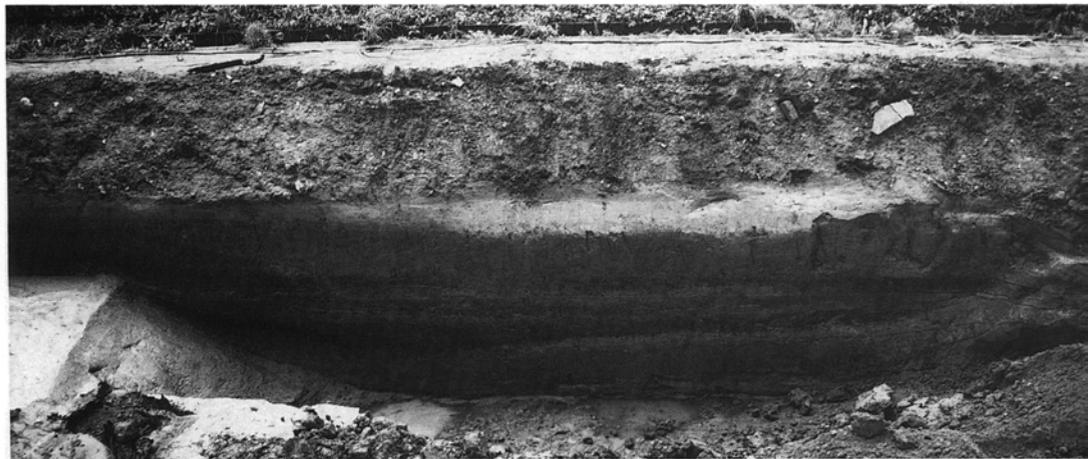
B区
SK04
東から



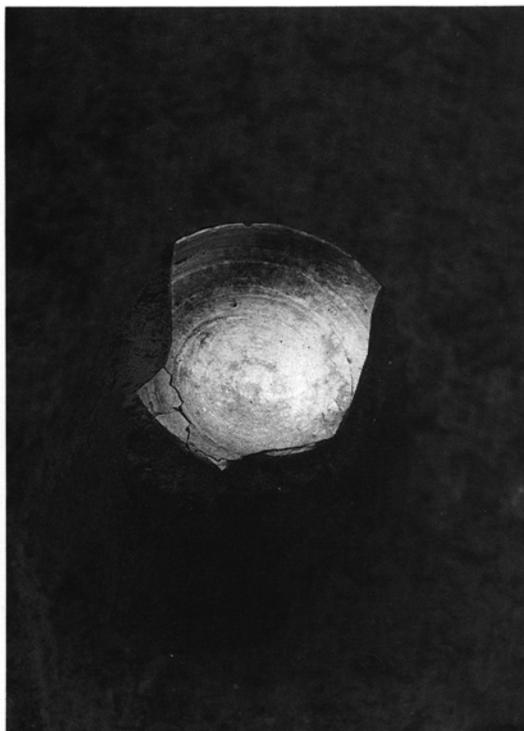
B区
SD04
南東から



B区
NR02
東から



B区
NR02
土層堆積状況
南から



(右) B区
NR02
S字甕出土状況



(左) B区
NR02
灰釉陶器出土状況



13



19



12



36



25



24



28



27



37



41



31



39



44



32



45



42





(上左) SD07
東から



(下左) SD07
B-B'ベルト
土層堆積状況
西から



(右) 全景
東から



(上) SD01土層堆積状況 (北から)



(下) NR02土層堆積状況 (南西から)



NR02 東から



3



4



13



18



20



21



32



34



36



25



26

C区
出土遺物

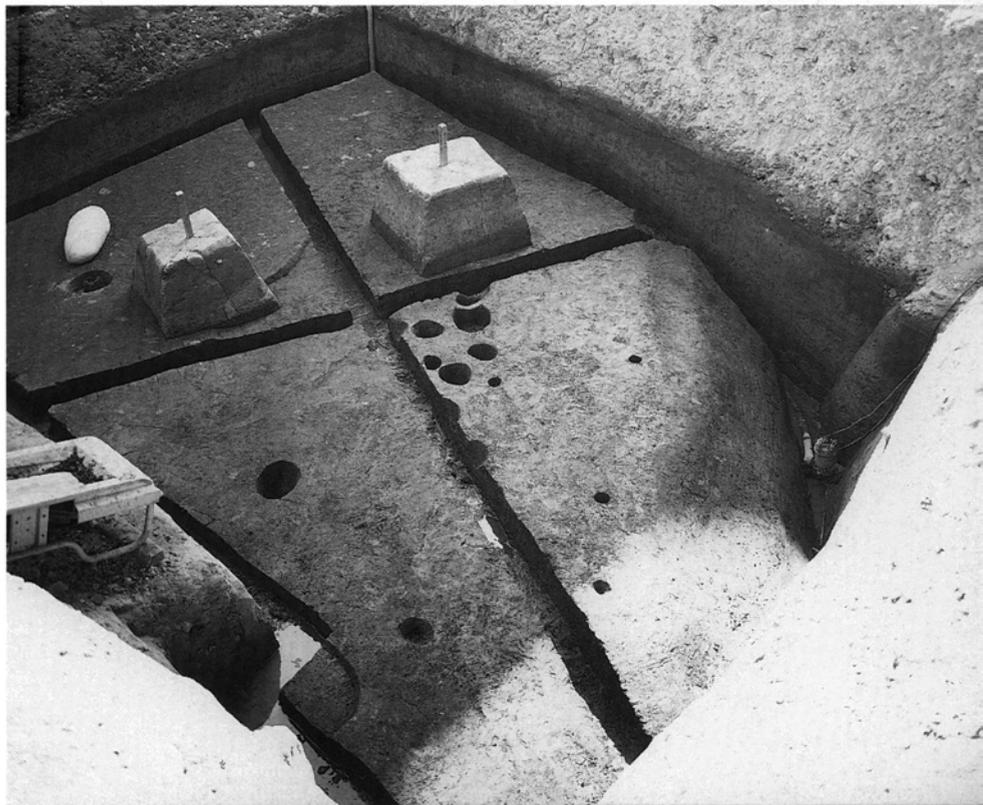
Aa・Ab区
全景
北東から



Aa区
第2遺構面全景
北東から



Aa区
第3遺構面全景
北東から

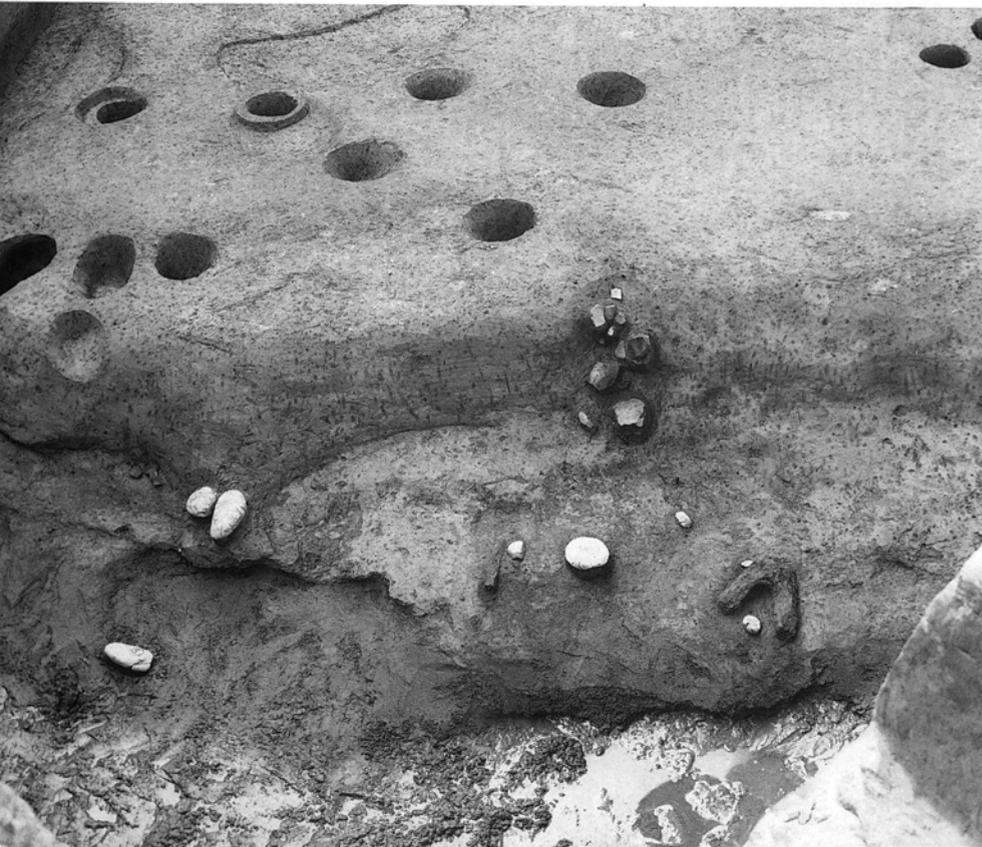




Ab区
全景
南西から



B区
全景
北西から



B区
NR101西肩
土器出土状況
北東から

Ca・Cb区
全景
南西から

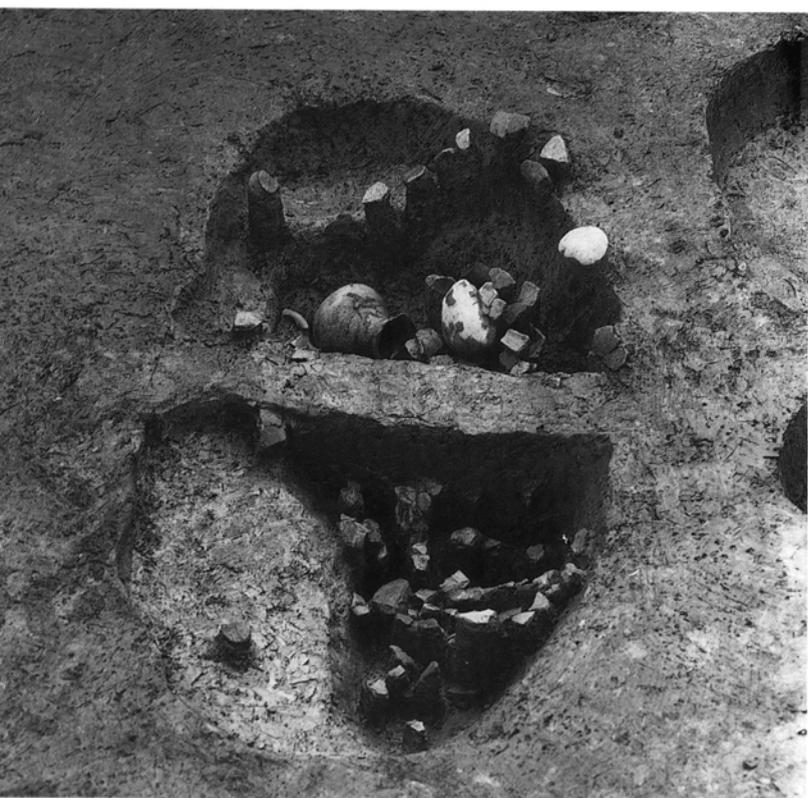


Ca区
全景
南西から

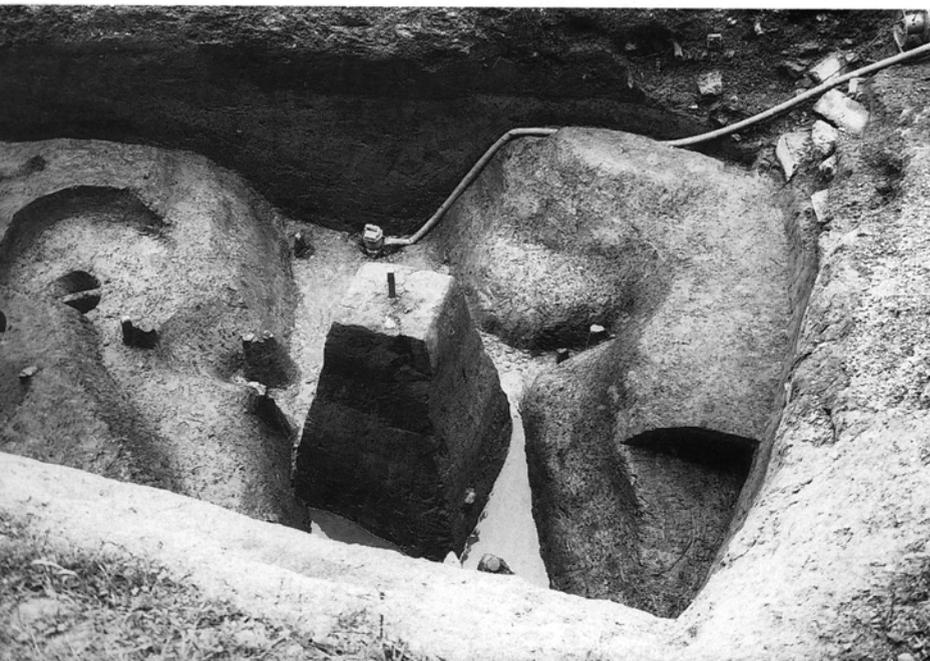




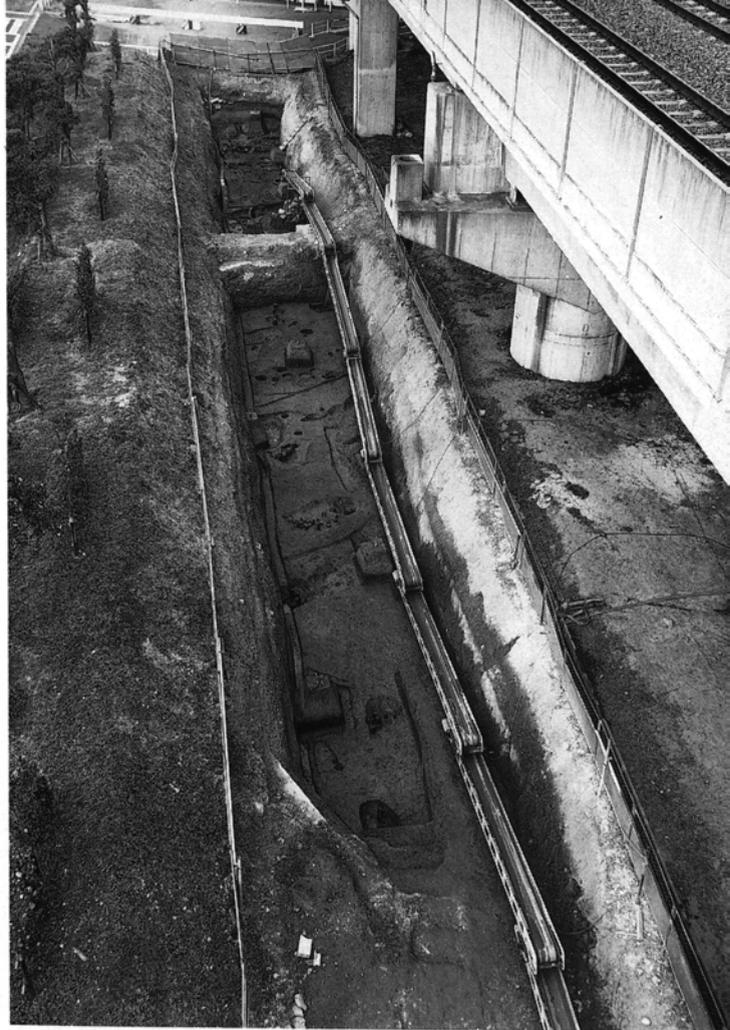
Ca区
SK113・114周辺
北東から



Ca区
SK116
北から



Ca区
SD101
北西から



Cb・Ca区
全景
北東から



Cb区
全景
北東から



Cb区
SK133周辺
北西から



Cb区
SK148
北から



Cb区
SK134
北西から

Cb区
SK150・151
SD110周辺
北から



Cb区
SK150・151
南西から

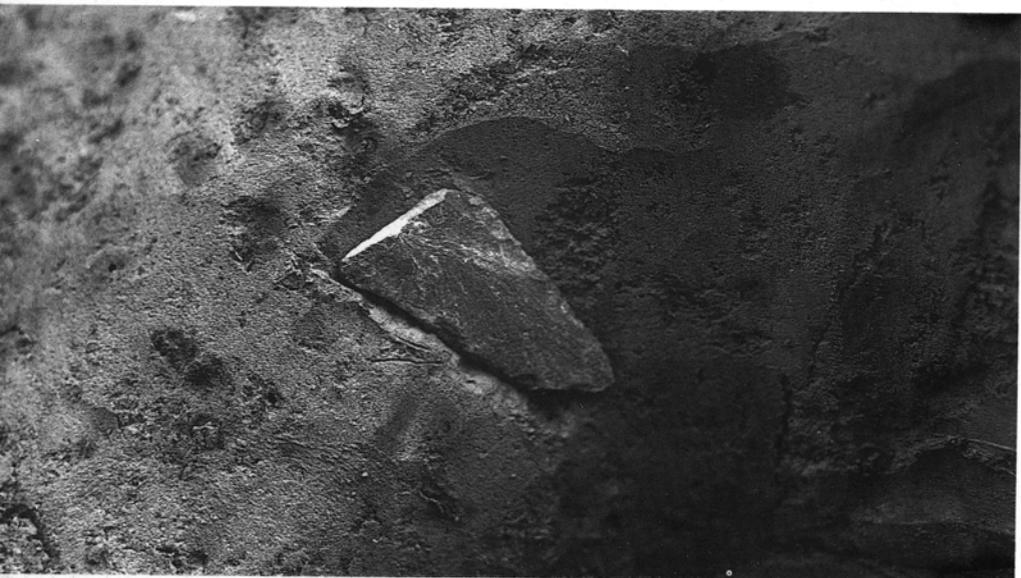


Cb区
SK152





Cb区
SD110
北西から



Cb区
SD110
石器出土状況
北から



Cb区
SK154
南東から

Aa・Ab区
全景
北東から



Aa区
全景
北東から



Aa区
全景
南東から

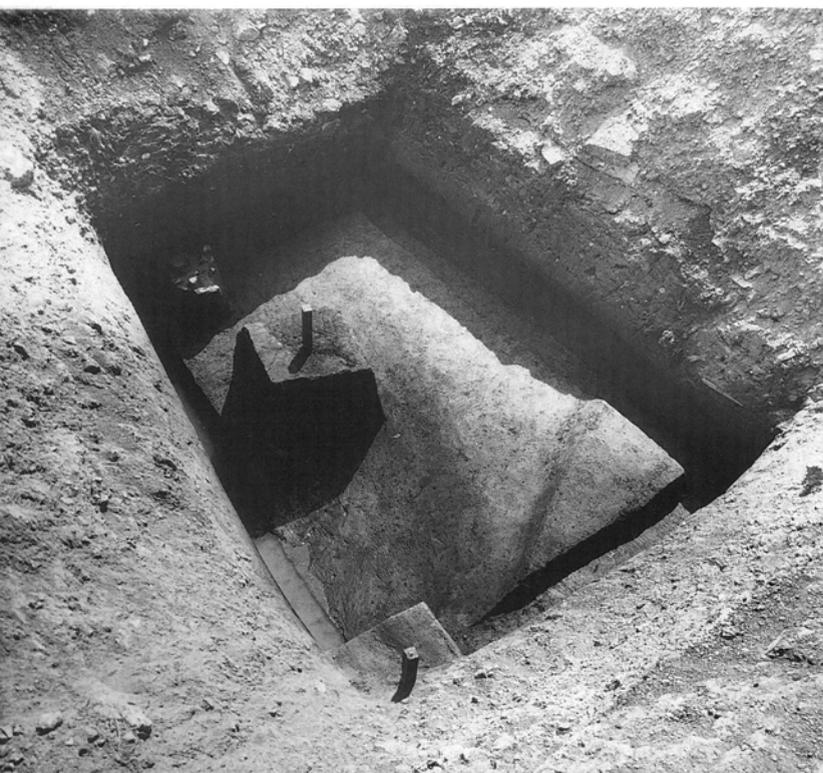




Aa区
SD01
北東から

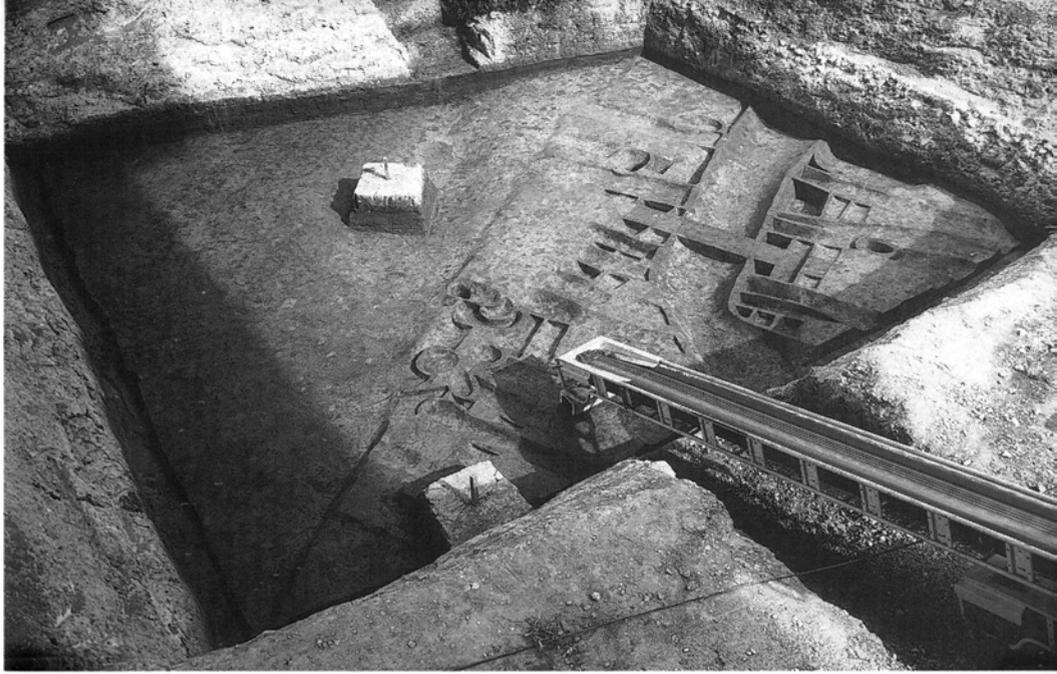


Aa区
SK01
断ち割り状況
南から

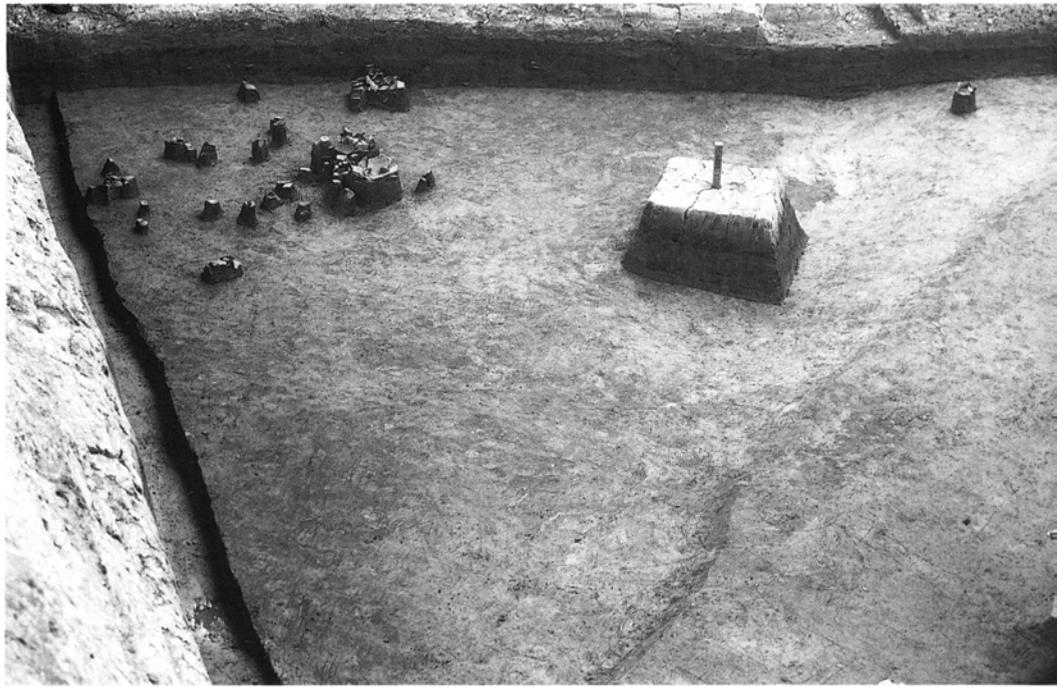


Ab区
全景
南東から

B区
全景
北西から



B区
NR01
北西から



B区
SX01
土器出土状況
北西から



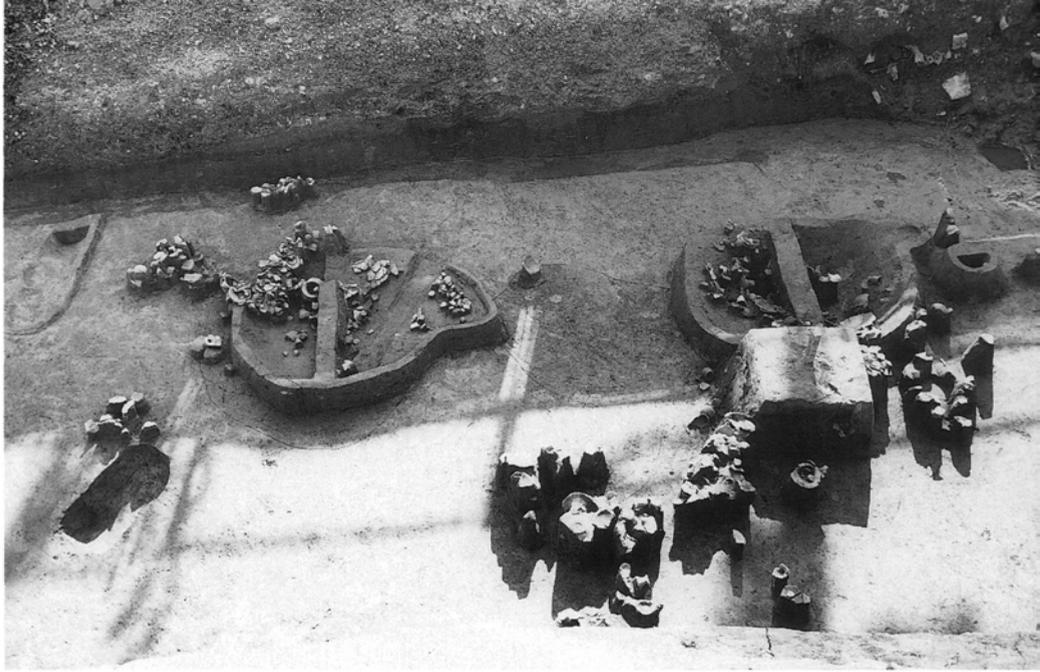


Ca区
全景
北東から

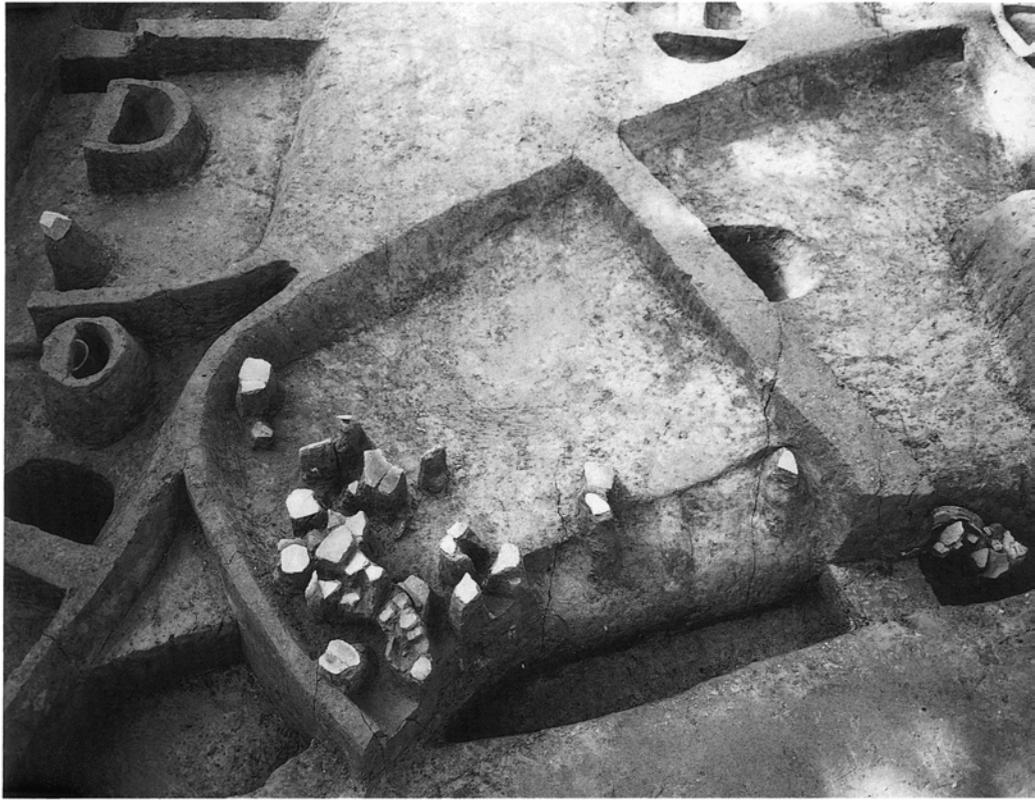


Ca区
東半部
南西から

Ca区
SK58・SX02~04
土器出土状況
北西から

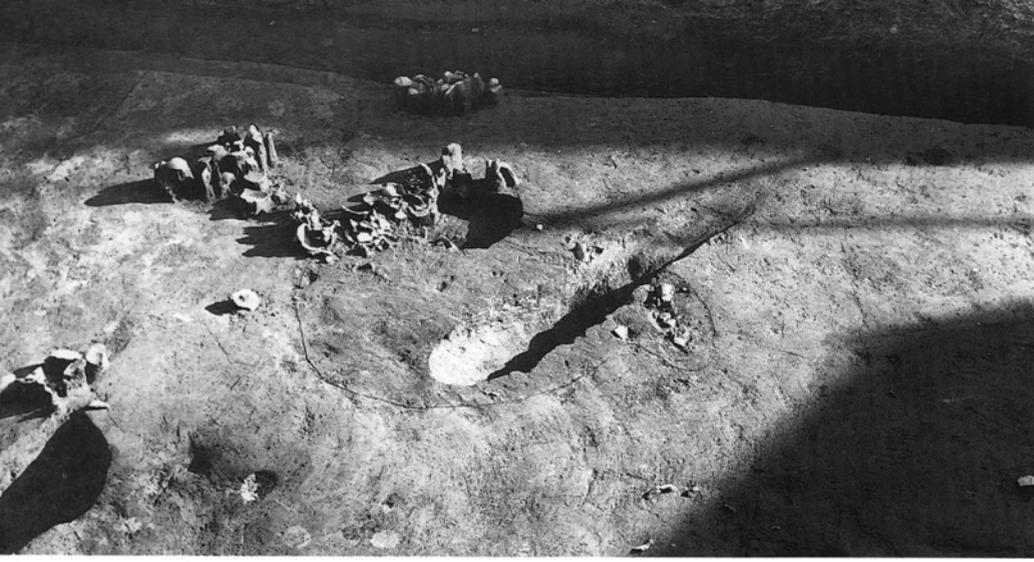


Ca区
SK24
北西から



Ca区
SK58
北東から





Ca区
SX02
検出状況
北西から



Ca区
SX02
全景
東から



Ca区
SX02
土層堆積状況

Ca区
SX02
最下層遺物出土状況
東から



Ca区
SX03
検出状況
南西から



Ca区
SX03
全景
西から





Ca区
SX03
土層堆積状況
西から

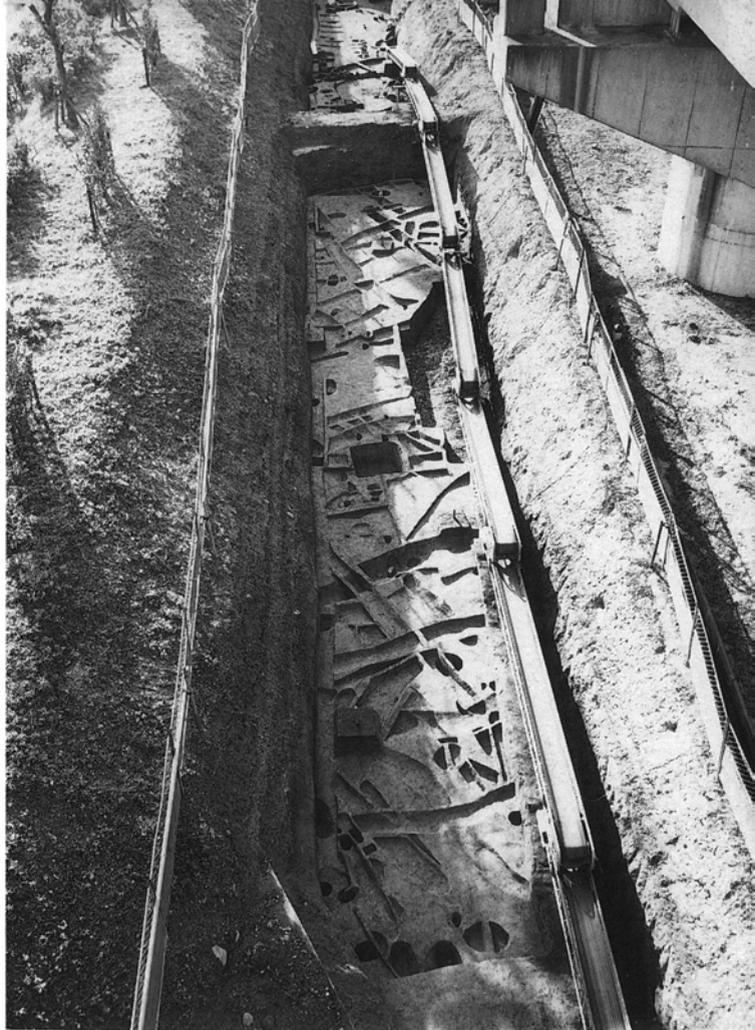


Ca区
SX03
遺物出土状況
西から

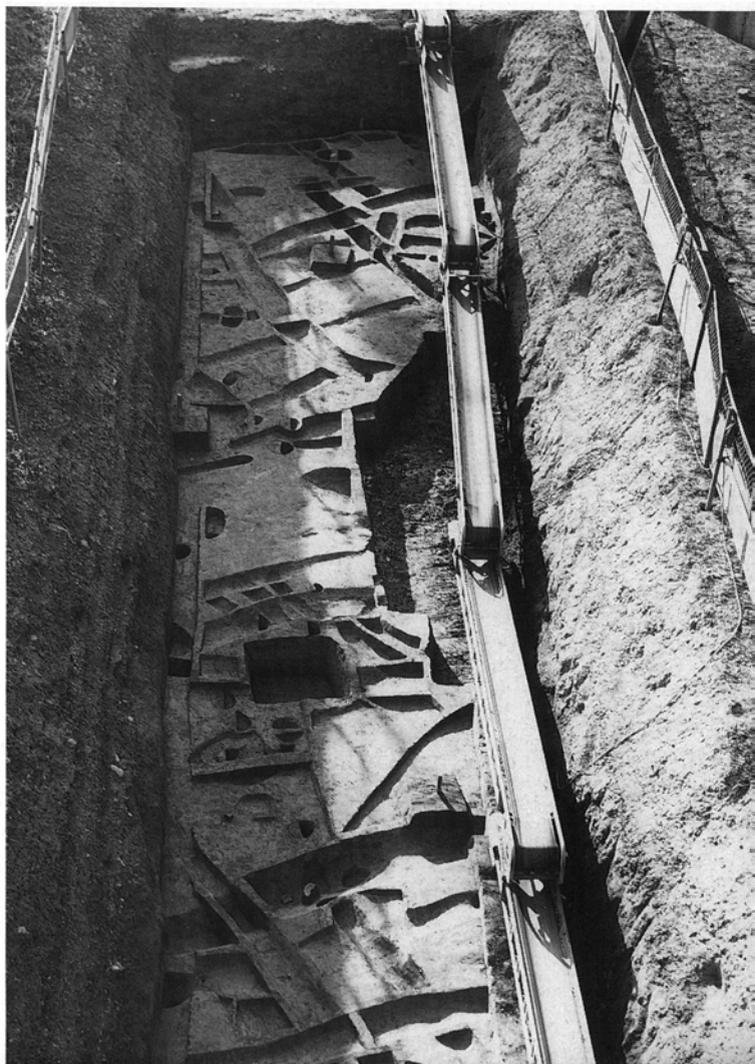


Ca区
SX03
最下層土器出土状況
西から

Cb・Ca区
全景
北東から



Cb区
西半部
北東から

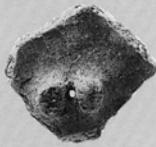




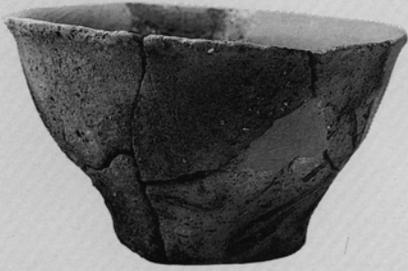
Cb区
東半部
北東から



Cb区
SK99・156
重複状況
南西から



28



37



38



46



48



31



32



39



43



8



26



51

SK114
SK117



62



63

SK134



69



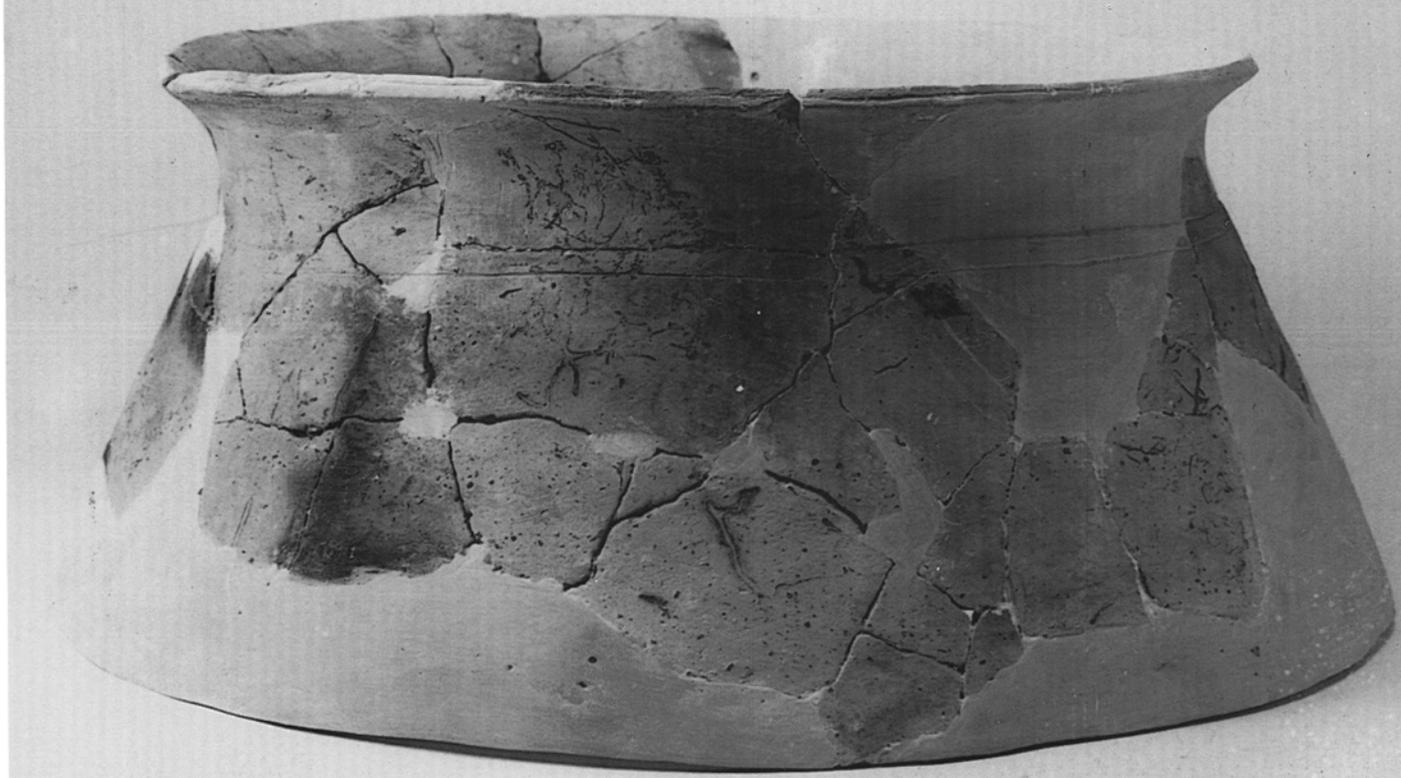
68

SK147



83

SK148
SK151



SK152

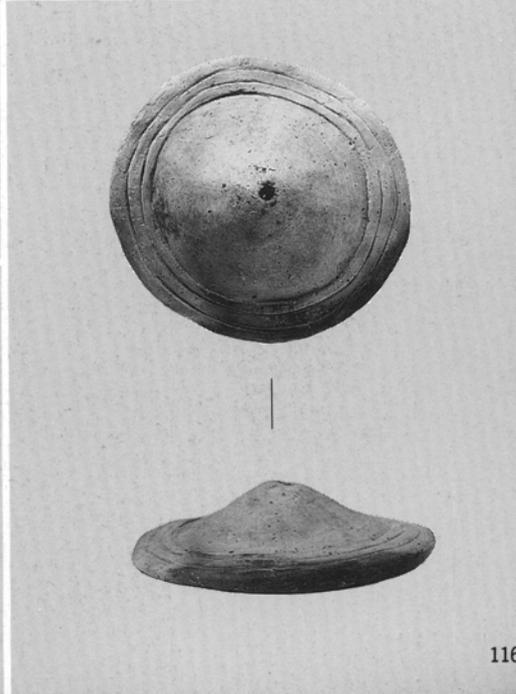
87



96



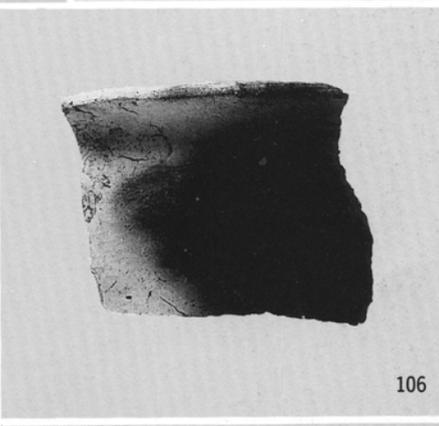
94



116

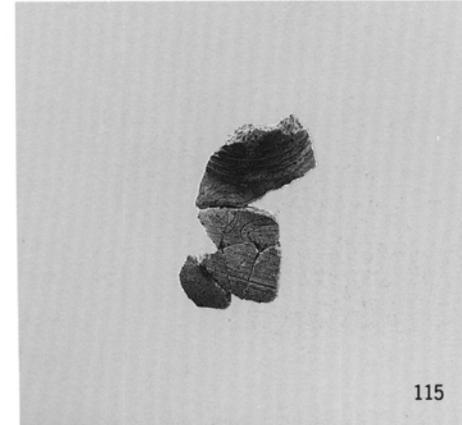


97

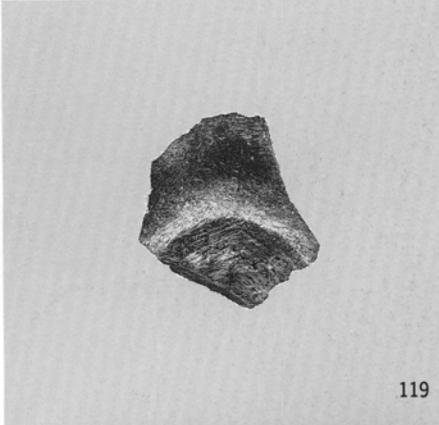


106

SK154
SK156



115



119

SD101



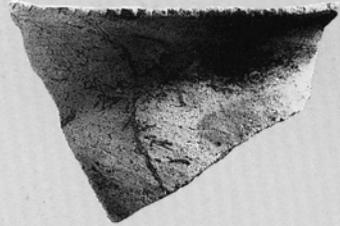
131



128



133



136

SD110



134

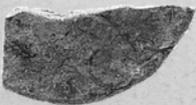


138



158

SX101



139



164



158

NR101



149



140



148



169



175



172



198



218



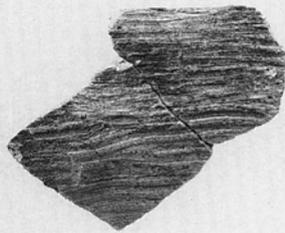
181



177



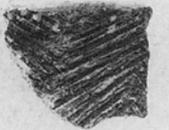
234



232



231



229



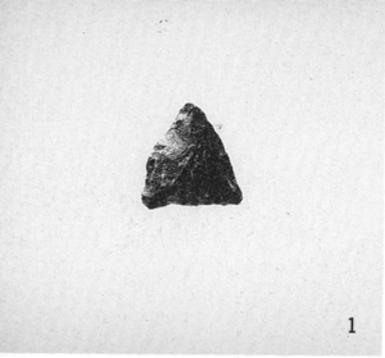
238



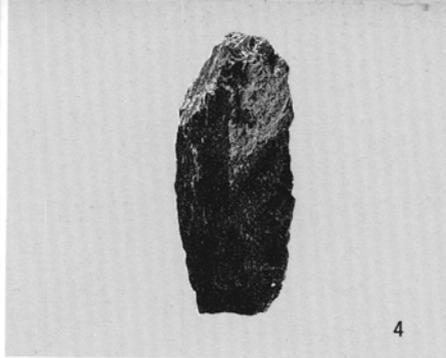
236



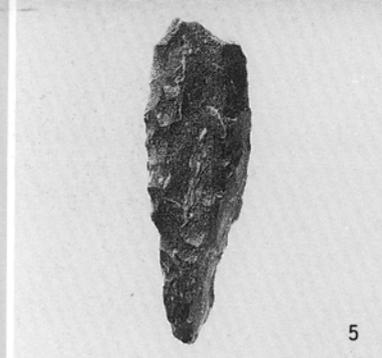
237



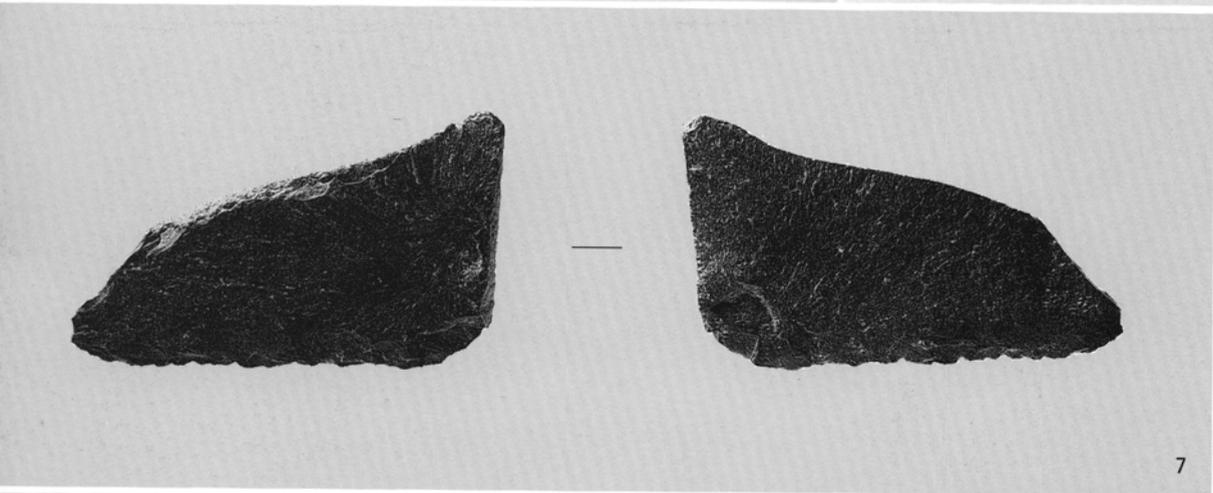
1



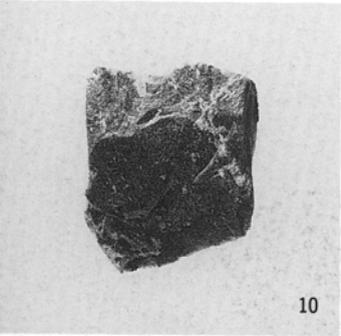
4



5



7



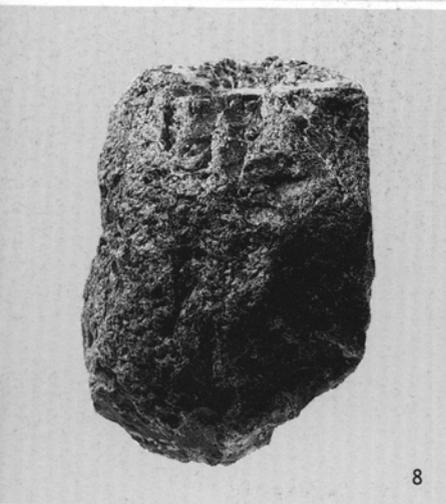
10



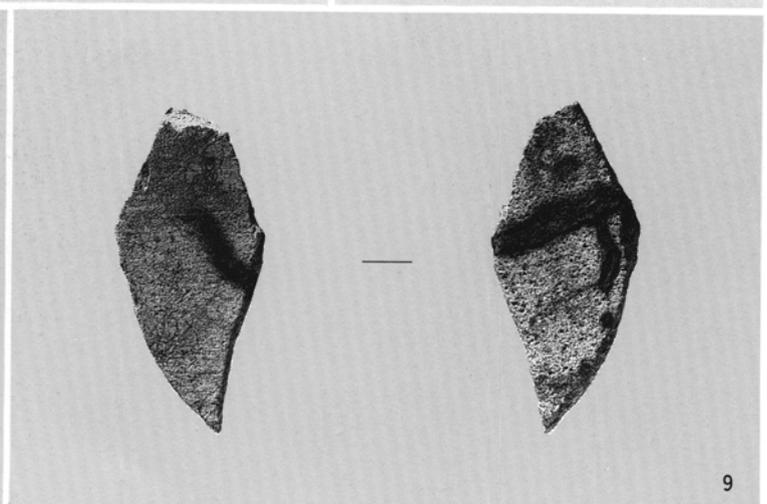
11



12



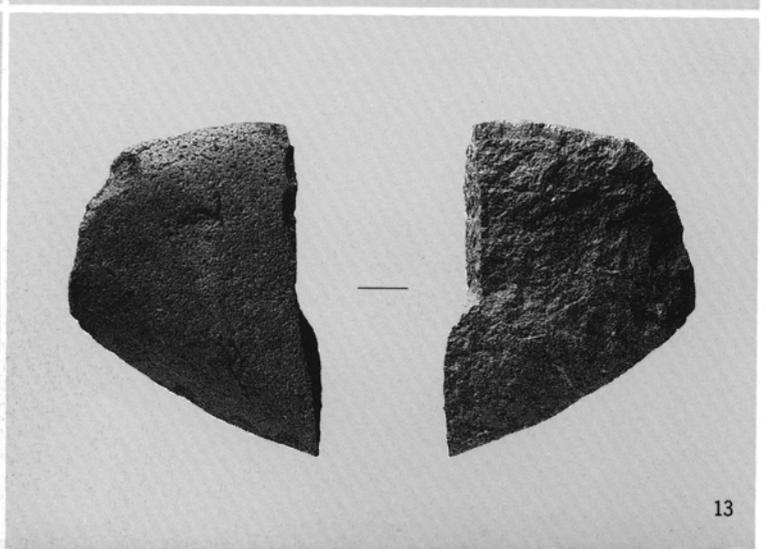
8



9



6



13

SK58



2



4



36



21

SX04



41

SX01



46



34



56



57



59



60



65



61



66



62

SX02上層



73

SX02下層



91



79

SX03
上層



98

SX03
下層



89



100

SX03
最上層



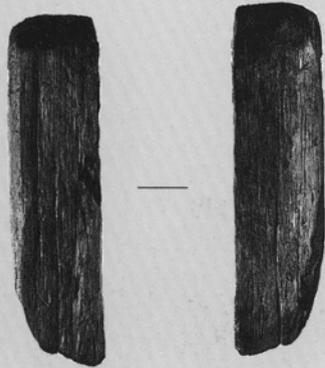
102



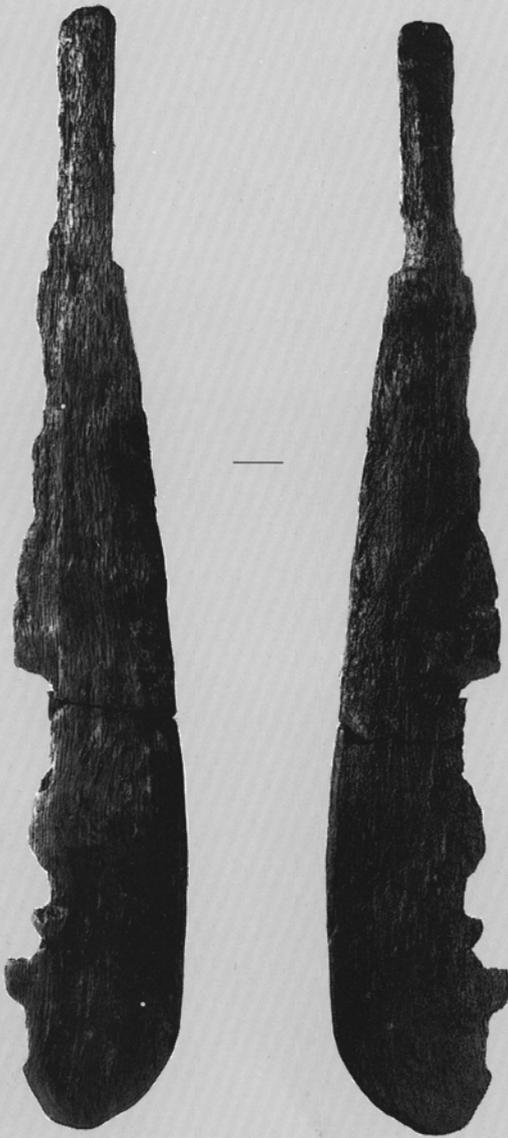
117



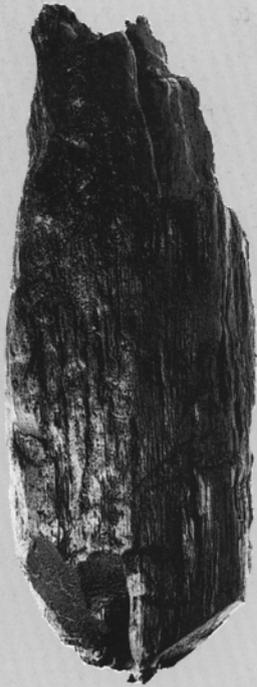
1



3



2



7



4



6



5

報告書抄録

フリガナ	キセイチョウイセキ ツキナワテイセキ							
書名	貴生町遺跡II・III 月縄手遺跡II							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第55集							
編著者名	樋上昇、服部信博、赤塚次郎、堀木真美子、森勇一、小澤美紀、萬谷さつき、吉野道彦							
編集機関	財団法人 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24							
発行年	西暦1994年3月30日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
キセイチョウ 貴生町遺跡	ナゴヤシニシクキセイチョウ 名古屋市西区貴生町	23104	013002	35°13′10″	136°52′45″	1993 4.21~5.30 7.18~8.19	1,088 540	道路拡幅 共同溝建設
ツキナワテ 月縄手遺跡	ナゴヤシニシクヒラ 名古屋市西区比良	23104	013021	35°13′30″	136°54′00″	1993 9.2~12.25	311	道路拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
貴生町遺跡	集落跡	古墳前期 鎌倉~江戸	自然流路 土坑・溝	土師器・石製品 陶磁器		線刻有孔円板		
月縄手遺跡	集落跡	弥生前期 古墳前期	自然流路・環濠土坑・溝 自然流路・土坑溝	弥生土器・石器 土師器・木器		モミ痕土器・プラントオーバー プラントオーバー		

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第55集

貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ
月縄手遺跡Ⅱ

1994年3月31日

編集・発行 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社